

東大阪市文化財協会概報集

—1997年度—

1998

財団法人 東大阪市文化財協会

序

東大阪市は、大阪府の東部に位置し、生駒山を挟んで奈良県と接しています。市域は、標高5 m前後の平野部と生駒山の西山麓の急斜面に分かれています。古代においては、北に大きな湖が広がっており、旧の淀川や大和川が流れこんでいました。このように自然環境に恵まれていたために、古くから人々の生活を示す遺跡が多く残されています。

今回、報告します6件の調査は、本協会がこれまでに実施いたしました発掘調査の一部であります。調査では、縄文時代から、弥生時代・古墳時代、中近世まで各時代に及んでいます。いずれも、東大阪市の歴史を考える上で貴重な資料であります。

本書が、地域の文化財の学習資料としてお役に立てれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査および整理調査を実施する上で、多大なご協力をいただきました関係機関、各位に心より感謝申し上げます。

財団法人東大阪市文化財協会
理事長 日吉 亘

目 次

1 意岐部遺跡第3次発掘調査報告

I. はじめに	1 (1)
II. 位置と環境	2 (2)
III. 調査の概要	3 (3)
1. 調査の方法	3 (3)
2. 層位	3 (3)
3. 遺構と遺物	4 (4)
IV. まとめ	12 (12)

2 巨摩廃寺遺跡第2次発掘調査概要

1. 調査に至る経過	1 (13)
2. 調査地点と地区割	2 (14)
3. 基本層序	3 (15)
4. 調査の概要	5 (17)
1) 弥生時代の遺構	5 (17)
2) 古墳時代～奈良時代の遺構	5 (17)
3) 出土遺物	9 (21)
5. まとめ	16 (28)

3 市尻遺跡第1次発掘調査報告

I. はじめに	1 (29)
II. 位置と環境	2 (30)
III. 調査の概要	3 (31)
1. 調査の方法	3 (31)
2. 層位	3 (31)
3. 遺構と遺物	6 (34)
IV. まとめ	20 (48)

4. 芝ヶ丘遺跡第5次発掘調査報告

例言

I. 調査に至る経過	1	(49)
II. 位置と環境	2	(50)
III. 調査の概要	3	(51)
1. 地区割	3	(51)
2. 層序	4	(52)
3. 調査の成果	5	(53)
IV. まとめ	7	(55)

5. 若江遺跡第42次発掘調査概要

I. 若江遺跡の概要	1	(59)
II. 若江遺跡の位置と環境	2	(60)
III. 第42次発掘調査の概要	4	(62)
層序	4	(62)
遺構	5	(63)
出土遺物	8	(66)
IV. まとめ	14	(72)

6. 瓜生堂第38次発掘調査報告書

I. はじめに	1	(73)
II. 環境	2	(74)
III. 調査概要	4	(76)
1. 第1ピット	5	(77)
2. 第2ピット	12	(84)
3. 第4ピット	23	(95)
IV. まとめ	32	(104)

意岐部遺跡第 3 次発掘調査報告

本文目次

I. はじめに	1
II. 位置と環境	2
III. 調査の概要	3
1. 調査の方法	
2. 層位	
3. 遺構と遺物	
IV. まとめ	12

挿図目次

第1図 調査地点位置図	1
第2図 遺跡周辺図	2
第3図 第1トレンチ西断面実測図	3
第4図 第1・2トレンチ南断面実測図	4
第5図 第2遺構平面実測図	5
第6図 第3遺構平面実測図	6
第7図 第4遺構平面実測図	7
第8図 第3・4層出土土器実測図	8
第9図 第5層出土土器実測図	9
第10図 第6層出土土器実測図	10
第11図 第7・8・9層出土土器・土製品実測図	11

図版目次

- 図版 1 遺構 調査風景
第 1 トレンチ西断面
- 図版 2 遺構 第 1 遺構 (南より)
第 2 遺構 (西より)
- 図版 3 遺構 第 3 遺構 (西より)
第 5 層土器出土状況
- 図版 4 遺構 第 4 遺構 (西より)
第 7-1 層土器出土状況
- 図版 5 遺物 第 3・4・5 層出土土器
- 図版 6 遺物 第 5・7・8・9 層出土
- 図版 7 遺物 第 4 層出土土器
第 5 層出土土器
- 図版 8 遺物 第 6 層出土土器
第 7・8・9 層出土土器

意岐部遺跡第3次発掘調査報告

I. はじめに

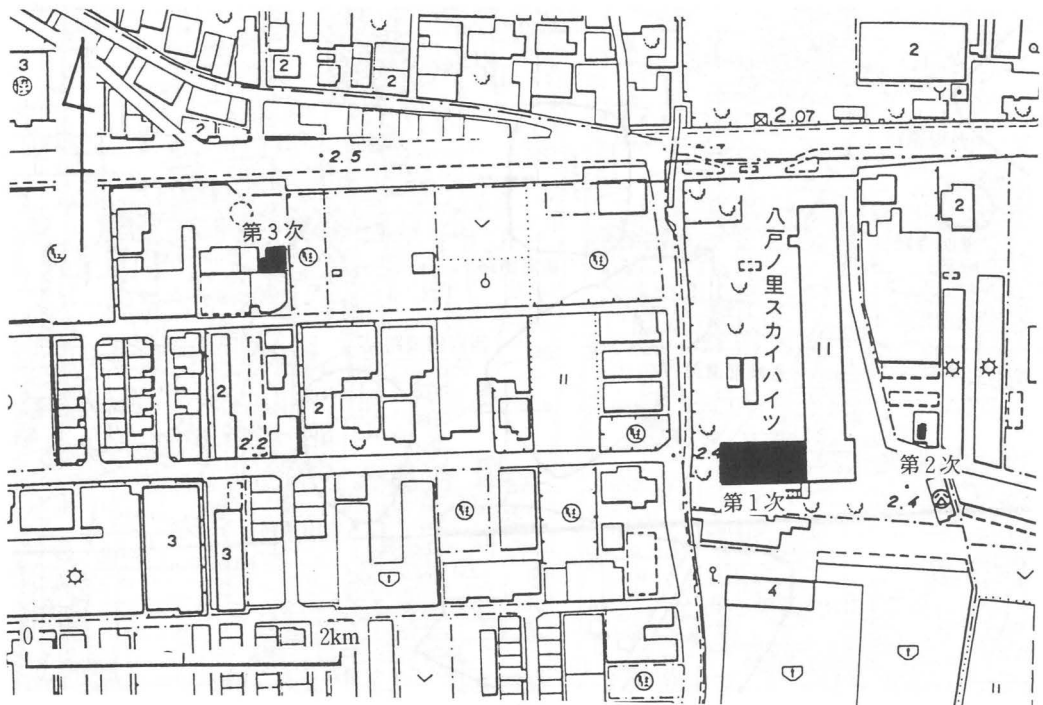
意岐部遺跡は標高2～2.5mの平野部にあり、西岩田・御厨・御厨東にかけての地域に位置する古墳時代から江戸時代に亘る複合遺跡である。昭和15年(1940)、古墳時代後期および平安時代の須恵器・土師器が出土したことによって知られるようになった。その後、昭和53年度(1978)に共同住宅建設に伴う第1次発掘調査が実施され、地表下約1mで6世紀後半と考えられる約30条の溝および一辺約40cmの方形ピット3箇などの遺構が検出され、溝は幅10～30cm、深さ5～30cmのものが南北・東西に直行していた。遺物としては須恵器・土師器・製塩土器などが出土した⁽¹⁾。第2次調査は昭和54年(1979)に第1次調査地の東で行なわれた試掘調査で、2次堆積層内から須恵器・土師器・瓦器の破片が見つかっただけであった⁽²⁾。

昭和63年(1980)、御厨東2丁目714-6番地においてガソリンスタンドの改築工事が計画され、同年3月に実施した試掘調査で古墳時代前半から後期の遺物包含層と遺構を確認した。建造物は遺物包含層などに影響を与えないが、給油および廃油タンク部分は支障をきたすため、タンク埋設部分約41m²について、昭和63年4月15日から5月2日まで第3次発掘調査を実施した。

調査および報告書の執筆・編集は若松博恵が担当した。

注(1) 東大阪市遺跡保護調査会編『東大阪市ガイド』 1978年

(2) 『東大阪市埋蔵文化財発掘調査概要 1979年度』 東大阪市教育委員会 1980



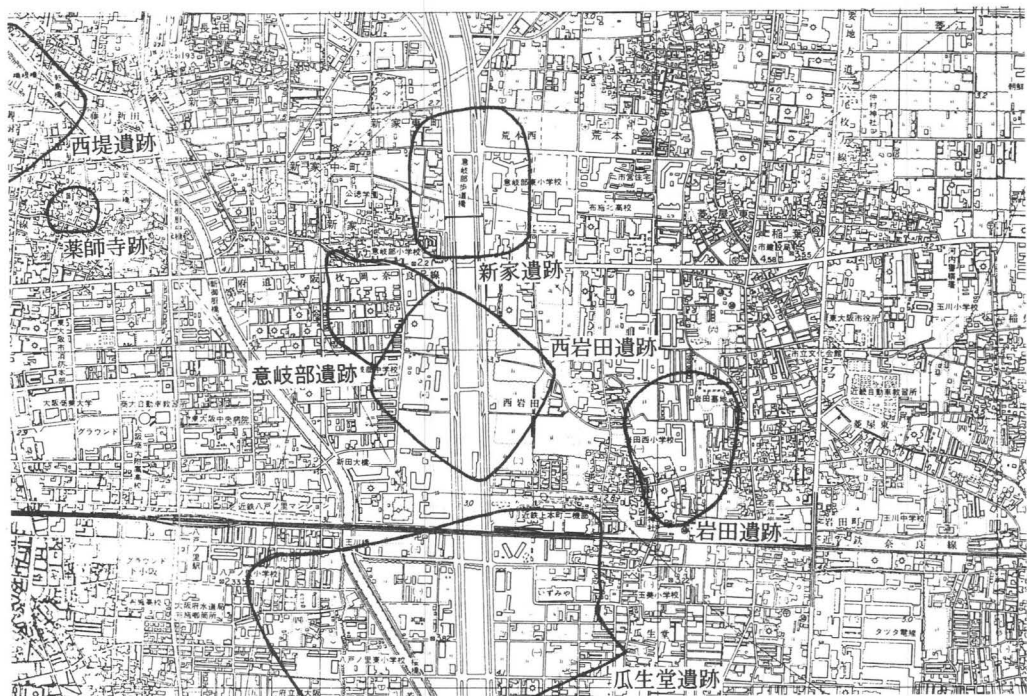
第1図 調査地点位置図

II. 位置と環境

意岐部遺跡周辺地域は現在、府道八尾・茨木線が東西に走り、東には中央環状線および近畿自動車道天理―吹田線が走っている。特に中央環状線沿いを中心に共同住宅をはじめとする多くの高層建造物が建ち、この周辺は住宅・工場地域と化して田畑はほとんどなくなっている。この地帯は、大阪平野のほぼ中央に位置し、約1万年前に始まった縄文海進により海中に没し、その後、海退および旧大和川から運ばれた土砂により自然堤防や後背湿地が形成され、中積平野と化していった。そのため人々の生活が始まるのは弥生時代以降であり、瓜生堂、西岩田遺跡からは前期の遺構・遺物がみつまっている。中・後期には瓜生堂、西岩田、新家で住居址、水田址、墓などと多量の弥生土器、石器、木製品が検出されており、特に瓜生堂遺跡の方形周溝墓群は周知されている。

古墳時代になると瓜生堂、西岩田、新家だけでなく、意岐部、西堤などの遺跡からも遺構・遺物が確認されており、西岩田では前期の竪穴式住居址や溝がみつまっている。また瓜生堂からは円筒埴輪、朝顔型埴輪が出土し、南隣する巨摩廃寺遺跡で小型低方墳（巨摩1号古墳）が発見されていることから、古墳の存在も考慮する必要がある。

飛鳥・奈良時代以降も各遺跡で遺構・遺物が確認されていて、瓜生堂からは皇朝十二銭の6枚が出土した井戸などもあり、各遺跡とも近現代までほとんど絶えることなく、集落が営まれつづけた。



第2図 遺跡周辺図

Ⅲ. 調査の概要

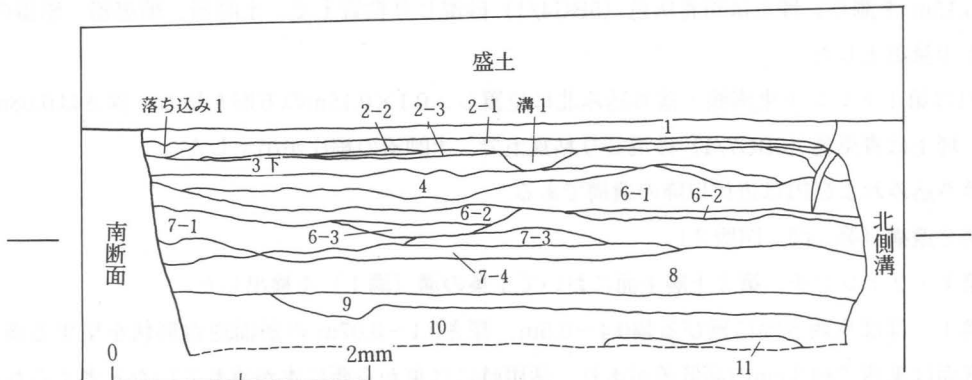
1. 調査の方法

発掘調査は、工事・調査に先立ち給油・廃油の各タンク設置範囲に土留めの鋼矢板を打設したため、東側の給油タンク部を第1トレンチ（約 33m²）、西側の廃油タンク部を第2トレンチ（約 8m²）として、計約 41m²について実施した。また、第1トレンチ東側には試掘調査穴があったことから、第1トレンチ西と、第1トレンチ・第2トレンチ南に層位断面を設定し、上部0.6~0.8mは盛土であるため機械掘削を行ない、以下1.2~1.4mを人力によって各層ごとに掘削し、遺構と遺物の検出作業を行なった。第2トレンチ北西部と南西部は既存していた埋設物とその堀方によって攪乱されていた。

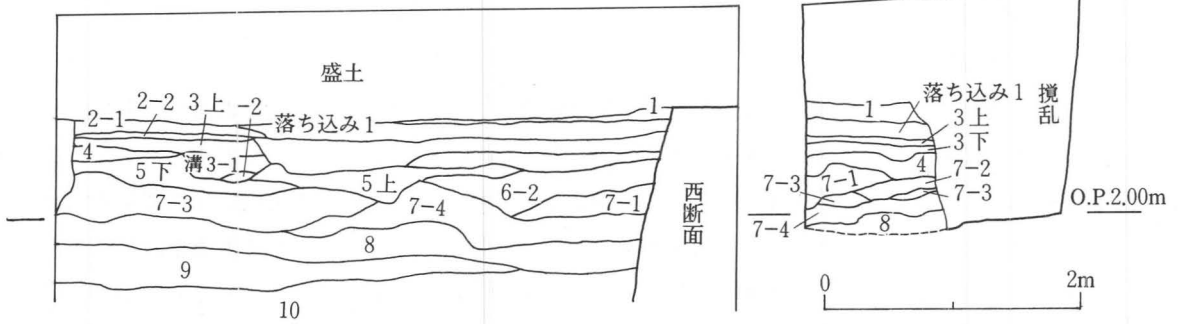
2. 層位（第3・4図 図版1）

盛土

- 第1層 暗灰黄色（2.5Y4/2）砂混じりシルト質粘土—旧耕土—
- 第2—1層 褐色（10YR4/4）砂混じりシルト質粘土—第1遺構面—
- 第2—2層 褐色（10YR4/4）シルト質粘土
- 第2—3層 褐色（7.5YR4/4）粘質土
- 第3上層 灰オリーブ色（7.5Y5/2）砂混じり粘質土—第2遺構面—
- 第3下層 暗褐色（10YR3/4）砂混じり粘質土—第3遺構面—
- 第4層 にぶい黄褐色（10YR4/2）シルト混じり粘質土—第4遺構面—
- 第5上層 オリーブ褐色（2.5Y4/3）砂混じり砂質土
- 第5下層 黄褐色（2.5Y5/3）シルト質土
- 第6—1層 褐色（10YR4/4）砂混じりシルト
- 第6—2層 にぶい黄褐色（10YR4/3）シルト・砂混じり粘質土
- 第6—3層 にぶい黄褐色（10YR5/3）シルト混じり粘質土
- 第7—1層 暗灰黄色（2.5Y5/2）シルト



第3図 第1トレンチ西断面実測図



第4図 第1・2トレンチ南断面実測図

第7-2層 オリーブ褐色 (2.5Y4/3) 粗・中粒砂

第7-3層 黄灰色 (2.5Y5/1) 粗・中粒砂

第7-4層 にぶい黄褐色 (10YR5/3) 中・細粒砂

第8層 にぶい黄橙色 (10YR5/3) 細～粗粒砂

第9層 にぶい橙色 (10YR6/4) 細～粗粒砂

第10層 黄灰色 (2.5Y5/1) 細～粗粒砂

第11層 灰オリーブ色 (5Y6/2) シルト質砂

落ち込み 暗青灰色 (5BG4/1) 砂混じり粘質土

溝1 褐色 (10YR4/4) 砂混じり粘質土

土坑1 にぶい黄褐色 (10YR4/3) 砂混じり粘質土

溝3-1層 暗オリーブ褐色 (2.5Y3/3) 砂混じり土

溝3-2層 暗褐色 (10YR3/3) 砂混じり粘質土

3. 遺構と遺物

第1遺構 (図版2)

第2層上面において落ち込み (落ち込み1) と1ピット (P1) を検出した。

落ち込み1は第1・2トレンチ南側に位置し、検出の南北最大長3.5m、東西最大長1.4m、深さ0.15mを測り、埋土は暗青灰色 (5BG4/1) 砂混じり粘質土で、土師器、須恵器、磁器の細片が少量出土した。

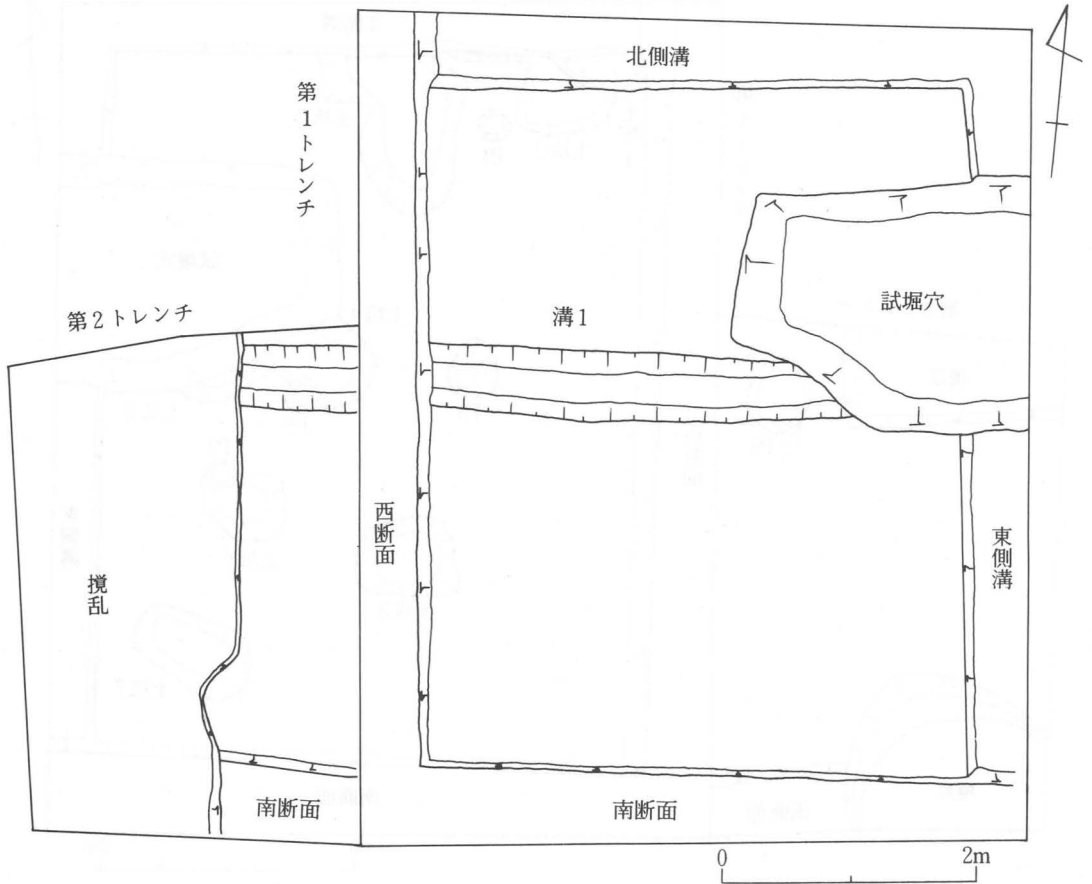
P1は第1トレンチ東南側・落ち込み北に位置し、0.1×0.15mの方形を呈し、深さは0.08m測る。埋土は青黒色 (5BG7/1) 砂混じり粘質土で、土師器の細片が出土した。

落ち込みおよびP1は近代以降の遺構である。

第2遺構 (第5図 図版2)

第1・2トレンチ、第3上層上面において1条の溝 (溝1) を検出した。

溝1 ほぼ東西方向に延びる幅0.4～0.5m、深さ0.1～0.07mの断面逆台形状を呈する溝で、溝底面は東西で約3cmの高低差があり、活用時には東から西に水が流れていたと考えられる。溝内は褐色 (10YR4/4) 砂混じり粘質土で、土師器細片と磁器片が出土した。江戸時代後期。



第5図 第2遺構平面実測図

第3層出土遺物 (第8図 図版5)

第3層からは土師器の壺(1)、小型器台(2)と須恵器小片、瓦器碗小片、土師器皿細片が出土し、中世以降の客土層である。

土師器壺(1) 胴上部から口縁部残存。外湾しながら内側へ立ち上がる胴部から、口縁部は外上方向に内湾して立ち、口端部は面をなす。外面はタテ刷毛、胴部内面はヨコ刷毛調整を施しており、橙色を呈する。

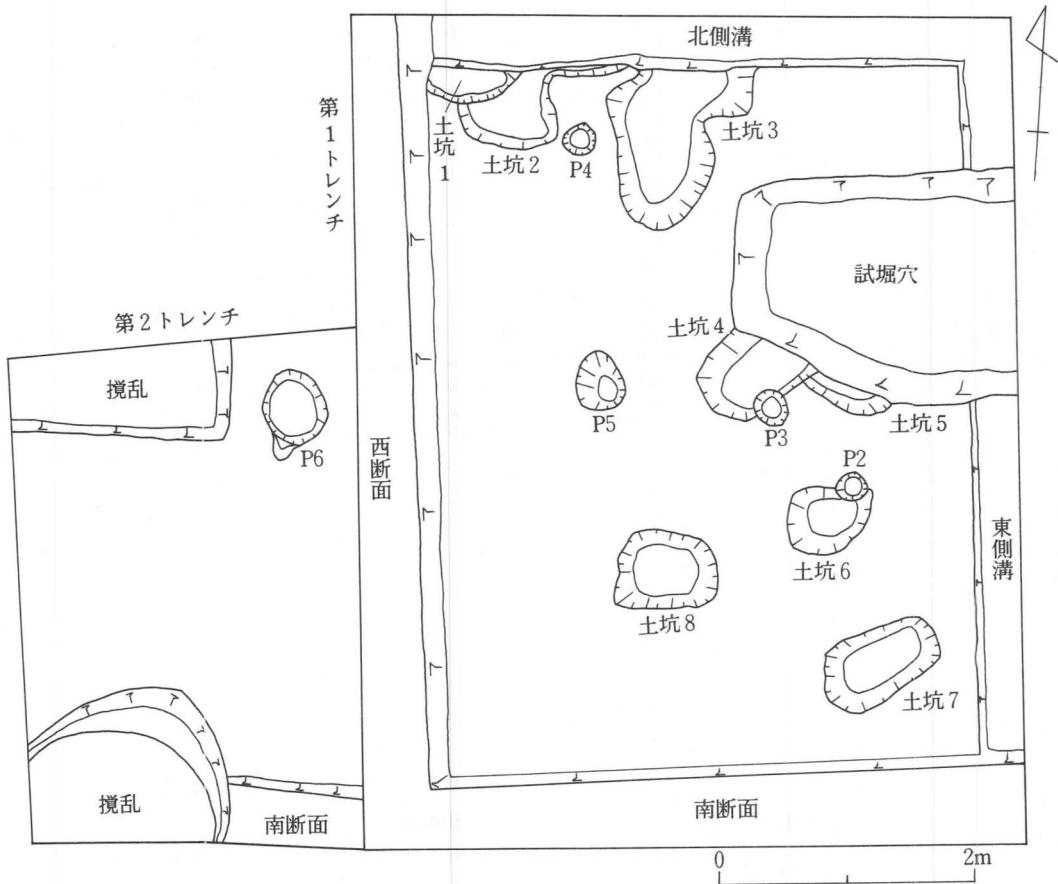
土師器小型器台(2) 杯部口縁は全て欠損。脚部は外下方向に大きく開き、端部を丸くおさめている。外面ナデ、内面ヨコ刷毛調整を施している。橙色を呈する。精製土器。

第3遺構(第6図 図版3)

第1・2トレンチ、第3下層上面においてピット4箇(P2~5)、土坑8基(土坑1~8)を検出した。遺構はその切り合い関係(P3・土坑4・土坑5)と埋土などから最低3期に分かれる。

第1期

P2~P5 いずれも円形を呈し、P2は径0.24m、深さ0.102m、P3は径0.3m、深さ0.132m、



第6図 第3遺構平面実測図

P4は径0.16m、深さ0.173m、P5は径0.5m、深さ0.183mを測り、埋土はにぶい黄褐色（10YR4/3）砂混じり土で、遺物は出土しなかった。

第2期

P6 径0.54m、深さ0.16mを測り、南南東部に浅い舌状の突出部があった。埋土は灰黄褐色（10YR4/2）土で、土師器皿の細片が出土した。

土坑1・4・6・8 土坑1は第1トレンチ北西部で検出し、検出の長さ0.7m、幅0.3m、深さ0.11mを測り、遺物は出土しなかった。土坑4は北東部を試掘穴によって破損し、検出の長さ0.76m、幅0.6m、深さ0.097mを測り、楕円形を呈していたと思われる。土坑内からは土師器皿・瓦器の細片が出土した。土坑6は0.64m×0.5m、深さ0.107mを測る不定の円形を呈し、北東部はP2によって切られている。遺物は出土しなかった。土坑8は長さ0.8m、幅0.6m、深さ0.171mを測り、隅丸方形を呈する。土坑内からは瓦器の細片が出土した。各土坑内はほとんど暗灰黄色（2.5Y4/2）砂混じり土で埋っていた。

土坑2・3・5・7 土坑2・3は第1トレンチ北辺で検出したため、土坑形は不明である。土坑2はさらに北西部を土坑1によって切られており、検出の長さ0.76m、幅0.6m、深さ0.097m

を測る。土坑3は検出の長さ1.24m、幅0.8m、深さ0.196mを測る。2土坑内から遺物は出土しなかった。土坑5は北側を試掘穴で破損し、北西部は土坑4に切られていた。検出長さ0.6m、幅0.2m、深さ0.108mを測り、遺物は出土しなかった。土坑7は長さ1m、幅0.6m、深さ0.13mを測り、楕円形を呈する。土坑内からは土師器皿・瓦器の細片が出土した。

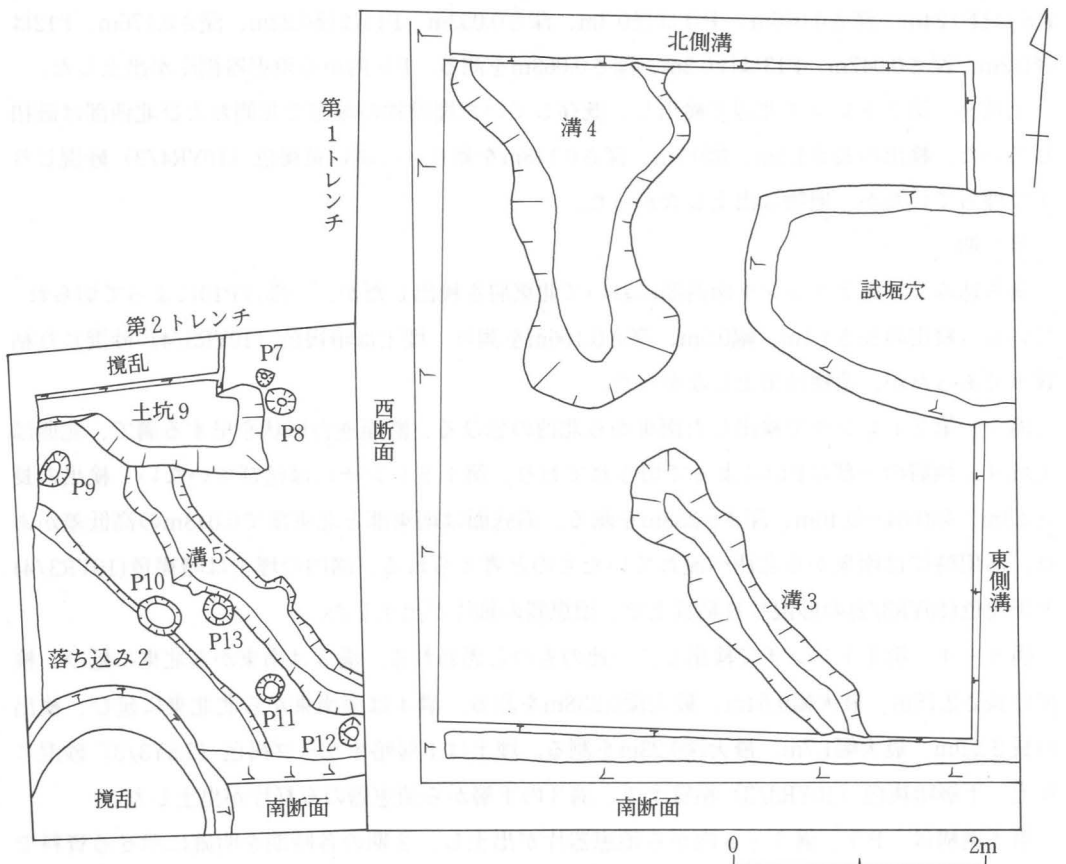
第3遺構は、土坑・ピット内から細片ではあるが土師器皿・瓦器の出土したものがあり（P6、土坑1・4・7・8）、各期の細かい時期を示せる資料ではないが、鎌倉時代ごろのものと考えられる。

第4遺構（第7図 図版4）

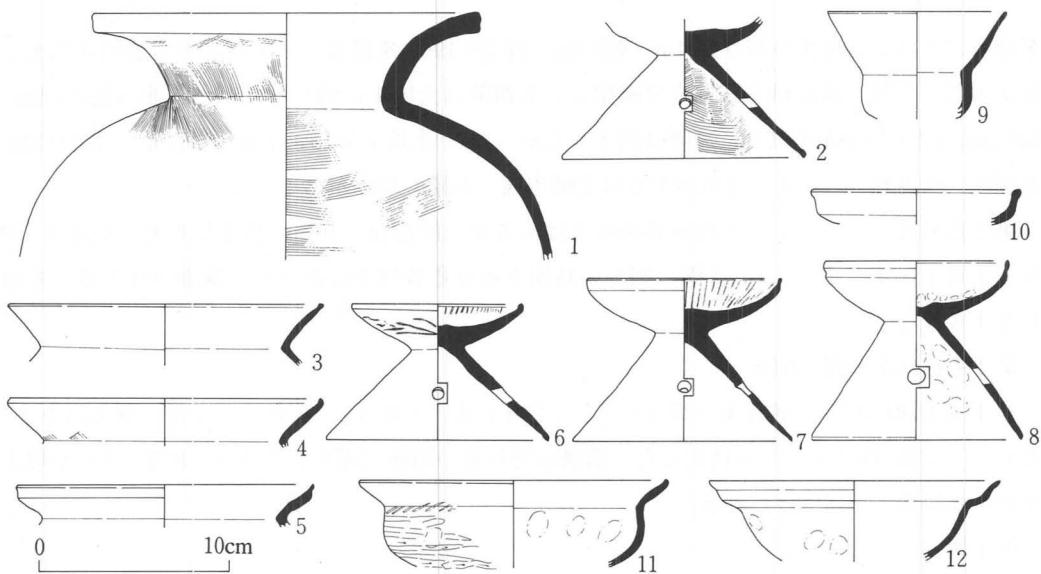
第4層上面において溝3条（溝3～5）、土坑1基（土坑9）、落ち込み1基（落ち込み2）とピット7箇（P7～13）を検出した。遺構の切り合い関係（溝5と土坑9・P13など）や埋土などから最低2期に分けられる。

第1期

P7 径0.12m、深さ0.052mを測り、小円形を呈する。ピット内は褐色（10YR4/4）砂で埋っていたが、遺物は出土しなかった。



第7図 第4遺構平面実測図



第8図 第3・4層出土土器実測図

P8・9・11・12・13 いずれも円形を呈し、埋土は褐色（10YR4/4）粘質土であった。

P8は径0.24m、深さ0.086m、P9は径0.3m、深さ0.053m、P11は径0.22m、深さ0.176m、P12は径0.2m、深さ0.047m、P13は径0.2m、深さ0.063mを測る。P9内から須恵器細片が出土した。

土坑9 第2トレンチ北辺で検出し、既存していた埋設物の堀方で北側および北西部は破壊していた。検出の長さ1.5m、幅0.7m、深さ0.178mを測り、にぶい黄褐色（10YR4/3）砂混じり土で埋っていたが、遺物は出土しなかった。

第2期

落ち込み2 第2トレンチ南西部において北東肩を検出したが、一部はP10によって切られている。検出の長さ1.1m、幅0.5m、深さ0.106mを測り、埋土は暗褐色（10YR3/4）砂混じり粘質土であったが、遺物は出土しなかった。

溝5 第2トレンチで検出した南東から北西の延びる、断面逆台形状を呈する溝で、北側は土坑9、西肩の一部はP13によって切られており、第1トレンチには延びていない。検出の長さ2.3m、幅0.64～0.46m、深さ0.238mを測る。溝底面は南東部と北東部で0.043mの高低差があり、活用時には南東から北西へ流れていたものと考えられる。溝内の埋土は暗褐色（10YR3/4）と黒褐色（10YR3/2）の砂混じり粘質土で、須恵器の細片が出土した。

溝3・4 第1トレンチで検出し、一連のものと思われる。溝3は南東から北東に延び、検出の長さ2.75m、最大幅0.64m、最大深0.238mを測る。溝4は南南東から北北東に延び、検出の長さ2.9m、最大幅1.7m、最大深0.23mを測る。埋土は上層暗オリーブ褐色（2.5Y3/3）砂混じり土、下層暗褐色（10YR3/3）粘質土で、溝3の下層から須恵器の高杯片が出土した。

第4遺構は、P9、溝3・5内から須恵器片が出土し、2期の各時期を明確に示せる資料ではないが、古墳時代後期ごろのものと考えられる。

第4層出土遺物（第8図 図版5・7）

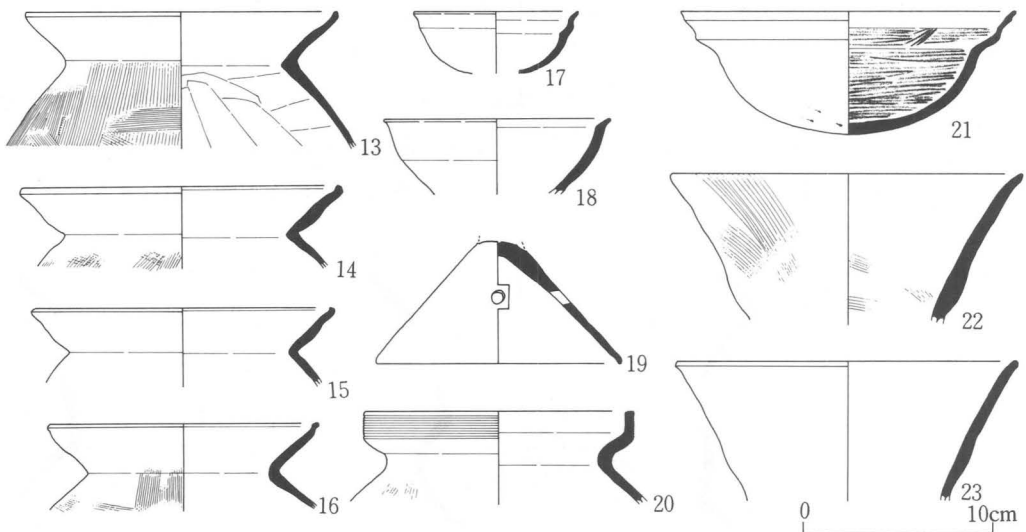
第4層からは土師器の甕（3～5・10）、小型器台（6～8）、小型丸底壺（9）、鉢（11・12）などが出土した。

甕（3～5・10） 3・4は口縁部・体肩上部片である。口縁部は外上方向に直線的に立ち上がり、3は端部を丸くおさめ、4は少し立たせてゆるい稜を有し、先端部を尖らせている。内外面ともヨコナデ調整を施している。5は口縁部・体肩上部片である。口縁部はやや外弯しながら上外方向に立ち、端部を立てて先端部を尖らせている。内外面ともヨコナデ調整を施している。10は「く」字形に屈曲しさらに上方に拡張した口縁部片で、拡張した口縁端部は丸くおさめている。全体に摩耗が激しく外面にあった櫛描き平行線もわずかに窺えるほどである。調整不明。吉備系。

小型器台（6～8） 6は脚部は外下方に直線的に大きく開き、端部外面は少しナデつけてゆるい稜を有し、先端は少し尖らせている。杯部は外上方向にゆるやかに立ち、端部外面をナデつけて立たせ、先端を丸くおさめている。内面タテ方向、外面ヨコ方向のヘラミガキ調整を施している。第4層下層で出土。7は脚部が外下方に直線的に大きく開き、端部を少し尖らせている。杯部は外弯しながらゆるやかに立ち上がり、端部を立てて丸くおさめている。内面タテ方向のヘラミガキ調整を施している。8は脚部が外下方にやや外弯しながら大きく開き、端部外面は少しナデつけて稜を有している。杯部は外弯しながら立ち上がり、口縁に凹線を有し、端部を丸くおさめている。杯部および脚部内面はユビオサエによる成形、両外面はヨコナデ調整を施している。杯部壁に0.1cmの円孔を焼成後内面から穿っている。

小型丸底壺（9） 扁平球形の体部から口頸部が外上方向に大きく開き、端部はやや尖らせておさめている。表面は摩耗しており調整は不明である。精製土器。

鉢（11・12） 11は碗状の体部から口縁部は外上方向に立ち上がり、端部を丸くおさめてい



第9図 第5層出土土器実測図

る。口縁内外面ヨコナデ、体部外面はヨコ方向のヘラミガキ調整を施している。12は扁平な椀状の体部から、口縁部が2段に屈曲し受口状を呈して外上方向に延び、端部をやや尖らせておさめている。表面は摩耗しており調整は不明である。精製土器。

第5層出土遺物(第9図 図版5・6・7)

第5層からは土師器の甕(13~16・20)、鉢(17・18・21)、高杯(19)、壺(22・23)などが出土した。

甕(13~16・20) 13~16は外弯しながら内傾する体部より、口縁部は外上方向に立ち上がり、先端外面をナデつけて内傾させ稜を有している。口縁部内外面はヨコナデ、体部外面はタテ、ヨコ方向の刷毛、体部内面はヘラケズリ調整を施している。20は口縁部がく字形に屈曲し更に上方に拡張して面をなす。拡張部外面には櫛描平行線が施されている。吉備系。

鉢(17・18・21) 17は椀状の体部から口縁部がゆるやかにく字に外上方向に延び、端部をやや尖らせておさめ、内面はゆるい受口状を呈している。18は椀状の体部から口縁部が短く外反し、端部を丸くおさめている。21は扁平な椀状の体部から口縁部が2段に屈曲して外上方向に延び、端部を丸くおさめ、受口状を呈している。内面は丁寧な主にヨコ方向のヘラミガキ調整を施している。精製土器。

小型器台(19) 杯部欠損。脚部は外下方向に直線的に大きく開き、端部外面をナデつけて稜をなし、先端を少し尖らせておさめている。

壺(22・23) 口縁部のみ。外上方向に開いて立ち上がり、端部を丸くおさめている。22は内外面を部分的に刷毛調整を施している。精製土器。

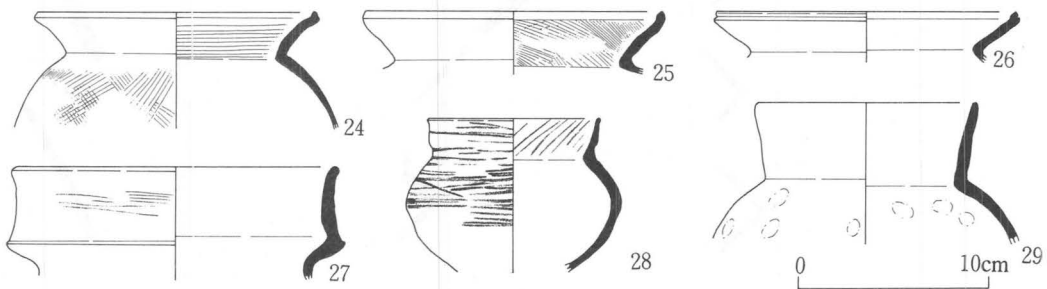
甕13・20と鉢21は第1トレンチ北西部、甕14~16と壺22・23は南西部でそれぞれ一括して出土し、鉢17・18は第5下層から出土した。

第6層出土遺物(第10図 図版6・8)

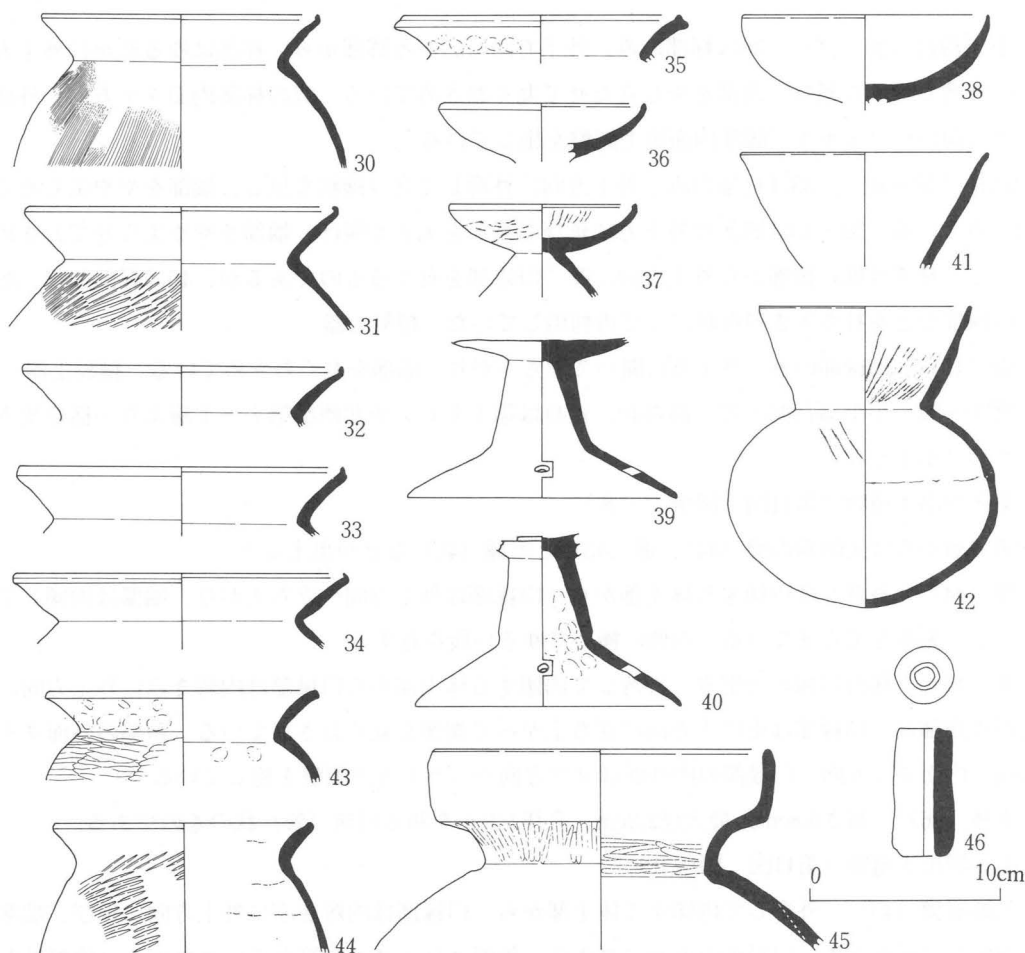
第6層からは土師器の甕(24~26)、壺(27)、短頸壺(28・29)などが出土した。

甕(24~26) 外弯して立ち上がる体上部から、口縁部は外上方向に延び、端部を少し立たせて先端をやや丸くおさめている。口縁部の端部はつまんでヨコ方向にナデつけており、外面はヨコナデ、内面は24がヨコ方向、25がタテ・ナナメ方向の刷毛調整を施している。

壺(27) 複合口縁の甕で、口縁部は「く」字形に内弯し、更に上方向に内弯ぎみに立ち上がり、端部を丸くおさめている。山陰系。



第10図 第6層出土土器実測図



第11図 第7・8・9層出土土器・土製品実測図

短頸壺 (28) 丸みをもった体部から口縁部は上方にやや外反ぎみに短く立ち、端部を丸くおさめている。口縁部内面はナナメ方向、口縁部・体上部外面がヨコ方向のヘラミガキ調整を施している。精製土器。

短頸壺 (29) 外弯する体上部から口縁部はやや外上方向に立ち上がり、端部を丸くおさめている。口縁部内外面はヨコナデ調整し、体部内外面にはユビオサエ痕がみられる。

第7層出土遺物 (第11図 図版6・8)

第7層からは土師器の甕 (30~35)、小型器台 (36・37)、高杯 (38~40)、壺 (41) などが出土した。

甕 (30~34・35) 30~34外弯して立ち上がる体上部から、口縁部は外上方向へ延び、端部を立たせて先端を丸くおさめている。口縁部内外面ヨコナデ、体部内面ヘラケズリ、外面は30が刷毛、31がタタキ調整を施している。35は口縁部は内弯ぎみに外上方向へ延び、端部は内傾させて先端をつまんで少し尖らせておさめている。内面ヨコナデ、外面ユビオサエの後ヨコナデ調整を施している。

小型器台 (36・37) 36は杯部のみ。外下方向に広がる脚部から、杯部はゆるやかに外上方向へ外弯しながら延び、端部を少し立たせて丸くおさめている。37の杯部内面タテ方向、外面ヨコ方向のヘラミガキ、脚部内面刷毛調整を施している。

高杯 (38~40) 38は杯部のみ。外上方向に外弯して立つ椀状を呈し、端部をやや尖らせておさめている。39・40は脚部は外下方に延びて裾部を大きく開け、端部をやや尖らせておさめている。杯部は低い体部から外上方向に開く口縁部を有するものであるが、40は杯部欠損、39は口縁部などを打ち欠き器台状にして再利用していた。精製土器。

壺 (41) 口縁部のみ。外上方に開いて立ち上がり、端部を丸くおさめている。精製土器。

甕30~32、小型器台36・37、高杯40、壺41は第1トレンチ北西部第7-1層より一括投棄された形で出土した。

第8層出土遺物 (第11図 図版6・8)

第8層からは土師器の甕 (44)、壺 (45) と土錘 (46) などが出土した。

甕 (44) 外弯して内傾する体上部から、口縁部は外上方向へ立ち上がり、端部は内傾して面なし、先端を尖らせている。内側に極めてゆるい段を有する。

壺 (45) 複合口縁の大型壺。外弯して内傾する体上部から口縁部は内弯ぎみに外上方向に延びる頸部に、口縁部は更に上方向に立ち上がって端部を丸くおさめている。頸部の外面タテ方向、内面ヨコ方向、口縁部の内外面はヨコ方向のヘラミガキ調整を施している。

土錘 (46) 長さ6.8cm、最大径2.2cm、孔径1.3cmを測る円筒 (管) 状のものである。

第9層出土遺物 (第11図 図版8)

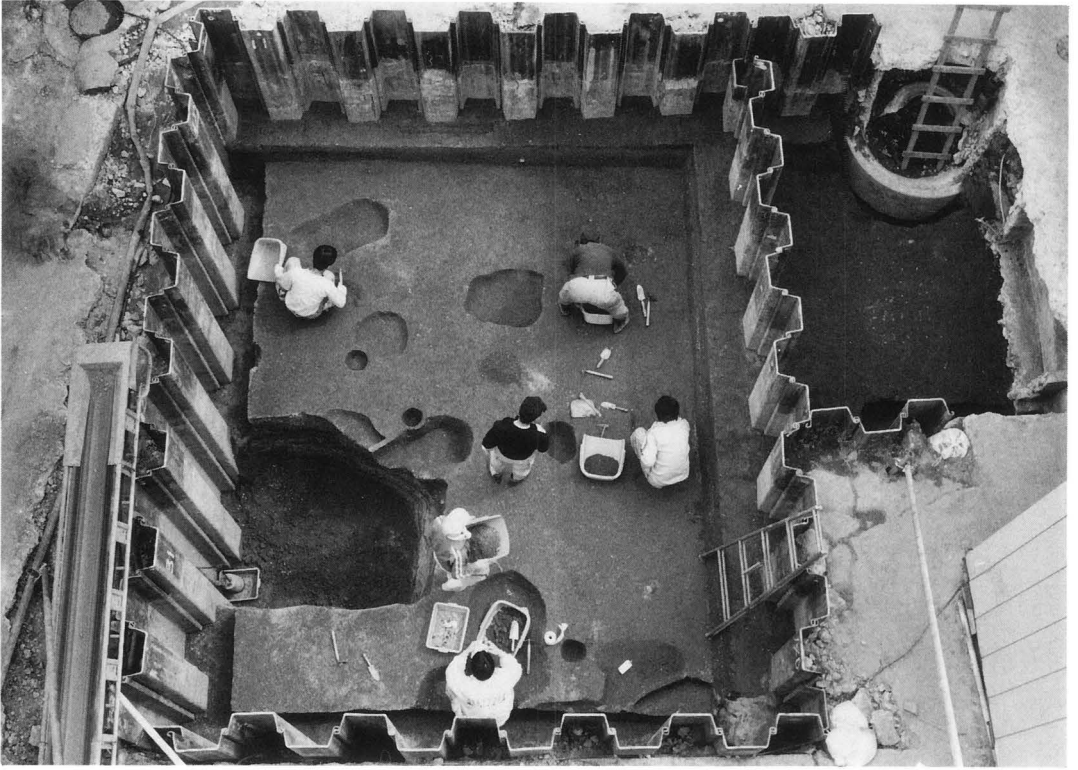
土師器甕 (43) 外弯して内傾する体上部から、口縁部は内弯ぎみに外上方向に延び、端部は内傾して面をなす。口縁部の内面ヨコナデ、外面ユビオサエの後かるいヨコナデ、体部外面はタタキ調整を施している。

IV. まとめ

今回の調査では古墳時代後期から近代までの4期に亘る遺構と、遺構を伴わないが古墳時代前期の庄内から布留の時期の土器を多く検出した。庄内~布留の土器は中世の整地層である第3層からも出土したが、第4~8層の各層から出土し、特に第5下層と第7-1層からはそれぞれまとまった形一投棄された状態一で出土した。調査範囲も狭く、甕・小型器台・壺・鉢・高杯などの器種が全時期に亘ってそろっているわけではなく、完形品または完形復元できる資料も少ないが、層ごとに分かれて出土しており、これらの土器は庄内から布留前半までの型式の変遷を追える資料であるといえる。南接する西岩田遺跡においてもこの時期の土器が多量に出土しており、その他の資料をも合わせて検討する必要がある、今後の課題としたい。

調査および報告書作成にあたって、現場での発掘調査では井上伸一、辻本智英、森下克弘、整理作業では本田けい子、平井多美子、四宮元子、横原美智子の協力を得た。

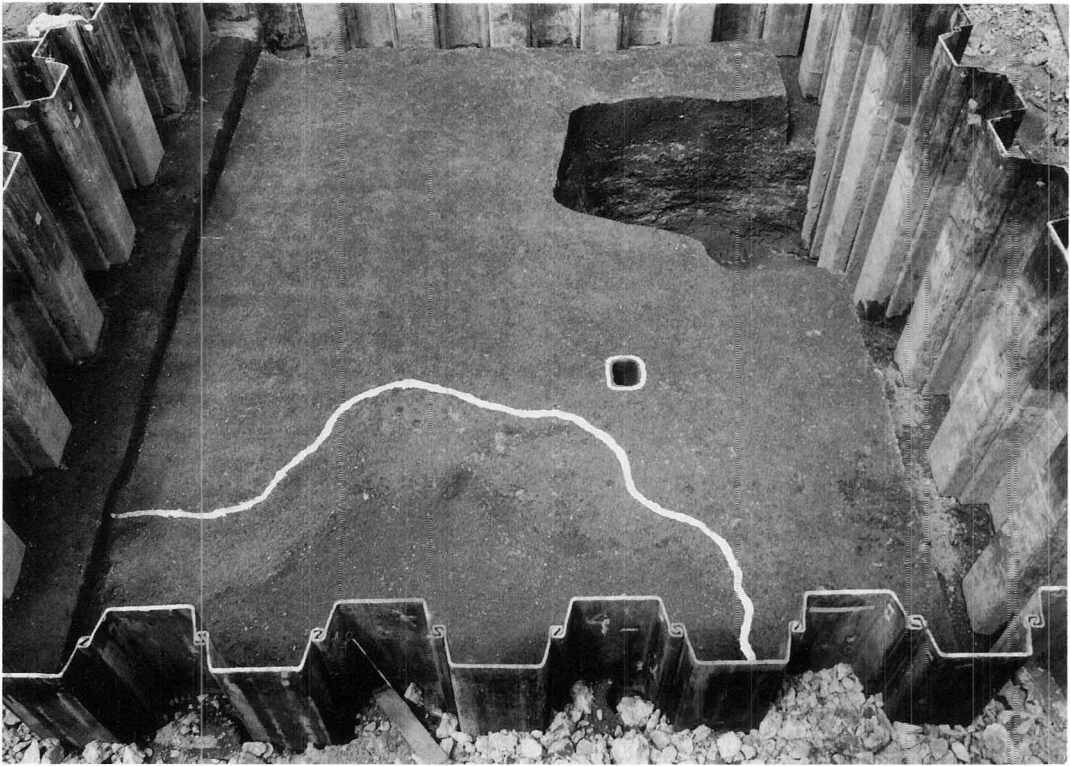
版 圖



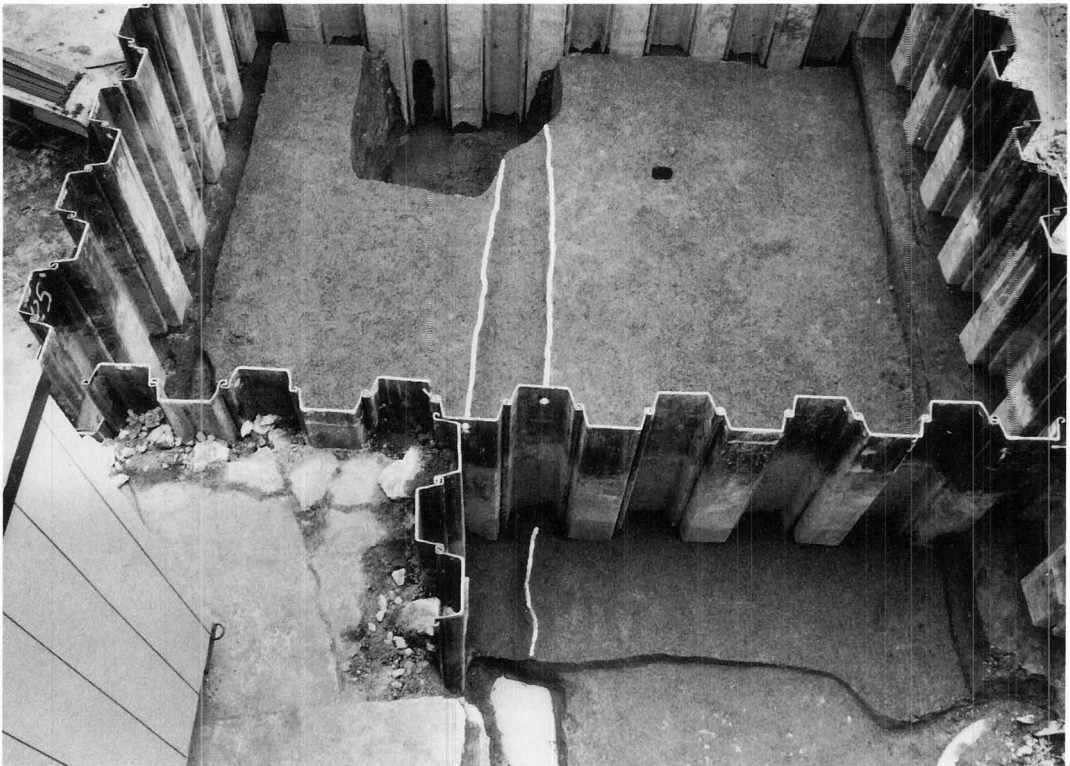
調査風景



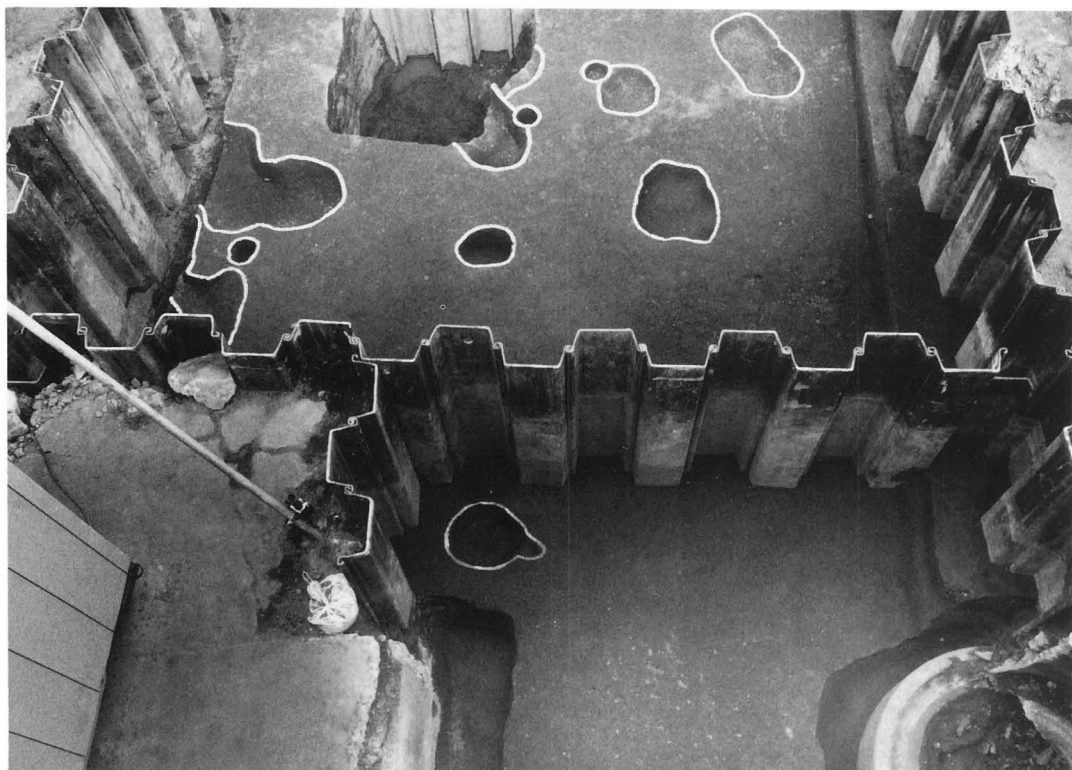
第1トレンチ西断面



第1遺構（南より）



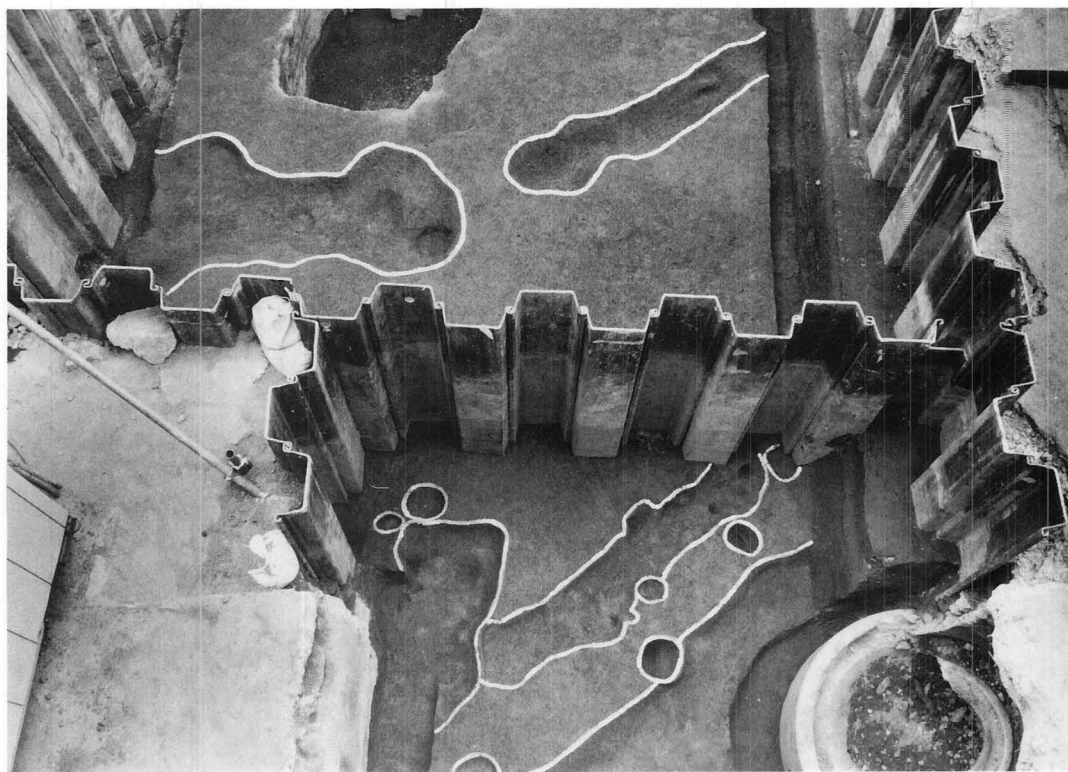
第2遺構（西より）



第3遺構（西より）



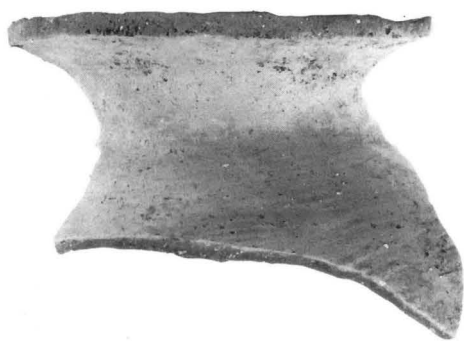
第5層土器出土状況



第4遺構（西より）



第7-1層土器出土状況



1



8



2



23



7



13



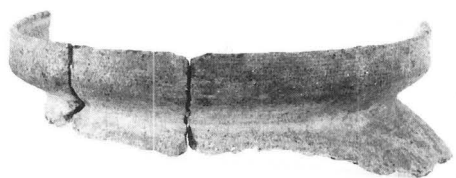
6



21



19



20



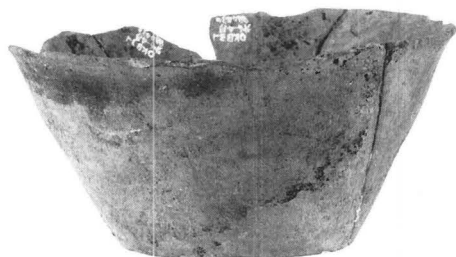
34



37



42



41



45



40



39



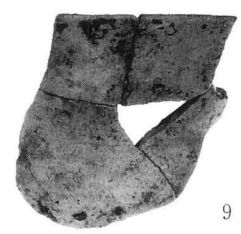
46



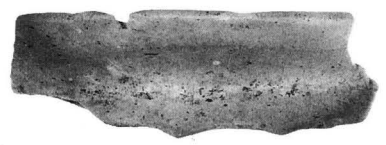
4



5



9



3



10



11



12

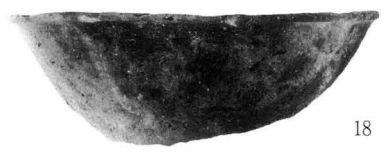
第 3 層出土土器



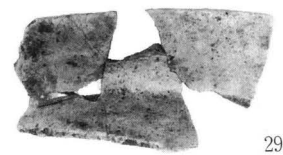
17



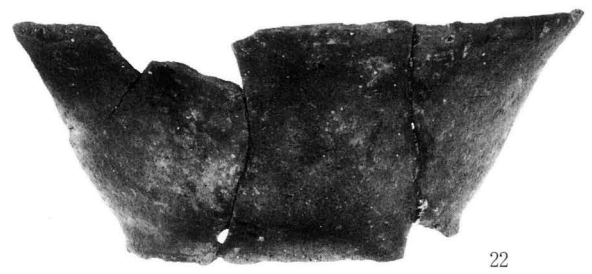
14



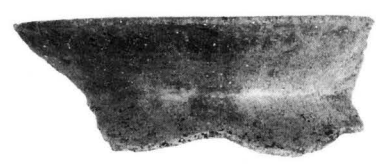
18



29



22

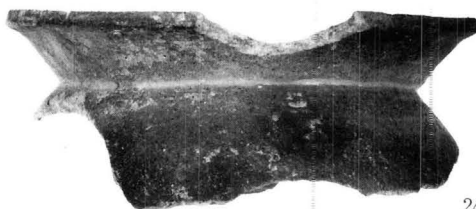


16

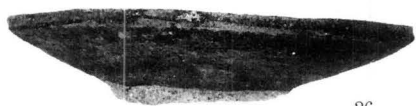
第 5・6 層出土土器



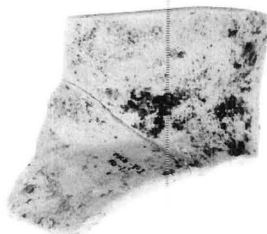
25



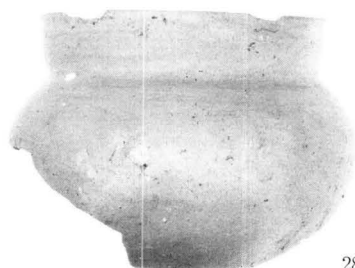
24



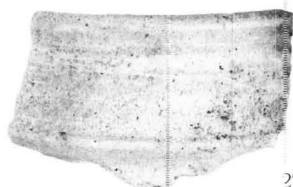
26



29

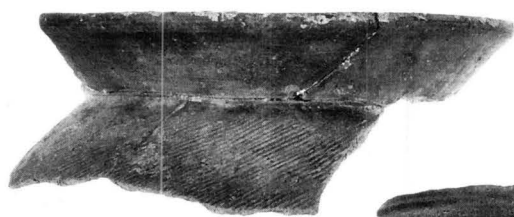


28



27

第6層出土土器



31



33



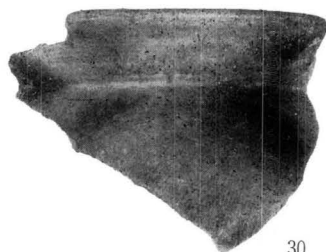
35



36



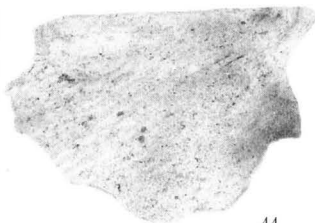
32



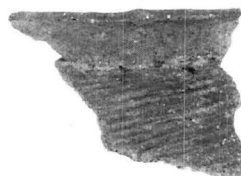
30



38



44



43

第7・8・9層出土土器

巨摩廃寺遺跡第2次発掘調査概要

本文目次

1. 調査に至る経過	1
2. 調査地点と地区割	2
3. 基本層序	2
4. 調査の概要	5
1) 弥生時代の遺構	5
2) 古墳時代～奈良時代の遺構	5
3) 出土遺物	9
5. まとめ	16

挿図目次

第1図 遺跡周辺図 (1/25000)	1
第2図 調査地点と地区割図	3
第3図 調査トレンチ南壁断面図	4
第4図 S D23東壁断面図	5
第5図 弥生時代中期遺構平面図	6
第6図 古墳時代～奈良時代遺構平面図	8
第7図 朱塗小型壺実測図	9
第8図 S D23出土遺物実測図	10
第9図 S D23・S D24出土遺物実測図	11
第10図 石器実測図	12
第11図 自然流路出土遺物	13
第12図 古墳時代～奈良時代遺構出土遺物実測図	14
第13図 古墳時代～奈良時代遺構出土遺物実測図	15

図版目次

図版1 巨摩廃寺遺跡遺構	1. 調査地全景	2. 調査風景
図版2 巨摩廃寺遺跡遺構	1. 弥生時代中期遺構検出状況	
	2. S D24・S K19～23検出状況	
図版3 巨摩廃寺遺跡遺構	1. S D23全景	2. S D23内遺物出土状況
図版4 巨摩廃寺遺跡遺構	1. S K20内遺物出土状況	2. S D24内遺物出土状況
図版5 巨摩廃寺遺跡遺構	1. 古墳時代～奈良時代遺構全景	

2. 古墳時代～奈良時代遺構全景
- 図版6 巨摩廃寺遺跡遺物 弥生土器9層(朱塗壺)SD23(蛸壺、甕)SK19(水差)SD24(鉢、高杯)
- 図版7 巨摩廃寺遺跡遺物 弥生土器SD23(壺、無頸壺、台付無頸壺、高杯、器台)
- 図版8 巨摩廃寺遺跡遺物 1. 弥生土器SD23(壺) SD24(壺)
2. 弥生土器SD23(甕)
- 図版9 巨摩廃寺遺跡遺物 1. 弥生土器SD23(無頸壺、高杯、鉢)
2. 弥生土器SD23(壺、短頸壺、水差、器台、無頸壺、脚台)
- 図版10 巨摩廃寺遺跡遺物 1. 弥生土器SD23(異形土器、脚台、甕蓋)SD24(異形土器)
2. 土師器自然流路(甕)
- 図版11 巨摩廃寺遺跡遺物 1. 土師器自然流路(高杯、脚台、小型器台)SX1(杯、壺)
2. 弥生土器自然流路(甕)
- 図版12 巨摩廃寺遺跡遺物 1. 土師器SX1(杯、皿、壺) 2. 土師器SX1(甕)
- 図版13 巨摩廃寺遺跡遺物 1. 須恵器SX1(杯蓋、杯身、平瓶、壺)SX5(鉢、杯、身)
- 図版14 巨摩廃寺遺跡遺物 1. 土師器SX1(壺) 2. 紡車SD23
3. 瓦6層(平瓦)SX1(丸瓦)
- 図版15 巨摩廃寺遺跡遺物 1. 土師器SX1(甕)、SX5(羽釜)、須恵器SX1(甕)
2. 未製石器SD23
- 図版16 巨摩廃寺遺跡遺物 1. 石鏃(表面)9層、10層、SD23 2. 石鏃(裏面)
- 図版17 巨摩廃寺遺跡遺物 1. 打製石器(表面)SD23、10層 2. 打製石器(裏面)

例 言

1. 本書は、学校法人樟蔭東学園の委託を受けて、財団法人東大阪市文化財協会が実施した巨摩廃寺第2次発掘調査報告書である。
2. 調査は、昭和58年8月1日から11月2日まで現地調査を実施した。
3. 整理作業は、本協会整理部で実施し、本書の執筆は下村が行い、石割珠貴が製図・トレスを行なった。
4. 現地での土色は、農林省農林水産技術会議事務所・財団法人日本色彩研究所監修の「新版標準土色帖」に準じており、記号の表示もそれにしたがった。出土遺物の写真は、スタジオGFプロに委託して撮影を行なった。
5. 調査の実施にあたっては、学校法人樟蔭東学園の全面的なご協力があった。記してお礼申し上げます。

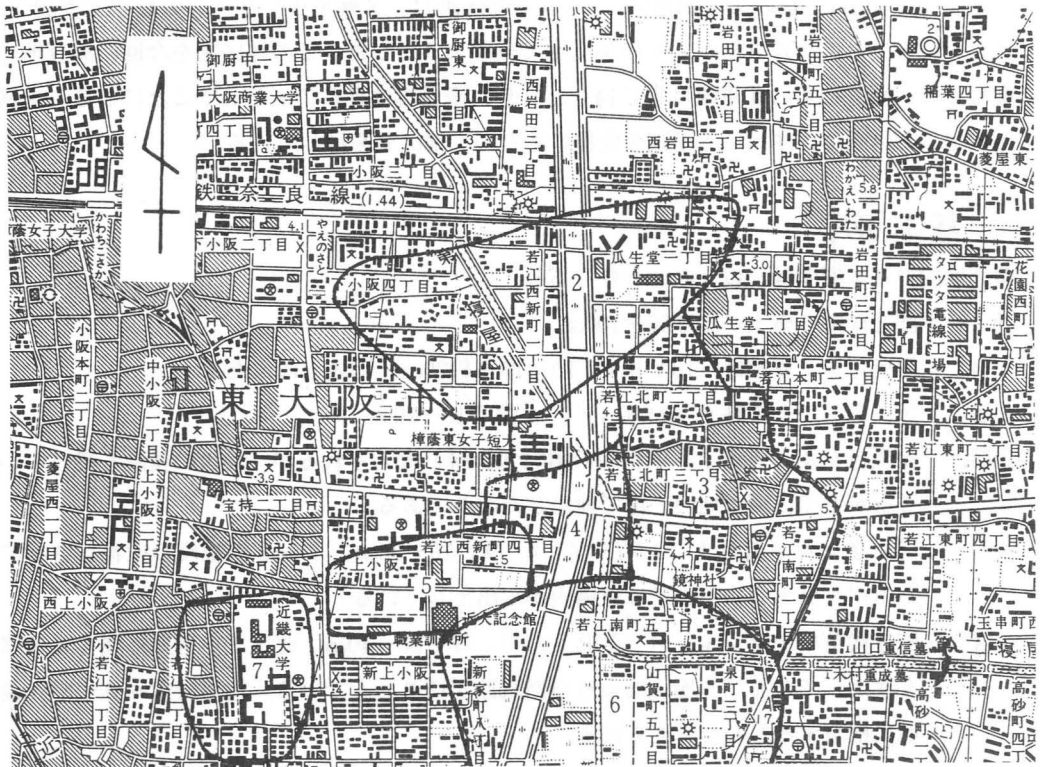
巨摩廃寺遺跡第2次発掘調査概要

1. 調査に至る経過

巨摩廃寺遺跡は、東大阪市若江西新町3丁目に所在する弥生時代から鎌倉・室町時代まで続く複合遺跡である。

遺跡が発見されたのは、昭和39年にさかのぼる。この年に府道中央環状線の建設工事が行なわれることになっていたが、地元の人々から昭和8～9年頃に楠根川改修工事及び耕地整理の際に発見された大きな石が、そのまま工事予定地に埋め戻されているので、事前に調査してほしい旨の要望が出された。当時の河内市教育委員会では、要望を受けて調査団を組織して発掘調査を行なうこととなった。調査の結果、基壇状の土層と礎石3個が検出された。出土した軒瓦などから、この遺構は鎌倉時代から室町時代に存在した巨摩廃寺の建物跡であると推定され、巨摩廃寺遺跡として周知されるようになった。

その後、昭和53年から近畿自動車道路建設予定地内の発掘調査が開始され、多くの新しい事実が明らかになった。巨摩廃寺遺跡の範囲内からも、弥生時代の方形周溝墓や古墳時代の水田



- | | | | |
|-----------|----------|----------|----------|
| 1. 巨摩廃寺遺跡 | 3. 若江遺跡 | 5. 上小阪遺跡 | 7. 小若江遺跡 |
| 2. 瓜生堂遺跡 | 4. 若江北遺跡 | 6. 山賀遺跡 | |

第1図 遺跡周辺図 (1/25,000)

跡、埋没していた方形墳（巨摩1号墳）などが発見されている。また、鎌倉～室町時代の堀立柱建物も検出され、巨摩寺との関係が注目されている。

今回の発掘調査は、遺跡の西半分を占める学校法人樟蔭東学園の本館建設工事に伴う調査である。樟蔭東学園の敷地は、南側は若江北遺跡の範囲内にあたり、昭和57年に行なわれた校舎建替に伴う調査では弥生時代～古墳時代の水田跡が検出されている。調査は、学校法人樟蔭東学園の委託を受けて昭和58年8月1日より11月2日まで財団法人東大阪市文化財協会の担当で実施した。

2. 調査地点と地区割

今回の調査地点は、樟蔭東学園敷地中央部にあたる。調査の実施にあたっては、樟蔭東学園敷地全域を対象に地区割を行なった。地区割は、国土座標系にもとづいて、100m方眼の大区画とさらにその中を5mメッシュの方眼で小区画に分けることにした。地区割の基点（0点）は、学園敷地の北西側（X=-149.000、Y=-36.900）に設定し、100mごとの大区画のX軸を西から東へⅠ・Ⅱ・Ⅲとローマ数字、Y軸を北から南へA・B・Cのアルファベットの大字で表記し、それぞれの南東の交点を地区名とした。

小区画は、100m方眼の大区画を5mメッシュで区画し、X軸を1・2・3の数字で表記し、Y軸をa・b・cのアルファベットの小文字で表すようにした。この地区割を今回の調査地点に重ねると、調査地点の北東端はⅢC14oとなり、南西端はⅢC7rということになる。遺構図面に記した区画は、すべてこの国土座標にもとづく地区名を付している。

3. 基本層序

調査地内の基本層序は、以下のとおりである。

盛土 学園造成時の盛土。厚さ50～100cm。

1層 褐色シルト質細砂（10YR 4/4）。厚さ約20cm。旧表土にあたる。

2層 黄灰色シルト質粘土（2.5Y 4/1）。厚さ10～20cm。

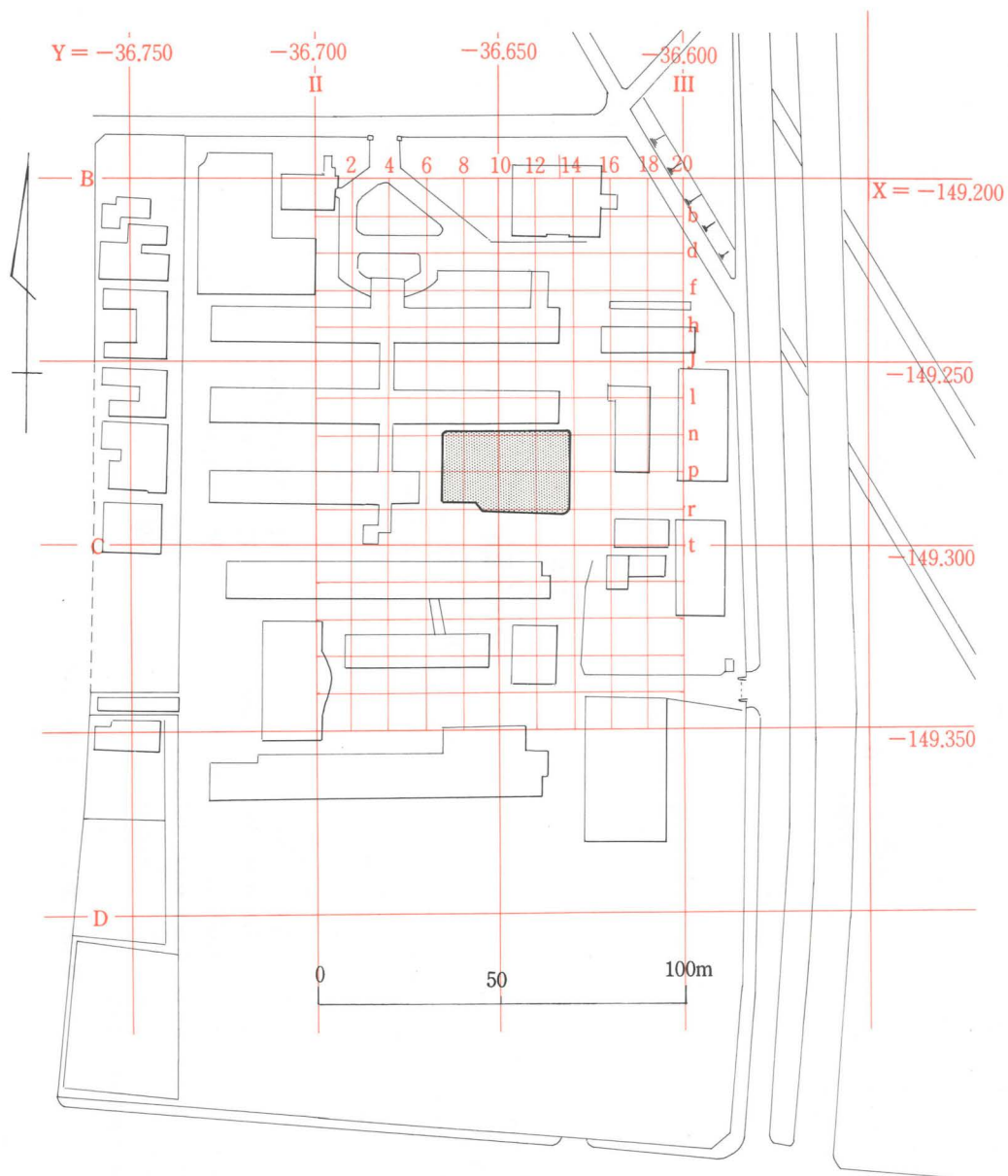
3層 褐灰色シルト質粘土。中世期の遺物包含層と考えられるが、後世の攪乱を受けている所が多く、調査地の一部で検出したのみである。

4層 黄灰色シルト質粘土（2.5Y 5/1）。厚さ10～30cm。7～8世紀代の遺物包含層であるが、出土遺物の大半は遺構内から出土している。

5層 明赤褐色粘土質シルト（5YR 5/8）。厚さ20～40cm。直上で中世期に属する遺構を検出している。5層上面より自然流路が切り込んでいる。古墳時代～弥生時代後期に相当するものと考えられる。

6層（上） 暗青灰色粘土質シルト（5B 4/1）。厚さ10～50cm。弥生時代後期に相当すると思われるが、遺物はほとんど出土しなかった。

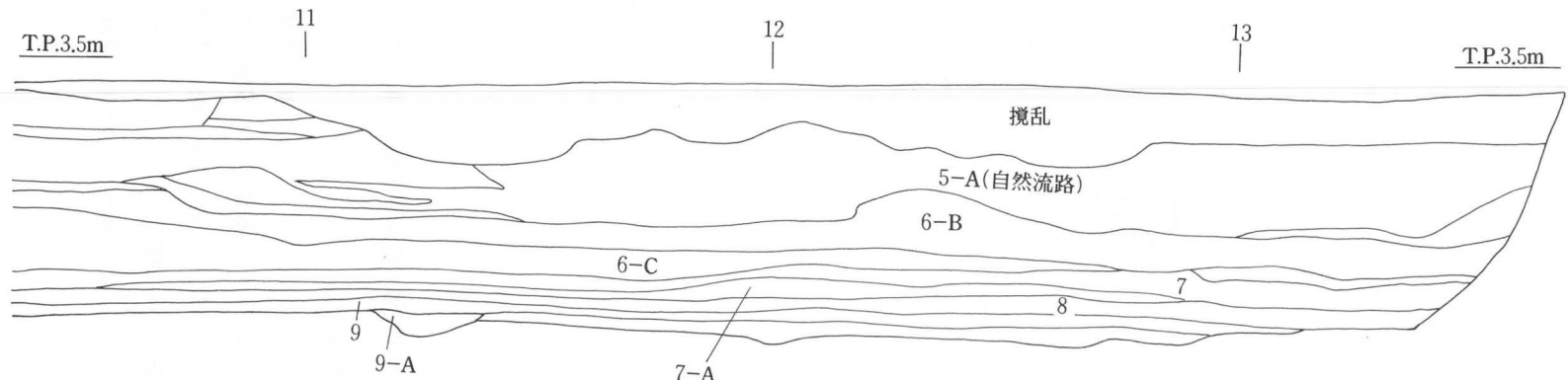
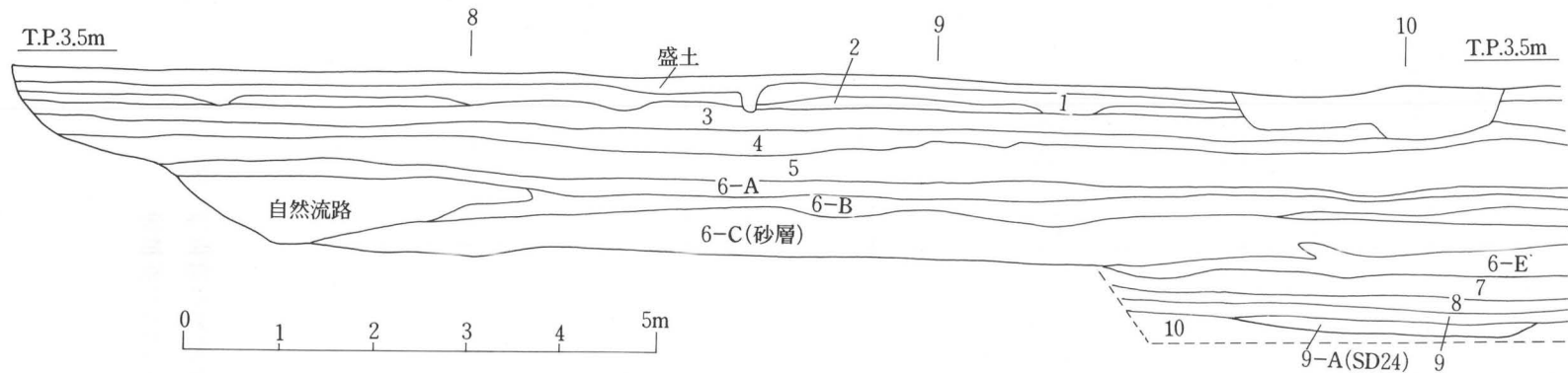
（下） 暗緑灰色シルト～細粒砂（10G 4/1）。厚さ30～50cm。調査地全域を覆う砂層



第2図 調査地点地区と地区割図

調査地西側へ厚く堆積する。

- 7層 暗緑灰色粘土層 (5G 4/1)。厚さ10~20cm。無遺物。
- 8層 暗緑灰色粘土層 (10G 3/1)。植物遺体を多量に含む。
- 9層 (上) 黒色粘土質シルト (N 2)。厚さ10~20cm。弥生時代中期の遺物包含層。
(下) 暗緑灰色シルト質粘土~細粒砂 (10G 4/1)。S D23・24内の堆積層。
- 10層 暗青灰色粘土 (5BG 4/1)。弥生時代中期の遺構面。



盛土	明黄褐色中粒砂 10YR6/8	6-A	灰色粘土 N4	7層	暗緑灰色粘土 5G4/1
1層	褐色シルト質細砂 10YR4/4	6-B	暗青灰色粘土質シルト 5B4/1	8層	暗緑灰色粘土 10G3/1
2層	黄灰色シルト質粘土 2.5Y4/1	6-C	暗緑灰色シルト 10G4/1	9層	黒色粘土質シルト N2
3層	褐灰色シルト質粘土 10YR4/1	6-D	青灰色細砂 10BG5/1	9-A	暗緑灰色シルト質粘土 10G4/1
4層	黄灰色シルト質粘土 2.5Y5/1	6-E	オリーブ黄色細粒砂 5Y6/4	10層	暗青灰色粘土~青灰色シルト 5BG4/1
5層	明赤褐色粘土質シルト~シルト質細砂 5YR5/8	7-A			

第3図 調査トレンチ南壁断面図

4. 調査の概要

1) 弥生時代の遺構

第10層直上で検出した。遺構としては溝状遺構3条、土坑6ヵ所を確認した。

S D23は、調査地の南側を西から東に向かって検出した。溝の西端では、幅が狭くなりそのまま終息しており、東端ではラッパ状に開いて調査地外に延びている。中央部では段堀りの状況を呈し、上幅3.5m、中幅約1mを測る。深さは、西端で約10cm、中央で約40cm、東端で約100cmを測る。溝底は皿状に凹み、地点により2段掘り、3段掘りの状況を呈することから、何回か溝の掘り直しがおこなわれたと思われる。遺物は、東端で深く凹んだ地点より弥生土器壺・甕・高杯などが一括出土している。

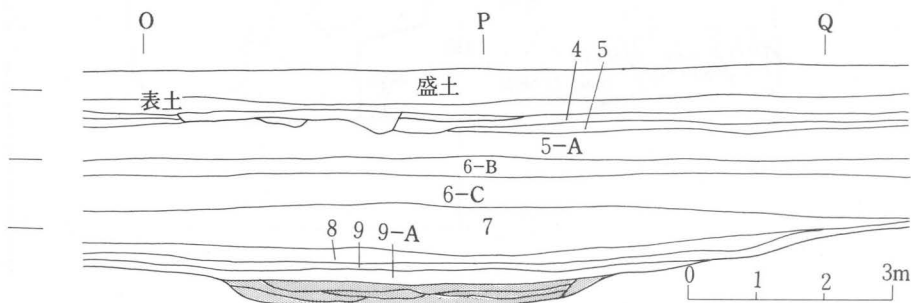
S D26は、西端で検出した幅20cm、深さ10cmの小規模な溝で、トレンチ外へ延びると思われる。この他に調査地北西端で土坑群を検出した。土坑群は、いずれも不定形な形状をしている。S K19は、長辺1.8m、短辺0.7mの長楕円形を呈し、内部より弥生時代中期の土器が少量出土している。いずれの土坑も深さ15~20cm前後で、性格などは不明である。

2) 古墳時代~奈良時代の遺構

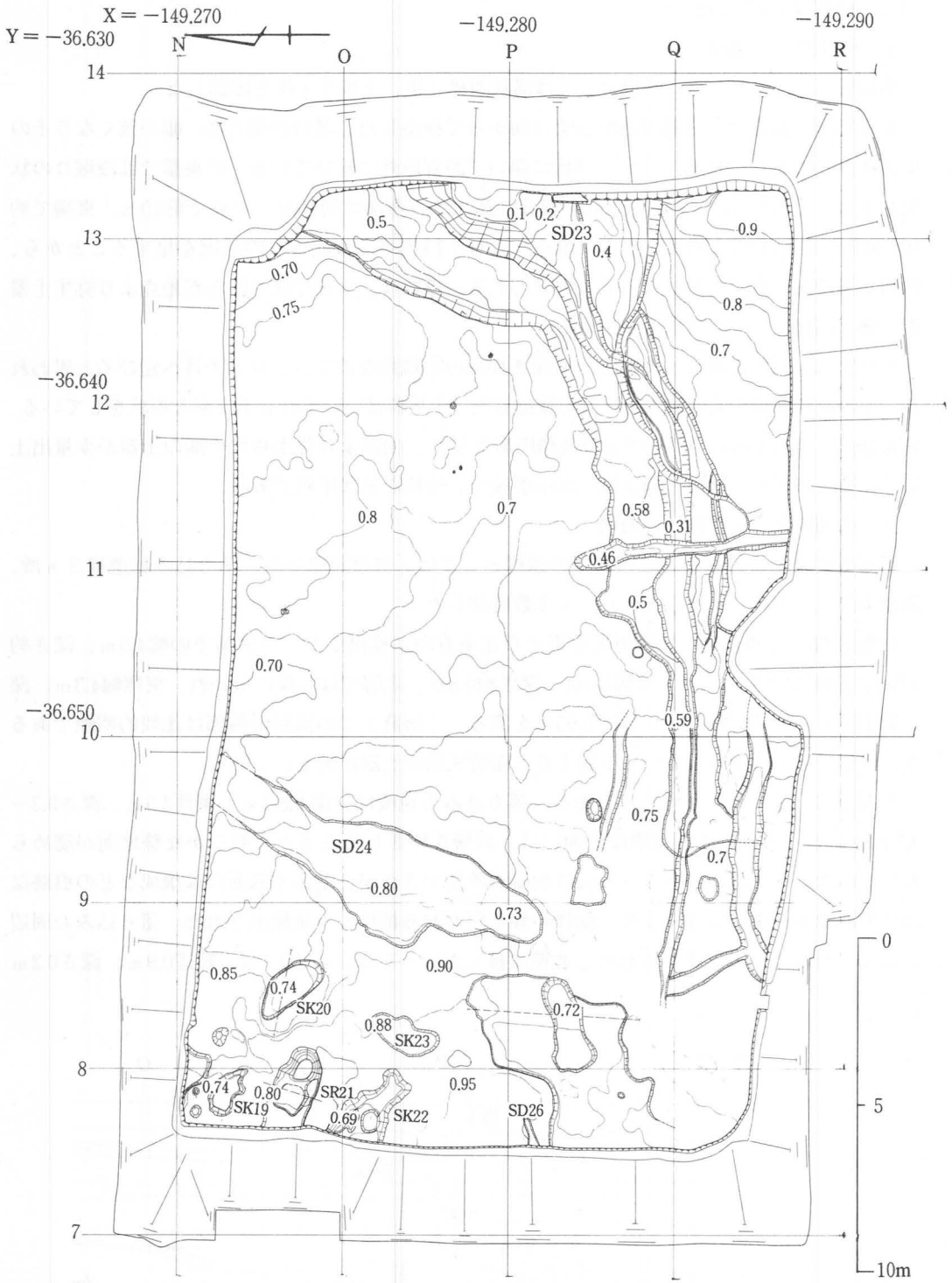
第5層直上で検出した。この時期の遺構としては、自然流路1条、落ち込み状遺構3ヵ所、溝12条以上、土坑15ヵ所以上、ピット多数確認した。

自然流路は、調査地のほぼ中央を南から北東方向に検出した。中央部での幅4.5m、深さ約0.9m、南端では少し広がって幅7.6m、深さ約0.8m、北端では二俣に分かれ、東側幅4.3m、深さ約0.95m、西側で幅4.2m、深さ0.95mを測る。5層直上での流路の輪郭は比較的明瞭であるが、下層でははっきりしない。下層より、布留式期の土器が出土している。

S X1は、竪穴状の落ち込みである。落ち込みの規模は、南北8.5m、東西3.5m、深さ0.2~0.3mを測る。落ち込み状遺構の底面には、砂層を叩きしめたような明らかな整地面が認められた。また、中央には厚さ5~6cmの炭層が確認できたが、壁面や底面には焼成などの痕跡は認められなかった。炭層内より、動物の骨と思われる細片が少量検出された。落ち込みの周辺には4ヵ所のピットが認められた。北壁に接したピットは、長辺1.1m、短辺0.9m、深さ0.2m



第4図 S D23東壁断面図



第5図 弥生時代中期遺構平面図

を測る。対面する南壁に掘って径0.7m、深さ0.15mの規模のピットを検出した。また東壁及び西壁近くからも径0.5mの規模のピットを確認した。小規模な覆屋的な施設が推測される。内部より土師器杯・皿・甕、須恵器杯・甕などが出土している。

SX4は、SX1と重複して検出した。落ち込み部の西半分をSX1によって切られているため、全体の形状は不明であるが、残存部で長辺6.8m、短辺2.2m以上、深さ約0.1mで長方形を呈するものと考えられる。SX4の輪郭は不明で、SX1で認められた整地土及び炭層は検出できなかった。

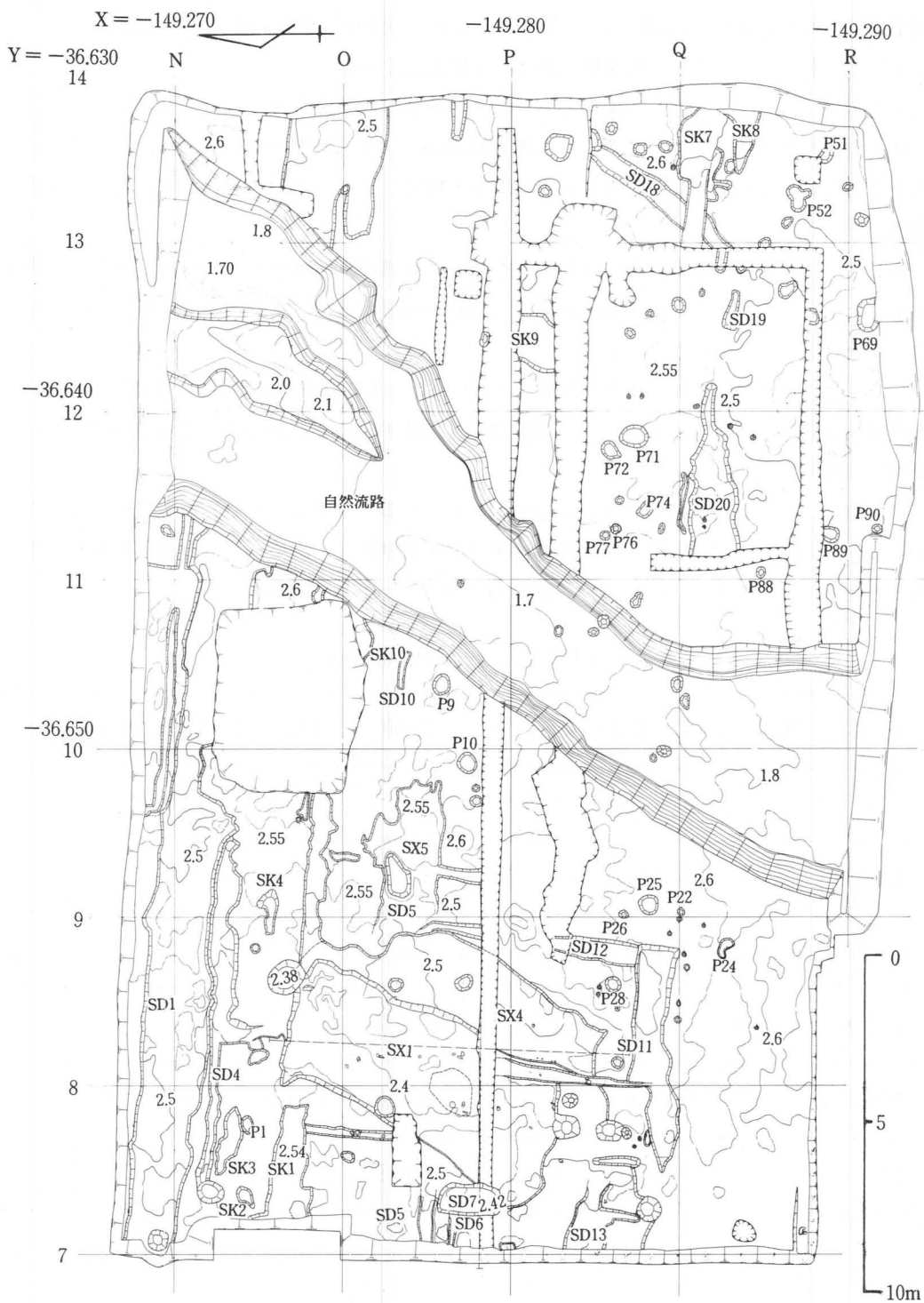
SX5は、SX4の北側に接して検出されたが、輪郭は不明確であり、形状・規模とも特定することはできなかった。5～10cmの深さに凹んだ内部からは、土師器羽釜・杯、須恵器杯・すり鉢などが出土している。

SD1は、調査地北東端で検出した溝で、SD11とともに落ち込み状遺構(SX1・SX4)の南北を区切るかのように検出した。溝幅2.1m、深さ約0.1mで総延長約15mを検出したが、東側では徐々に幅を減じている。

SD11は、SD12につながって逆L字形に延びている。本来は、SD13とつながっていたのかもしれない。そうであれば、SX4の南東コーナ及びSX1の南辺を囲むようにめぐっていたと考えることもできる。SD11の溝幅0.9m、深さ0.5～0.1mを測る。

主要なピット・土坑の計測値

名称	規模(長辺×短辺×深さ) m	名称	規模(長辺×短辺×深さ) m
P9	0.65×0.53×0.12	SK3	2.2×0.6×0.03
P10	0.6×0.55×0.2	SK4	1.3×0.3×0.15
P25	0.6×0.6×0.1	SK5	1.37×0.7×0.2
P28	0.46×0.46×0.15	SK7	2.15×1.63×0.2
P69	1.05×0.7×0.2	SK8	1.9×0.63×0.05
P71	0.87×0.67×0.13	SK9	?×1.7×0.05



第6図 古墳時代～奈良時代遺構平面図

3. 出土遺物

弥生時代の遺物

S D 23内から弥生時代中期Ⅳ様式の良い土器が出土している他、第9層包含層内より石器類が少量出土している。

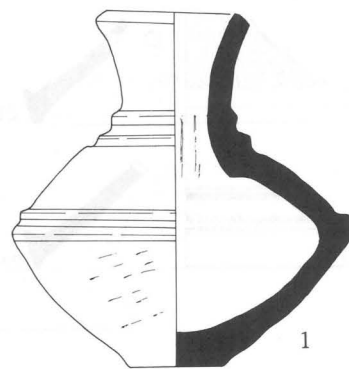
広口壺 口縁部の形状から3タイプが認められる。太く短く直立する頸部に、ゆるやかに外反する口縁部が付くタイプ(2~5)。(4)は、外面に粗いハケメで調整を施す他地域産の土器である。長くのびた頸部に6条以上の櫛描直線紋を施す。第Ⅲ様式から続く特徴を残している。受口状口縁をもつ有段口縁壺(34)は、口縁端部に3条の凹線紋を配している。(33)は生駒西麓産の土器で、その他は他地域の胎土である。

朱塗の小型短頸壺 (1)の土器は、第9層包含層内よりバラバラに出土した破片を接合復元したものである。復元後の口径5cm、器高13.8cm、器壁の厚さ1.05cmを測る。算盤形の体部に、短く外反する直口の口縁部が付く。頸部と体部中央に2本ずつの凸帯をめぐらす。外面の全面に朱塗りが施されている。他地域からの搬入品である。

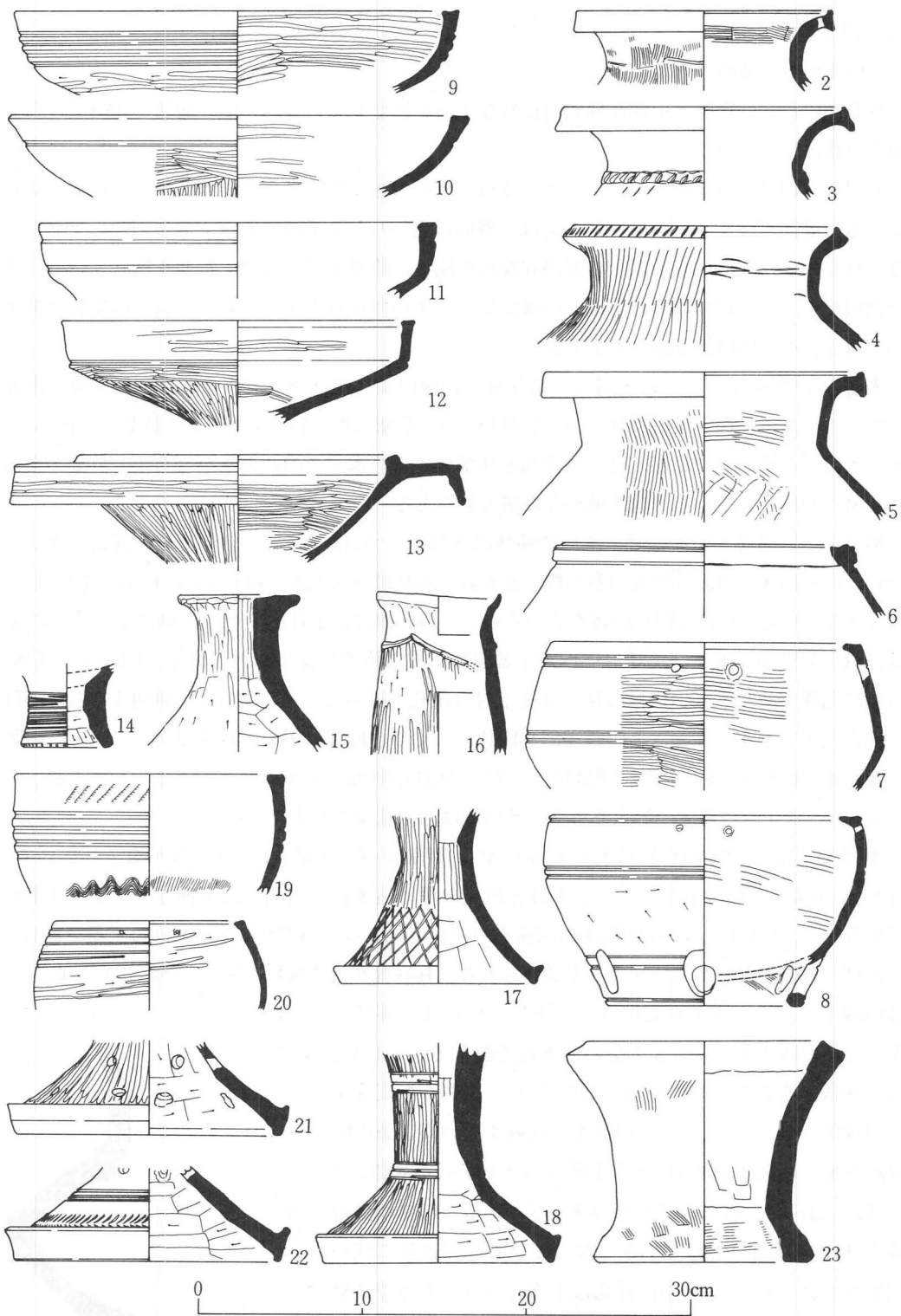
無頸壺 口縁部を肥厚させ、直口で椀状の体部をもつ(19・20)は、鉢形土器の部類かもしれない。(19)は体部外面に櫛描の烈点紋、直線紋、波状紋を入れる。(20)は、口縁端部を肥厚し、内傾させている。(6)は段状口縁をもつもので、段の幅はあまり広くなく、無紋である。(7・8)は、台付無頸壺である。半球形に内弯する壺に三方に円窓を穿つ脚台が付く。口縁部、頸部、台部に凹線をめぐらし、口縁端部に2孔1対の紐孔を穿っている。(39)は、無頸壺に器台が付く複合土器である。壺部は、口縁端部を段状につくり、段部に円形浮紋を貼付けている。台部口縁にも凹線紋上に円形浮紋を貼付けている。体部内外面を丁寧にヘラミガキで調整している。(7)は生駒西麓産の胎土をもち、その他は他地域産の胎土である。

水差形土器 全体の形状はわからないが、(図版6・9-107・110)の土器が出土している。(107)は体部上半に把手が付く。把手は充填式で埋め込まれ、内面には指押さえにより圧痕が認められる。(110)は、口縁に数条の凹線をめぐらしている。いずれも他地域産の土器である。

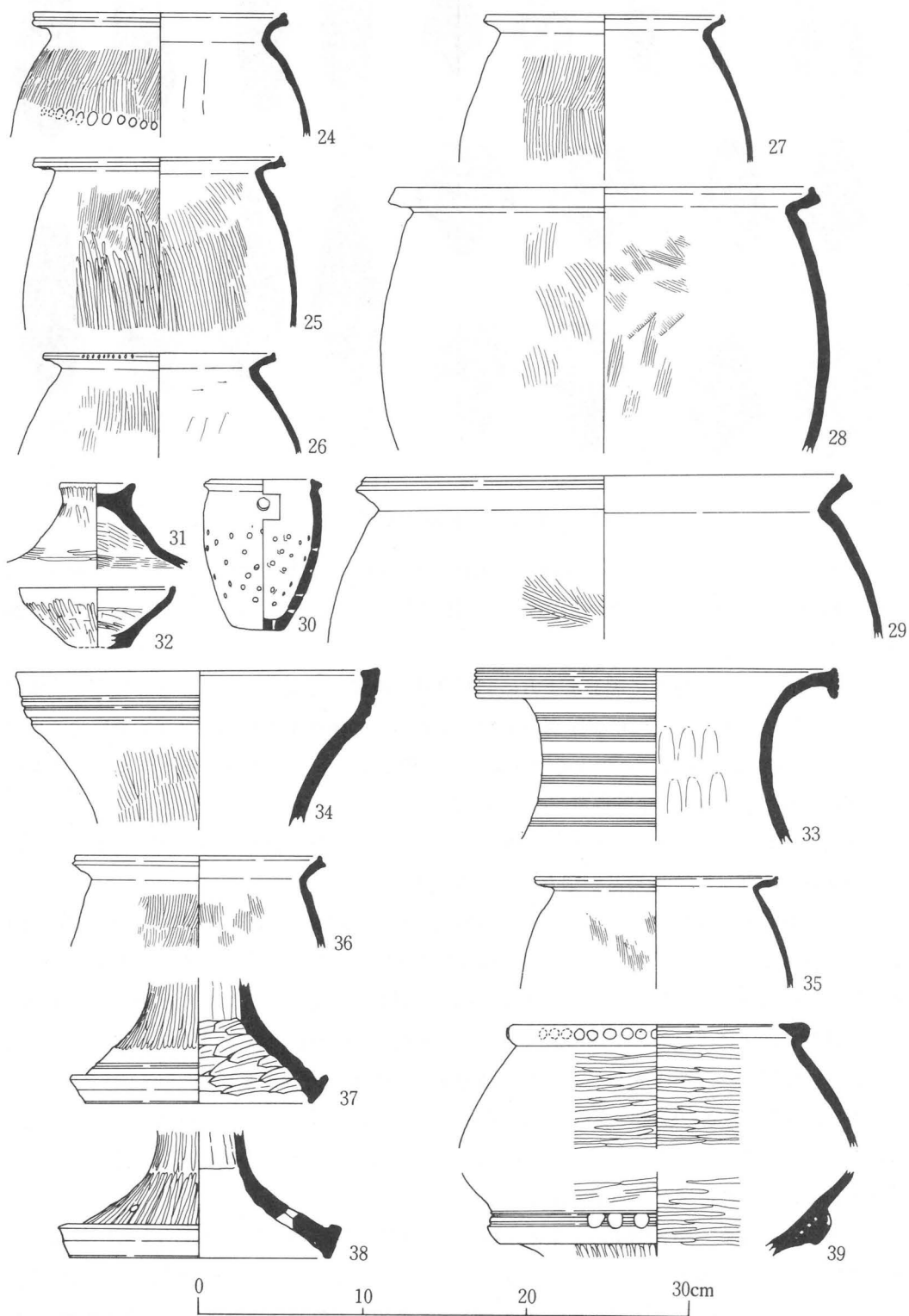
高杯 杯部の形態から3タイプが認められる。杯底部が浅く椀状を呈し、内弯ないし直立する口縁部が付く。端部を肥厚させ、平坦につくる。杯部外面に、(9)は4条、(10)は1条の凹線紋を配する。(11・12)は、杯底部を斜め上方に直線的につくり、屈曲して直立する口縁部が付く。(11)は、口縁部に間隔を置いて2条の凹線紋を配し、(12)は内外面とも丁寧にヘラミガキで調整している。(13)は、水平口縁をもつタイプである。口縁端部の垂下部や杯部内面突起も小さくなっている。口縁部に浅い凹線紋をめぐらし、杯部内外面は丁寧にヘラミガキで調整している。杯部と脚部が接合できる例はないが、総じて中空の柱状部に直線的に外へ開く裾部をもつ。裾端部を拡張



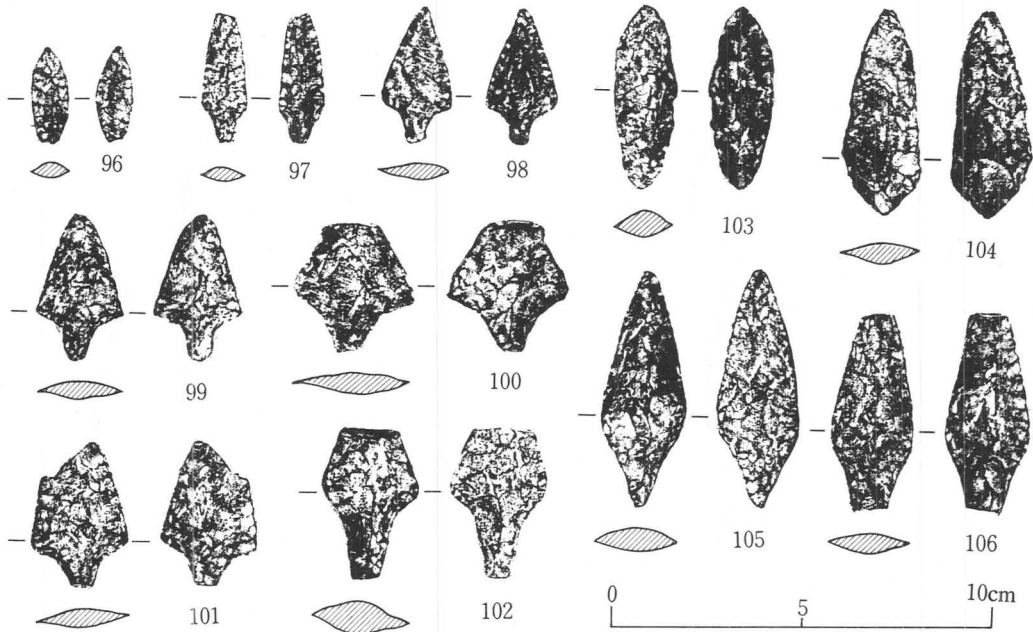
第7図 朱塗小型壺(1/3)



第8图 SD23出土遺物実測図



第9图 S D23·24出土遺物実測図



第10図 石器実測図

し、面をつくっている。柱状部に沈線紋を入れるもの(18)、裾部に斜格子紋(17)、沈線紋十矢羽根状紋(22)、二段の円孔を穿つもの(21)など装飾性に富むものが多い。(9・11～13・18)は生駒西麓産の土器である。

甕 屈曲外反する口縁部に端部を上方に肥厚させ、内傾する面をつくる。そこに弱い凹線紋を入れるもの(24・25・29・35・36)が圧倒的多数をしめる。体部外面を粗いハケメで調整するものが多く、大型品(28・29)は、その上をナデにより調整している。体部外面をヘラミガキで調整する例は少ない。(29)は、生駒西麓産の土器である。

甕用蓋 (31)はつまみ上部が凹み、裾部が大きく開くことから甕用の蓋と考えられる。(15)は、つまみ中央部に径2.3cmの孔が穿たれている。

脚台 (23)は、口径13.3cm、底径11.2cm、高さ13.4cmの器台形の土器である。器壁の厚さ1.4cmあり、安定した形状を呈するところから器台と考えておきたい。外面は粗いハケメののちナデ調整、内面はヘラケズリと粗いハケメののちナデ調整、内面はヘラケズリと粗いハケメののちナデ調整で仕上げている。生駒西麓産の土器である。その他に凹線紋で飾る大型器台も出土している。(図版9-116・120)は、いずれも他地域からの搬入土器である。

蛸壺 (30)は、丸底の底部に内湾する体部が付き、口縁端部に1条の凸帯をめぐらしている。口縁部直下に径7mmの孔を1ヵ所穿ち、体部上半から底部にかけて径3mm前後の円孔を102ヵ所入れている。他地域からの搬入品である。

異形土器 (16)は、口径7.3cmの小型の手捏土器である。円筒形の体部に直口する口縁部が付き、端部をわずかに内湾して終わっている。口縁部直下に斜目方向(螺旋形)に1条の凸帯をめぐらしている。口縁部を指押さえ、凸帯より下はケズリ調整で仕上げている。他地域からの搬入品。

石器 石鏃が11点出土している。凸基有茎式(91・97・98・100～102)と柳葉形(96・103～106)とがあり、大型のもの(100)と小型のもの(96)などバラツキが認められる。その他の打製石器(129～131)、未製品(図版15～127・128)が出土しているが、石器の量はそれほど多くはない。

2) 古墳時代～奈良時代の遺物

自然流路内出土遺物

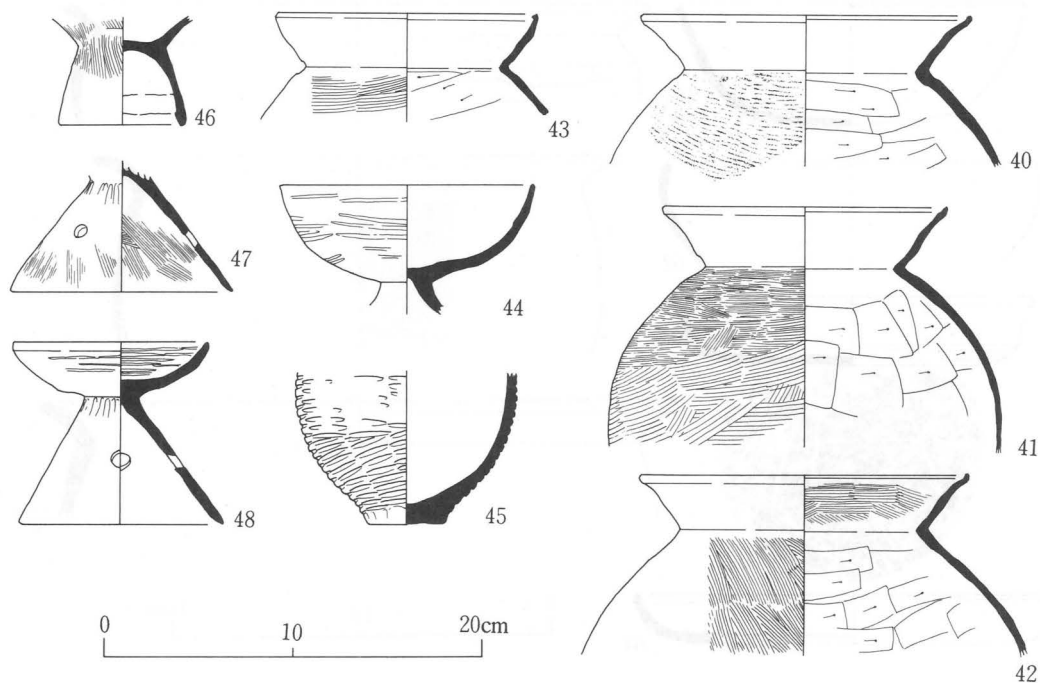
甕 体部外面に粗いタタキメを施す弥生時代後期の甕底部が1点出土している。その他に、「く」の字形に屈曲外反する口縁部に端部を上方につまみ上げ、受口状を呈する甕が出土している。このタイプには、体部外面をこまかなタタキメで仕上げるもの(40)とハケメで仕上げるもの(41・42)がある。また、外反する口縁部をわずかに内弯させ、端部を肥厚し内傾するもの(43)がある。(46)は台付甕の脚部、(47・48)は小型品ですべて搬入品である。(40～42)の甕は、生駒西麓産の土器である。

SX1・SX5内出土遺物

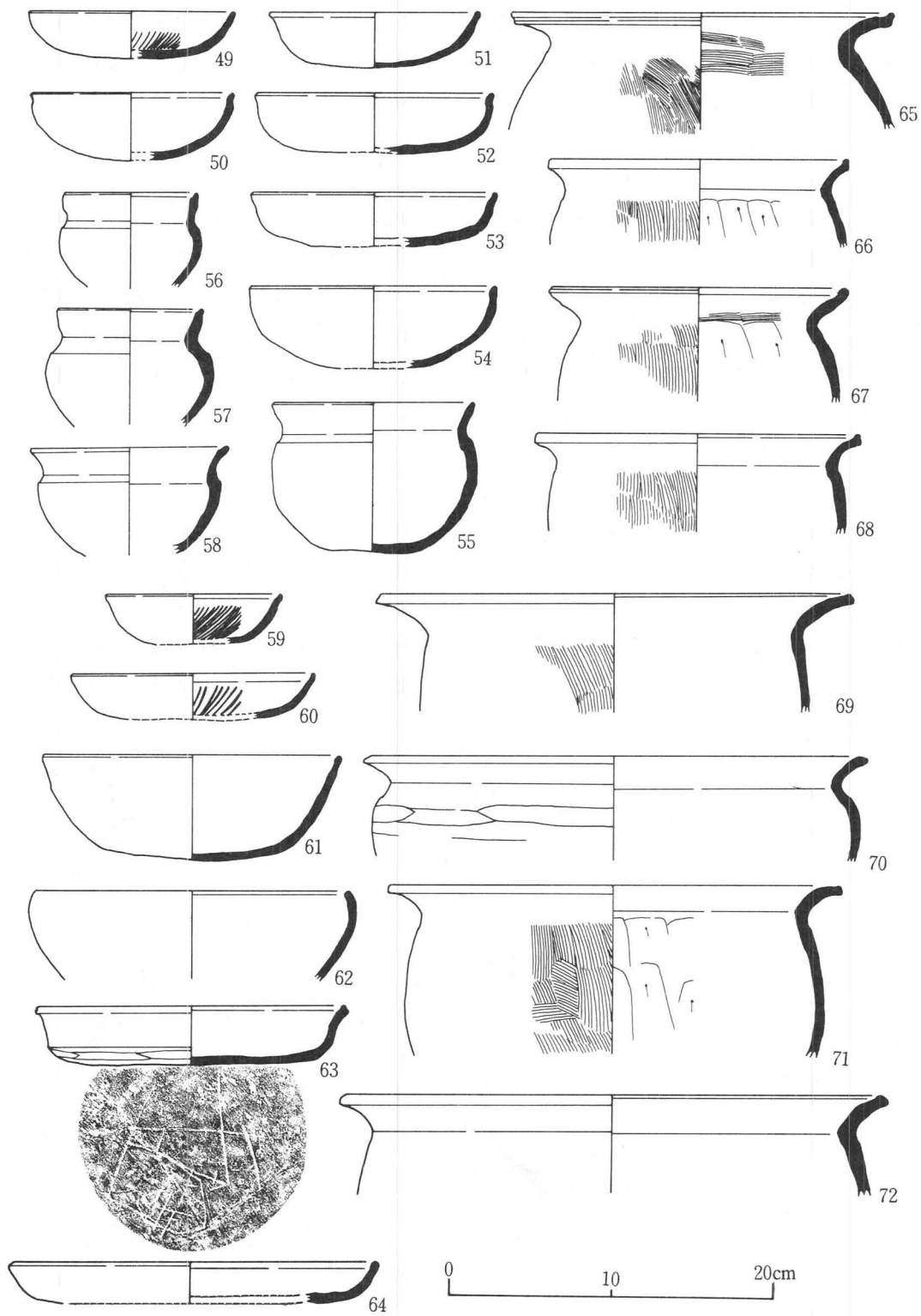
土師器

杯 丸みをおびた底部から口縁部がゆるやかに内弯して上方へ開くタイプには、椀状に深い体部に口縁部が内傾するもの(50・54・62)と直口のもの(61)がある。平らな底部から外上方に開く口縁部をもつタイプにも、口縁部が内傾するもの(52・53)と直口のものがある。

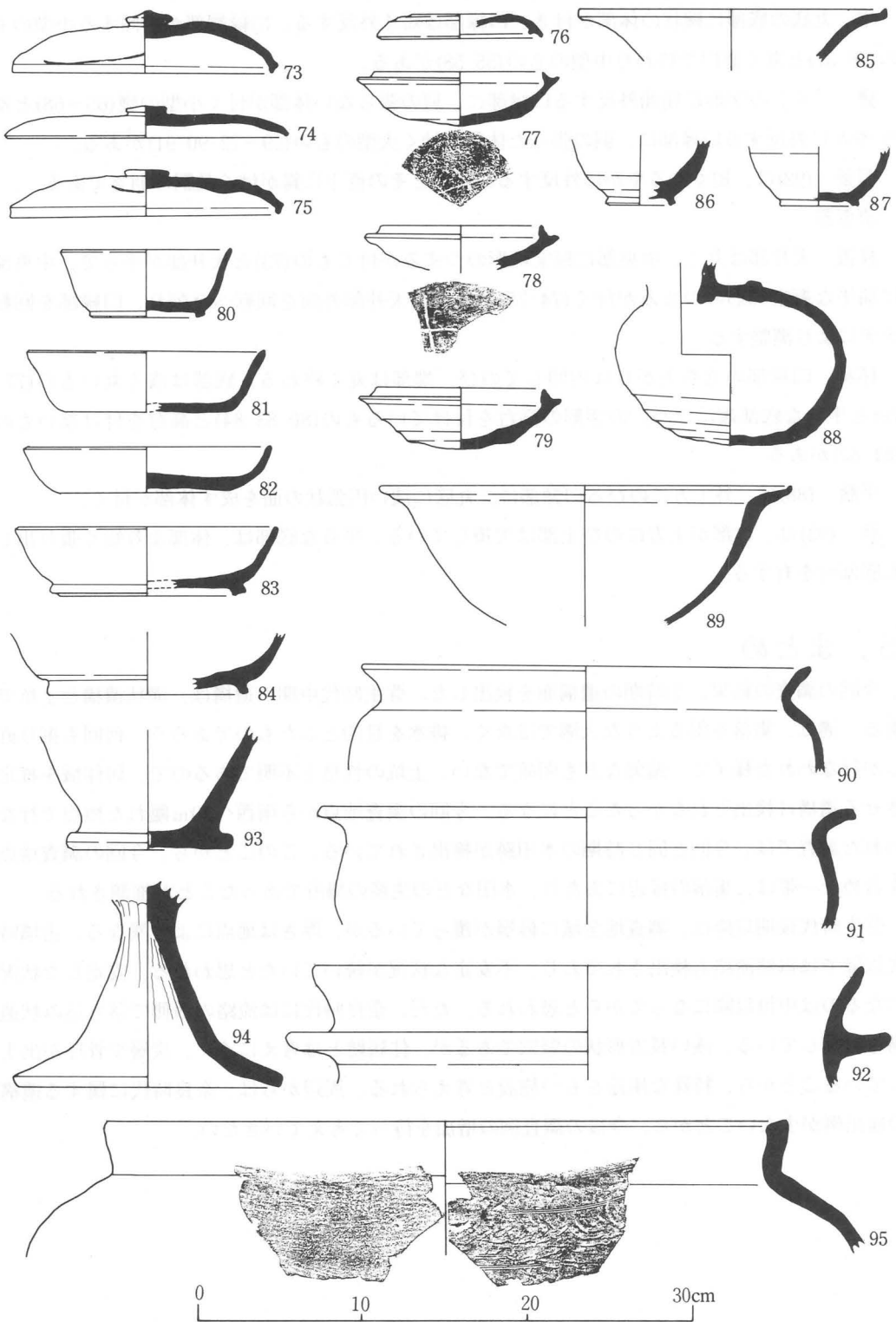
皿 平らな底部から外上方にまっすぐ開く口縁部が付く。口縁端部が外反するもの(63)と丸く内弯するもの(60・64)がある。(63)は、口径18.8cm、器高3.6cmを測り、底部外面にヘラ描きの線刻を施している。



第11図 自然流路出土遺物実測図



第12図 古墳時代～奈良時代遺構出土遺物



第13図 古墳時代～奈良時代遺構出土遺物

埴 丸底の底部に椀状の体部が付き、口縁部は短く外反する。口縁端部が内傾する小型のもの(56・57)と丸く直口で終わり中型のもの(55・58)がある。

甕 「く」の字形に屈曲外反する口縁部に、肩の張らない体部が付く小型の甕(65～68)とゆるやかに外反する口縁部に、胴の張った体部が付く大型のもの(69～72・90・91)がある。

羽釜 (92)は、短くゆるやかに外反する口縁部とその直下に鏝が付く長胴の羽釜である。

須恵器

杯蓋 天井部は丸く、中央部に擬宝珠形つまみが付くもの(73)と天井部が平らで、中央部に扁平な擬宝珠形つまみが付く(74・75)がある。天井部外面を回転ヘラ削り、口縁部を回転ナデにより調整する。

杯身 口縁部の立ち上がりは内傾してのび、端部は丸く終わる。底部は浅く丸いもの(77・79)と平らな底部端に「ハ」の字形の高台を付けているもの(80・83・84)と高台を付けないもの(81・82)がある。

平瓶 (88)は、外上方にのびる口頸部に、丸底に浅い円弧状の面を成す体部が付く。

鉢 (93)は、体部が上方にのび上部は欠損している。平らな底部は、体部より短く張り出した底部台を有する。

5. まとめ

今回の調査の結果、2時期の遺構面を検出した。弥生時代中期の遺構は、溝状遺構と土坑である。溝は、集落を限るような大溝ではなく、排水を目的としたものであろう。何回も掘り直しが行われた様子で、輪郭なども明確でない。土坑の性格も不明であるので、居住域を推定させる遺構は検出されなかったことになる。今回の調査地点から南西へ50m離れた地点で行われた調査では、今回と同じ時期の水田跡が検出されている。このことから、今回の調査地点を含めた一帯は、集落の縁辺にあたり、水田などの生産の場所であったことが推測される。

弥生時代後期以降は、調査地全域に砂層が覆っているが、厚さは地点により異なる。古墳時代以降では自然流路も検出されており、不安定な状況が続いていたと思われる。安定した状況になるのは中世以降になってからと思われる。ただ、奈良時代には流路の西側で落ち込み状遺構を検出している。浅い長方形の縦穴であるが、住居跡とは考えにくく、炭層や骨片が出土していることから、特殊な用途をもつ施設と考えられる。周辺からは、奈良時代に属する遺構の検出例が少ないことから、今後の調査例の増加を待って考えていきたい。

圖 版



1. 調査地全景



2. 調査風景



1. 弥生時代中期遺構検出状況



2. SD24・SK19～23検出状況



1. SD23全景



2. SD23内遺物出土状況



1. SK20内遺物出土状況



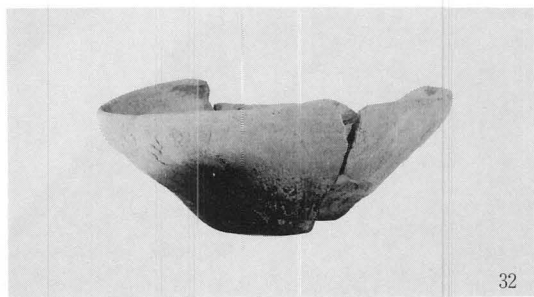
2. SD24内遺物出土状況



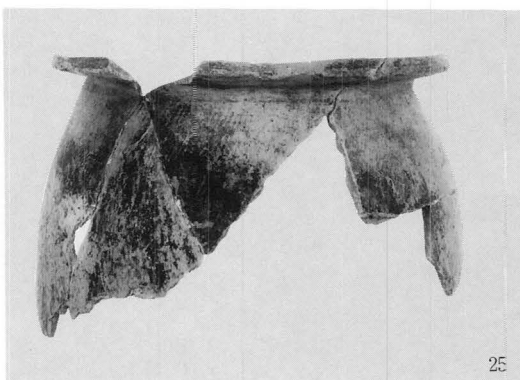
1. 古墳時代～奈良時代遺構全景



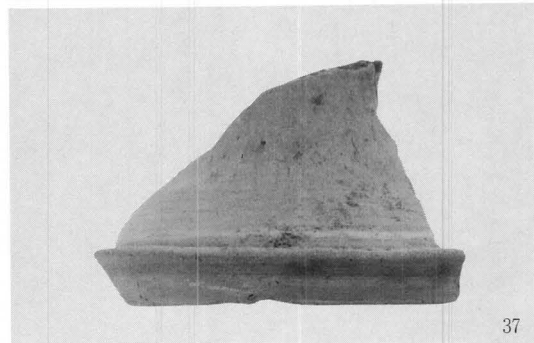
2. 古墳時代～奈良時代遺構全景



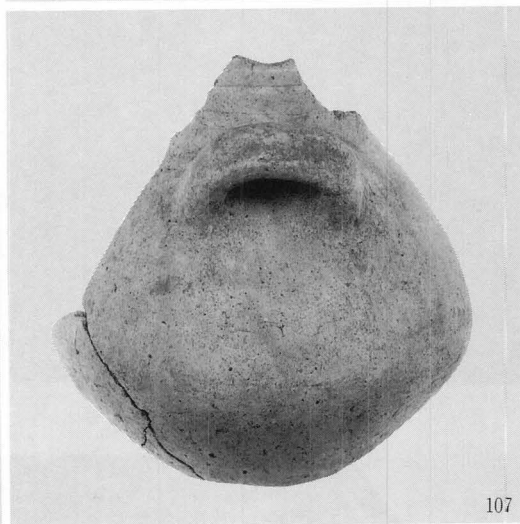
32



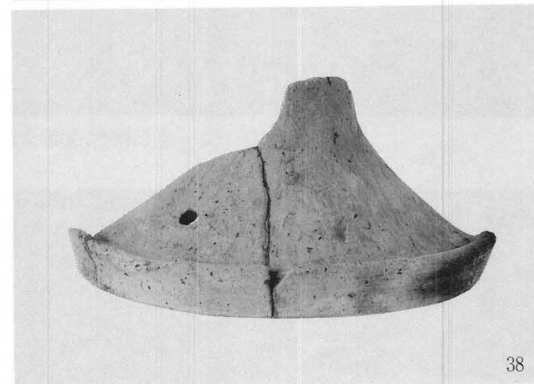
25



37



107



38

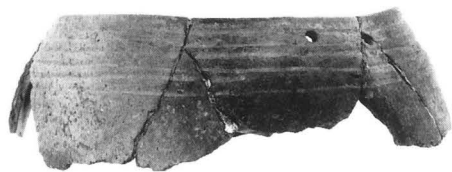


30

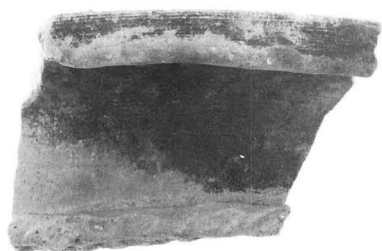


1

弥生土器 9層(朱塗壺 1) SD23(蛸壺30・甕24) SD24(鉢32、高杯37・38) SK19(水差107)



20



3



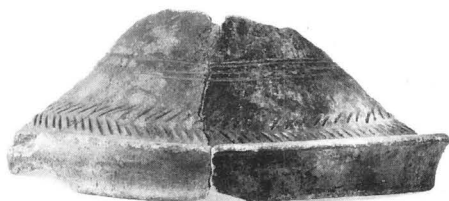
8



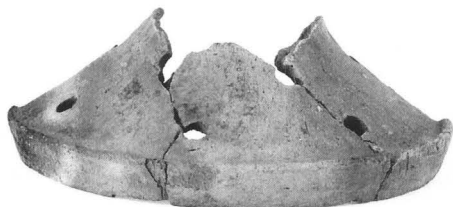
13



23



22



21

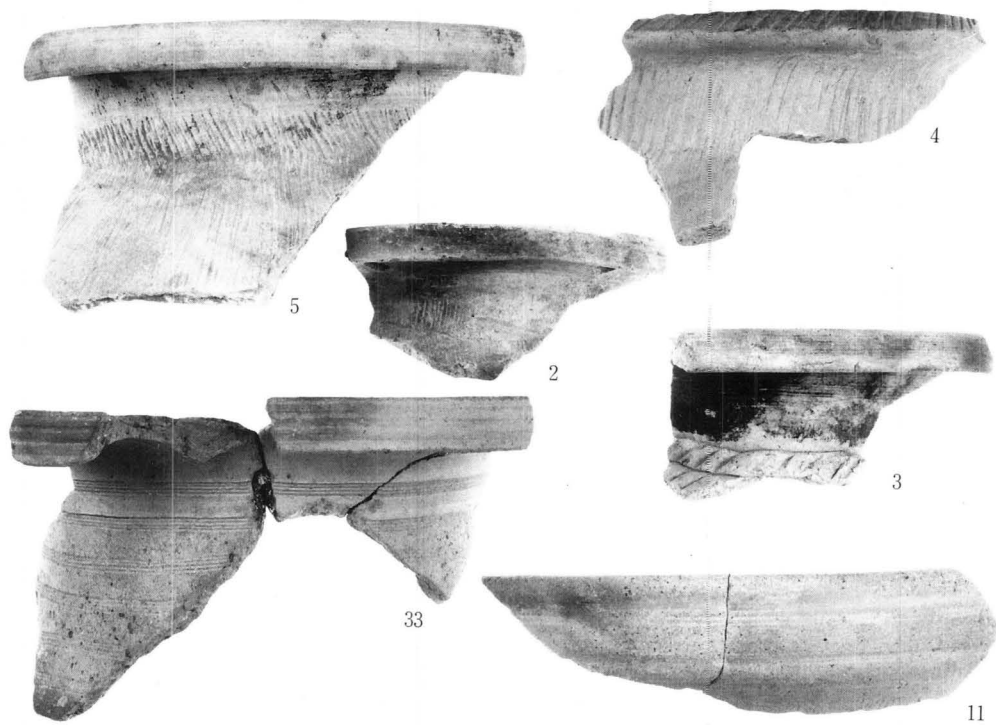


17

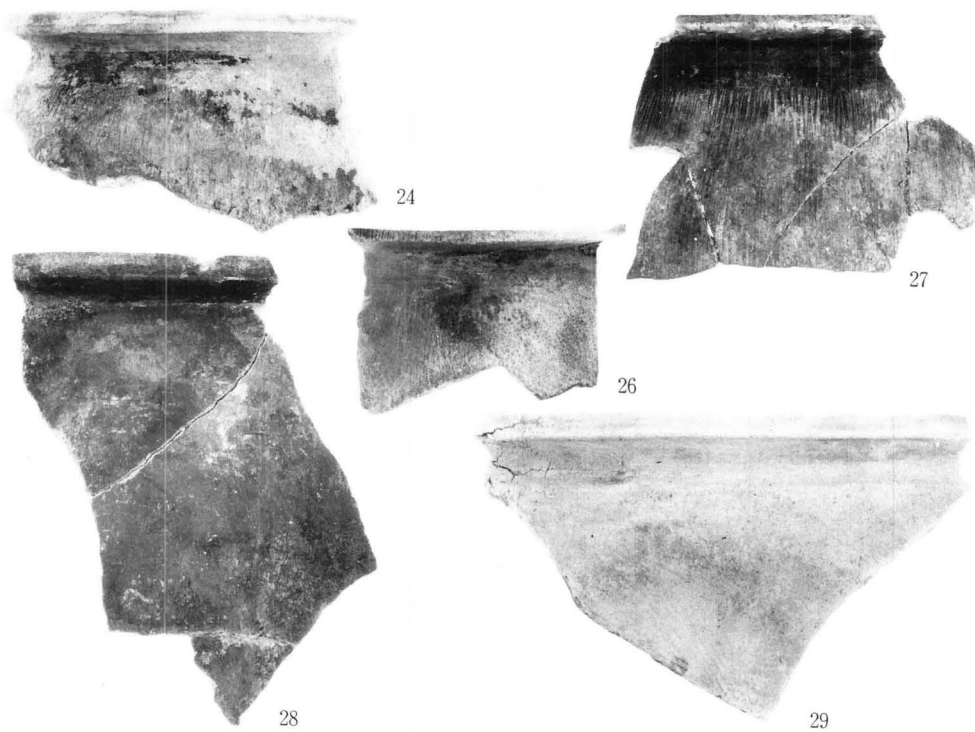


18

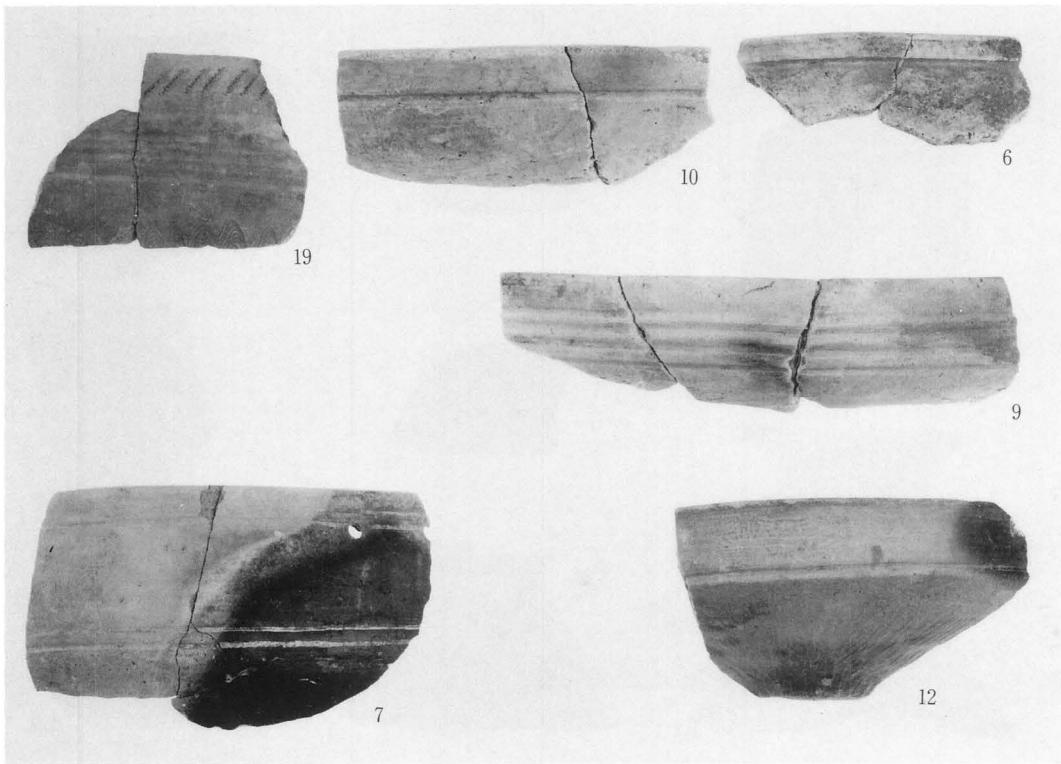
弥生土器 SD23(壺 3、無頸壺 20、台付無頸壺 8、高杯 13・17・18・21・22、器台 23)



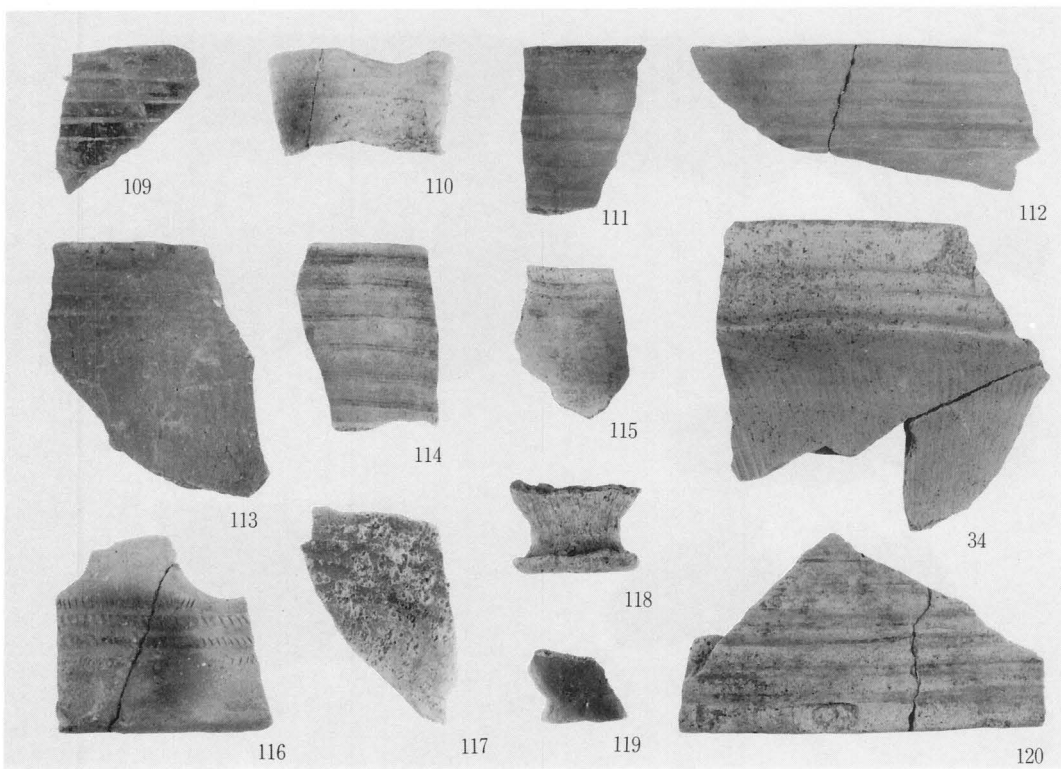
1. 弥生土器 SD23(壺 2~5・11) SD24(壺33)



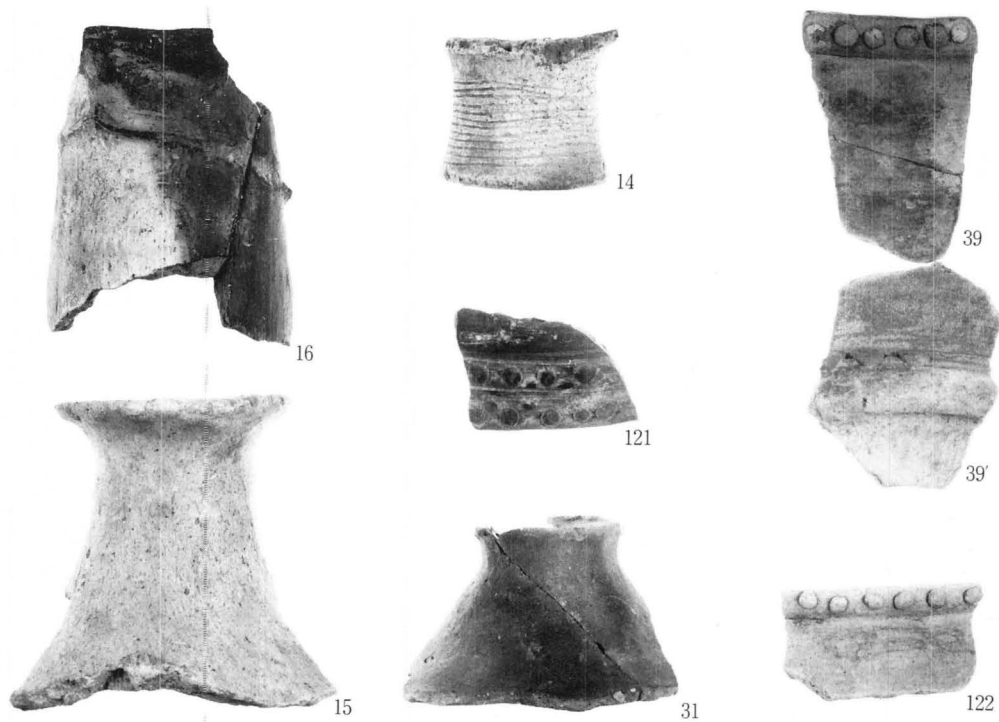
2. 弥生土器 SD23(甕24・26~29)



1. 弥生土器 SD23(無頸壺6・7、高杯9・10・12、鉢19)



2. 弥生土器 SD23(壺112、短頸壺111・115、水差110、器台120、無頸壺109・113、脚台118・119)
SD24(壺34、短頸壺114、器台116) SK19(短頸壺117)



1. 弥生土器 SD23(異形土器16・122、脚台14、甕蓋15・31) SD24(異形土器39・121)



2. 土師器 自然流路(甕40～43)



44



46



47



51



45



63



48

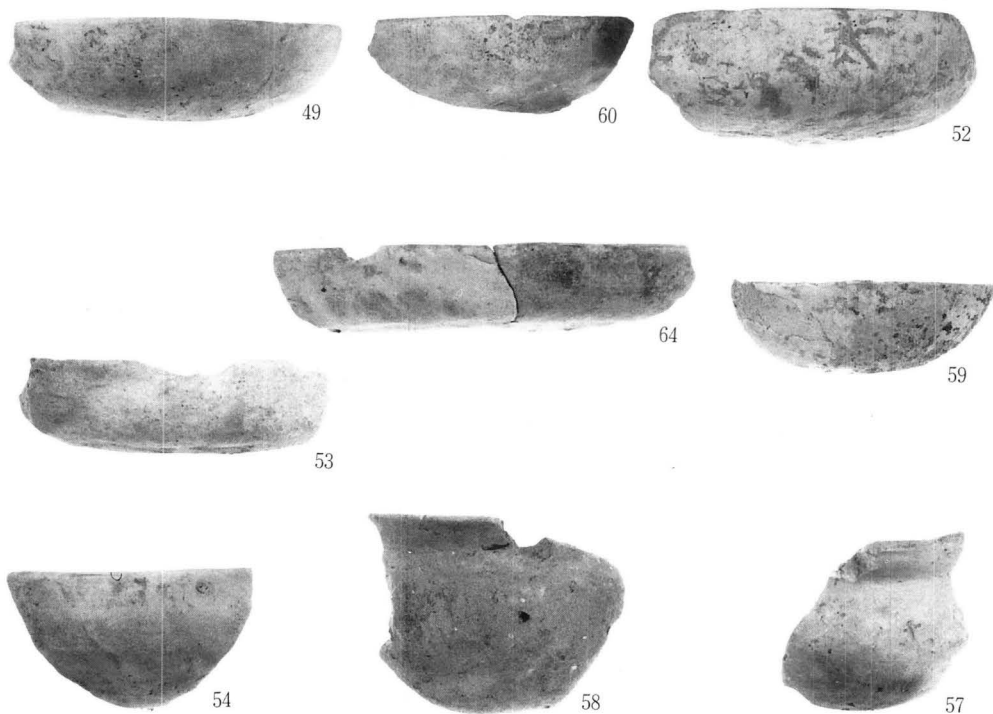


56

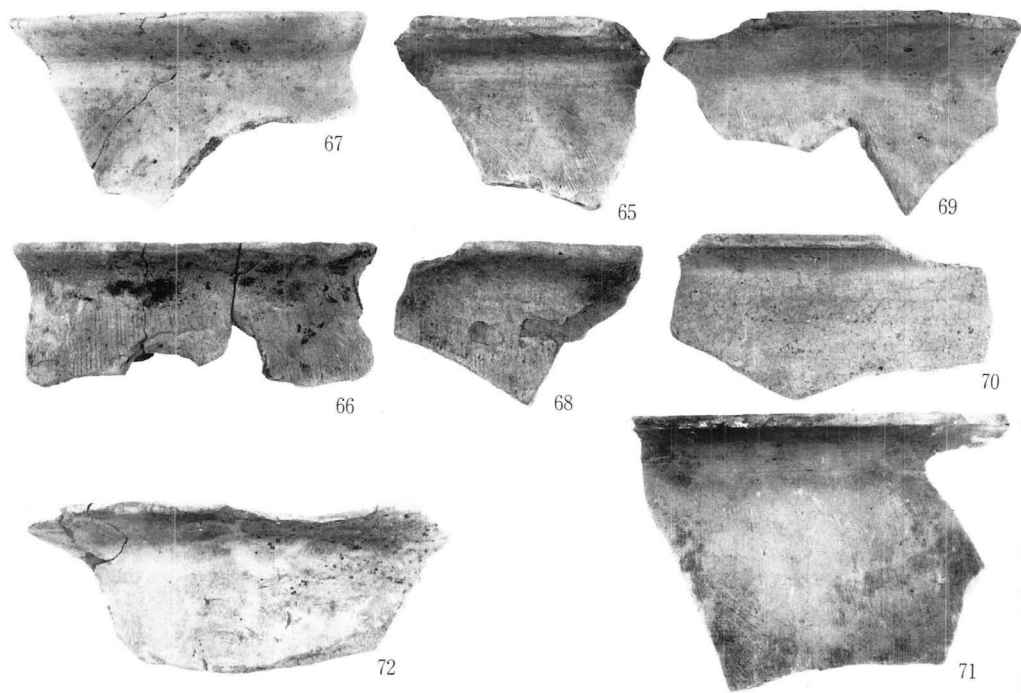


61

1. 土師器 自然流路(高杯44・47、脚台46、小型器台48) SX 1(杯51・61・63、壺56)
 2. 弥生土器 自然流路(甕45)



1. 土師器 SX 1 (杯49・52~54・59・60、皿64、壺57・58)



2. 土師器 SX 1 (甕65~72)



93



73



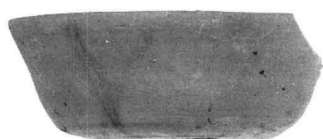
75



88



82



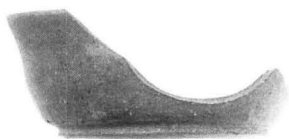
81



78



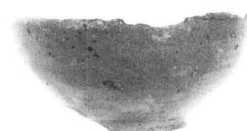
87



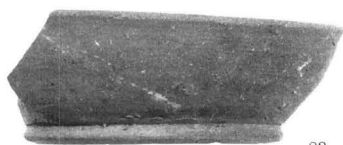
80



77



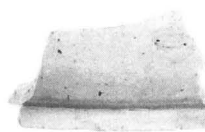
86



83

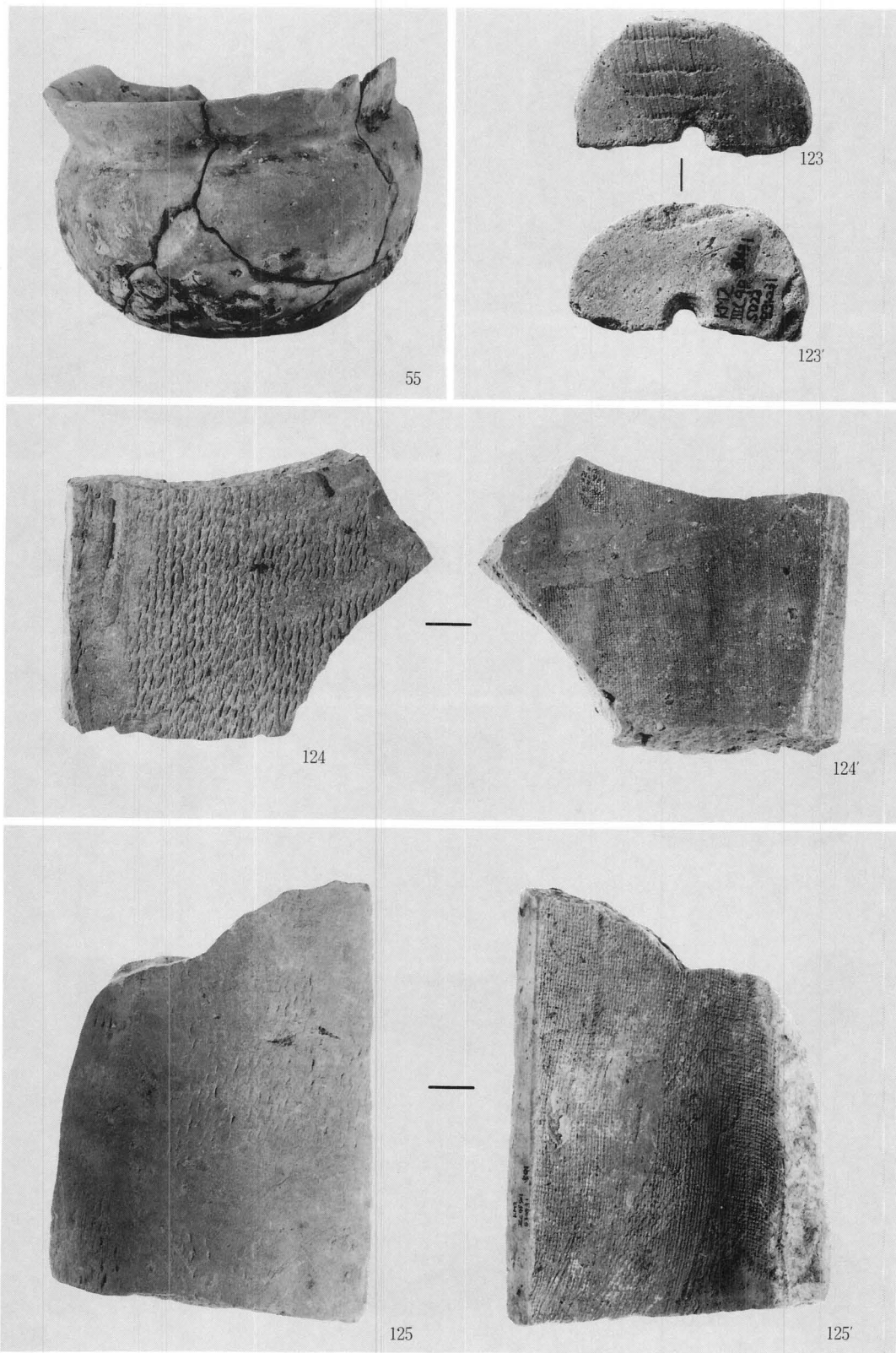


79

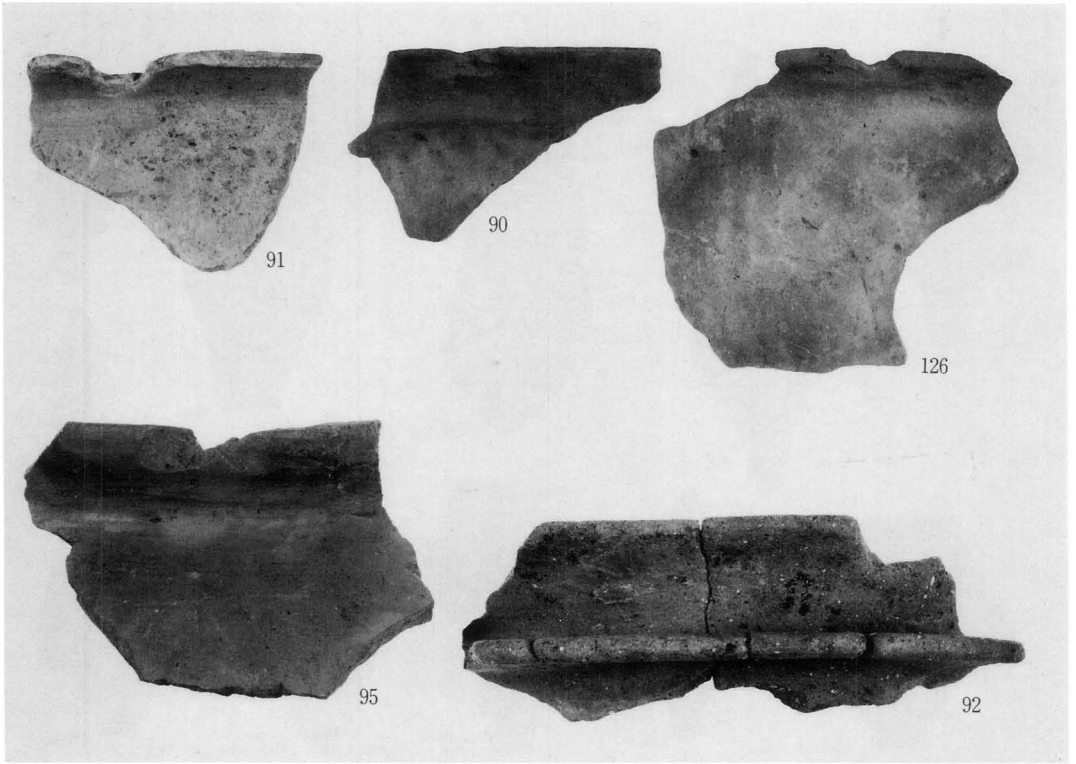


84

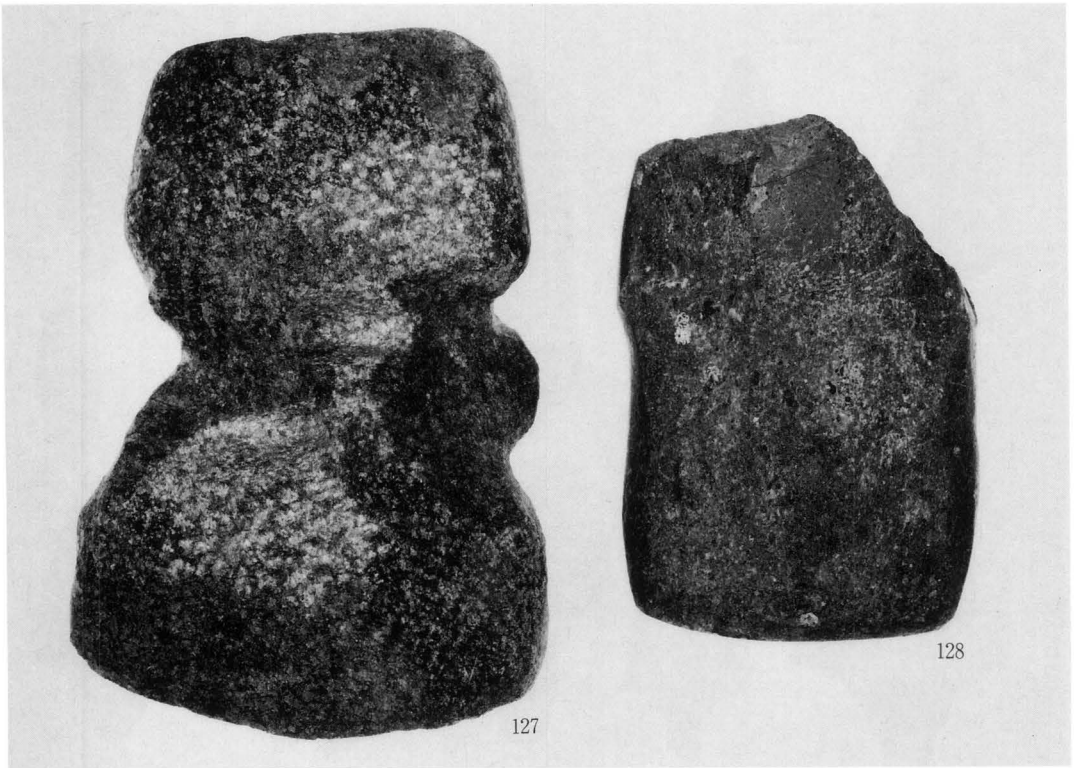
1. 須恵器 SX 1 (杯蓋73・75、杯身79・80・82・84、平瓶88、壺86・87)
SX 5 (鉢93、杯身77・78・81・83)



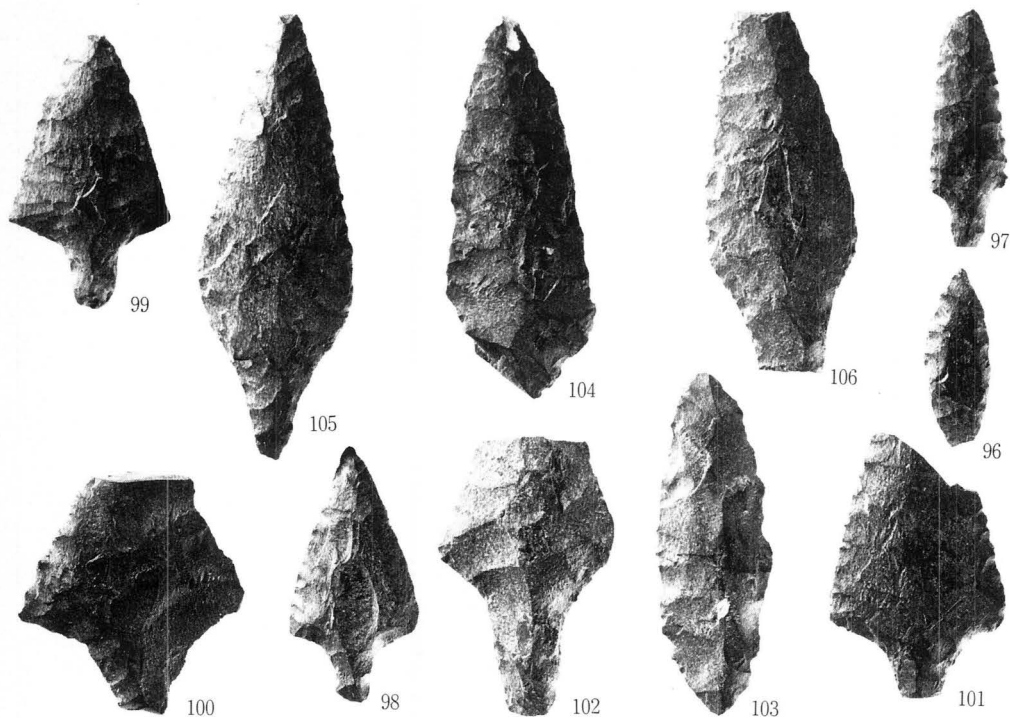
1. 土師器 SX 1 (壺55) 2. 紡錘車 SD23(123) 3. 瓦 6層(平瓦124) SX 1 (丸瓦125)



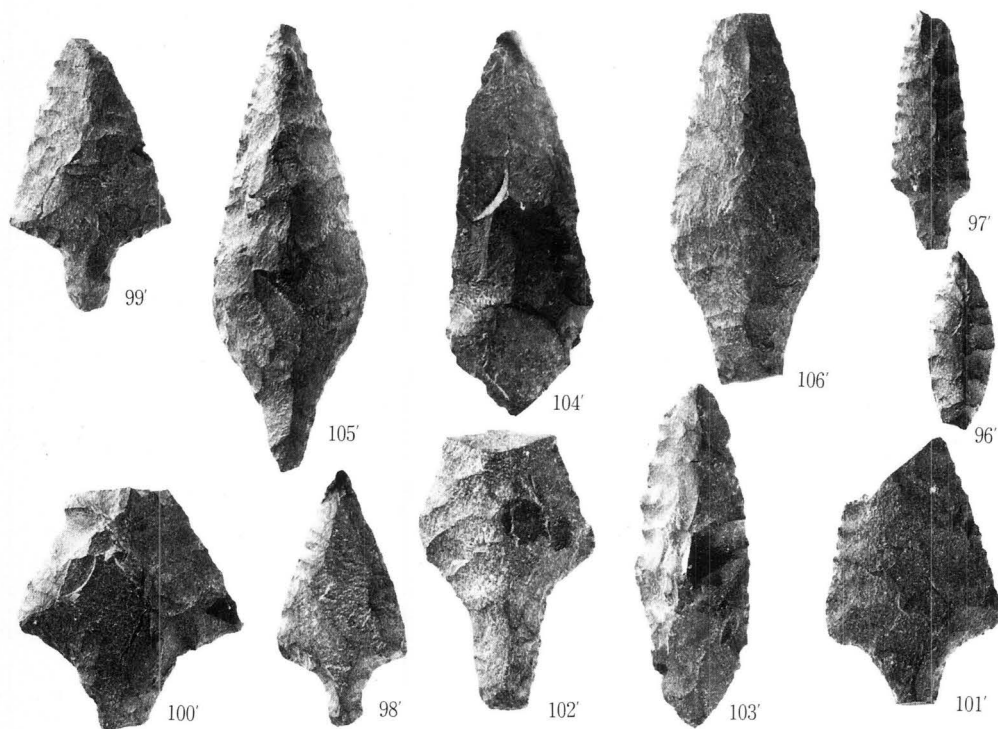
1. 土師器 SX 1 (甕90・91・126) SX 5 (羽釜92) 須恵器 SX 1 (甕95)



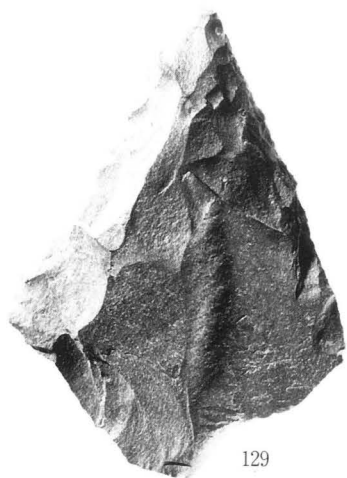
2. 未製石器 SD23 (127・128)



1. 石鏃(表面) 9層(98~100・102・105・106) 10層(96・101・103) SD23(97・104)



2. 石鏃(裏面)



129

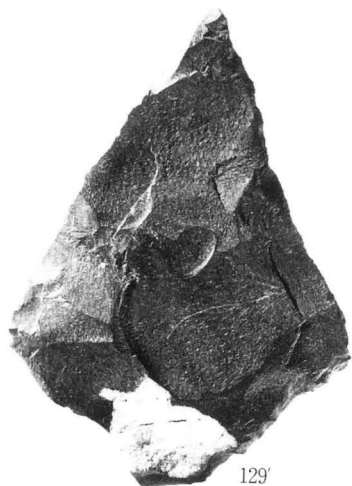


130

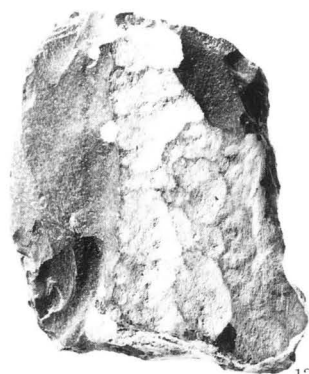


131

1. 打製石器(表面) SD23(129) 10層(130・131)



129'



130'



131'

2. 打製石器(裏面)

市尻遺跡第 1 次発掘調査報告

本文目次

I. はじめに	1
II. 位置と環境	2
III. 調査の概要	3
1. 調査の方法	
2. 層位	
3. 遺構と遺物	
IV. まとめ	20

挿図目次

第1図 調査地点位置図	1
第2図 遺跡周辺図	2
第3図 I・II地区断面実測図	4
第4図 II地区北断面実測図	5
第5図 第1遺構平面実測図	7・8
第6図 第2遺構平面実測図	10
第7図 第4遺構平面実測図	1
第8図 溝11・12、第6下層出土土器実測図	12
第9図 溝29・30、土坑2、第6上層出土土器実測図	14
第10図 第5遺構平面実測図	15・16
第11図 溝13・14出土土器実測図	17
第12図 土坑1、溝28出土土器実測図	18
第13図 第7・8層出土弥生土器実測図	19
第14図 第7・8層出土石器実測図	19

図版目次

図版1 遺構 I地区 第1遺構 (東より)	
溝1 杭列	
図版2 遺構 II地区 第1遺構 (東より)	
I地区 第2遺構 (東より)	
図版3 遺構 I地区 第3遺構 (北より)	
II地区 第3遺構 (北より)	

- 図版4 遺構 I地区 第4遺構(南より)
I地区 南断面(部分)
- 図版5 遺構 I地区 第5遺構(南より)
I地区 第5遺構(東より)
- 図版6 遺構 II地区 第5遺構(東より)
II地区東拡張 第5遺構(西より)
- 図版7 遺構 P14 根石
現地説明会風景
- 図版8 遺構 I地区 東断面(部分)
I地区 北断面(部分)
- 図版9 遺構 II地区 北断面(部分)
II地区東拡張 北断面(部分)
- 図版10 遺物
- 図版11 遺物 溝11・12、第6下層出土土器
溝29・30、土坑2、第6上層出土土器
- 図版12 遺物 溝13出土土器
溝28出土土器
- 図版13 遺物 土坑1出土土器
縄文土器、弥生土器、円板形土製品、製塩土器、韓式系土器
- 図版14 遺物 煮沸用土器(竈・甌・羽釜)
第7・8層出土石器
- 図版15 遺物 ウマの歯(落ち込み1、落ち込み3、第5層、溝28)
土坑1出土モモの種

市尻遺跡第1次発掘調査報告

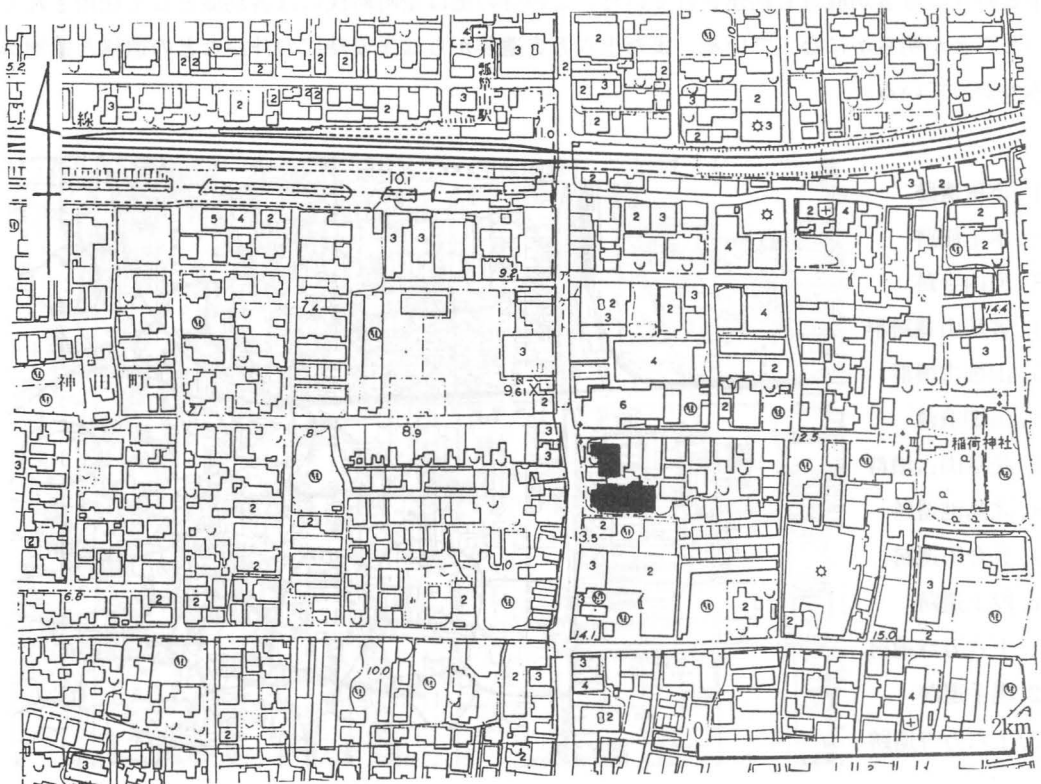
I. はじめに

市尻遺跡は、標高約12mの生駒山麓西方の河岸段丘上にあり、近鉄瓢箪山駅の南方、双円墳として知られている瓢箪山古墳のある瓢箪山稻荷神社の西方に位置し、東大阪市瓢箪山町、神田町、四条町、御幸町一帯に広がる弥生時代から江戸時代に亘る複合遺跡である。

昭和62年(1987)、瓢箪山町279-1、280-1地内において共同住宅の建設が計画され、同年8月、東高野街道(旧・国道170号線)に東接し、山畑古墳群の西に隣接することなどから、建設工事に先立つ試掘調査を実施したところ、古墳時代後期の遺構および遺物包含層を検出し、遺跡であることが確認され、小字名をとって「市尻遺跡」と名付けられた。そのため原因者および建設施工者等と協議し、建築予定区域の発掘調査を実施することになった。

発掘調査は昭和62年10月19日から昭和63年1月9日まで行ない、昭和62年12月12日には現地説明会を実施した(図版7)。調査にあたっては、原因者である藤本フジエ様および御家族の方々の御理解、御協力をいただいた。また、発掘調査では玉置泰嗣、森下克弘、山口浩次、田中直博、整理作業および報告書作成では四宮元子、谷口千恵美、榎原美智子の協力を得た。

調査および報告書の執筆・編集は若松博恵が担当した。



第1図 調査地点位置図

Ⅱ. 位置と環境

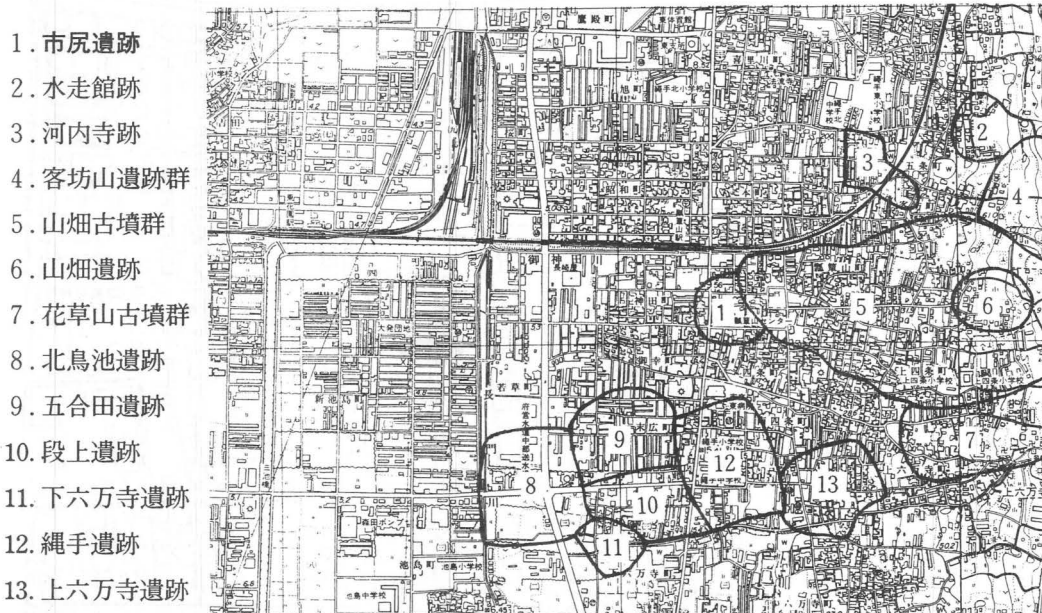
市尻遺跡の位置する東大阪市東南部は、縄文海進における河内湾（後、河内潟、河内湖）の東辺、生駒山地西山麓に広がる河岸段丘、扇状地帯であり、旧石器時代から江戸時代に亘る数多くの遺跡が密集している。

旧石器時代の遺跡としては山畑遺跡があり、ナイフブレードが表採されている。本遺跡の南にある縄手遺跡は縄文時代中期から晩期の遺物が出土し、特に多量の後期土器・石器や土偶などの遺物と住居跡が検出されている。

弥生時代の遺跡は縄手、段上、山畑、上六万寺、などが点在するが、前期に相当する遺物は確認されていない。中期も山畑遺跡で住居跡—高地性集落—と土器・石器を検出したほか、縄手や段上遺跡で土器が出土しているだけである。しかし、後期および古墳時代初頭にかけては上六万寺、北鳥池などの各遺跡から多くの遺物・遺構（住居・井戸など）が確認されている。

山麓地域には、瓢箪山古墳を含む約70基の古墳が確認されている山畑古墳群をはじめ、客坊山、花草山などの古墳時代後期の群集墳がある。また縄手遺跡内にはヒレ付き円筒埴輪の伴うえの木塚古墳、段上遺跡からは家形埴輪などの遺物とともに小型低方墳が確認されている。また、河内寺跡内にある皿池古墳からは船形埴輪が出土している。

飛鳥時代になるとその後期から鎌倉時代まで存続した四天王寺式伽藍配置の河内寺があり、平安時代には客坊廃寺も創建されていた。この寺の地は室町時代には客坊城として使用されていたことが明らかになっている。また上六万寺遺跡からは平安時代の井戸などの遺構と遺物が見つかった。



第2図 遺跡周辺図

Ⅲ. 調査の概要

1. 調査の方法

調査は北側調査地をⅠ地区、南側調査地をⅡ地区として実施した。

当初、試掘調査のときには東南部分から遺構・遺物が検出されなかったことから、Ⅰ地区の233.2m²とⅡ地区の316.8m²の計550m²について発掘調査を開始した。しかし、調査の進行とともにⅡ地区東部にも遺構および遺物包含層が広がっていることが判明したことから、原因者および建設施工業者と協議を行ない、Ⅱ地区東側の建築予定地145.6m²をも拡張し、Ⅱ地区は406.4m²となり、調査総面積は693.6m²となった。

調査は上部0.4～0.8mを機械掘削し、以下1～1.2mについて人力で各層を掘削し、遺構と遺物の検出作業を行なった。

調査は国土座標を用いて実施し、国土座標および標高値については株式会社国際航業に委託した。

2. 層位 (第3・4図 図版8・9)

盛土

第1層 暗青灰色 (5B4/1) シルト質土 細～粗粒砂少量含む。旧耕土。

第2層 灰色 (7.5Y4/1) 砂質土 シルト、細～粗粒砂、炭小粒含む。土師器小片出土。

第3層 灰色 (10Y4/1) シルト質土 細～粗粒砂含む。土師器・磁器小片出土。

第4層 灰オリーブ色 (5Y4/2) 砂質土 シルト、細～粗粒砂、小礫含む。須恵器片、土師器・陶器小片出土。

第5層 灰黄褐色 (10YR4/2) 砂質土 やや粘質で、細～粗粒砂、小礫含む。土師器・須恵器・瓦器小片出土。

第6上層 灰オリーブ色 (5Y4/2) 粘質土 細～粗粒砂含む。

第6下層 オリーブ黒色 (7.5Y3/1) 砂質土 シルト質で、細～粗粒砂、小礫含む。須恵器片土師器片、製塩土器片、弥生土器片など多く出土。

第7層 黒褐色 (10YR3/1) シルト質粘土 オリーブ黒色 (7.5Y3/1) 土のブロック含む。弥生土器片、石器出土。

第8層 オリーブ黒色 (5Y3/1) 砂礫土 弥生土器片、石器出土。

第9層 黒褐色 (10YR3/1) 粘土質シルト 中～粗粒砂含む。

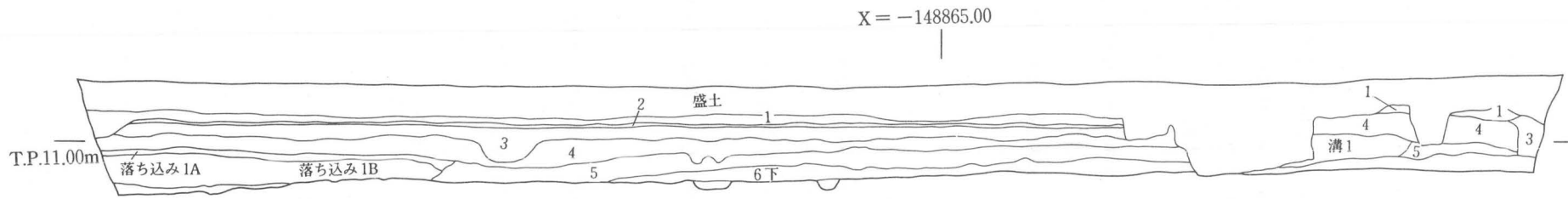
第10層 褐色 (10YR4/6) 粘土質シルト 中～粗粒砂含む。

第11層 明黄褐色 (10YR6/6) シルト質粘土 黒褐色 (10YR3/1) 粘質土のブロック混じり、中～粗粒砂、小礫含む。

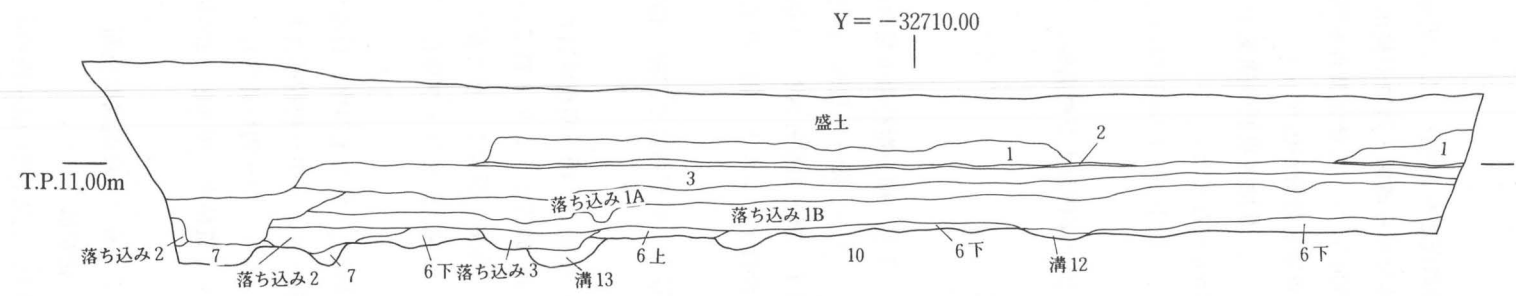
第9～第11層は地山で、無遺物層である。最終遺構検出面。

溝1 黒褐色 (10YR3/2) シルト・細粒砂

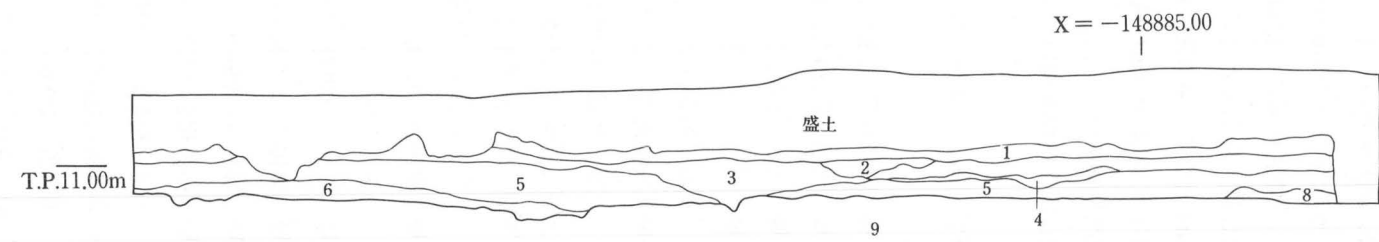
溝2 暗灰黄色 (2.5Y5/2) ～灰黄色 (2.5Y7/2) 細～粗粒砂



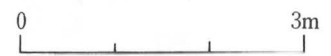
I地区東断面



I地区北断面

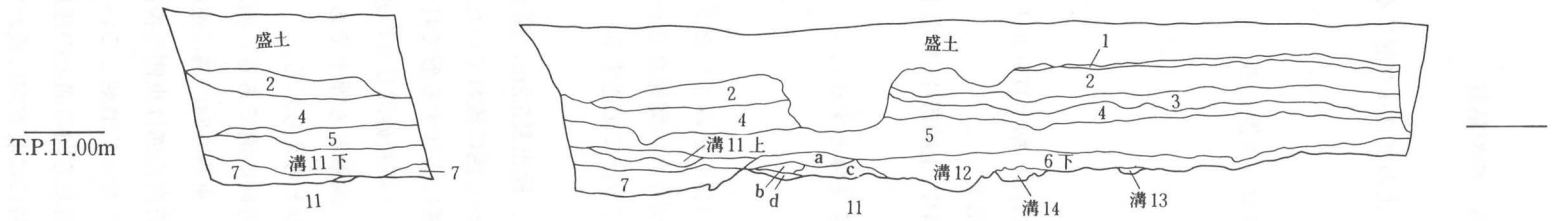


II地区東断面

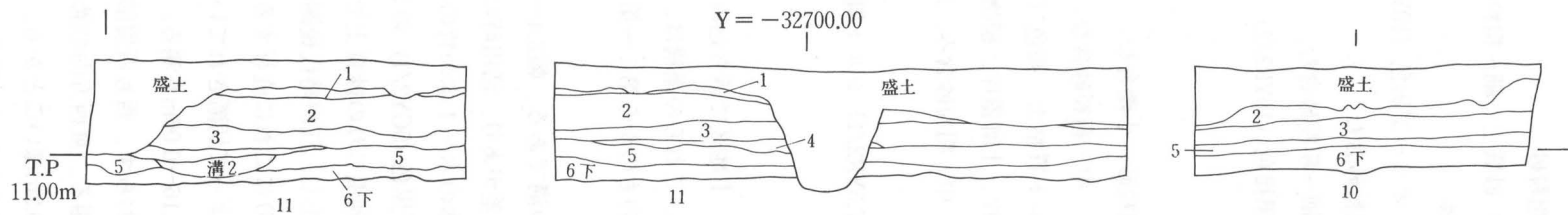


第3図 I・II地区断面実測図

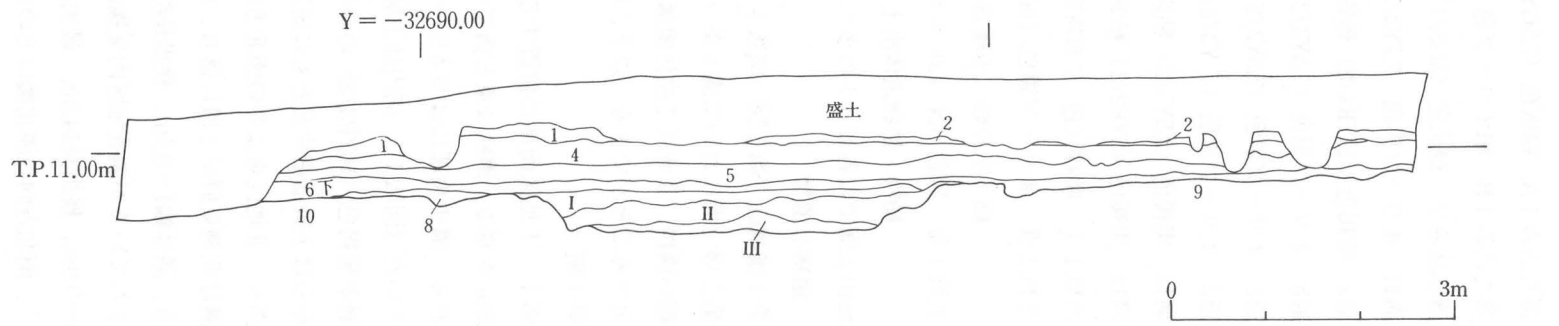
Y = -32715.00 Y = -32715.00



Y = -32700.00



Y = -32690.00



第4图 II地区北断面实测图

落ち込み1A 緑灰色(7.5GY6/1) 細～粗粒砂

落ち込み1B 暗オリーブ色(2.5GY4/1) 砂質土 細～粗粒砂含み、やや粘質。

落ち込み2 緑灰色(5G5/1) 粗～細粒砂

溝11 オリーブ黒色(7.7Y3/2) 粘質土 オリーブ灰色(10Y5/2) 土のブロック混じる。

道a 暗褐色(10YR4/2) 砂質土 細～粗粒砂含む。

道b オリーブ黒色(7.5Y3/2) 粘質土 細～粗粒砂含む。

道c オリーブ黒色(7.5Y3/2) 粘質土 黒褐色(10YR3/2) 土のブロック混じる。

道d オリーブ黒色(5Y3/2) 粘質土

溝13 黒褐色(2.5Y3/2) 粘質土

溝14 黒褐色(5YR2/1) 粘質土 細～粗粒砂、小礫含む。

土坑1Ⅰ 暗緑灰色(7.5GY3/1) 粘質土 中・粗粒砂含む。

土坑1Ⅱ オリーブ黒色(5GY2/1) シルト質粘土 褐色(7.5YR4/6) 粘土質シルトの混層
細・中粒砂、小礫含み、須恵器片、土師器片、植物遺体出土。

土坑1Ⅲ 黒色(N/2) シルト質粘土 中・粗粒砂含み、須恵器片、土師器片、製塩土器片、
植物・動物遺体出土。

地山上面での各ピットの多くは、黒色(7.5YR2/1) シルト質粘土を主体とする。

3. 遺構と遺物

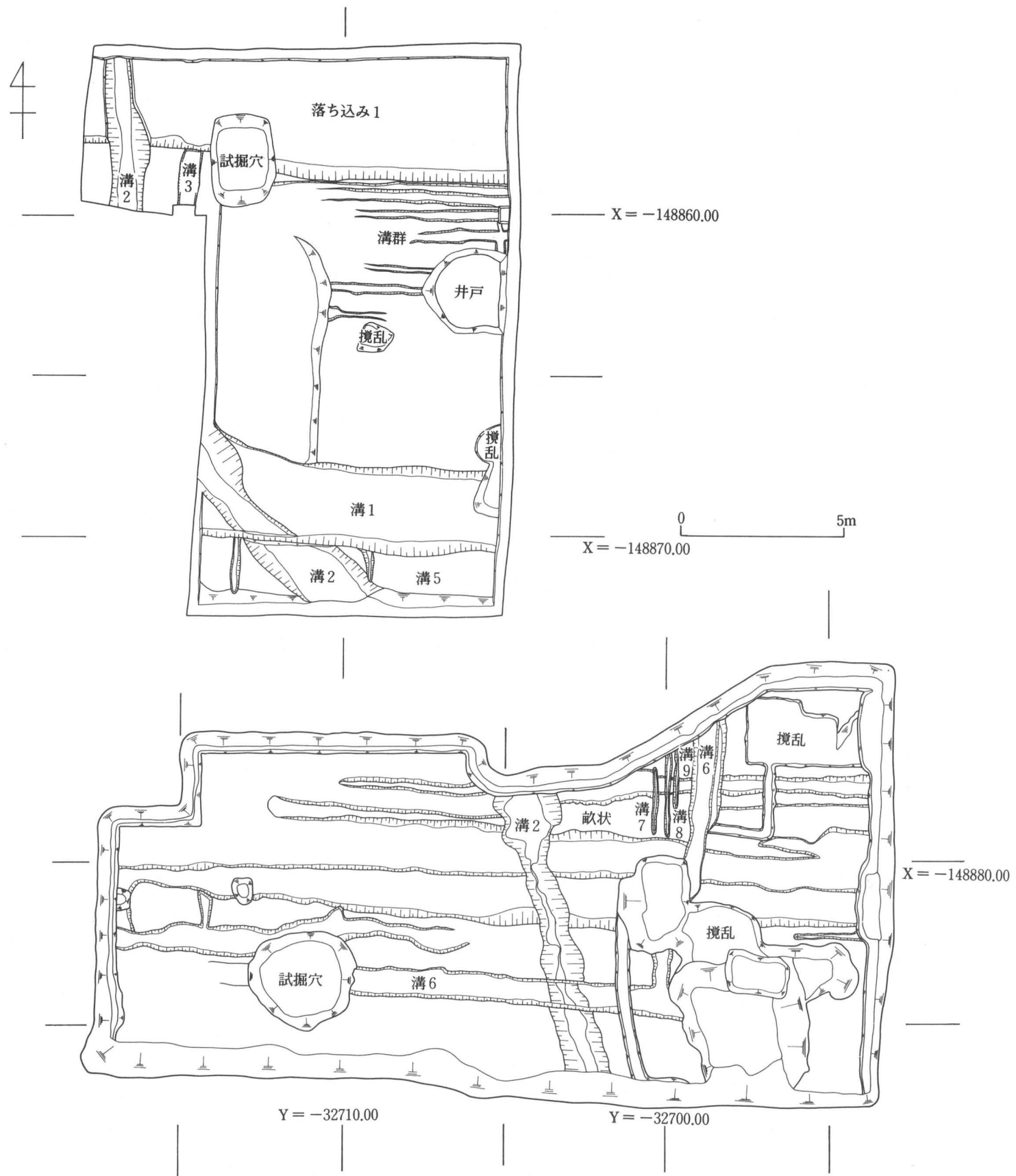
第1遺構面(第5図 図版1・2)

第5層上面において溝6条(溝1～6)、Ⅰ地区で落ち込み1基(落ち込み1)と5条以上の細い溝群、Ⅱ地区で畝状遺構を検出した。これらの遺構は、その切り合い関係などから4期に分けることができる。以下、新しい時期のものから第1～第4期に分けて記述する。

第1期

溝1 Ⅰ地区南部に位置する東西方向の溝である。幅2.4～3.6m、検出長5.2m、深さ0.2～0.25mを測る。溝底は東と西で6cmの高低差があり、活用時には東から西に流れていたと考えられる。溝中央部には長さ50～60cmの8本の木・1本の竹の杭が溝に直行する形で打ち込まれていた(図版1)。溝内は上層がオリーブ黒色(5GY2/1)のシルト・細粒砂混じりの砂質土、下層が黒褐色(10YR3/2)のシルト・細粒砂混じりの砂質土であり、両層とも埋土である。溝内からは土師器細片とともに磁器小片が出土し、江戸時代後期のものと考えられる。

溝6 Ⅱ地区東よりの南北方向と、南よりにこれに直行する東西方向の溝である。南北方向の溝は北側東肩が2段に落ち、途中攪乱によって切断されているが、東西方向の溝に連結している。溝は幅1～0.5m、検出長8.6m、深さ0.16～0.06mを測る。東西方向の溝は東側を攪乱で切断されているが調査地区内東端には達しておらず、西も西端部は浅くなって消滅している。幅0.6～0.9m、検出長14.6m、最大深0.06mを測る。東西方向の溝は、南北方向の溝との連結部が深く、南北方向の溝北端はその連結部より0.2m深いことから、活用時には北方向に流れていたと考えられる。溝内は灰色(10Y4/1)の砂混じりシルト質土で、土師器・磁器の細片が出土し、



第5図 第1遺構平面実測図

江戸時代後期以降のものと思われる。

溝7～9 II地区東側、南北方向の溝6の西側でこれに並行する形で検出した細長い3条の溝である。幅0.16～0.1m、最大深0.04mを測る。各溝内は灰色(10YR4/1)の砂混じりシルト質土で、遺物は出土しなかった。溝6とほぼ同じ時期のものと考えられる。

第2期

溝2 I地区西北部・西南部とII地区中央において検出した。幅1.9～0.84m、深さ0.56～0.24mを測り、長さは37m以上となる。II地区南端とI地区北端の溝底は約0.15mの高低差があり、活用時には北へ流れていたと考えられる。すなわちII地区で南南東から北北西へ、さらにI地区西南部で北西方向、そして西北部さらに北方行と蛇行していた。溝内は逆台形・部分的には(II地区)V字形を呈し、灰色(10YR4/1)～オリーブ黒色(5Y3/2)の細～粗粒砂で、2～7cm大の礫が混じっていた。ローリングをうけた土師器細片と陶器・磁器小片が出土し、江戸時代前・中期のものと思われる。

第3期

落ち込み1 I地区北部で南肩部を検出した。溝2によって西側の一部が切られているが、東西長13.2m以上、南北幅4m以上、最大深0.43mを測る。落ち込み内は上層が黒褐色(10YR3/2)シルト・細粒砂、下層が暗灰黄色(2.5Y5/2)～灰黄色(2.5Y7/2)細～粗粒砂で、土師器と瓦質土器の細片が出土した。

溝群 I地区北側、落ち込み1の西で、これに並行するもの6条、直行するもの1条の7条の溝を検出した。並行する6条のうち南側2条は西端が上層によって切断されているが、すべて調査地西端まで達していない。幅0.4～0.16m、最大深0.12mを測る。溝内は黒褐色(10YR3/2)のシルト・細粒砂で、遺物は出土しなかった。

畝状遺構 II地区で南端を除くほぼ全面にわたって東西方向のもの4条を検出した。幅1.55～0.2m、高さ0.1～0.07mを測る。畑作に伴うものと考えられる、不明。

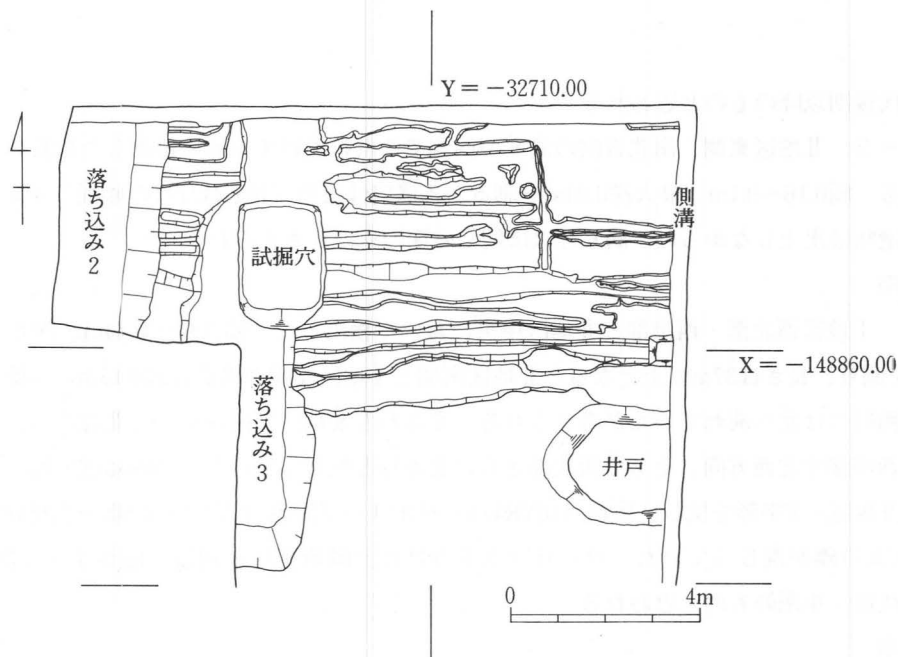
これらの遺構の時期は明確にしがたいが、室町時代後期ごろと思われる。

第4期

溝3 I地区北西部で検出した南北方向の溝で、落ち込み1によって東側は切られている。幅0.66m、検出長1.7m、最大深0.12mを測る。溝底は南と北とで0.03mの高低差があり、活用時には南へ流れていたと考えられる。溝内は黒褐色(10YR3/2)砂混じり粘質土で、土師器・瓦質土器の細片が出土した。

溝4 I地区南部で検出した南北方向の溝で、北側は溝2などによって切断されている。幅0.28m、検出長1.7m、最大深0.1mを測る。溝は断面逆台形状を呈し、南と北で0.06mの高低差があり、活用時には南へ流れていたと思われる。溝内は黒褐色(10YR3/2)砂混じり粘質土で、土師器細片が出土した。

溝5 I地区南部、溝4の東側で検出した南北方向の溝で、北側は溝1、南側は溝2によって切断されている。幅0.52～0.16m、検出長0.98m、最大深0.06mを測る。溝は断面逆台形状を



第6図 第2遺構平面実測図

呈し、南と北で0.03mの高低差があり、活用時には南へ流れていたと思われる。溝内は黒褐色(10YR3/2)砂混じり粘質土で、遺物は出土しなかった。

これらの時期は明確にしがたいが、室町時代のものと考えられる。

第2遺構(第6図 図版2)

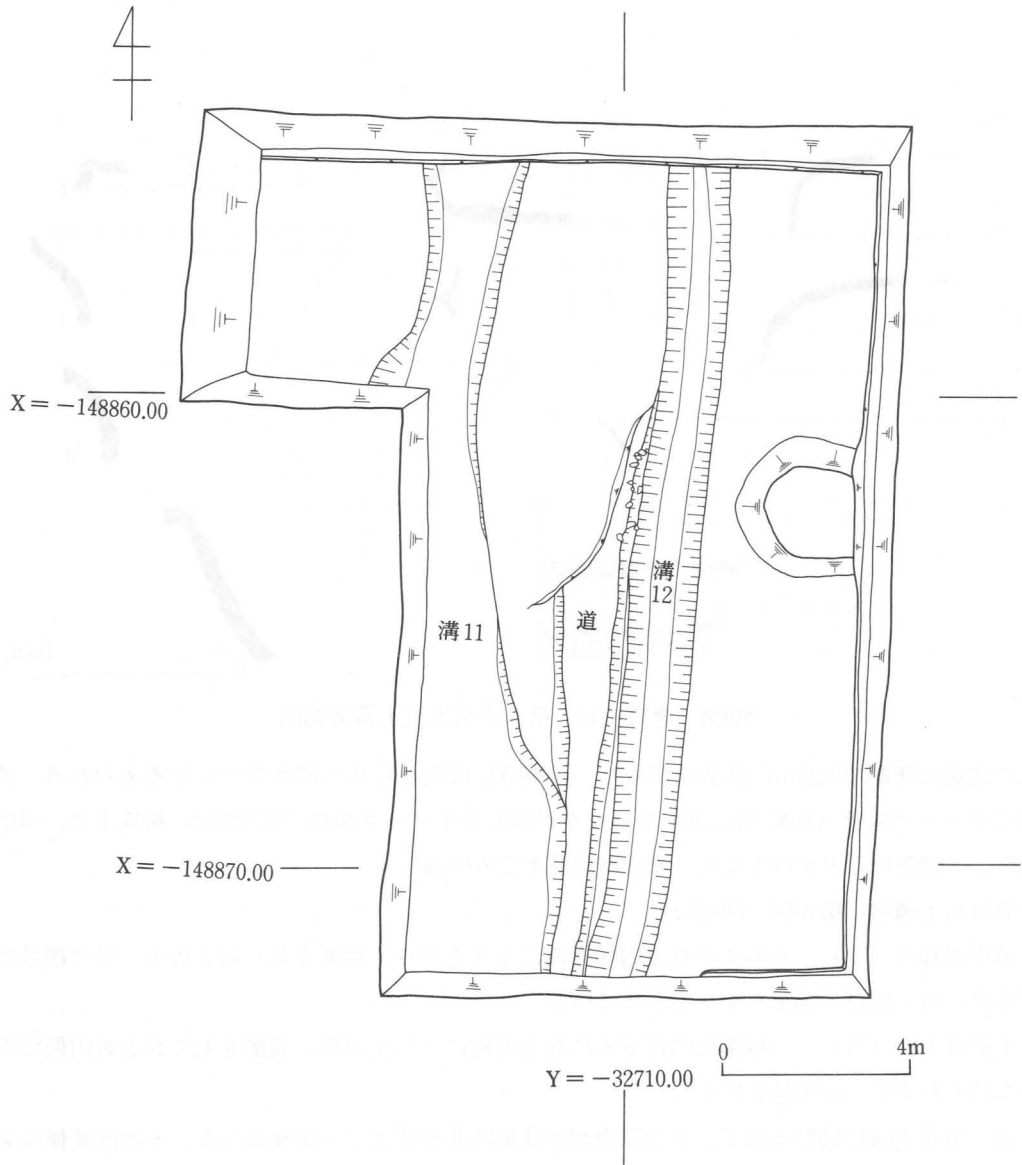
I地区北地域において、第6上層上面で、落ち込み2基(落ち込み2・3)と数条の主に東西方向の溝状遺構を検出した。溝状遺構は2基の落ち込みによって切断されており、落ち込みの方が先行する。

落ち込み2 I地区西北部で東肩の一部を検出した。残存の南北長4.6m、東西の最大幅2.16m、最大深0.31mを測る。落ち込み内は緑灰色(5G5/1)細～粗粒砂で、瓦器・土師器の細片が出土した。

落ち込み3 落ち込み2の東部で南北に延びるもので、南肩と西・東肩の一部を検出した。最大の南北長9.56m、東西長2.42m、深さ0.18mを測る。落ち込み内は緑灰色(5G5/1)細～粗粒砂で、瓦器・土師器の細片を確認したのみであった。

溝状遺構 I地区の北側、北壁面より6.2mの間に8条以上の東西方向のものと、一部これらの溝と連結する2条の東西方向の溝を検出した。幅1.5～0.1m、最大長10.8m、深さ0.5～0.1mを測り、さまざまである。溝内は上層・黄褐色(2.5YG4/1)シルト質土、下層・黒褐色(10YR5/1)粘質の砂質土で、上層は埋土、下層は活用時の堆積土と考えられ、瓦器・土師器・瓦質土器の細片が出土した。

第2遺構は、その出土遺物がいずれも細片であるため明確な時期を確定しがたいが、鎌倉時代のものと思われる。



第7図 第4遺構平面実測図

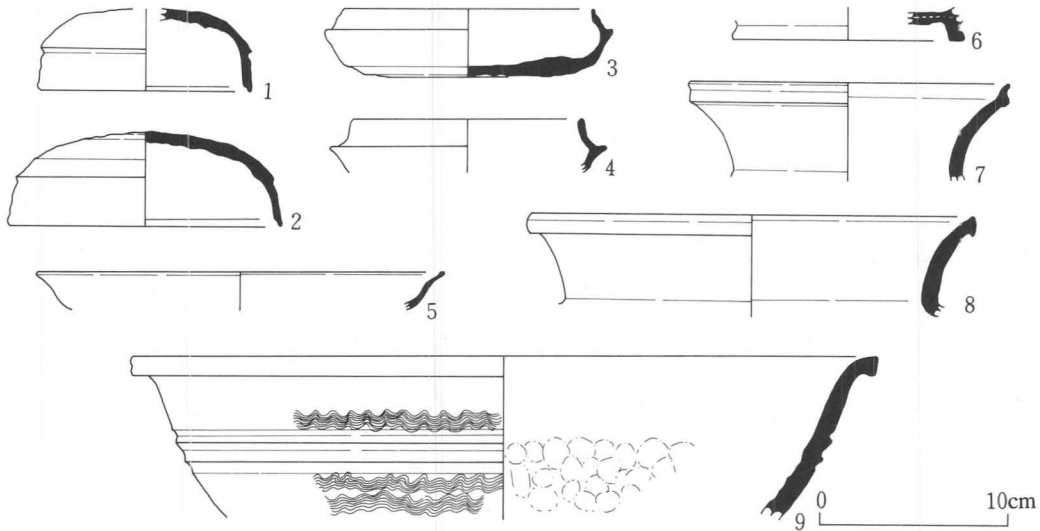
第3遺構 (図版3)

第6下層および第4遺構上面において、I地区東部およびII地区西・中部で多数の足跡を検出した。足跡は特にI地区南東部からII地区にかけて集中しており、人のものばかりでなく、円形・ハート形の牛馬のものもあり、さらに鋤などによる耕作跡も見られた。人の足跡など歩行状況の追える明確なものはなく、かなり乱れている。踏み込み内は細・中粒砂で、遺物は出土しなかった。第2遺構内および落ち込み4 (第4遺構) などとの関係から、平安時代後期から鎌倉時代前半ごろのものと思われる。

第4遺構 (第7図 図版4)

第6層を除去し、溝11、道とそれに伴う東側側溝 (溝12) を検出した。

溝11 I地区およびII地区西側において南北方向に延びる溝で、北側は細く、南側は大きく広がっている。最小幅1.6m、最大幅4.7m以上、深さ0.1~0.45mで、断面逆台形状を呈する。溝



第8図 溝11・12、第6下層出土土器実測図

底は北端と南端で0.25mの高低差があり、活用時には南から北へ流れていたと考えられる。溝内はオリブ灰色(10Y5/2)土のブロックが混じるオリブ黒色(7.5Y3/2)粘質土で、須恵器片、土師器片などが出土した。平安時代前半ごろの溝。

溝11出土遺物(第8図 図版11)

須恵器杯身(4) たちあがりは内傾ぎみに立ち上がり、端部を丸くおさめる。受け部はほぼ水平に短く延び、端部をやや尖らせている。

土師器大皿(5) 口縁部は内弯ぎみに外上方向に立ち上がり、端部を丸くおさめ内側に明瞭な段を有する。白褐色を呈する。

道 南北方向に延びる道で、I地区南側とII地区北壁付近で一部検出した。I地区北側は第5層によって破損しており、I地区南部の西肩は溝11によって削り取られて細くなり、II地区ではほとんど削平されていた(II地区北断面実測図参照)。道は断面台形状を呈し、検出の道幅は上辺で1.2~2.5m、下辺で2.4~3.6m、高さ0.1~0.15mを測る。東側には並行して側溝を有し、東肩部には所々に人頭大の石が据えられていた。道は4種以上の土(粘質土・砂質土)をつき固めて盛り上げ造成していた。すなわち、地山直上にオリブ黒色(5Y3/2)粘質土、黒褐色(10YR3/2)土のブロック混じりのオリブ黒色(7.5Y3/2)粘質土、細~粗粒砂を含むオリブ黒色(7.5Y3/2)粘質土を重ねて基底部を造成し、最上部を最~粗粒砂を含む暗褐色(10YR4/2)砂質土で仕上げていた。各層から須恵器・土師器の細片が少量出土した。

東側溝(溝12) 道の東側に若干のテラスを部分的に設けて(幅~0.2m)、道に並行する南北方向の溝である。溝は幅1.5~2m、深さ0.1~0.25mで、道上面からの深さは0.35~0.45mを測る。溝底面は東よりに低い凸状の高まりが見られる。前述したように道はII地区においてはほとんど検出できなかったが、この溝はほぼ残存していた(第10図 図版6)。溝内は礫、粗・中粒砂を含み、オリブ灰色(10Y5/2)土の混じるオリブ黒色(7.5Y3/2)砂質土で、

須恵器片などが出土した。道および側溝は奈良時代。

東側溝（溝12）出土遺物（第8図 図版11）

須恵器杯身（6） 底部片。高台はほぼ平坦な杯底部から短く外下方向に伸び、端部は面をなす。

第6上層出土遺物（第9図 図版11）

須恵器壺（10） 口縁部、体肩部片。口縁部はやや内湾ぎみに立ち上がり、端部を肥厚させて面をなし、内側にゆるい段を有している。

須恵器長頸壺（11） 底部片。高台はやや平坦な壺底面から少し外開きぎみに垂直に短く伸び、端部は面をなす。

須恵器高杯（12） 脚部片。外下方に大きく開き、端部は段を有してほぼ垂直に外湾ぎみに立ち、先端を尖らせておさめている。

須恵器杯蓋（15） 丸みをもつ天井部と考えられ、ゆるやかに突出するにぶい稜を有し、口縁部は広がりぎみに下り、端部は内傾して段を有する。

第6下層出土遺物（第7図 図版11）

須恵器杯蓋（1・2） 丸みをもつ天井部から、少し突出する鋭さの欠く稜をもち、口縁部はゆるやかに広がりぎみに下り、端部は内傾して明瞭な段を有する。

須恵器杯身（3） 底面は平坦である。たちあがりは内上方に立ち上がり、端部は内傾してゆるい段を有する。受け部は短く水平に伸び、端部はやや丸くおさめている。

須恵器壺（7・8） ともに口縁部片。7の口縁部は大きく上外方に内湾して立ち上がり、端部は段を有して内湾ぎみに短く垂直に立ち、先端をやや尖らせておさめている。8の口縁部は内湾ぎみに上外方に立ち上がり、端部は垂下する面をなして先端をやや尖らせている。

須恵器器台（9） 杯部片。外湾ぎみに上外方に伸び、口縁端部は外折して面をなす。中ほどに3条の凹線を有し、その上に1段、下に2段の波長の短い櫛描き波状文を施している。

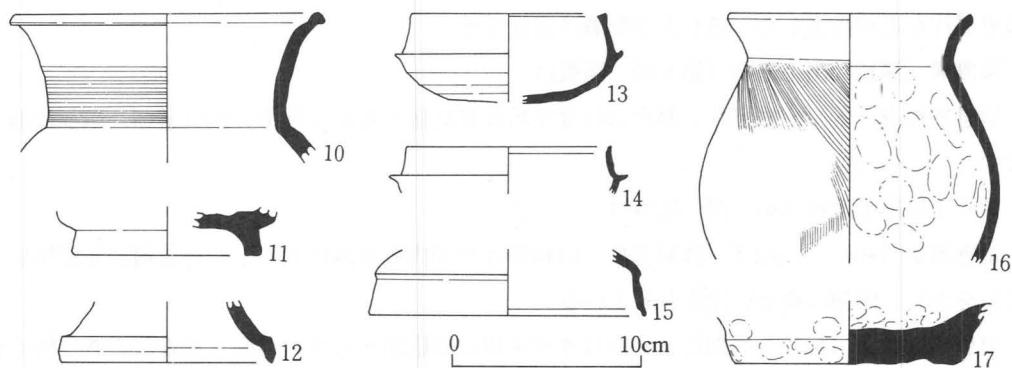
第6上・下層は7世紀前半ごろの整地層と考えられ、多くの遺物を包含していた。その中には縄文土器（船元式など）、弥生土器、製塩土器、韓式系土器（図版13）、土師器（竈・甑・甕、図版14）などの破片も含まれていた。

第5遺構（第10図 図版5～7）

第7・8層および地山上面で、Ⅰ地区は3条の溝とピット群、Ⅱ地区は土坑6基、15条の溝とピット群を検出した。Ⅰ地区で検出した溝はいずれもⅡ地区では検出されなかったことからⅠ・Ⅱ地区ごとに主要遺構・遺物について記していく。

Ⅰ地区

溝13 Ⅰ地区西よりにほぼ南北方向に縦断して走る溝で、検出長13.45m、幅1.45～0.4m、最大深0.37mを測り、断面逆台形状を呈する。溝内は上層黒色（5Y2/1）砂混じり土、下層黒色（10YR2/1）砂混じり粘質土で、特に下層から須恵器、土師器、製塩土器とともに動物遺体（ウマの歯）など多くの遺物が出土した。溝は南南東から北北西に伸びており、南端は北端より深



第9図 溝29・30、土坑2、第6層上層出土土器実測図

さが0.063m浅く、活用時には北北西方向へ流れていたと考えられる。

溝13内出土遺物 (第11図 図版10・12)

須恵器杯蓋 (18) やや丸みをもつと思われる天井部に、少し突出するが鋭さを欠く稜が続く。口縁部はゆるやかに広がりぎみに下り、端部は内傾して明瞭な段を有する。

須恵器杯身 (19~24) たちあがりは内傾ぎみに立ち上がり、端部は内面に明瞭な段を有する。受け部は短く上外方へ延び、端部をやや尖らせておさめている。

脚付有蓋壺 (25) 口縁部片。たちあがりはやや内傾するがほぼ垂直に立ち上がり、端部は内傾して面をなす。受け部はすこし上外方に延び、やや尖らせておさめている。頸上部に波長の短い櫛描き波状文が施されている。

溝14 南西部で検出した南東から北西方向に延びる溝で、検出長5.15m、幅1.1m、最深0.32mを測り、断面逆台形状を呈する。溝底面は南端と北端で約0.1mの高低差があり、活用時には南東から北西に流れていたと思われる。溝内は黒褐色 (5YR2/1) 砂混じり粘質土で、須恵器、土師器、製塩土器などの破片と動物遺体 (ウマの歯) が出土した。

溝14内出土遺物 (第11図 図版10・12)

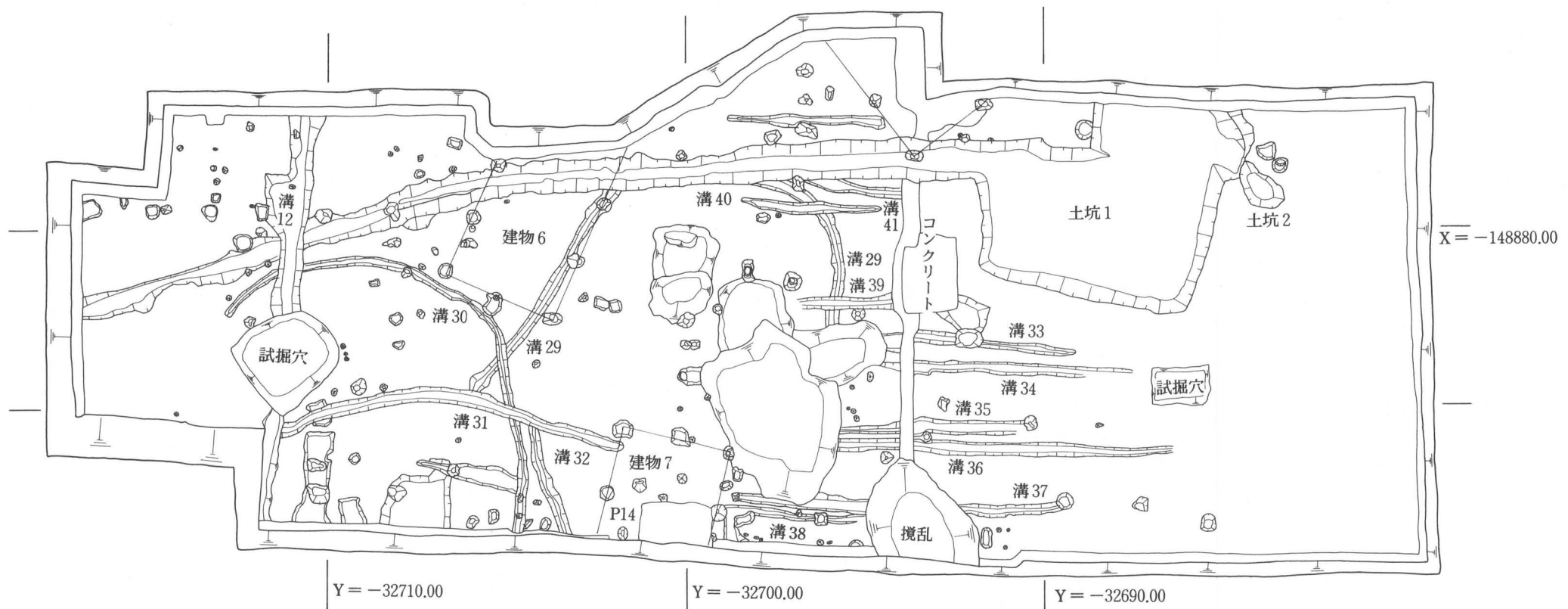
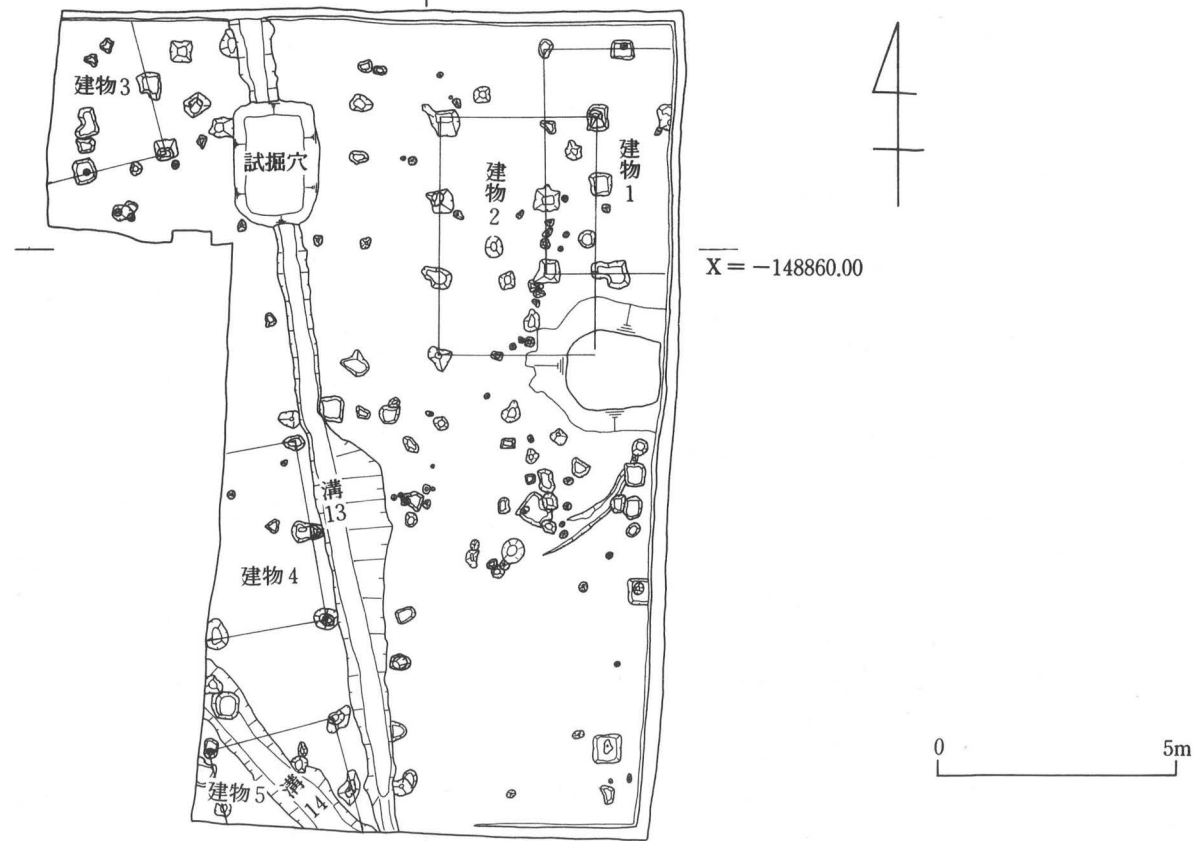
有蓋高杯蓋 (26) 天井部はやや平坦で広く、つまみを有しているが欠損している。稜は下辺がほぼ水平に延び、口縁部はやや開きぎみに下り、端部は内傾して面をなす。

高杯 (27) 脚部片。脚は低く、大きく外下方に八字形に開き、外面下方に2条の明瞭な凸線が巡り、端部は立たせてやや尖らせておさめている。

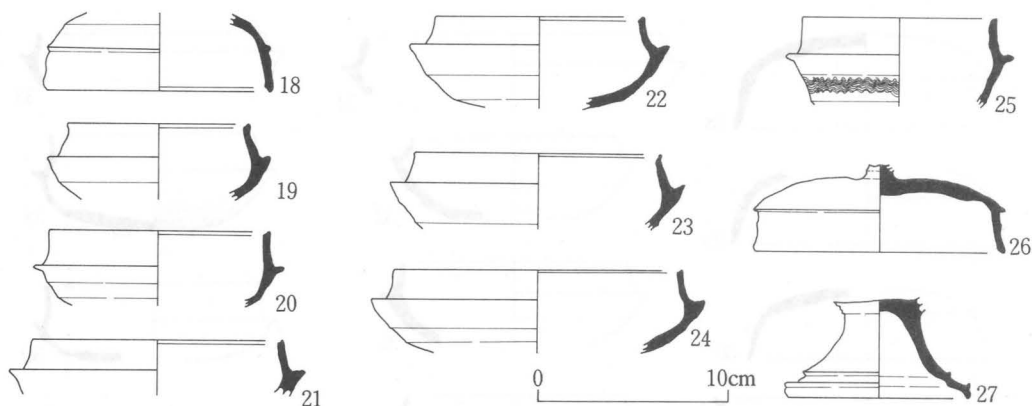
建物1 北東隅で検出。桁行3間 (柱間1.2m)、梁間2間 (柱間1.6m) 以上の南北の掘立柱建物で、東側は調査地外で不明。柱掘形はほとんど一辺約0.4mの方形を呈する。

建物2 北東部、建物1西よりで検出。桁行3間 (柱間1.2m)、梁間1間以上の南北の掘立柱建物で、東南隅は既存の井戸のため検出できなかった。柱掘形はほとんど一辺約0.4mの方形を呈する。

建物3 北西隅でその一部を検出。南北柱列の柱軸N-13°-Wで、東西柱列が桁行と思われる掘立柱建物である。桁行・梁間とも調査地外に延びるため不明。桁行の柱間1.6m、梁間の



第10図 第5遺構平面実測図



第11図 溝13・14出土土器実測図

柱間1.4mを測る。柱掘形はほとんどいー辺約0.4mの方形を呈する。

建物4 西部の溝13西側で検出。南北柱列の柱軸 $N-9^{\circ}-W$ で、東西柱列が桁行と思われる掘立柱建物である。梁間2間（柱間1.8m）で、桁行は調査地外に延びるため不明であるが、柱間は2.2mを測る。柱掘形は円形または楕円形を呈する。

建物5 南西隅、溝13西側で検出。南北柱列の柱軸 $N-10^{\circ}-W$ で、南北柱列が桁行と思われる掘立柱建物である。梁間1間（柱間2.8m）だが、桁行は調査地外に延びるため不明であるが、柱間は1.5mを測る。柱掘形は円形または楕円形を呈する。

II地区

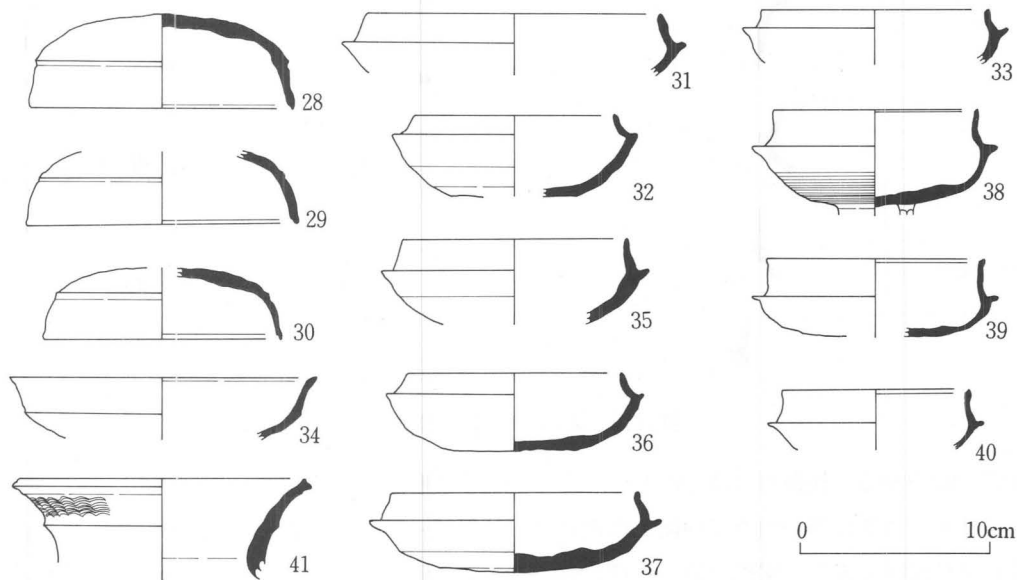
建物6 ほぼ中央北よりで検出。北部は調査地外に延びる。桁行3間（柱間1.7m）以上、梁間2間（柱間1.6m）の $N-26^{\circ}-E$ の掘立柱建物で、柱掘形は径約0.4mの円形を呈する。

建物7 建物6の南東部にて検出。南部は調査地外に延びる。桁行2間（柱間1.8m）、梁間2間（柱間1.6m）の $N-15^{\circ}-E$ の掘立柱建物で、柱掘形は径0.6~0.4mの円形または楕円形を呈し、P14には根石が残存していた（図版7）。

土坑1 北部は調査地外になるが、検出の南北長5.7m、東西最大長7.7m、最大深0.83mを測り、北側に突出するL字形を呈し、底面はほぼ平らである。また北西部からは溝28が西方向へ延びている。土坑内はI~IIIの3層に分かれ、I層は中・粗粒砂を含む暗緑灰色（7.5GY2/1）粘質土で、II層は細・中粒砂、小礫を含む褐色（7.5GR4/6）粘土質シルトとオリーブ黒色（5GY2/1）シルト質粘土の混層で、III層は中・粗粒砂を含む黒色（N /2）シルト質粘土であった。I層からはほとんど遺物は出土しなかったが、II層からは須恵器、土師器の小片と植物遺体が、III層からは多くの須恵器、土師器、製塩土器・ミニチュア土器・円板形土製品など（図版13）とともにウマの歯と多量のモモの実（図版15）が出土した。

土坑1内出土遺物（第12図 図版10・13）

須恵器杯身（35~37） 器高は低く底面はやや平らである。たちあがりは内傾して短く立ち上がり、端部をやや尖らせておさめている。受け部は少し上外方向に短く延び、端部はやや尖らせている。



第12図 土坑1、溝28出土土器実測図

須恵器高杯（38～40） いずれも杯部のみ。平坦な底部に脚を装着している。たちあがりはやや内弯してからほぼ垂直に立ち上がり、端部は内傾して段を有する。受け部はほぼ水平に短く延び、先端をやや丸くおさめている。

須恵器壺（41） 口縁片。上外方向な内弯ぎみに大きく開き、端部は外上方に立って面をなす。外面上方に凸線が巡り、その上に波長の短い波状文を施している。

溝28 土坑1の北西部から西さらに西南西方向にやや弓なり状を呈して延びる溝で、溝12によって一部切られているが西壁まで達している。断面逆台形状または部分的にV字状を呈し、検出長約27m、幅1.3～0.3m、深さ0.27～0.15mを測る。北側と南側で約0.3mの高低差があり、土坑1から流出したものが西方向へ流れていたものと考えられる。溝内は中・粗粒砂を含む黒色（7.5YR※1.7/1）粘土質シルトで須恵器、土師器、製塩土器などとともにウマの歯（図版14）とモモの実が出土した。

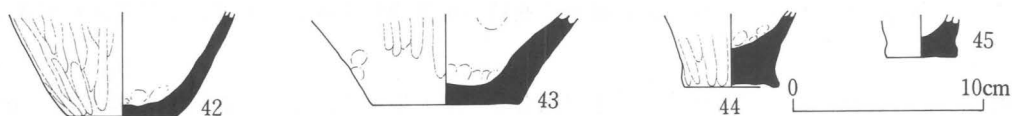
溝28内出土遺物（第12図 図版12）

須恵器杯蓋（28～30） やや丸みをもつ天井部に、突出のゆるい稜を有している。口縁部は外弯ぎみに少し開いて下り、端部は内傾して段を有する。

須恵器杯身（31～33） たちあがりは内傾して立ち上がり、端部をやや尖らせておさめている。受け部は少し上外方に短く延び、端部をやや尖らせている。

須恵器高杯（34） 杯部片。上外方にゆるやかに立つ体部から、口縁部はやや立たせて内弯ぎみに開き、端部は内傾してゆるい段を有する。

土坑2 土坑1東側で検出した変形の卵形を呈するもので、長さ1.5m、幅0.9m、深さ0.4mを測る。土坑内は黒色（10Y2/1）砂混じりシルト質粘土で、植物遺体・炭片などを含み、須恵器片、土師器小片が出土した。



第13図 第7・8層出土弥生土器実測図

土坑2内出土遺物(第9図 図版14) たちあがりはやや内傾して上方向に延び、端部を内傾させている。受け部はほぼ水平に延びて、先端をやや丸くおさめている。

東西方向の溝群(溝33~42) II地区東よりに主に東西方向に走る10条の溝があった。長さは各溝によって異なるが、幅0.5~0.15m、深さ0.1m前後を測る。埋土は黒色(7.5YR1.7/1)砂混じり土。溝41は溝28によって切断されており、これより先行する遺構であるが、遺物はほとんど出土せず、明確な時期・性格は不明である。

曲線溝群(溝29~32) II地区中央で検出した4条の溝は、その切り合い関係から溝29が一番古く、溝30、溝32、そして溝31へと新しくなる。幅0.5~0.2m、深さ0.12~0.05mを測る。溝29は溝28および溝39・40によって切断されており、これらより先行する遺構である。溝内は暗褐色(10YR3/3)土のブロックの混じる砂を含む黒色(7.5YR1.7/1)粘質土で、溝30から土師器の甕(16)、溝29からは須恵器杯身(13)などが出土したが、性格などは不明である。

溝30内出土 土師器甕(第9図 図版16) 卵状を呈する体部から、口縁部はゆるやかに外上方に延び、端部は外面をナデつけて稜をなし、先端を尖らせておさめている。口縁部内外面はヨコナデ、体部外面はタテ方向の刷毛調整を施している。

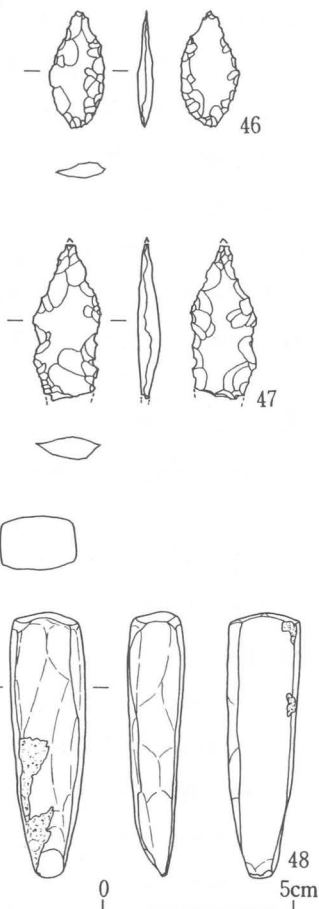
溝29内出土 須恵器杯身(第9図 図版13) 丸みをもつやや深い体部に、たちあがり内上方に延び、端部は内傾して面をなす。受け部はほぼ水平に短く延び、端部を尖らせておさめている。

第7層内出土遺物(第13・14図 図版10・11)

第7層はオリブ黒色(7.5Y3/1)土のブロックの混じる黒褐色(10YR3/1)シルト質粘土で、I・II地区西側のみで検出し、弥生土器片、石器などが出土した。

弥生土器壺(42~44) 器形は異なるが、いずれも壺の底部であり、下から上へのヘラミガキ調整を施している。

打製石鏃(46) 円基式石鏃である。長さ3.05cm、最大幅1.4cm、先端角度65°を測る。両



第14図 第7・8層出土石器実測図

面の縁片両側とも先端から基部方向に細かく連続の細部調整を施し、刃部および基部を形成している。サヌカイト。

磨製石器 柱状片刃石斧(48) 前主刃側など一部欠損している。長さ7cm、最大幅2cm、最大厚1.4cmを測る。基部は前主面方および両側方向に傾斜し、ゆるやかな山状を呈する。各面ともゆるいふくらみをもつ。刃縁は直線で、刃研ぎ出しは前・後主面より行ない、その割合は8:2である。後面以外はいずれも基部から刃部方向へケズリ成形している。刃縁部は使用による刃こぼれがみられる。

第8層内出土遺物(第13・14図 図版10・11)

第8層はⅠ地区およびⅡ地区中央・東部において、地山直上で部分的に検出したのみであり、弥生土器片(甕底部 45)および石器などが出土した。

打製石鏃(47) 基部側および先端部が欠損し、残存長4.1cm、最大幅1.8cmを測る。両面の縁辺両側とも先端から基部方向に細かく連続の細部調整を施している。サヌカイト。

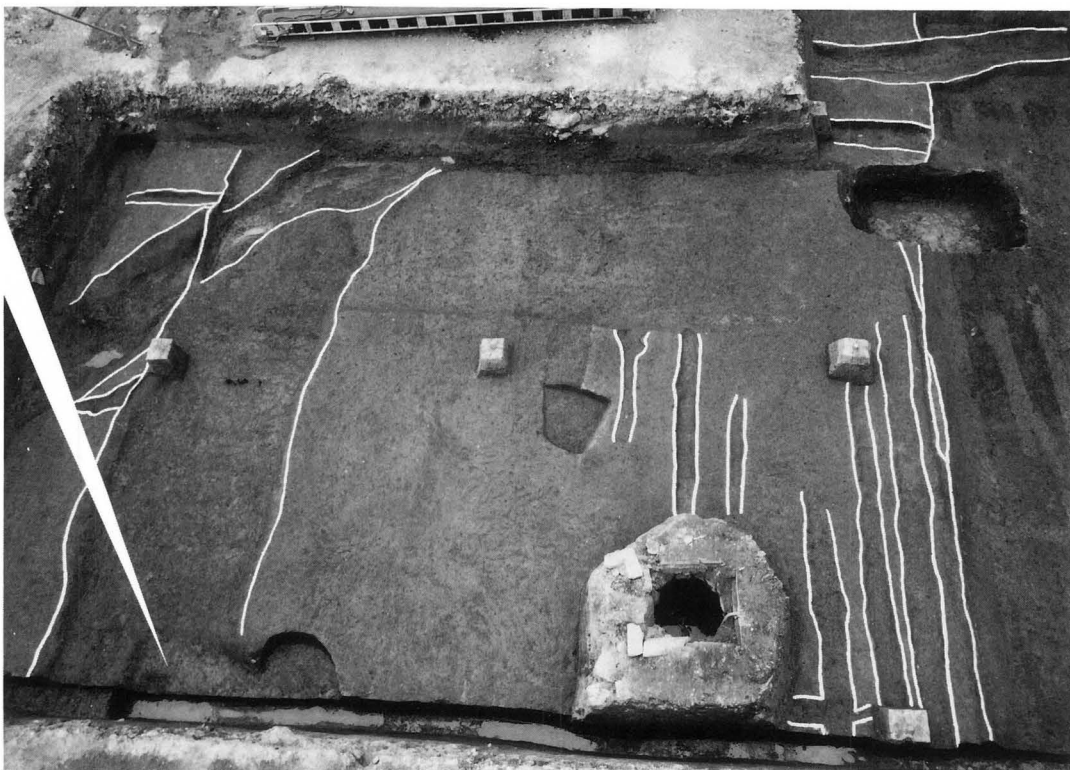
Ⅳ. まとめ

今回の調査は市尻遺跡の第1次発掘調査であり、この遺跡の性格をはじめて明らかにすることができた。すなわち、縄文土器片は出土したが、全体としては弥生時代中期から江戸時代に亘る複合遺跡である。縄文土器は中期の船元式の深鉢片の口縁1片で、これは平安時代後半から鎌倉時代の整地層の中からの出土であり、南に位置する縄手遺跡から出土していることから、整地時に持ち込まれたものと考えられる。また、弥生時代の明確な遺構は確認できなかったが、第7・8層は明らかに弥生時代の遺物包含層といえる。しかし、この遺跡はやはり5世紀後半—古墳時代後期以降活発に盛行する遺跡である。

遺構・遺物としては、5世紀後半から6世紀前半に亘る建物に伴う柱穴群や溝群・土坑など(第5遺構面)と、須恵器・土師器(竈・甌・甕—煮沸用土器多い)・韓式系土器・製塩土器などを多量に検出・出土しており、この時期には居住区としての役割を果たしていたと思われる。これに対し、奈良時代以降は様子が一変し、建物などの遺構はほとんどなく、集落の縁辺地域と化している。奈良時代前後には南北方向に走る道とそれに伴う溝を検出したが(第4遺構面)遺物は極めて少なく、平安時代には田または湿地(第3遺構)、鎌倉から室町時代には畑地などとなり(第2遺構および第1遺構の第3・4期)、江戸時代前—後半には灌漑などに伴うと考えられる溝が穿かれていた(第1遺構第1・2期)。また、平安時代後半から鎌倉時代(第6層)、江戸時代前半(第5層)および近現代(盛土)に大がかりな整地を行なっていることも判明した。

今後、縄文時代後期の遺跡として知られている南に位置する縄手遺跡から本遺跡に類似する古墳時代後期以降の遺構・遺物が確認されており、東に隣接する山畑古墳群は古墳時代後期の群集墳であることなど、周辺部の調査によりこれらとの関係が明確になっていくものと考えられる。

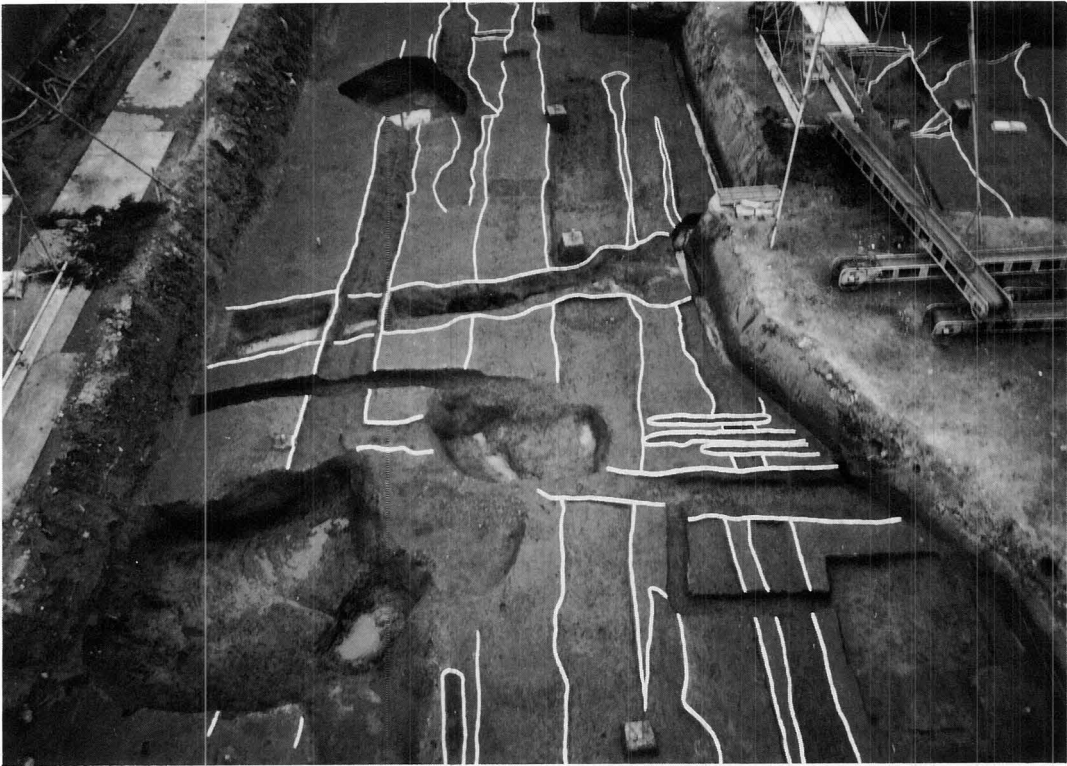
版 圖



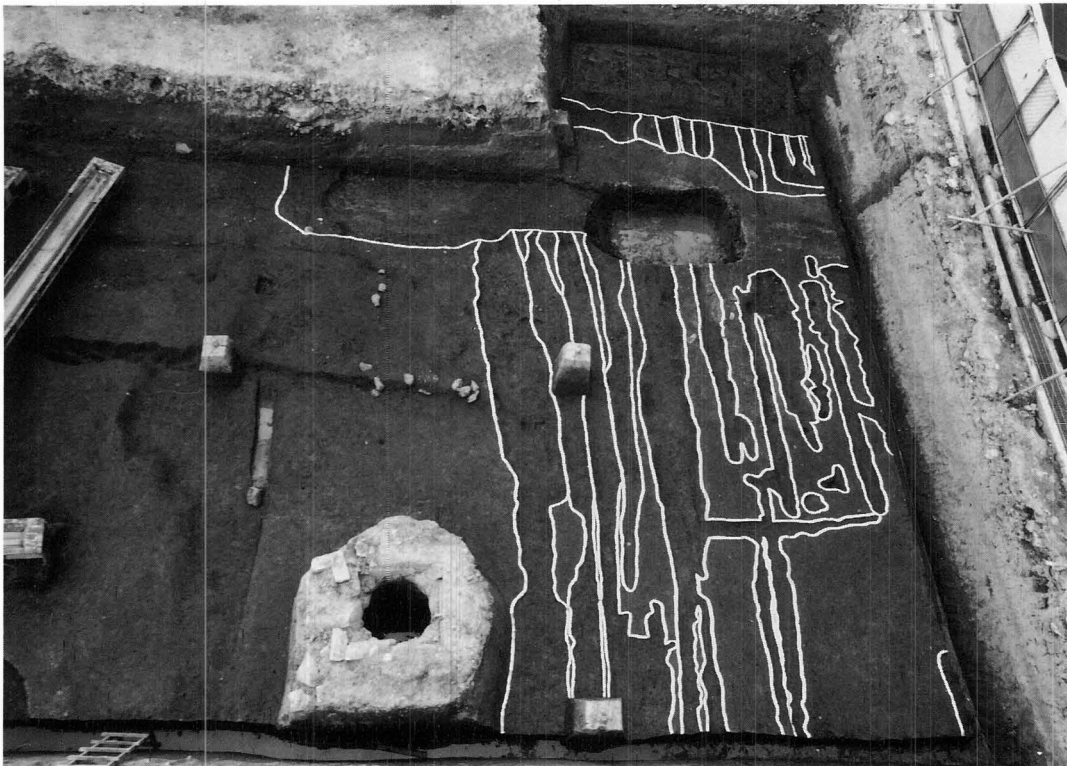
I地区第1遺構(東より)



溝1杭列



II地区第1遺構（東より）



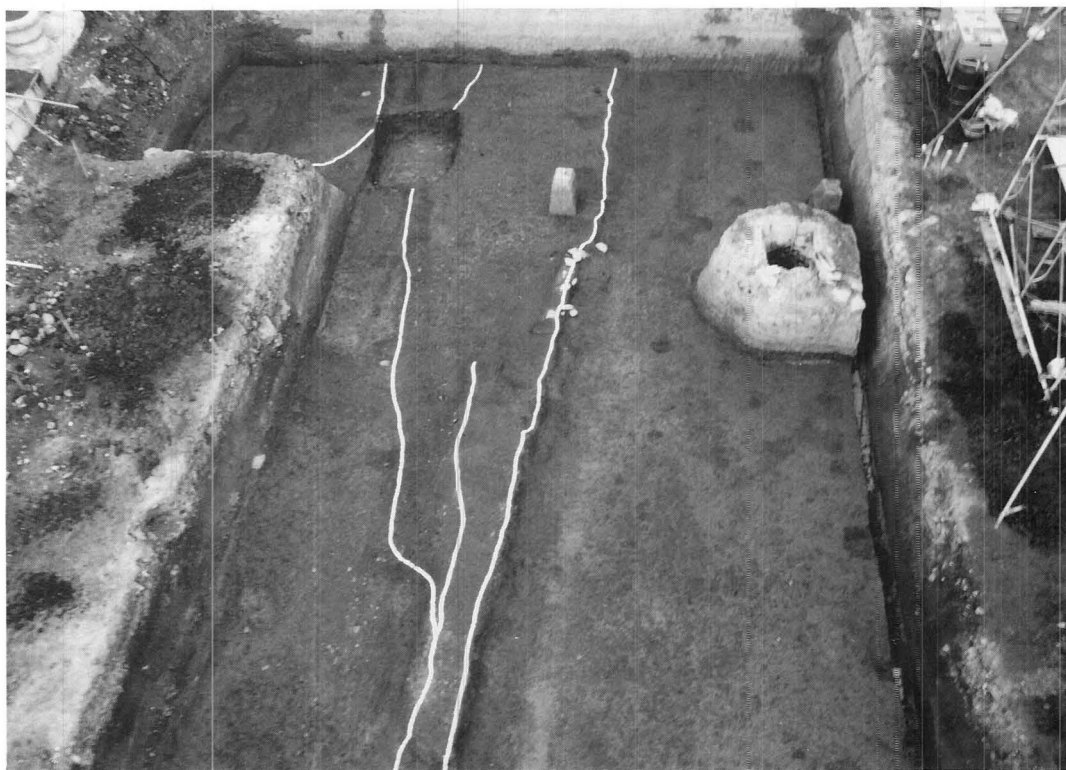
I地区第2遺構（東より）



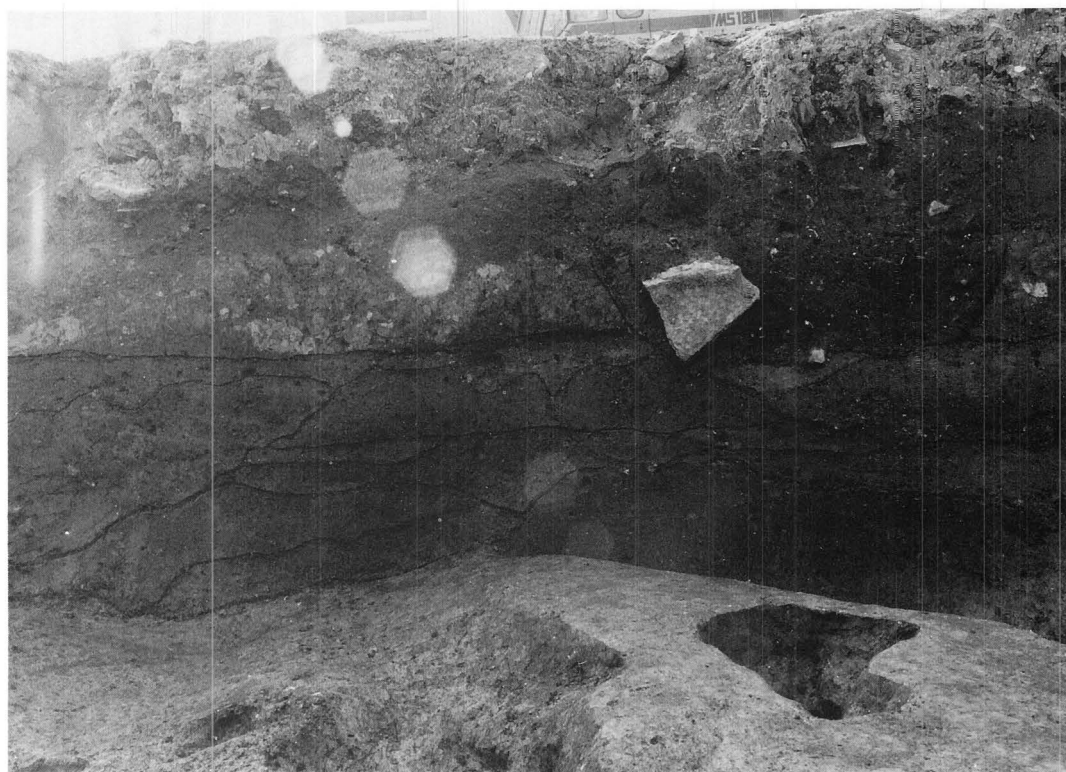
I地区第3遺構（北より）



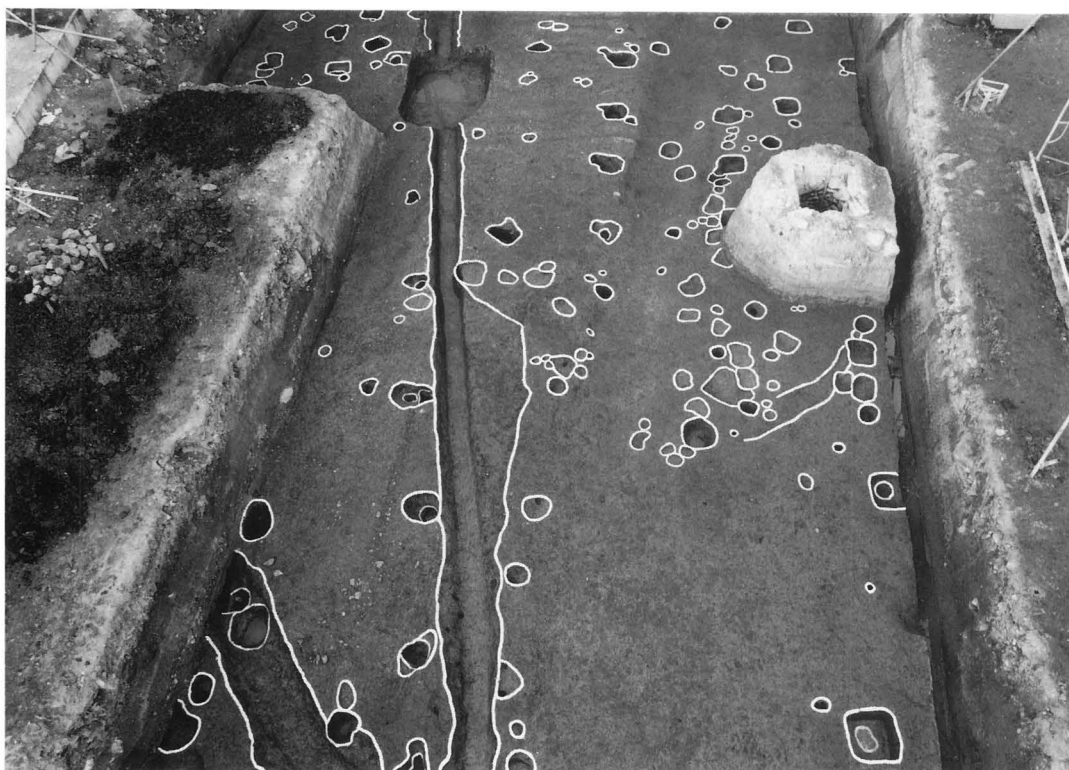
II地区第3遺構（北より）



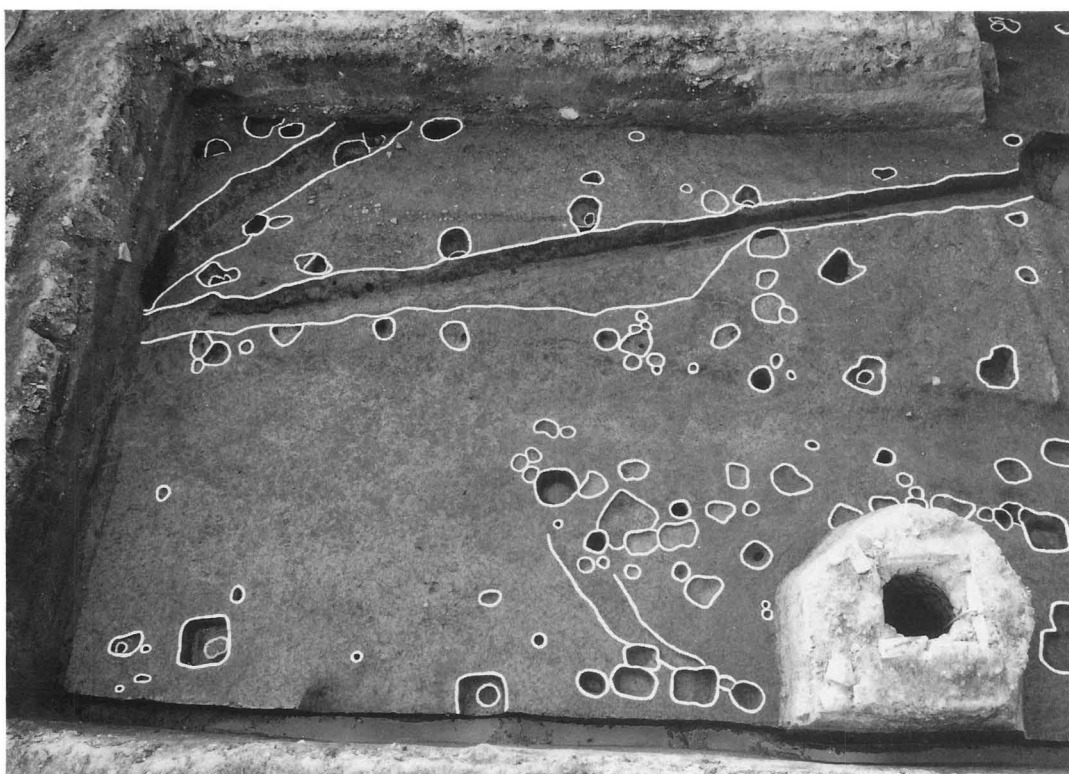
I 地区第 4 遺構 (南より)



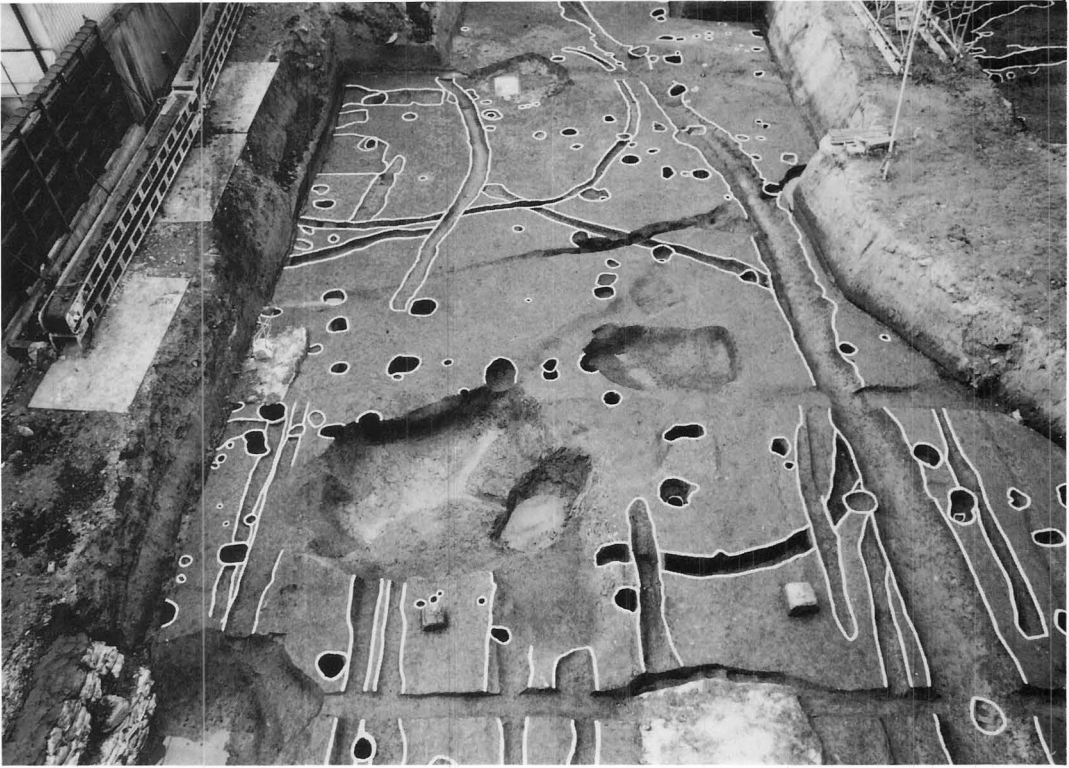
I 地区南断面 (部分)



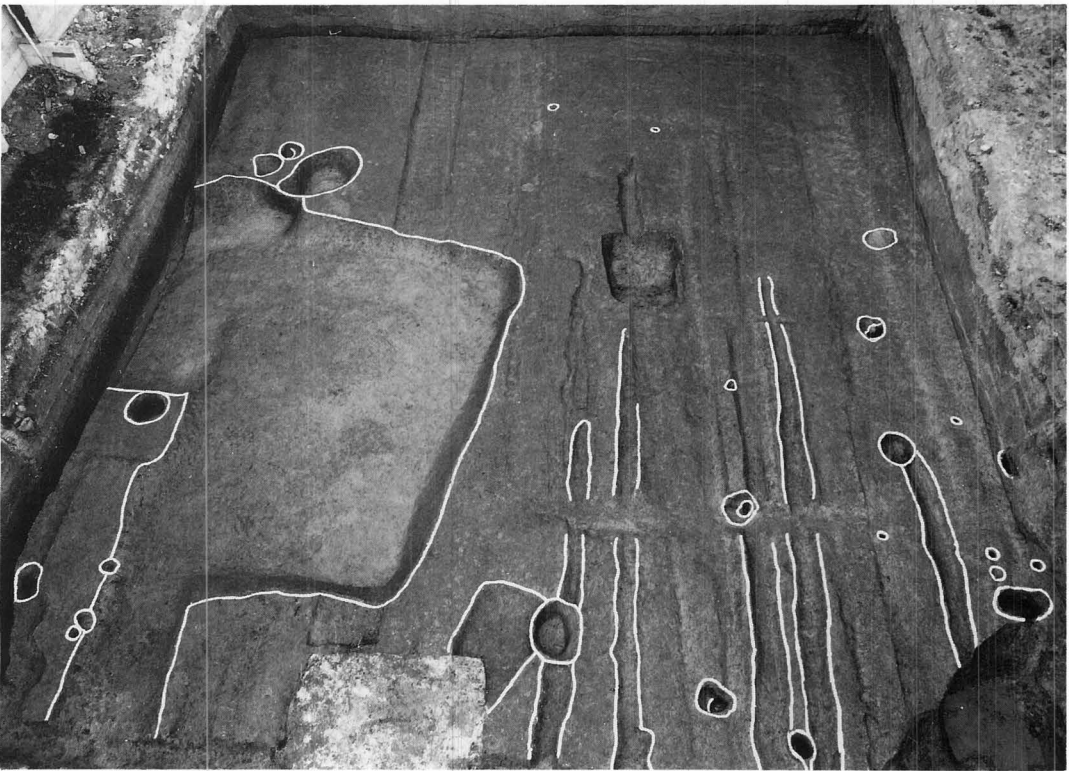
I 地区第 5 遺構 (南より)



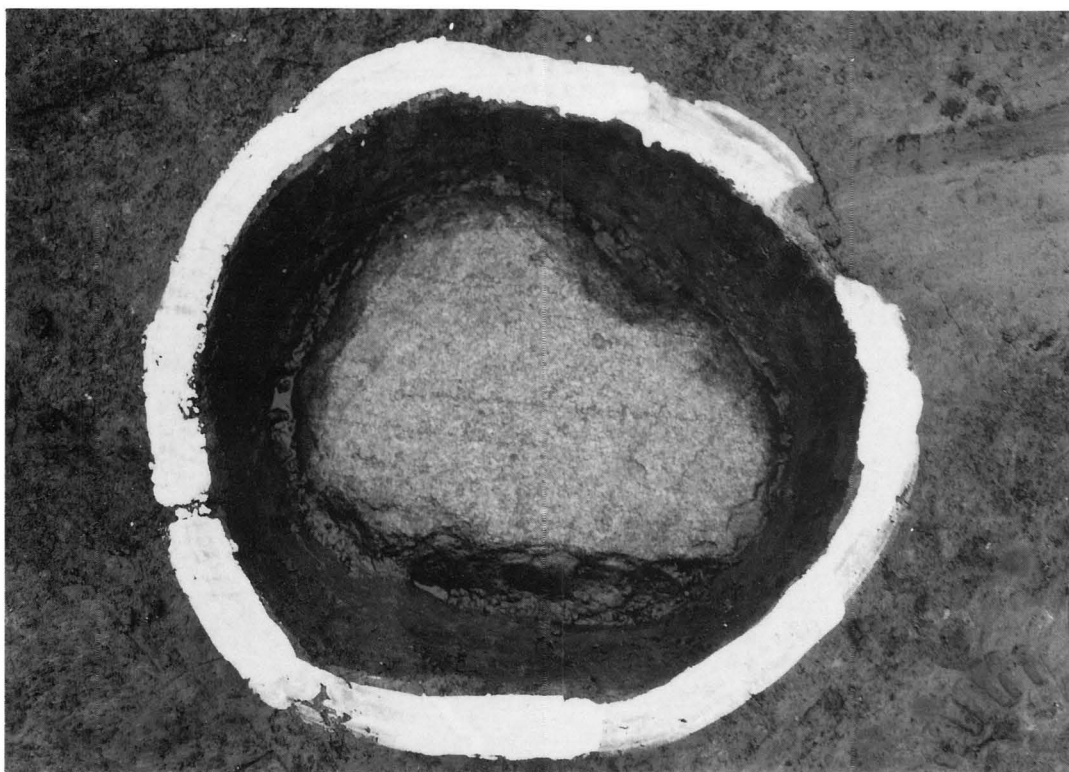
I 地区第 5 遺構 (東より)



II地区第5遺構（東より）



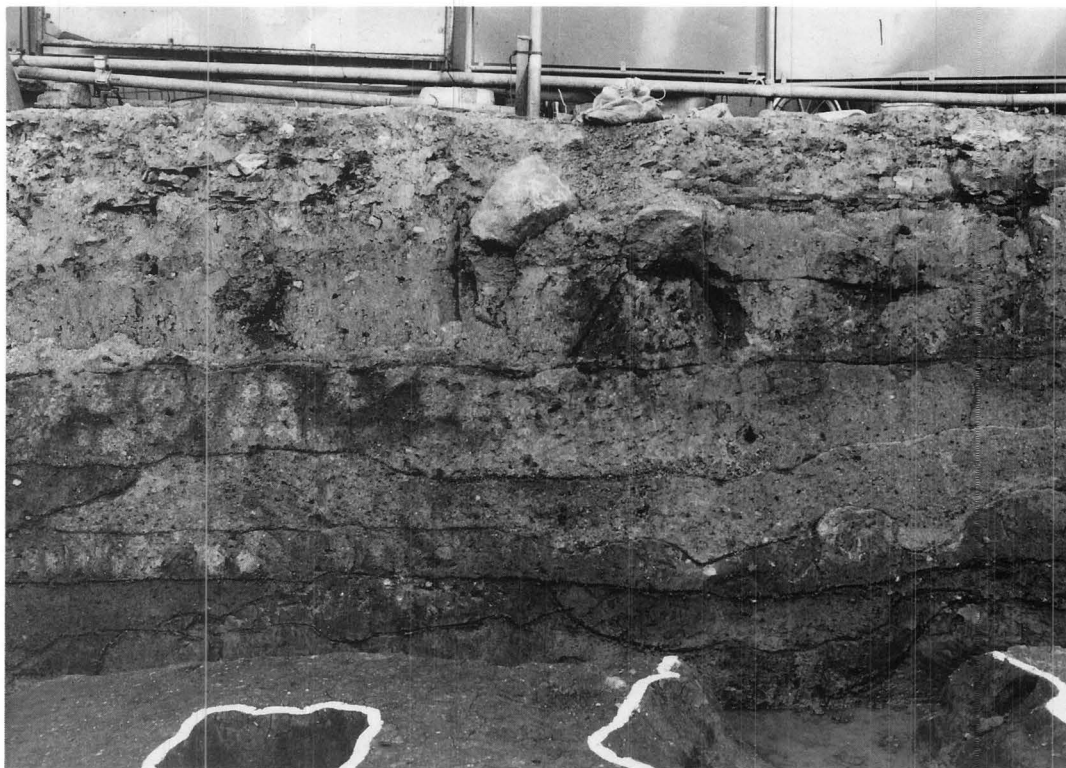
II地区東拡張 第5遺構（西より）



P14 根石



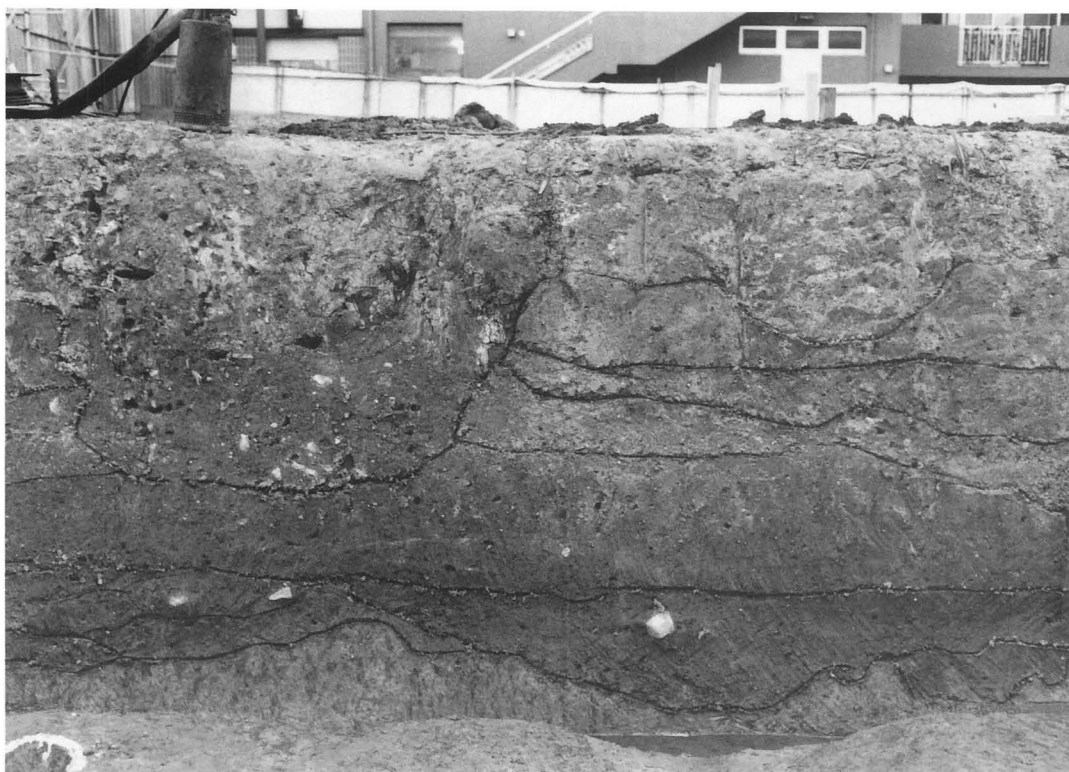
現地説明会



I 地区東断面 (部分)



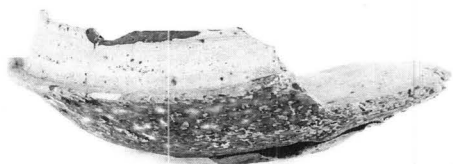
I 地区北断面 (部分)



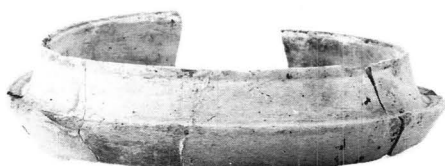
II地区北断面（部分）



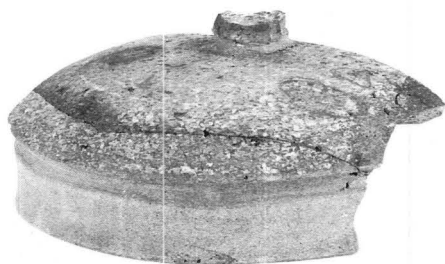
II地区東拡張北断面（部分）



37



23



26



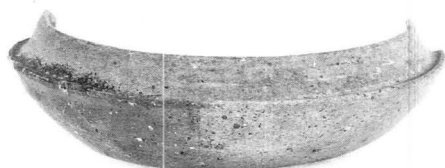
22



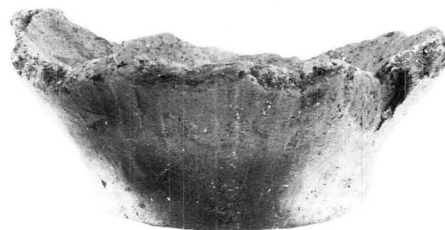
38



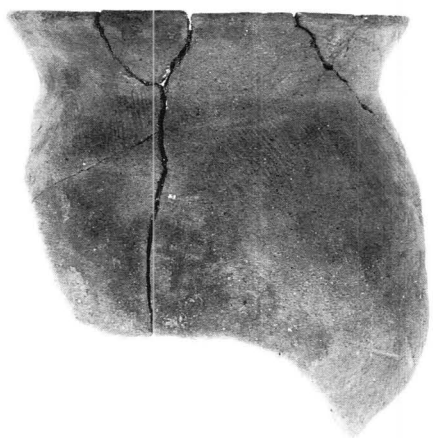
27



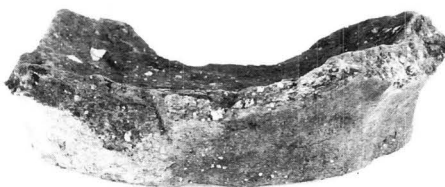
36



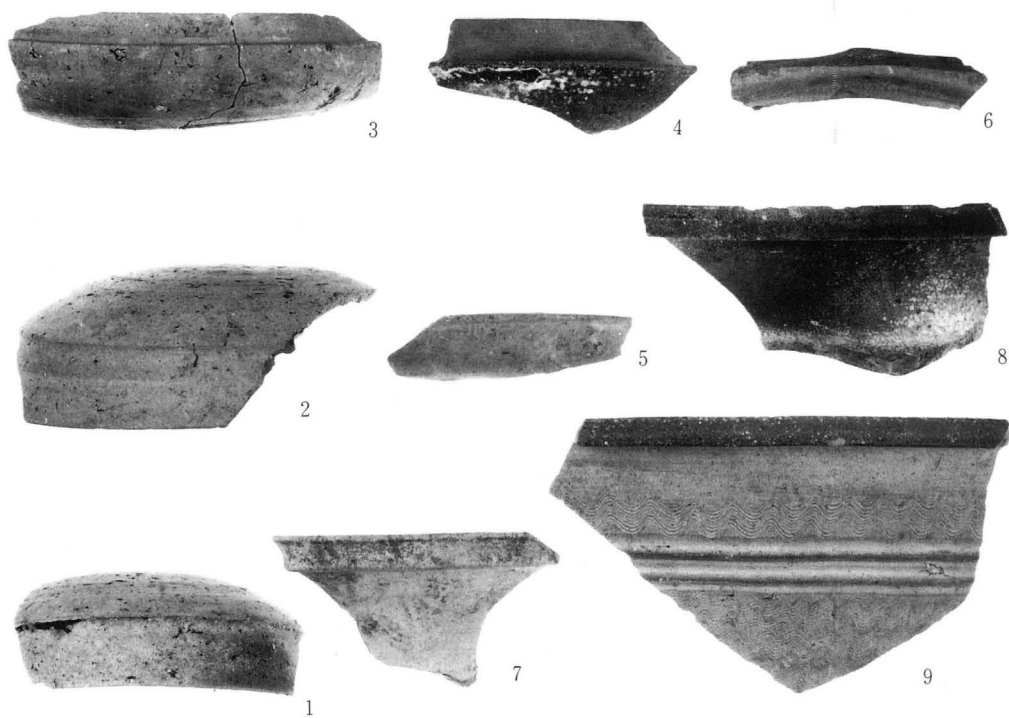
43



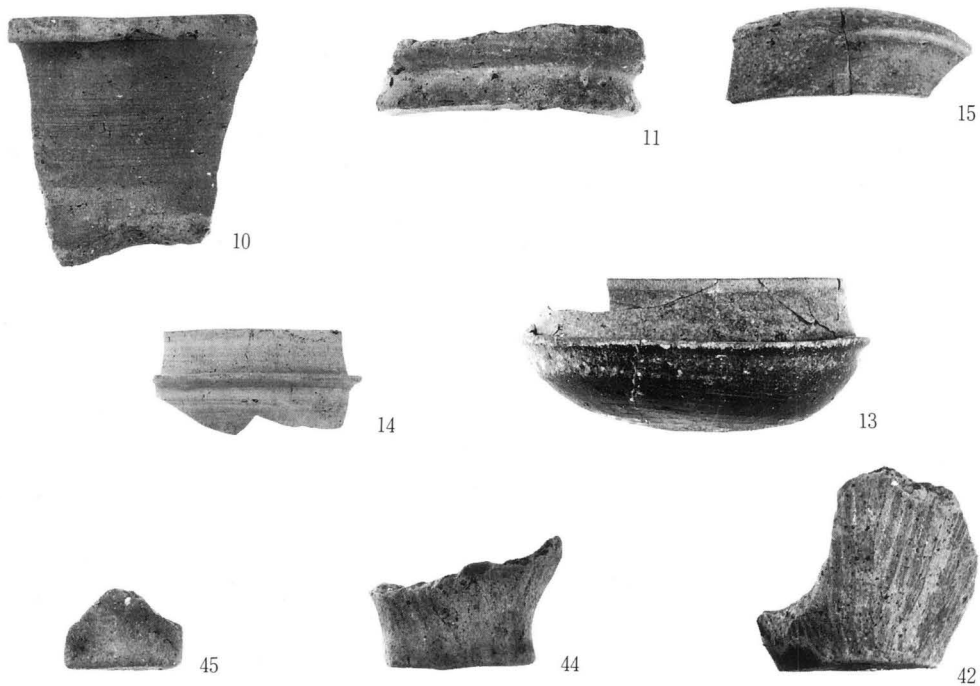
16



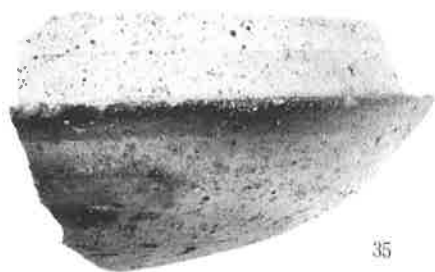
17



溝11·12、第6下層出土土器



溝29·30、土坑2、第6上層出土土器、第7·8層出土弥生土器



35



41



40



39

土坑1出土土器



溝13



溝28



第7層



第6層



第6層



土坑1

縄文土器、弥生土器、円板形土製品、製塩土器、韓式系土器



25



18



20



21



19

溝13出土土器



34



30



28



31



29

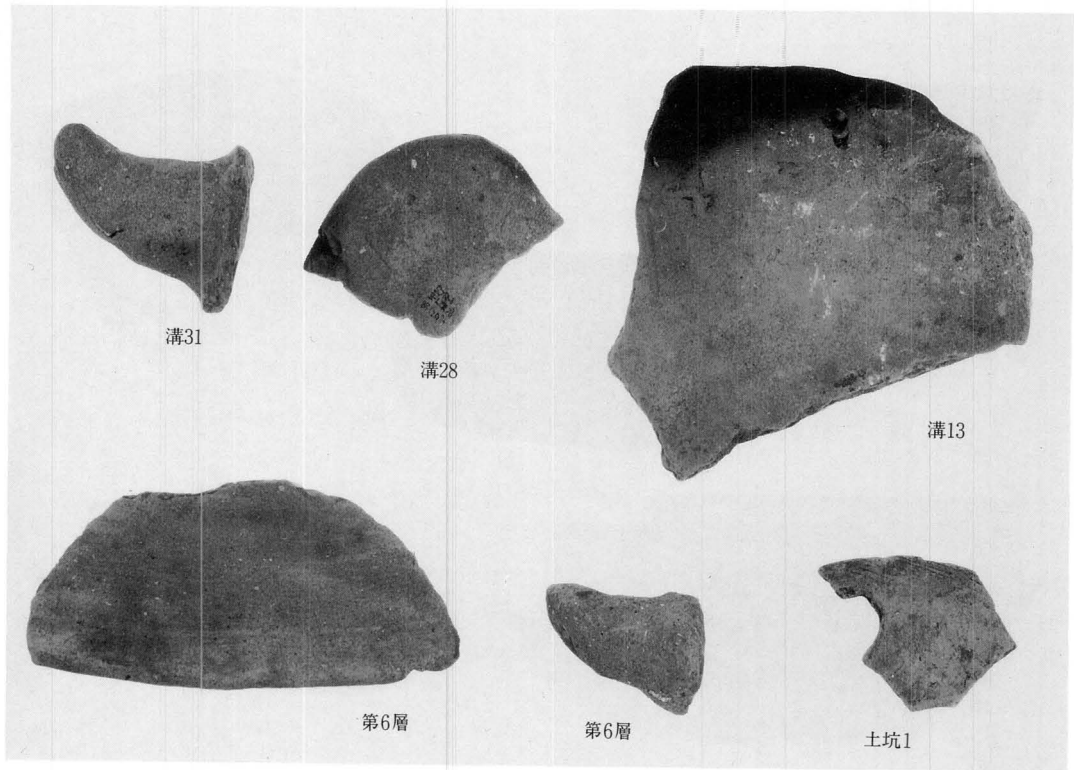


33

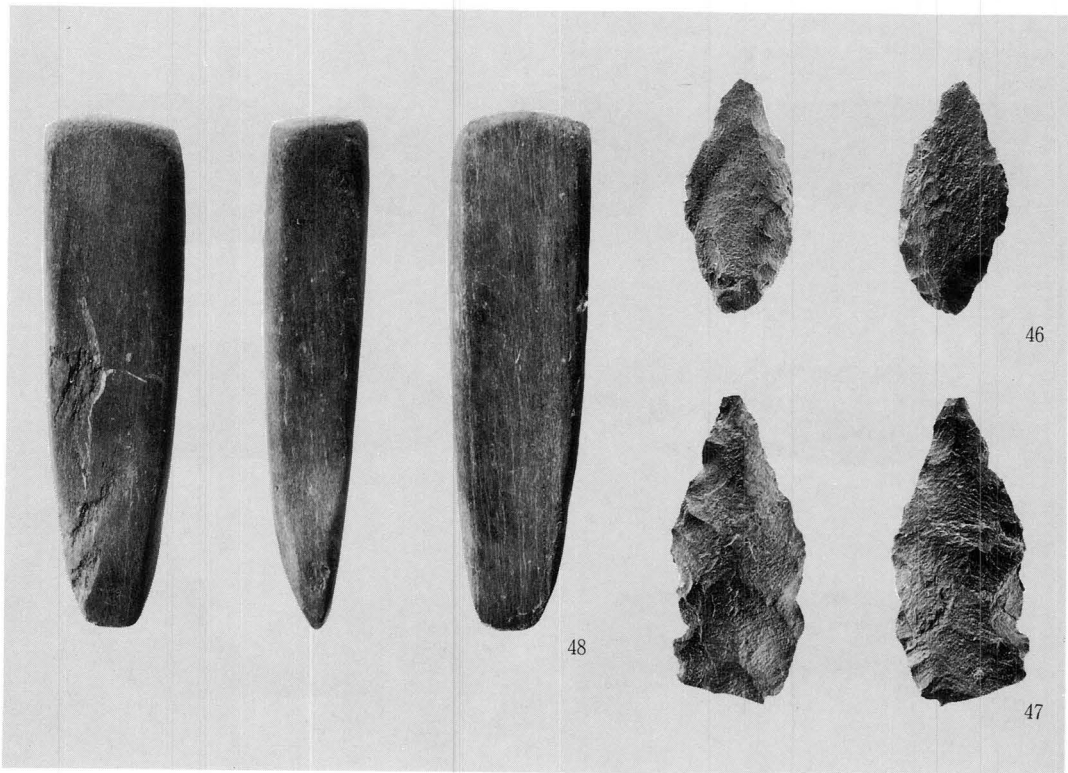


32

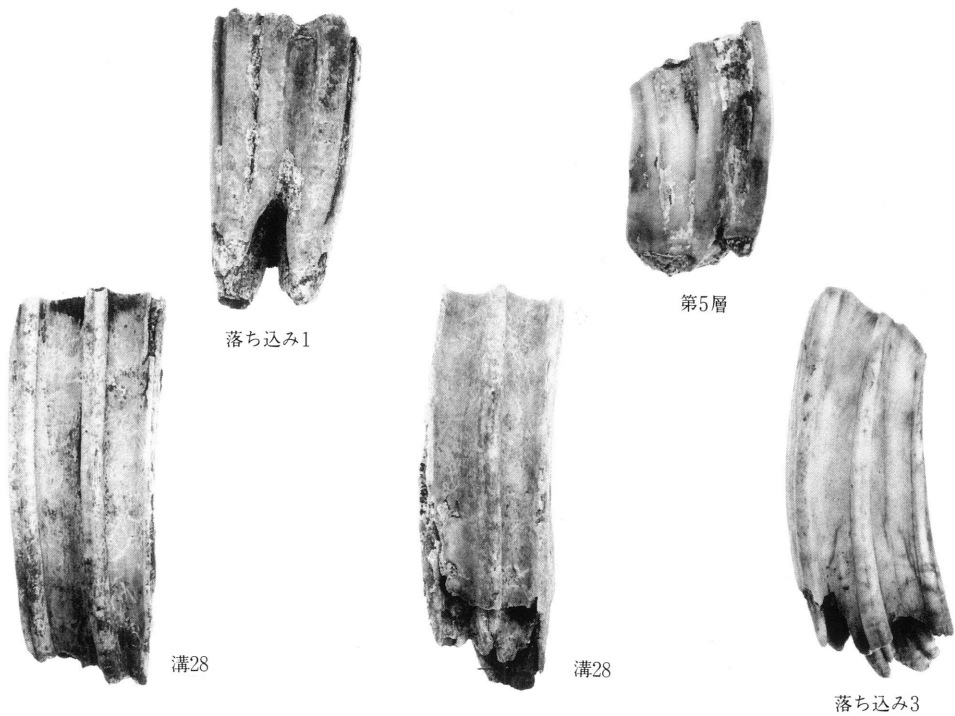
溝28出土土器



煮沸用土器（竈・甑・羽釜）



第7・8層出土石器



ウマの歯（落ち込み1、落ち込み3、第5層、溝28）



土坑1出土モモの種

芝ヶ丘遺跡第5次発掘調査概要

例 言

1. 本書は大阪府東大阪市中石切町4丁目210番地に所在する芝ヶ丘遺跡第5次の発掘調査報告書である。
2. 調査は石切中学校プール建設工事に伴う事前調査として実施した。
3. 調査は、財団法人東大阪市文化財協会が東大阪市教育委員会の依頼により勝田邦夫を調査担当として実施した。
4. 調査期間は1987年7月20日から8月12日までである。
5. 調査対象面積は154m²である。
6. 発掘調査の参加者は、井上伸一、辻本智英、栗須直樹、長岡智、池谷孝郎、三野章生の各氏で整理作業についても同様である。遺構、遺物のトレース、図版作成は 原美智子氏によるものである。
7. 本書の執筆、編集は勝田が行なった。遺物の観察表は横原美智子氏によるものである。本書に掲載した遺物写真は、GFプロに委託して撮影した。
8. 調査の実施に当たっては東大阪市建設局建築課、東大阪市教育委員会総務部施設課、安西工務店の方々に御協力を頂いた。記してお礼申し上げます。

本文目次

例言

I. 調査に至る経過	1
II. 位置と環境	2
III. 調査の概要	3
1. 地区割	3
2. 層序	4
3. 調査の成果	5
IV. まとめ	7

挿図目次

第1図 調査地点位置図	1
第2図 芝ヶ丘遺跡周辺の遺跡分布図	3
第3図 調査地区割図	4
第4図 調査地層位図	5
第5図 東側調査区検出遺構図	6
第6図 ピット2実測図	7
第7図 ピット4実測図	7
第8図 南側調査区検出遺構図	7
第9図 東側調査区第4層上面土器溜遺物実測図	8
第10図 包含層出土遺物実測図	9

表目次

第1表 出土遺物観察表	10
-------------	----

図版目次

- 図版1 遺構 1. 調査前の状況
2. 東側調査区全景 掘立柱建物
- 図版2 遺構 1. ピット2と根石
2. ピット4と柱根
- 図版3 遺構 1. 東側調査区 第4層上面遺物出土状況
2. 東側調査区 第4層上面遺物出土状況
- 図版4 遺構 1. 南側調査区全景
2. ピット5
- 図版5 遺構 1. ピット11
2. ピット15
- 図版6 遺構 1. ピット23
2. ピット27
- 図版7 遺物 東側調査区A2地区第4層上面出土遺物
- 図版8 遺物 1. 南側調査区B1～6地区第3層出土遺物
須恵器杯身、杯蓋、鉢、壺、土師器高杯脚部
2. 南側調査区B3、4地区第3層、東側調査区A2、7地区第3、4層出土遺物
土師器鉢、杯、ミニチュア壺、弥生土器底部

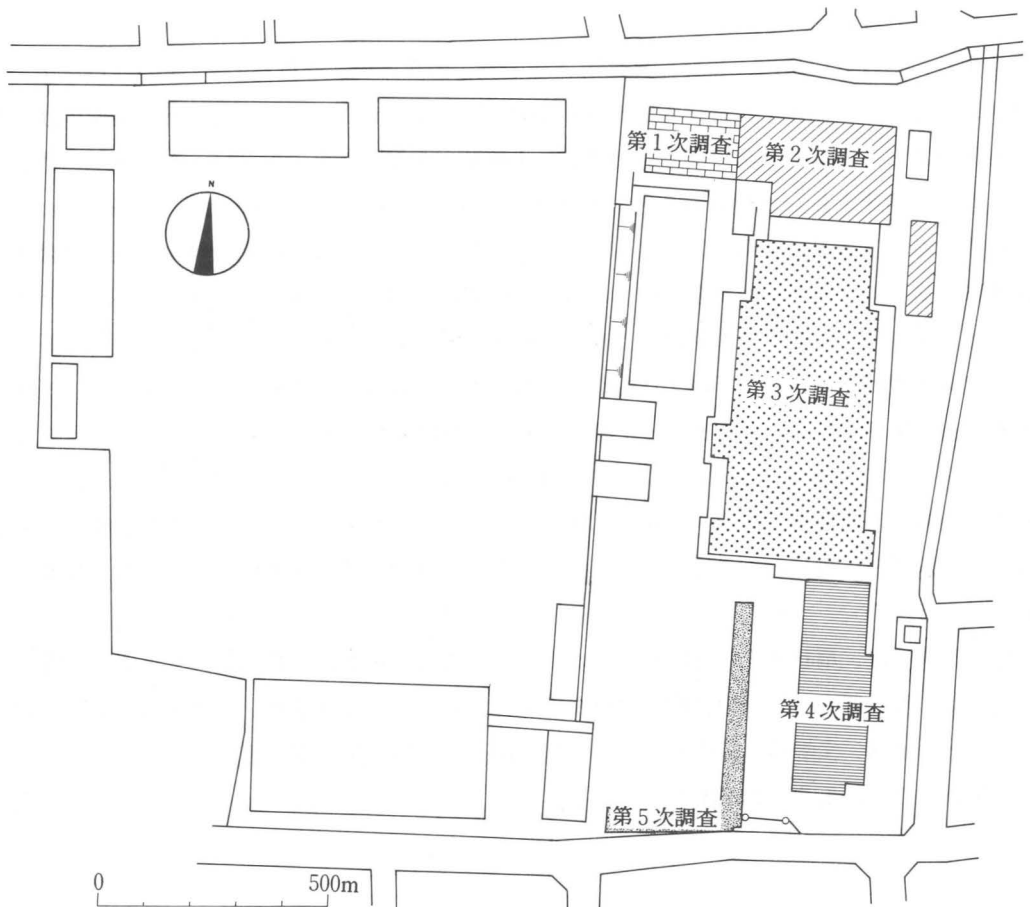
芝ヶ丘遺跡第5次発掘調査概要

I. 調査に至る経過

芝ヶ丘遺跡は東大阪市中石切町4丁目から北石切町にかけて所在する縄文時代から歴史時代（鎌倉時代）にいたる複合遺跡である。

本遺跡は、生駒山西麓に発達する中位段丘及び低位段丘に位置し、標高15～35mである。昭和34年、北石切町で住宅建設に伴う造成工事が実施され、地下50cmの青灰色粘土層から土師器、弥生土器が出土した。昭和37年にも、工事中に土師器、弥生土器など多数の土器片が採集され、この地域一帯に大きな集落が存在し、長期間に存続したことが推測され、遺跡として周知された。

発掘調査は、石切中学校校舎増改築に伴うもので、第1次調査は昭和47年に実施され、弥生時代後期の溝やそれに伴う土器、縄文時代後期～晩期の土器が出土した。第2次調査は、昭和50年に実施され、1次調査の弥生時代後期の溝の続きとそれに伴う土器、古墳時代の井戸、ピ



第1図 調査地点位置図

ット、5世紀末～6世紀初頭ごろの土師器、須恵器、焼土、滑石製勾玉を検出した。第3次調査は、昭和54年に実施され、縄文時代の埋甕、古墳時代の井戸、ピットなどの遺構と縄文時代～古墳時代に至る遺物を検出した。第4次調査は、昭和59年に実施され、弥生時代後期の溝、古墳時代の掘立柱建物、土坑、ピット群と縄文時代～古墳時代に至る遺物を検出した。

今回の第5次調査地は、第4次調査地のすぐ西側にあたる。調査は盛土部分の約20～30cmを、機械により掘削し、以下を人力により掘削し調査した。

II. 位置と環境

芝ヶ丘遺跡の周辺地域で生活が開始されたのは旧石器時代で、日下、芝坊主山、千手寺山、正興寺山、山畑などの遺跡でナイフ形石器および尖頭器が出土している。旧石器時代から縄文時代の過渡期では、神並、草香山、日下、六万寺などの遺跡で有舌尖頭器が出土している。

縄文時代では、早期の神並遺跡、中期の善根寺遺跡、後期の日下遺跡、縄手遺跡、晩期の日下、芝ヶ丘、鬼塚、馬場川遺跡がある。これらの遺跡は、生駒山西麓の段丘上、標高15～80mに位置し、前面に広がる河内湾と背後に位置する生駒山の豊かな自然を背景として集落が営まれたものと考えられる。

弥生時代では、中垣内、和泉、高井田、瓜生堂、山賀といった標高1～7mの低地を中心に集落が営まれる。南西1.4kmにある鬼虎川遺跡では、幅5m、深さ1.2～1.5mの環濠に囲まれた集落があり、集落の東側では方形周溝墓、土壙墓、木棺墓、土器棺といった墓地域、西側では杭などで護岸された水利施設をもった水田などが広がっていたものと考えられる。しかし、中期末になって衰退し後期には廃絶してしまう。西ノ辻遺跡では、中期中葉から集落が営まれ後期には集落の規模が拡大する傾向にある。この違いは遺跡の立地に大きな要因があると考えられる。弥生時代後期では中期のような大規模な集落は影をひそめ、小規模なものとなる。ただ、鬼虎川遺跡を中心として西ノ辻遺跡、植附遺跡、鬼塚遺跡が隣接して存在するが、集落の配置、集団関係、生業、変遷といった詳細なことは現段階では明確ではない。

古墳時代では、馬場、日下、芝ヶ丘、辻子谷、神並、西ノ辻、鬼塚、縄手といった扇状地、新家、西岩田、意岐部、西堤、岩田、瓜生堂、小若江、池島東といった沖積平野で集落が営まれているが概して規模の小さいものが多い。また、生駒山西麓の各尾根筋には古墳が数多く作られている。

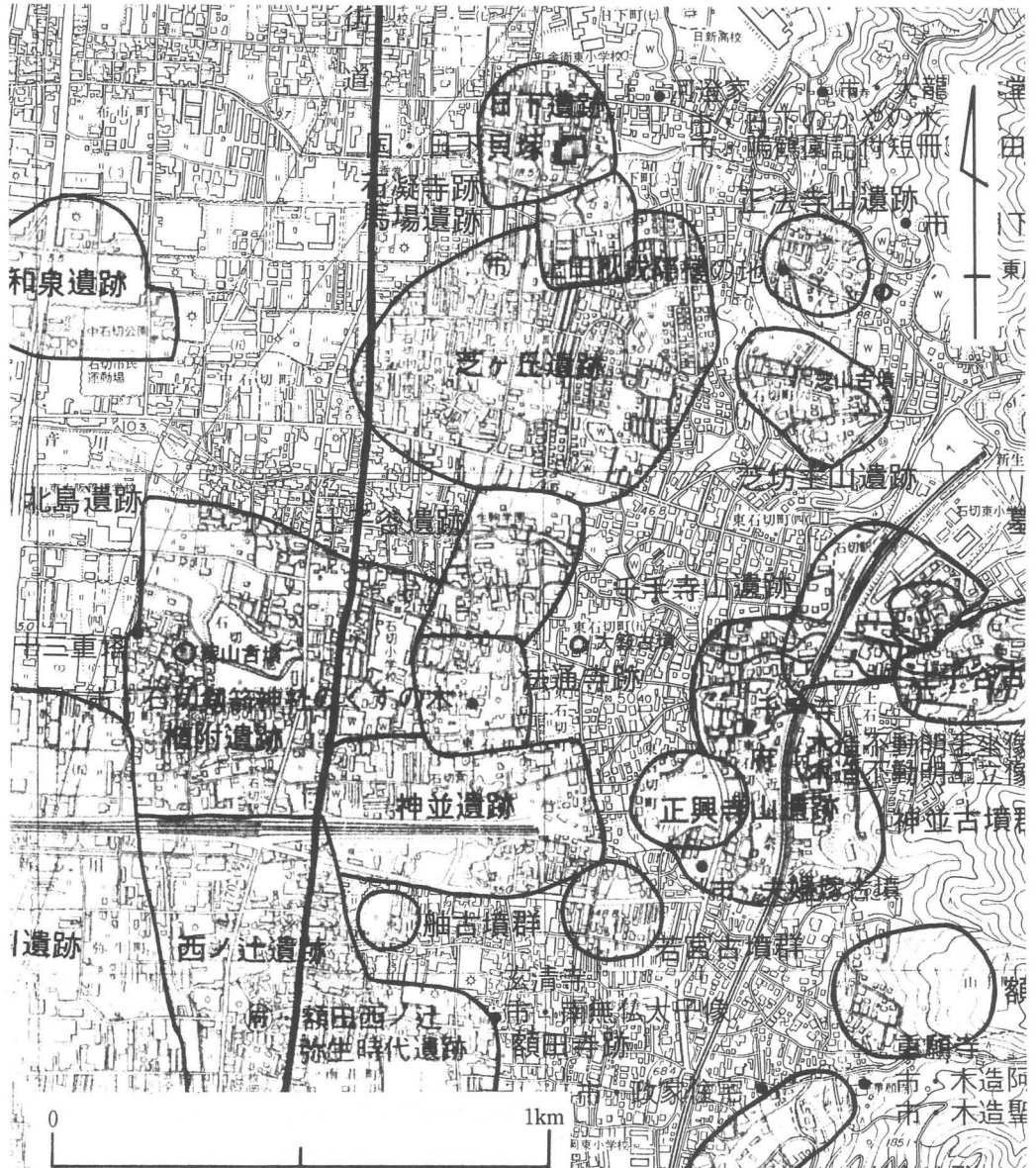
歴史時代では、扇状地上に寺院や集落がみられ、また沖積平野の微高地にも集落や寺院が立地し、その周辺部では人間の活動の痕跡が多く見られる。掘立柱建物、井戸、溝、土坑、耕作痕といった遺構、土師器、須恵器、瓦器、輸入陶磁器、国産陶磁器、漆器、石製品といった当時の生活がかがえる遺物が出土している。

III. 調査の概要

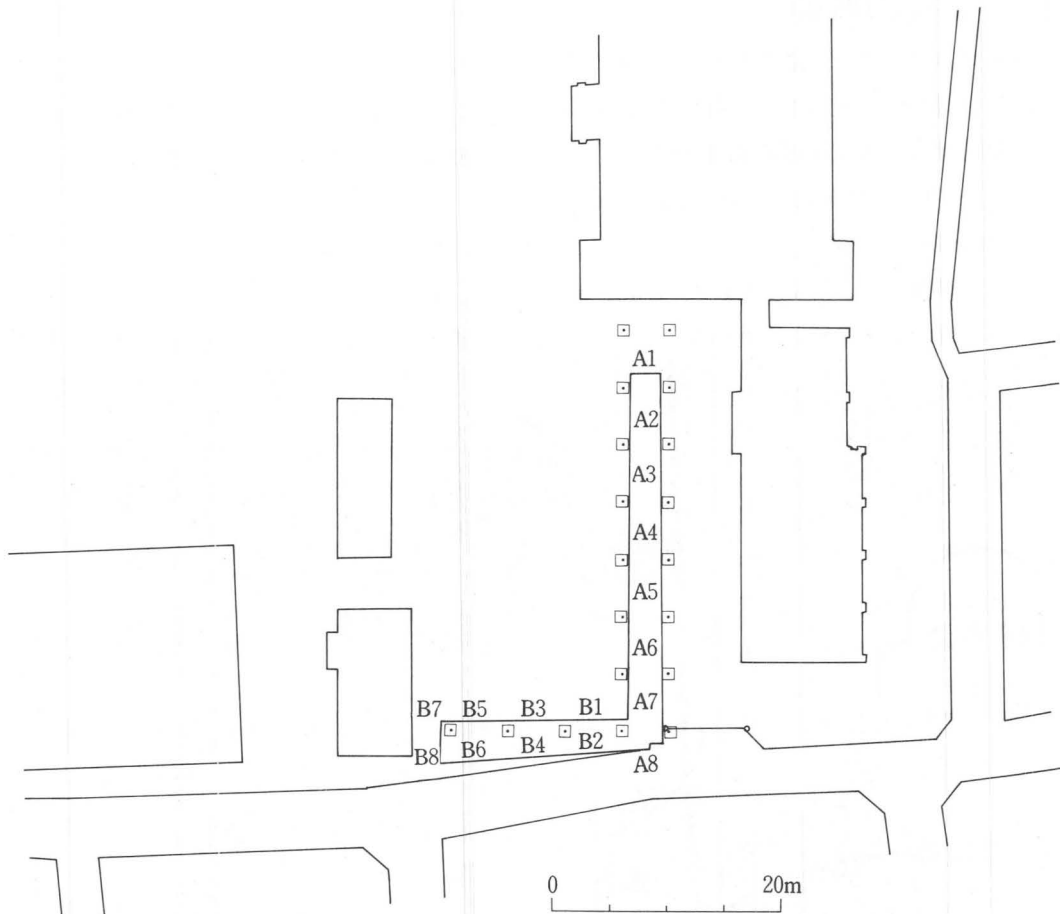
調査地点は、芝ヶ丘遺跡の西寄りにあたる所であり、標高18m前後である。調査は東西3.1m、南北33m、東西17m、南北3.7mの逆L字形で、面積165.2m²を対象として実施した。今回の調査地は、国家座標第VI座標系で東端がY=-32,040.50、西端がY=-32,067.00、北端がX=-146,207.00南端がX=-146,217.00である。

1. 地区割

今回の調査地は、幅5m前後の逆L字形をしており、5mメッシュの地区割を行った。東側調査区は調査地北東の杭から南へA1、A2……、南側調査区は東端杭を基準に北西をB1、南西を



第2図 芝ヶ丘遺跡周辺の遺跡分布図



第3図 調査地区割図

B2、更にその西側をB3、B4……とした。

2. 層序

調査地点の層序は、東側調査区では東壁、南側調査区では北壁断面をもとにして行なった。以下、確認した土層を列挙したうえで特徴を記す。

第1層 盛土 層厚20～30cm。学校建設時の整地層。

第2層 旧耕土 層厚10cm。学校が建設されるまでの耕作土。

第3a層 黒色(5Y2/1)シルト。層厚14～22cm。東側調査地の中央付近より北側で検出され、北側へ行くほど厚さを増していく。土師器甕口縁部、高杯脚部、須恵器杯蓋、甕、製塩土器、弥生土器甕、高杯杯部などの遺物を含む。3a層上面は古墳時代の遺構面である。

第3b層 暗灰黄色(2.5Y5/2)シルト。層厚8cm。南側調査地の中央付近より西側で検出され西に行くほど厚さを増していく。土師器片、須恵器杯身、杯蓋、高杯、弥生土器甕などの遺物を含む。

- 第3c層 灰オリーブ色 (5Y6/2) シルト。層厚10～32cm。南側調査地の西側で検出された。土師器片、須恵器高杯、甕、杯身などの遺物を含む。
- 第3d層 黄灰色 (2.5Y4/1) 細礫混じりシルト。南側調査地の西側で部分的に検出された。土師器高杯杯部、脚部、須恵器高杯、長頸壺、甕などの遺物を含む。
- 第3e層 暗灰黄色 (2.5Y5/2) 細礫混じりシルト。層厚9～33cm。遺構面を覆う包含層で南側調査地で認められた。土師器、須恵器を多く含む。
- 第4層 黒褐色 (10YR3/2) シルト。東側調査地中央付近より北側で検出された。地山である。
- 第5層 暗褐色シルト (7.5YR3/3) 調査地全域で認められた。調査地南東部付近では、盛土を除去するとすぐに地山に達するが、地山は北及び西に向かってなだらかに傾斜していく。

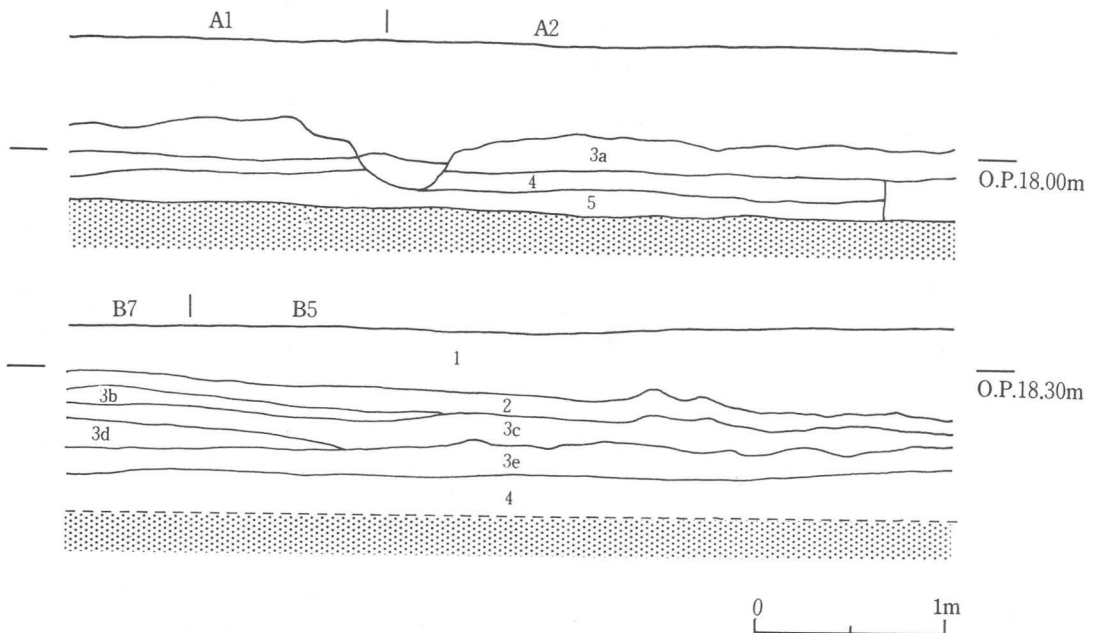
3. 調査の結果

遺構は第3a層、第4層の各上面で検出した。遺構の分布では調査地の北寄りと南寄り部分に集中し、中央部分ではほとんど検出されなかった。東側調査地ではピット4個、南側調査地ではピット27個、溝7条を検出した。

東側調査地

A1～3地区にかけて掘形の一辺が40～70cmの柱穴を検出した。中央部分を南北に旧木造校舎の基礎工事によって破壊されているため詳細は不明であるが、南北3間分以上の掘立柱建物の存在が推定できた。南北の柱間は1.8mであるが、これに対応する東西の柱穴が調査地区内で検出することが出来ず、建物の西端にあたる部分ではないかと考えられる。

柱穴の中でP4では柱材が残存し、P2では根石が認められた。また校舎の基礎工事による攪



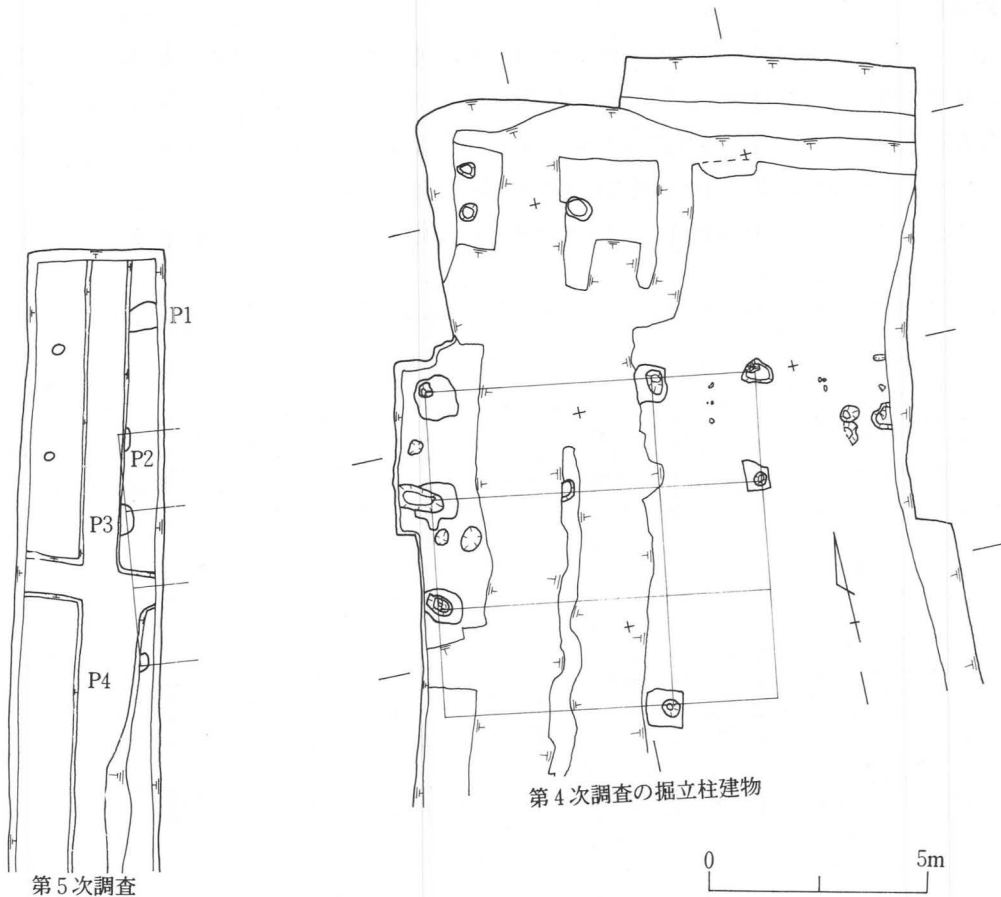
第4図 調査地層位図

乱土の中からもP4と同様の柱材が2本出土した。検出した柱穴の掘形の規模はP1が一辺66cm、深さ30cm、P2が一辺45cm、深さ36cm、P3が一辺70cm、深さ59cm、P4が一辺75cm、深さ45cmであった。P2の根石は掘形の北東隅に置かれている。根石は一辺15～20cmの三角形で、厚さは8cm、扁平な面を上になっている。P4の柱材は直径20cmで、掘形の中央に垂直に建てている。柱材の下には根石がなく、抜き取られた痕跡もないことから、当初より置いていないものと思われる。

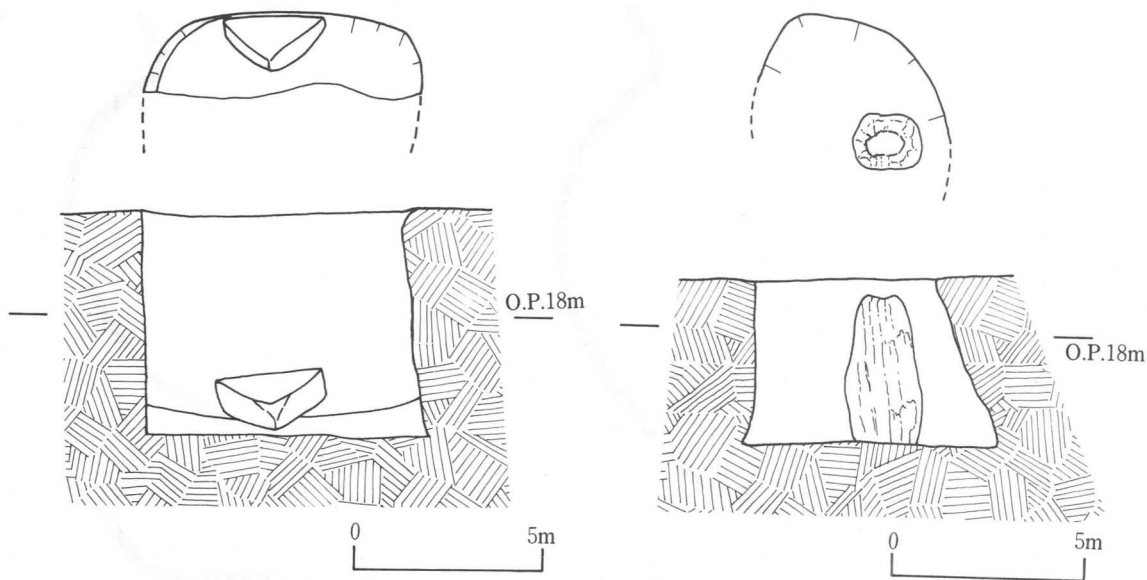
A2地点では第4層上面で比較的まとまった状態で土器が出土した。土器は高杯4、壺3、甑（韓式系土器）1で、周辺では炭化物が多く見られたが精査しても遺構状のものは見られず窪地に溜まったものと思われる。

南側調査地

ほぼ全域にわたって溝、柱穴を検出した。溝は東西方向、南北方向のものが7条検出された。幅20～140cm、深さ5～26cm。調査地の北寄りに東から西に向かう溝があり、これに注ぎ込むような形で南から北へ、北から南へと向かう溝があるが、切り合いも見られることからすべて同一の時期ではない。ピットは23個検出した。平面形は円、楕円形で、規模は直径13～

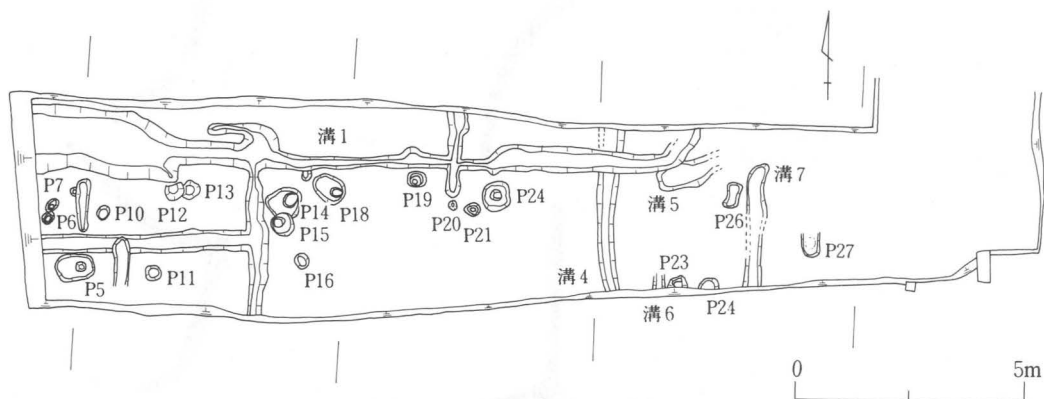


第5図 東側調査区検出遺構図



第6図 ピット2

第7図 ピット4



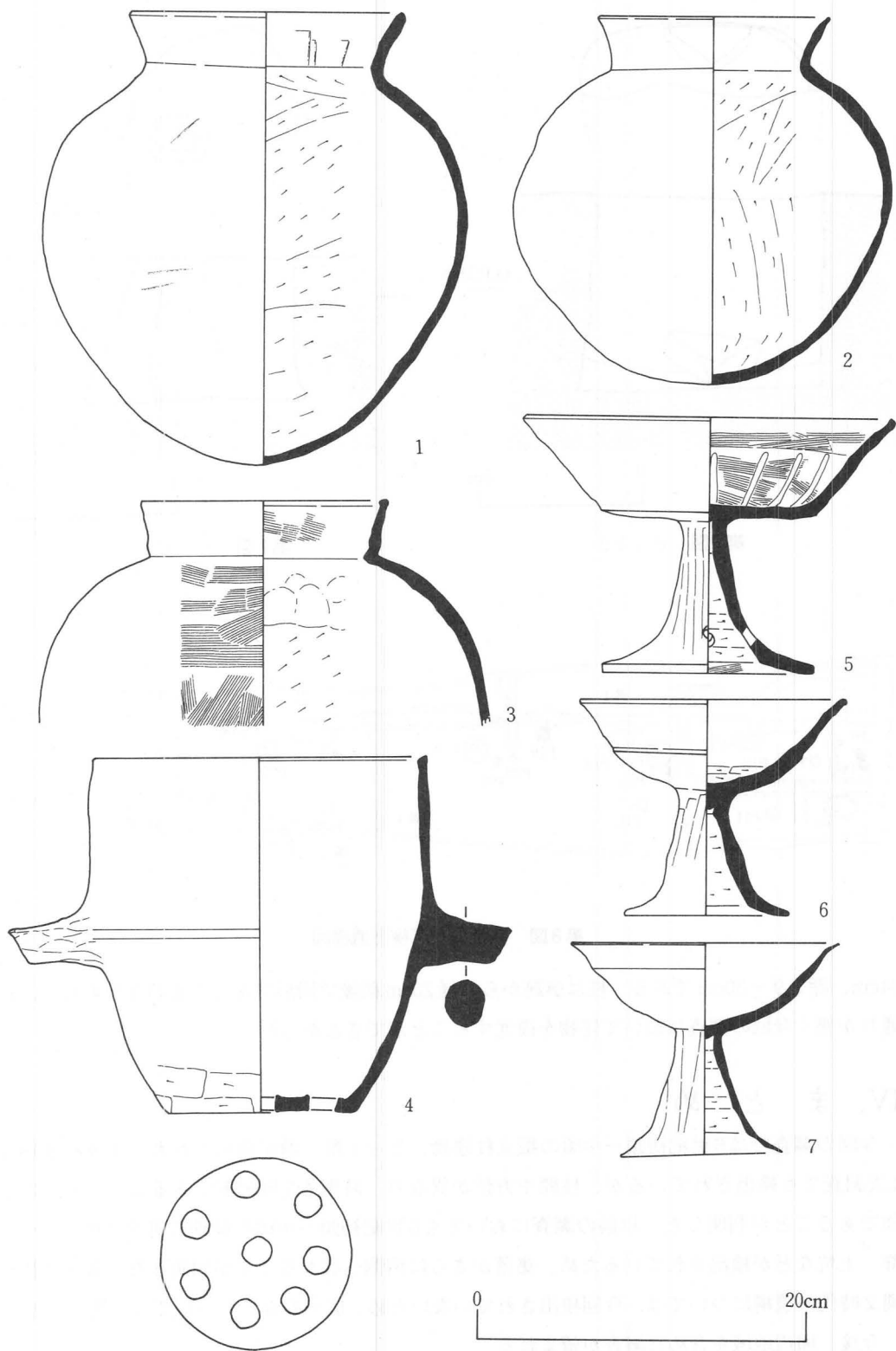
第8図 南側調査区検出遺構図

54cm、深さ9～30cmである。柱は痕跡から直径20cm前後で円形であったものと思われる。柱通りが悪く今回の調査において建物を復元することができなかった。

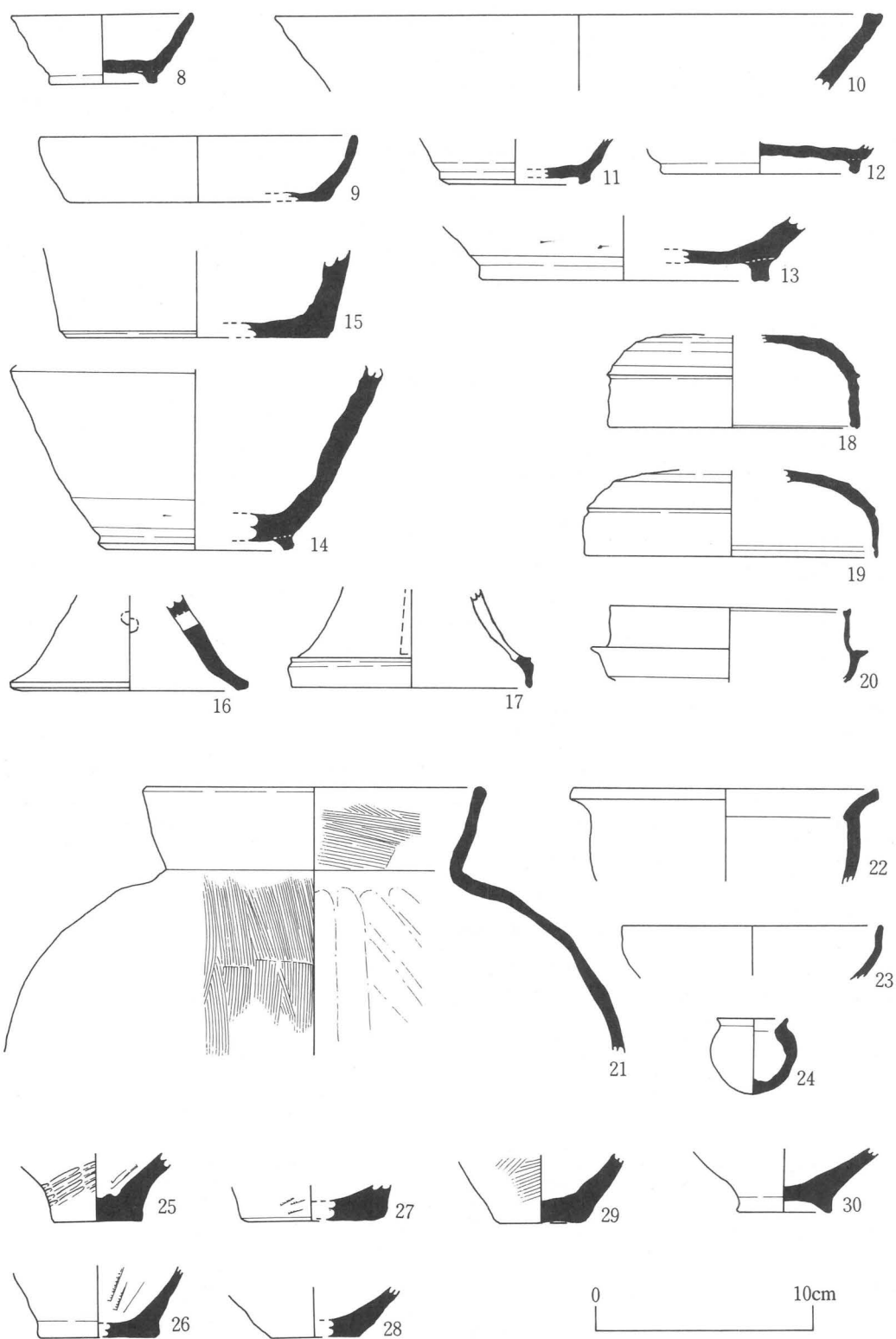
IV. ま と め

今回の調査では6世紀初頭～中頃の掘立柱建物、ピット群、溝が検出された。掘立柱建物は4次調査でも検出されているが、柱間や方位が異なり、時期も5世紀末であることから別の建物であることが判明した。以前の調査においても6世紀初頭～中頃の時期の井戸2基、ピット群、土坑などが検出されているため、集落がさらに南側へ広がることが判明した。弥生時代や縄文時代の遺構については、今回検出されていないため、広がりなどについては不明である。

今後、周辺地域を含めた調査が望まれる。



第9图 第4層上面土器溜実測図



第10图 包含層出土遺物実測図

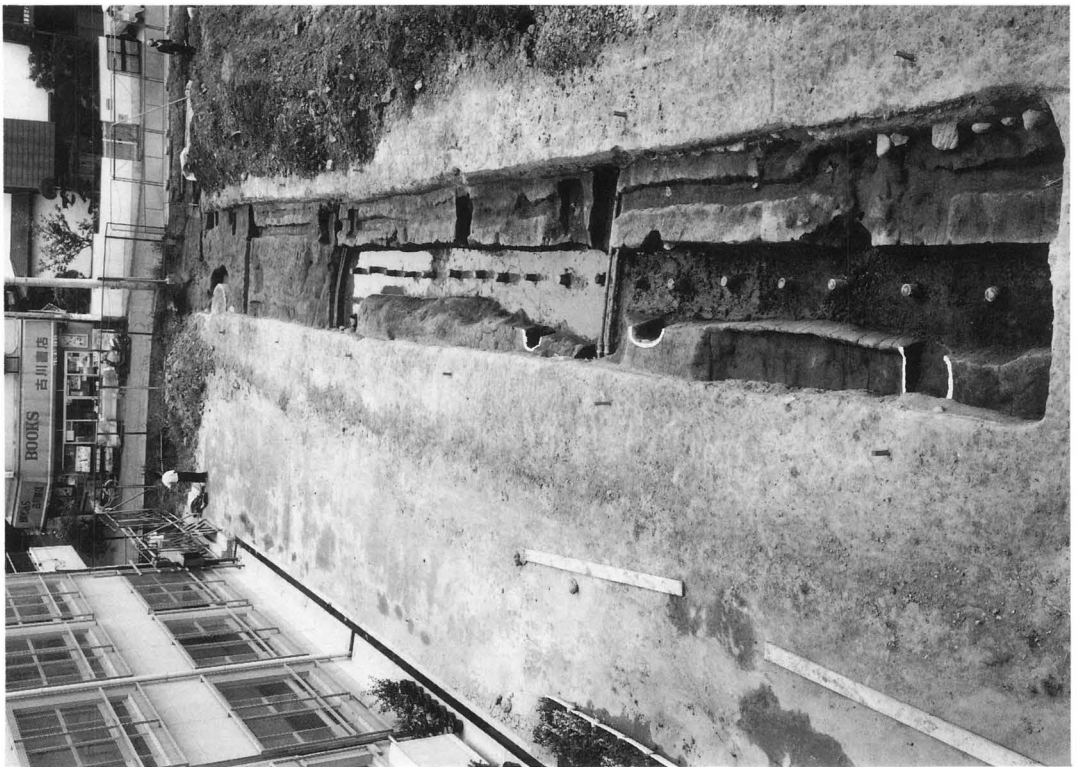
器形	番号	法 量	形態・技法の特徴	色 調	備 考
土師器	壺	1 口 16.4 高 27.7	○内面口縁部、外面体部にハケによる調整痕がみられるほかは、風化のため詳細不明	橙色 2.5YR7/8 浅黄橙色 10YR8/3 一部黒褐色 7.5YR3/1	○外面体部 黒斑
		2 口 14.0 高 22.5	○外面風化のため詳細不明	口縁部浅黄橙色 7.5YR8/4 体部橙色 5YR6/6 底部にぶい橙色 7.5YR6/4	○外面体部 黒斑
		3 口 15.0 高 (13.7)	○内面口縁部、外面体部にハケメ (8/cm) 調整が施される	にぶい褐色 7.5YR7/3, 5/4	
	高杯	4 口 20.4 高 21.8 底 11.6	○外面底部に板状工具による痕が見られる	灰白色 2.5Y8/2 淡赤橙色 2.5Y7/4	
		5 口 21.8 高 15.6 裾 12.8	○内面見込みにハケメ (7/cm) 調整のち放射線状の暗文が見られる ○外面杯部工具によるナデ調整、内面脚注部ヘラケズリ、裾部ハケメ調整が施される	杯部橙色 5YR7/6 淡赤褐色 2.5YR7/6 脚部褐色 2.5YR7/6 赤褐色 10YR6/8 浅黄褐色 10YR8/3	○外面口縁部 黒斑
		6 口 16.3 高 13.1 裾 10.0	○外面杯部ににぶい稜、脚注部に工具によるナデ調整が施される	杯部灰黄褐色 10YR5/2 褐色 7.5YR7/6 褐色 2.5YR6/6 脚部外面にぶい褐色 7.5YR5/3 にぶい褐色 7.5YR7/4 脚部内面褐灰色 7.5YR4/1	
		7 口 16.2 高 13.1 裾 9.6	○内外面杯部、風化のため詳細不明 ○内面脚注部ヘラケズリ調整を施す	にぶい褐色 2.5YR6/4 褐色 2.5YR7/8	
須恵器	杯身	8 口 8.2 高 3.2 底 5.0	○小型 ○内外面共に回転ナデ調整を施す	灰色 N5/	
		9 口 14.5 高 3.1 底 12.0	○内外面共に回転ナデ調整を施す	灰色 N6/	
	鉢	10 口 28.0 高 (3.5)	○内外面共に回転ナデ調整を施す	灰白色 N7/	
須恵器	杯身	11 底 7.0 高 (2.1)	○内外面共にやや風化している	灰白色 10Y7/1	
		12 底 8.8 高 (1.4)	○内外面共に回転ナデ調整を施す	灰白色 N7/	
	壺	13 底 13.4 高 (3.0)	○外面高台髷ヘラケズリ調整を施す	灰白色 N7/	
		14 底 9.0 高 (8.4)	○外面高台髷ヘラケズリ調整を施す	青灰色 10BG5/1 青灰色 5B6/1	
	鉢	15 底 12.0 高 (4.0)	○外面ヘラケズリ調整を施す	灰白色 N7/	
土師器	脚部	16 裾 11.0 高 (4.4)	○円形の透かし窓がみられる	にぶい褐色 5YR7/4	
		17 裾 11.0 高 (4.5)	○長方形の透かし窓がみられる	灰白色 N7/	
	杯蓋	18 口 11.4 高 (4.3)	○口縁部と天井部境に鋭い稜線がみられる	灰白色 N6/	
		19 口 13.4 高 (4.0)	○口縁部と天井部境にやや鈍い稜線、口縁端部に沈線状の段がみられる	灰白色 N7/	
	杯身	20 口 11.1 高 (3.4)	○たちあがりが高く、口縁端部にわずかに凹面をなして内傾する	灰白色 N5/	
土師器	壺	21 口 15.4 高 (12.2)	○内面口縁部、外面体部にハケメ (8/cm) 調整を施す	にぶい黄褐色 10YR7/3	
		22 口 16.0 高 (4.4)	○内外面共に風化のため詳細不明	にぶい褐色 7.5YR6/4	
	杯	23 口 12.0 高 (2.4)	○内外面共に風化のため詳細不明	褐色 5YR7/6	
	壺	24 口 3.2 高 (3.5)	○ミニチュア	にぶい黄褐色 10YR7/4	
弥生土器	底部	25 底 4.0 高 (3.1)	○外面タタキ、内面ハケメ調整を施す	褐色 7.5YR4/3 黒褐色 7.5YR3/1	
		26 底 5.2 高 (3.2)	○外面ナデ、内面ハケメ調整 (5/cm) を施す	暗褐色 5YR3/6 褐色 5YR4/1	
		27 底 6.8 高 (1.7)	○外面体部に工具痕がみられるほかは、風化のため詳細不明	明黄褐色 10YR6/6	
		28 底 4.0 高 (2.2)	○内外面共に風化のため詳細不明	褐色 5YR6/6 褐色 2.5YR7/6	
		29 底 3.8 高 (3.2)	○内外面共に風化のため詳細不明	浅黄褐色 10YR8/3 灰白色 5Y8/1	
		30 底 4.2 高 (3.0)	○外面ナデ調整、内面風化のため詳細不明	灰白色 10YR8/ 浅黄褐色 7.5YR8/4	

第1表 出土遺物観察表

図 版



1. 調査前の状況



2. 東側調査区全景 掘立柱建物



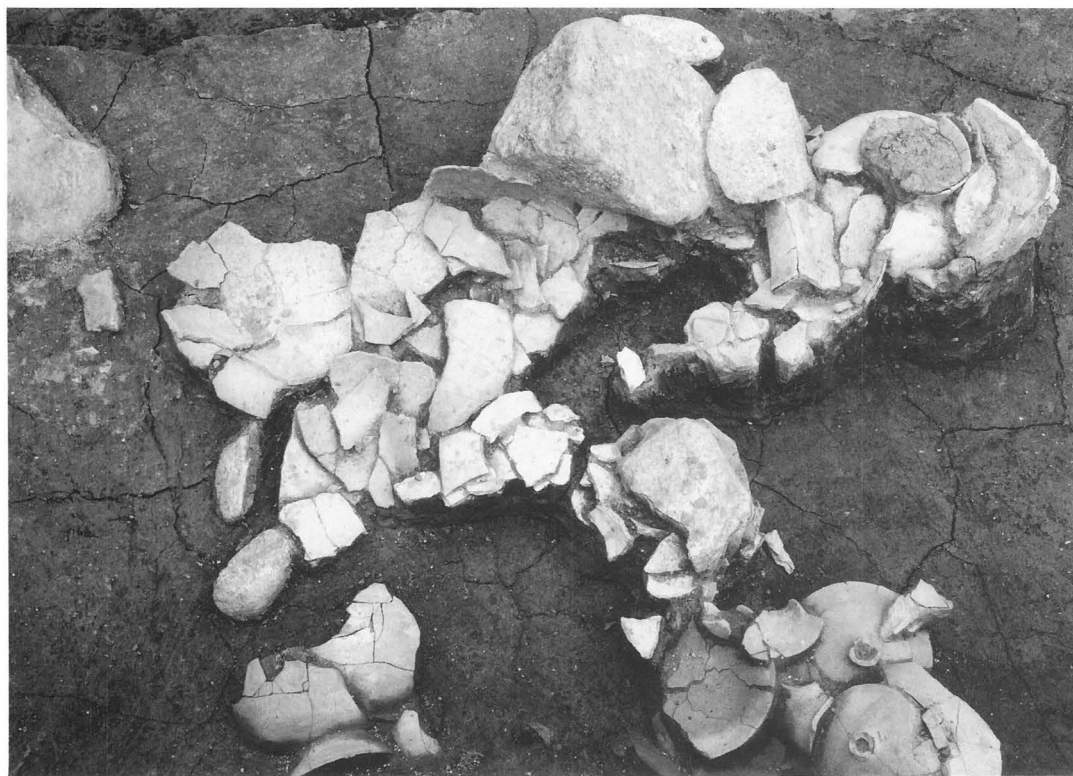
1. ピット2と根石



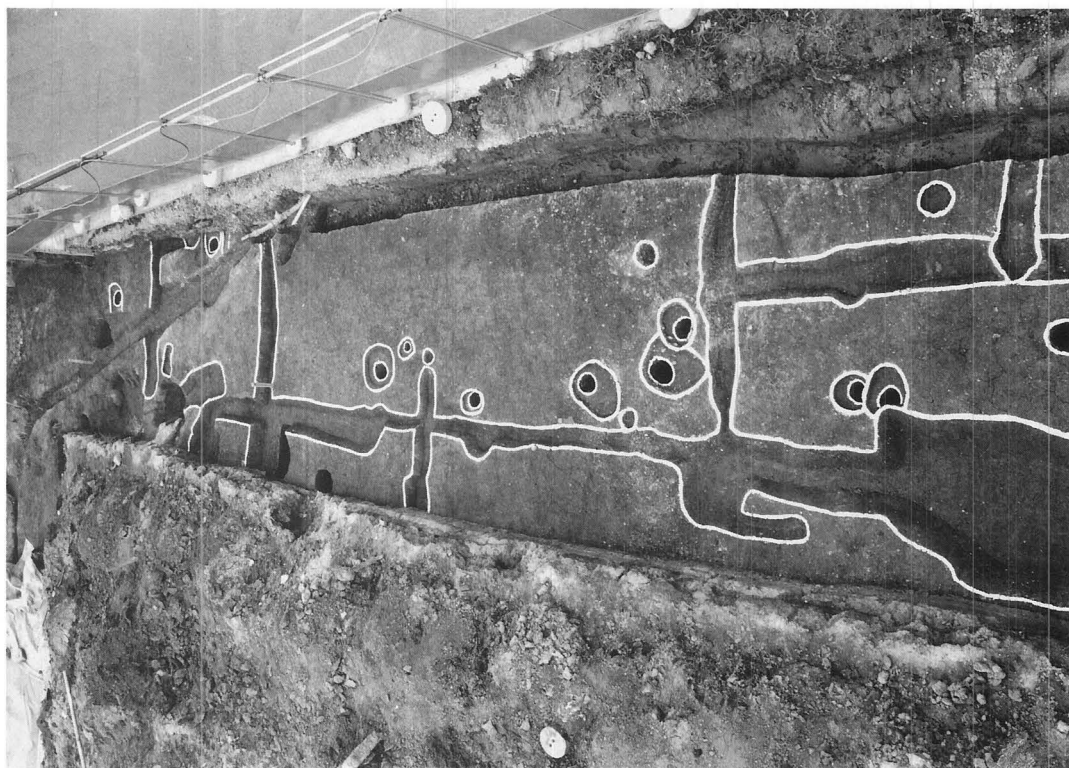
2. ピット4と柱根



1. 東側調査区 第4層上面遺物出土状況



2. 東側調査区 第4層上面遺物出土状況



1. 南側調査区全景



2. ピット5



1. ピット11



2. ピット15



1. ピット23



2. ピット27



1



2



3



4



4'

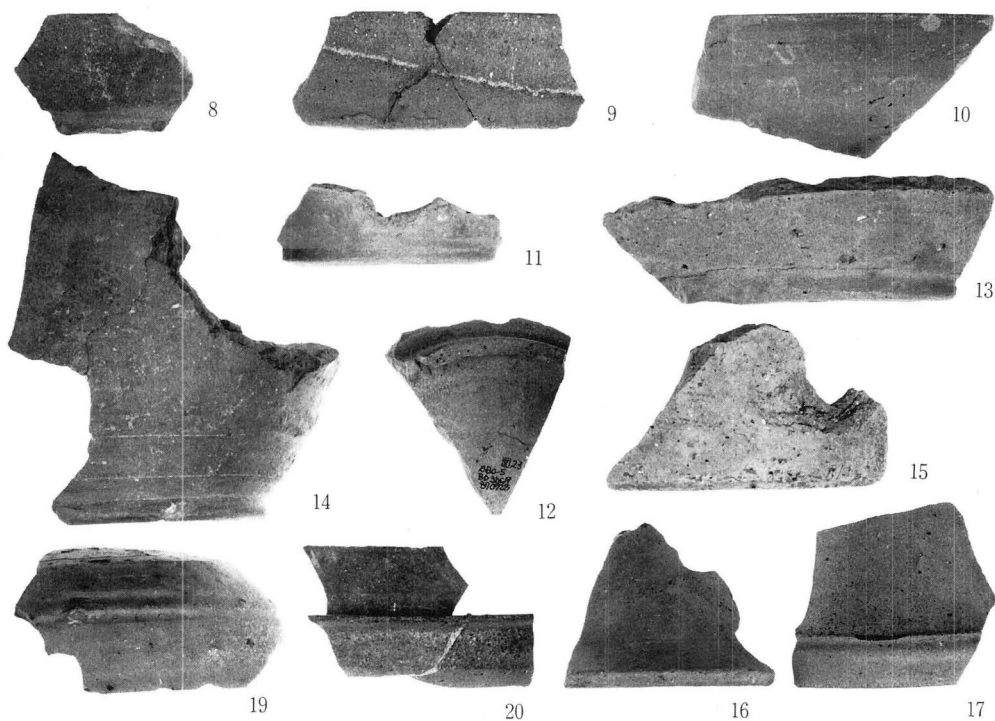


5

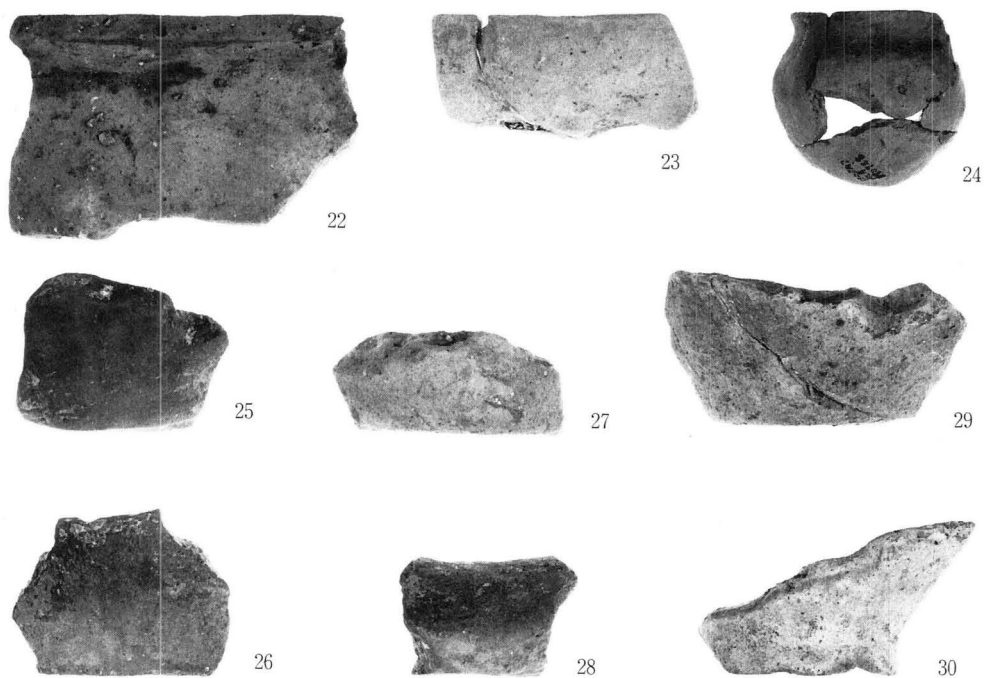


6

東側調査区A2地区第4層上面出土遺物



1. 南側調査区B1～6地区第3層出土遺物
須恵器杯身、杯蓋、鉢、壺、土師器高杯脚部



2. 南側調査区B3、4地区第3層、東側調査区A2、7地区第3、4層出土遺物
土師器鉢、杯、ミニチュア壺、弥生土器底部

若江遺跡第42次発掘調査概要

本文目次

1 若江遺跡の概要	1
2 若江遺跡の位置と環境	2
3 第42次発掘調査の概要	4
層序	4
遺構	5
出土遺物	8
まとめ	14

挿図目次

第1図 若江遺跡周辺遺跡分布図 (1/25,000)	3
第2図 若江遺跡第42次調査地の地層断面図 (1/80)	4
第3図 調査地位置図 (右上) 及び第3 b層下面遺構平面図 (1/100)	6
第4図 第4 c層下面の遺構平面実測図 (1/100)	7
第5図 溝2出土遺物実測図1 (1/4)	9
第6図 溝2出土遺物実測図2 (1/4)	10
第7図 溝7・11出土遺物実測図 (1/4)	11
第8図 包含層出土遺物実測図 (1/4)	12
第9図 包含層出土遺物実測図 (1/4)	13

図 版 目 次

- 図版 1 若江遺跡第 42 次調査 1 発掘調査着手直後の作業風景
2 調査地全景
- 図版 2 若江遺跡第 42 次調査 1 耕作土直下の全景
2 溝 1 全景 (東より)
- 図版 3 若江遺跡第 42 次調査 1 溝 1 池状部分 (西より)
2 溝 1 全景 (北より)
- 図版 4 若江遺跡第 42 次調査 1 溝 2・溝 3 (北より)
2 溝 2・溝 3・溝 7～11
- 図版 5 若江遺跡第 42 次調査 1 第 4 c 層下面の遺構全景 (東より)
2 畦畔・溝 5 (西より)
- 図版 6 若江遺跡第 42 次調査 1 井戸 1 2 井戸 2
- 図版 7 若江遺跡第 42 次調査 1 溝 7 内上部の足釜出土状況
2 井戸 1 内上部の瓦器椀出土状況
- 図版 8 若江遺跡第 42 次調査 1 包含層内の羽釜出土状況
2 溝 1 池状部分内の俵出土状況
- 図版 9 若江遺跡第 42 次調査 土師器小皿・瓦器小皿
- 図版 10 若江遺跡第 42 次調査 瓦器椀
- 図版 11 若江遺跡第 42 次調査 瓦器椀・皿・羽釜・足釜
- 図版 12 若江遺跡第 42 次調査 土師器皿・ミニチュア羽釜・天目茶碗・弥生土器甕
- 図版 13 若江遺跡第 42 次調査 1 羽釜 2 羽釜
- 図版 14 若江遺跡第 42 次調査 1 東播系甕 2 こね鉢・搦鉢・備前焼甕

若江遺跡第42次発掘調査概要

I. 若江遺跡の概要

東大阪市若江北町～南町一帯は、民家の建替えの際や耕作に伴って土器や瓦が出土することが以前より知られていた。また、若江公民館建設の際には羽釜杵を重ねた井戸跡が発見されたことから、中世の集落遺構の存在が知られるようになった。この中世遺構は室町時代の文献に度々登場する若江城に関連するとみられ、地元に残る字切図に「字城」と記された現在の若江幼稚園～若江小学校付近に分布すると考えられた。また、若江小学校の南側に「字寺」と描かれた地域が存在し、付近で出土する奈良時代以後の瓦との関連も考えられていた。このため、昭和47年には、若江小学校の校舎建替えに伴って第1次の発掘調査が行われ、続いて南側「字寺」相当の地点でも確認調査が実施された。これらの調査では、目的とする城跡や寺跡の遺構は検出されなかったが、曲物杵井戸等の遺構と多数の土器・瓦が出土し、近畿地方で有数の中世遺跡であることが知られるようになった。若江城の遺構は、その後府道拡幅工事や下水道建設等に伴う発掘調査によって、堀の一部とみられる大溝や倒壊した壁下地の一部等が検出されたほか、昭和63年には若江小学校体育館建替えに伴う第38次調査で幅約17m、深さ約3.2mの大溝状を呈する堀跡が東西に約30m発掘された。この堀は石垣を伴っていなかったが、その後延長部とみられる箇所では石垣の一部とその下に敷設した胴木が発見され、つくられた当初は石垣を伴うものであったと考えられるようになった。

現在考えられている若江城の中心は、現在の若江幼稚園付近にあり、城を囲む堀跡は、南が発掘により府道南側に沿って東西に延びること、東は美女堂川と呼ばれる南東から北西にのびる小河川付近、西は第42次調査地の東付近、北は若江北町2丁目と3丁目の境付近ではないかと推定されている。また、若江城の築城以前には一帯に中世集落が存在し、その周辺には湿田が広がっていたとみられること、城はこれらの集落のかなりの範囲を取り潰して築城されたこと、織田信長の石山本願時攻略後に廃城となった後は、城の痕跡がほとんど残らないまでに整地されたこと等も明らかになっている。若江の現集落もまた、廃城後の近世集落を基本として踏襲することが度重なる発掘調査によって確認されている。また、近世には大阪と奈良を結ぶ十三街道が若江遺跡南部を東西に横切り、遺跡中央部には南北に縦断して河内街道が通じている。この二つの街道が交わる若江は、中近世の河内においても各地と人と物の流通拠点としても重要な位置を占めていたことが知られるのである。

ところで、若江遺跡では中世の遺物に混じって古代の若江郡衙の存在を示す墨書土器が遺跡の北端部で出土し、前記したように奈良時代以後の瓦も遺跡南部を中心に出土する。しかしながら、これらを使用したとみられる古代の遺構は中世以後の人間活動に伴って地表が整地されたことにより、その痕跡は発見されていない。

このほか、若江遺跡の下層からは古墳時代以前の遺物も発掘されている。最も古い遺物として

は弥生時代前期の土器が隣接する山賀遺跡との関連が考えられる遺跡南部より少数出土する。

また、弥生中期の土器も遺跡南部で出土しており、今回の調査でも第Ⅳ様式の完形の甕が地表下約1mより1点出土した。弥生後期のものとしては若江小学校南側で小区画水田が検出され、その上面を覆う砂層と同時期に埋積された自然流路より庄内式～布留式土器の出土が知られている。

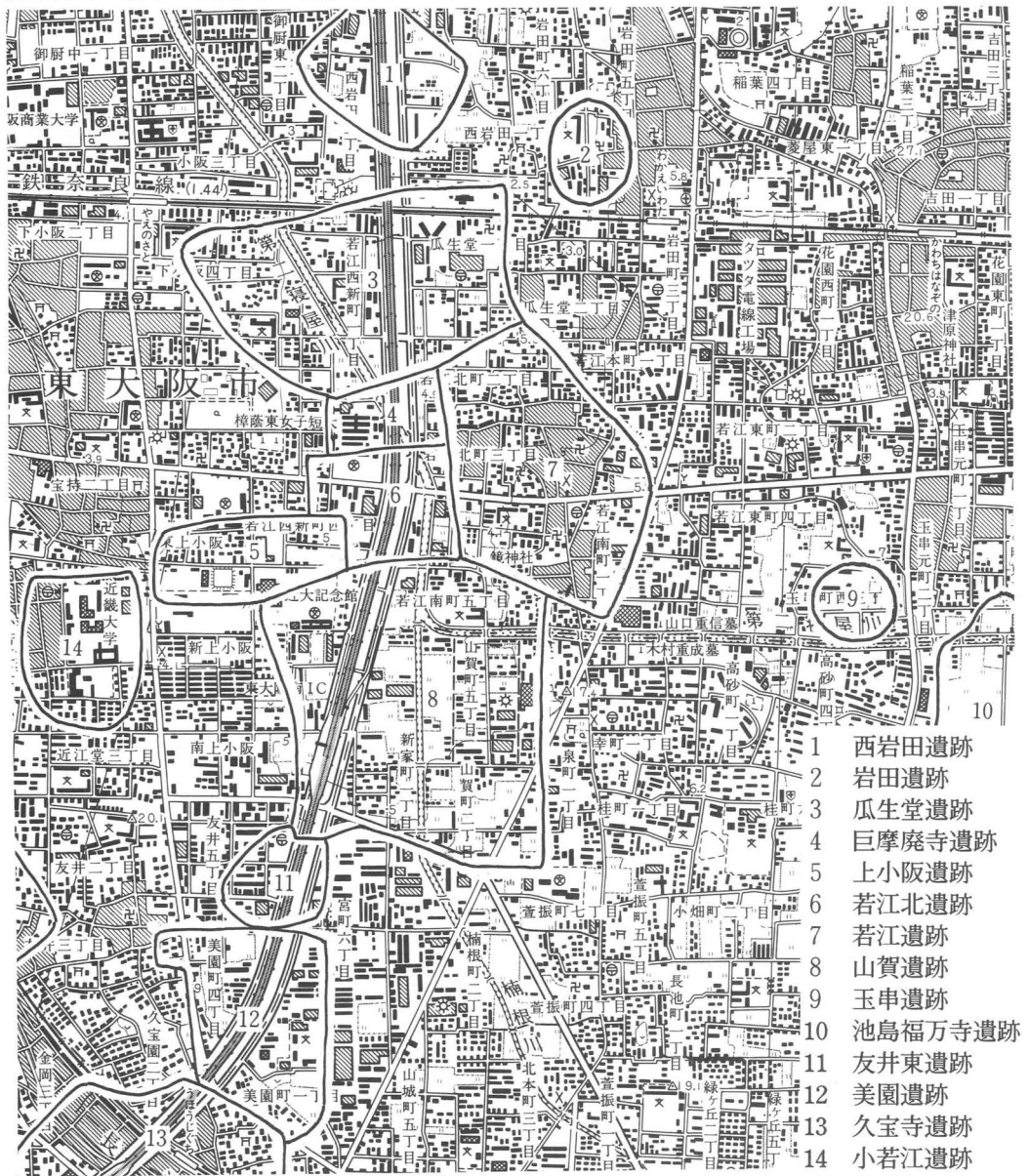
Ⅱ．若江遺跡の位置と環境

若江遺跡は旧大和川の堆積によって形成された河内平野の中央部、近鉄奈良線若江岩田駅の南約1kmを中心とする標高T.P 5m前後の一带に位置する。付近では、府道大阪中央環状線沿いに弥生時代の遺跡が南北に連なって発見されているが、これらの遺跡は弥生時代に現在の河内平野北半部に存在した河内湖南岸部の低湿地に形成されたものと考えられている。これらの中で最も古い遺物が出土するのは弥生時代前期中段階に属する若江北遺跡であり、すこし遅れてその南に山賀遺跡が出現する。その後、前期末には北側の瓜生堂遺跡に集落が移動し、弥生時代中期後半に至るまで方形周溝墓群と共に集落が連綿と続いたことが発掘調査で確かめられている。弥生中期末には瓜生堂遺跡の集落は分解し、後期初めには南の巨摩廃寺遺跡・若江北遺跡・上小阪遺跡等に縮小移動したと思われる。発掘調査で検出される後期の遺構は水田跡が多く、集落の詳細は不明な部分が多いが、遺物量などからみて、おそらく小規模な集落が散村状に分布していたのではないかと推定される。ところで、これらの弥生時代遺跡が分布する一带は、旧大和川が現在の長瀬川と玉串川とを主要な流れとして河道が固定されるまでに存在した多数の自然流路による堆積作用によって微地形が変遷し、現地地表下3～4mに自然堤防を発達させていったと考えられている。瓜生堂遺跡及び周辺の遺跡では、この自然堤防上に方形周溝墓や集落遺構が形成され、その背後の後背湿地はおそらく水田として利用されたと思われる。その後、弥生後期後半～古墳前期に堆積した厚い砂層によって多数の自然流路内とその周辺は埋積されたことが知られている。いっぽう、後背湿地の排水対策としては、人工的な排水路が一带で多数掘削されたとみられ、また5世紀頃には河内平野北部の排水不良を改善するため大規模な水路が掘削された記事が日本書紀にみられるように大規模な土木工事が行われたこともあって、河内平野北部諸地域において水浸かりとなる頻度は次第に減少したと思われる。低地である若江遺跡において奈良時代の寺院や郡衙の存在が推定されるのも、付近一带の排水対策により環境が安定したことの証左とみられ、事実若江遺跡で発掘される多数の中世の溝はその多くが排水路として機能していたものと思われる。

さらに大規模な排水路としては、旧大和川本流間の後背湿地において掘削された人工の河川が大和川付替え前の川筋を描いた絵図にも描かれている。昭和40年の第二寝屋川掘削まで若江遺跡西端部を南東から北西に向かって流れていた楠根川はその一つで、八尾市域より突如として出現したのち長瀬川と玉串川の間の後背湿地の排水を集めて河内湖の名残である新開池にむかって流れる人工河川である。この人工河川は、前記した若江遺跡内に多数みられる排水路

と付近一帯の排水を集める排水河川であると共に水田灌漑のための用水河川でもあった。これと同様に、生駒山麓と玉串川の間の後背湿地を北流する恩智川も、絵図によれば大和川に取り付かない人工の河川であり、山麓平野部の水田経営に重要な役割を果たしたものと思われる。

このように河内平野の開発は弥生時代以後一貫して排水対策の歴史であったと考えられるが、その最後で最大の土木工事が18世紀初めに行われた大和川の付替えであった。この工事によって、大和川は河内平野南部から直接西に向い大阪湾に至る流路に付け替えられた結果、河内平野北部の地下水位は相対的に低下し、水田内で乾燥を好む綿作が行えるようになるなど後背湿地の排水は飛躍的に改善されたことが広く知られている。



第1図 若江遺跡周辺遺跡分布図 (1/25,000)

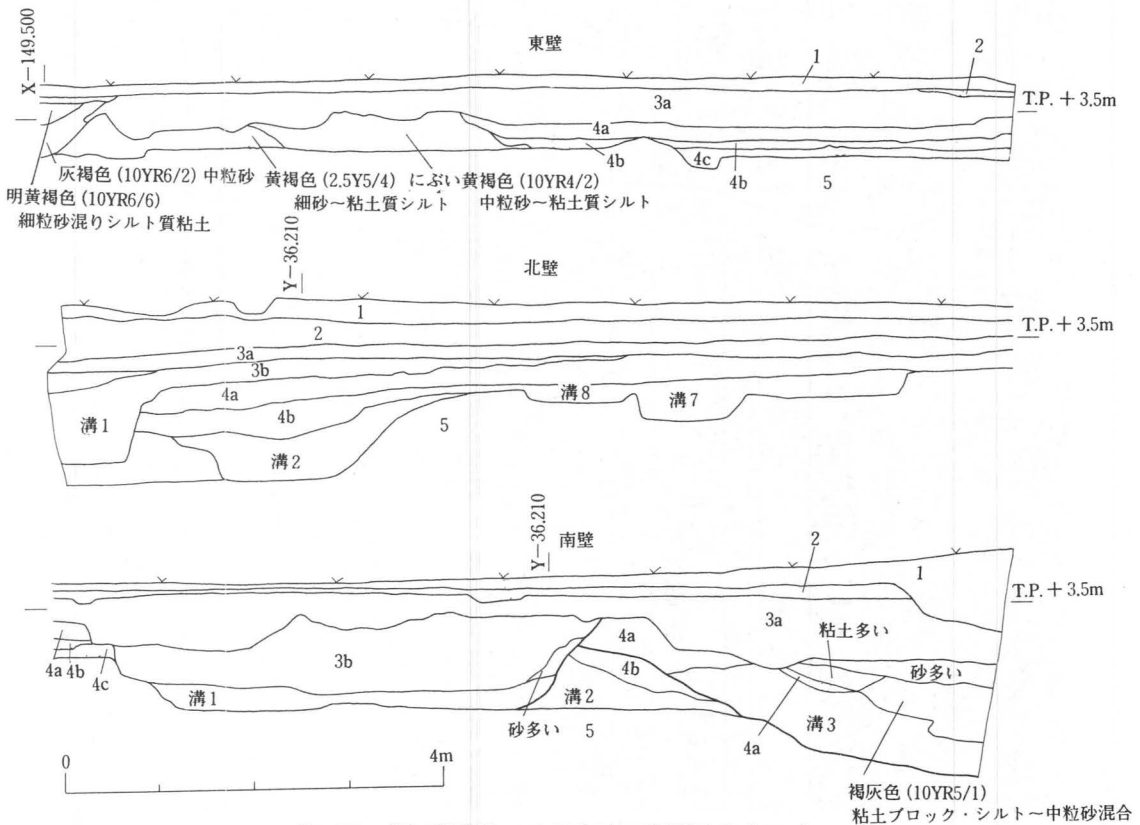
Ⅲ. 第42次発掘調査の概要

若江遺跡第42次発掘調査は、若江北町3丁目52-1番地においてビル建設が計画されたのに伴って、約280m²の範囲を対象として平成元年2月6日～同年3月16日に実施した。調査対象地は、南側が府道拡幅に伴って昭和54年に発掘調査が実施された第17次調査地に隣接し、東側は事務所建設に伴う第41次調査地に隣接している。

層序

旧畑地表より地表下約2mまでに次のような地層の重なりが認められた。

- 第1層 旧耕作土で、厚さ約15cm。
- 第2層 灰褐色(5YR6/2)細粒砂混じり粘土質シルト。厚さ20～50cm。
- 第3a層 黄褐色(2.5YR7/8)粘土ブロック混じり細粒砂～シルト。厚さ約40cm。
- 第3b層 灰黄色(2.5Y6/2)シルト～粘土質シルト。シルト薄層を2～3枚挟む。厚さ約20cmで、溝1を埋積する。近世の遺物を含む。
- 第4a層 黄灰色(2.5Y6/1)粘土ブロック混じりシルト層。厚さ約40cmで、溝3を埋積する。
- 第4b層 にぶい黄褐色(10YR4/3)中粒砂・細粒砂・シルト・粘土の混合層。15世紀頃の整地層。厚さ約50cm。
- 第4c層 黄灰色(2.5Y5/1)シルト～粘土質シルト。厚さ約20cmで、溝2・溝7・8・11・



第2図 若江遺跡第42次調査地の地層断面 (1/80)

12を埋積。15世紀を下限とする遺物が出土。

第5層 明黄褐色(2.5Y7/6)細粒砂～シルト。部分的に灰黄色(2.5Y7/2)を呈する。厚さ約50cm。若江城築城以前の中世遺構面。

以下は、下層確認のため調査地中央部で実施したトレンチ調査により認められたものである。

第6層 灰色(10Y4/2)シルト質粘土。厚さ約10cm。

第7層 緑灰色(7.5GY6/1)シルト質粘土。シルト薄層を3枚挟む。厚さ約40cm。

第8層 灰白色(7.5Y8/2)中～細粒砂。

第9層 灰色(10Y4/1)シルト質粘土。厚さ約10cm。

第10層 オリーブ灰色(5GY5/1)シルト質粘土。厚さ50cm以上。弥生時代中期(第Ⅳ様式)の甕1点が出土。

遺構

第3b層下面において南北の溝1条が検出され、第4c層下面において南北の溝7条・東西の溝6条・井戸2基・ピット11個・東西畦畔1条などの遺構が検出された。

溝1 第3b層によって溝内が埋積された南北溝。幅約2m・深さ約0.8mを測り、溝底のレベル値より北に流れていたものとみられる。この溝は調査地南部において幅約6mに広がり、平面の形状が方形の小溜池状を呈するが、堆積土に明らかな違いは認められない。この部分の深さは約1mで、溝状部分と底のレベル値に大差ないため、同時に機能していたとすればその用途は不明である。南に隣接する第17次調査で土坑19とされた遺構が位置と形状より、この方形池状部分から続くものである可能性がある。池状部分の下面より18世紀以後の染付が出土したことから、近世に掘削されたものとみられる。

溝2 第4c層によって埋積された南北溝。検出状態での幅約4m・深さ約1mを測るが、西側の肩部を上層から掘削された溝1によって切られているため、本来の幅はもうすこし大きかったと思われる。方向は溝1と同様であり、流れの方向も溝底のレベル値より北に向かうものとみられる。溝内堆積土より15世紀を下限とする土師器小皿・羽釜等多数の遺物が出土した。

溝3 溝2を切って西側に平行するように掘削された南北溝。溝の西肩が調査地の外となるため幅は不明であるが、東肩の立ち上がりからは幅5m以上・深さ1.8m以上の大溝であったと推定できる。溝内の堆積土は3層に区分され、このうち下層は滞水状態での泥の堆積物とみられ、中層と上層は埋土とみられる。3層からの出土遺物はいずれも少数である。切り合い関係から、溝3は溝2が埋もれた後に掘削され、堆積層の状態よりみて滞水状態で比較的長い期間存続していたものと思われる。

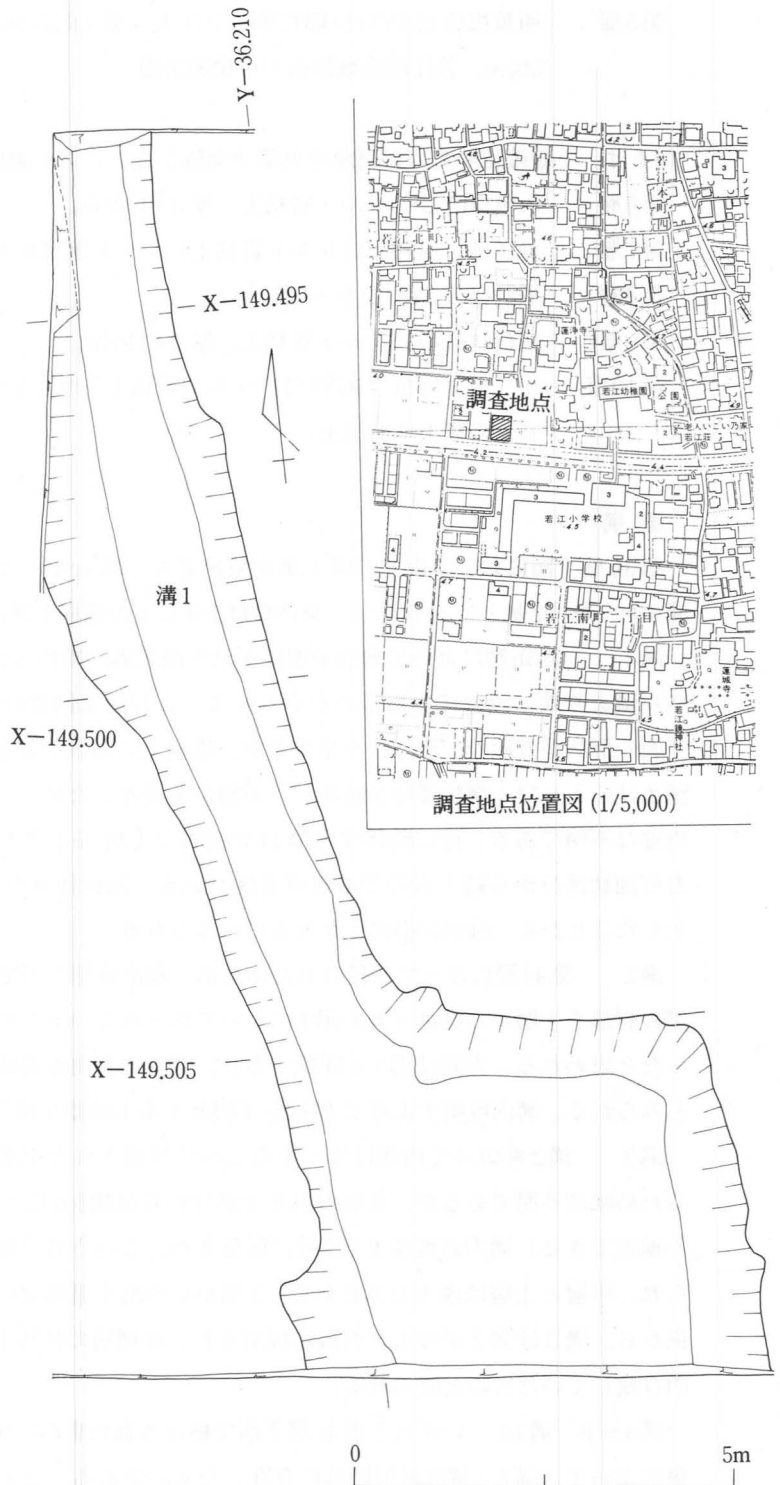
溝4～6・溝10 いずれも第4c層下面で検出された東西に平行する小溝である。切り合い関係によって、溝2・溝3掘削以前に存在したものであることが知られる。このうち残りのよい溝10と溝12は約6mの間隔で平行すること、溝12は後記する畦畔に沿って掘られていること

などから、若江城築城以前の
中世の条里型水田地割に伴う
ものと考えられる。

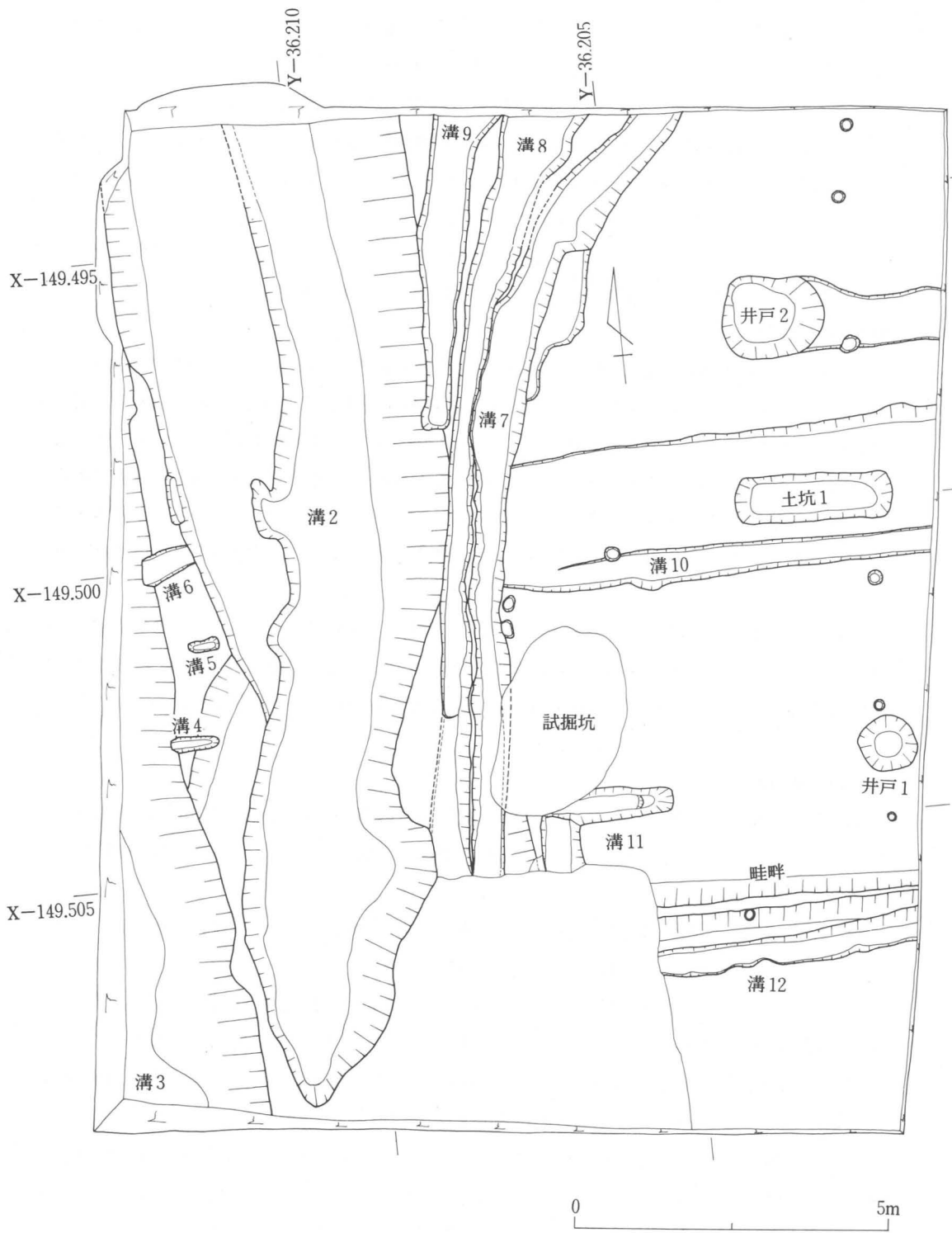
溝7～9 第4c層下面で検
出された平行する南北溝3条
である。これらの溝は幅0.5～
1m・深さ約0.5mを測り、南
から北に向かうにつれて向き
をしないで東に振る。溝7は
前記した東西方向の溝10とは
直交せず、切り合い関係をもつ
とみられるが、溝10の残存状
態がよくないため確認はでき
なかった。また、溝9と溝8
は途中で溝2によって切られ
ている。溝7～9はいずれも溝
内に黒色粘土が充填されてい
る点において、本調査地で検
出された他の溝とは違う特徴
をもつものである。溝7内よ
り12世紀前半の瓦器碗・足釜
等が出土した。

溝11 溝7の東で検出され
た小溝。幅0.6m・深さ0.3m
の南北溝から幅0.5m・深さ
0.4mの溝が東に折れ曲がり、
逆L字形の平面形となる。溝
内は溝7～9と同じく黒色粘土
が充填されていることから、
同時期の溝と思われる。

井戸1 第4c層下面で検出
された円形井戸。直径0.9m・
深さ1mを測る。井戸枠は遺存
していなかったが、掘方の形
状よりみて曲物枠を使用した



第3図 第3b層下面遺構平面図 (1/100)



第4図 第4c層下面の遺構平面図 (1/100)

可能性が大きいと思われる。井戸内の埋土より12世紀初めの瓦器碗が出土した。この瓦器碗は井戸の中程で出土したが、出土面に焼土・炭化物が多量に含まれていたことから、井戸を埋め戻す際の祭祀に伴って投入されたものかと考えられる。

井戸2 井戸1と同様、第4c層下面で検出された円形井戸。掘方上面は1.5×1.3mの楕円形を呈し、深さ0.9mを測る。井戸底に直径0.5mの曲物杵が腐朽しつつ遺存していた。この井戸の東側には、幅0.8m・深さ0.1mの溝が東にのびているが、これは汲み上げた水を流すための溝とみられる。埋土より15世紀代の遺物が出土した。

土坑1 長さ2.4m・幅0.8m・深さ0.35mを測る長方形の土坑。埋土の上部に炭化物と灰の薄層を数枚挟んでいた。出土遺物に土坑の性格や埋もれた時期を決定できるものはないが、溝9埋土の上より掘られている。

ピット 調査地東部の第4c層下面において、柱穴とみられるピットが真南北に6個並んで検出された。これらは柱通りを有することから、掘立柱の建物跡の可能性が考えられる。建物跡であれば、建物プランは調査地東側に続くものであるが、柱間の間隔及び柱穴の直径が一定しないため、建物かどうか不明であり、塀の跡である可能性も考えられる。掘立柱列の時期は、柱穴の一つが井戸2に接続する溝によって切られていること、この柱列と井戸1が重なり合うことなどから、おそらく井戸1よりは新しく、井戸2よりは古い12世紀前半～15世紀と推定される。

畦畔 第5層と同じ明黄褐色細粒砂～シルトを使用して幅0.8m・高さ0.15mで東西に細長く盛り上げた畦畔で、東側の第41次調査地でも検出されている。南側に沿って掘られた溝12と同時期のものであろう。畦畔上に直径15cm・深さ12cmを測るピット1個が認められている。

出土遺物

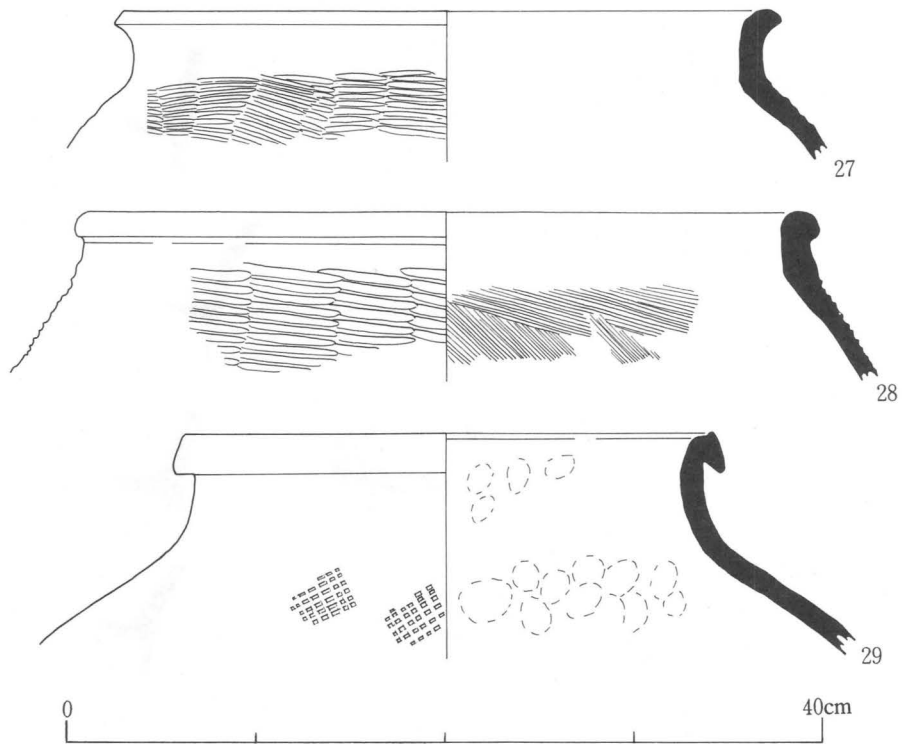
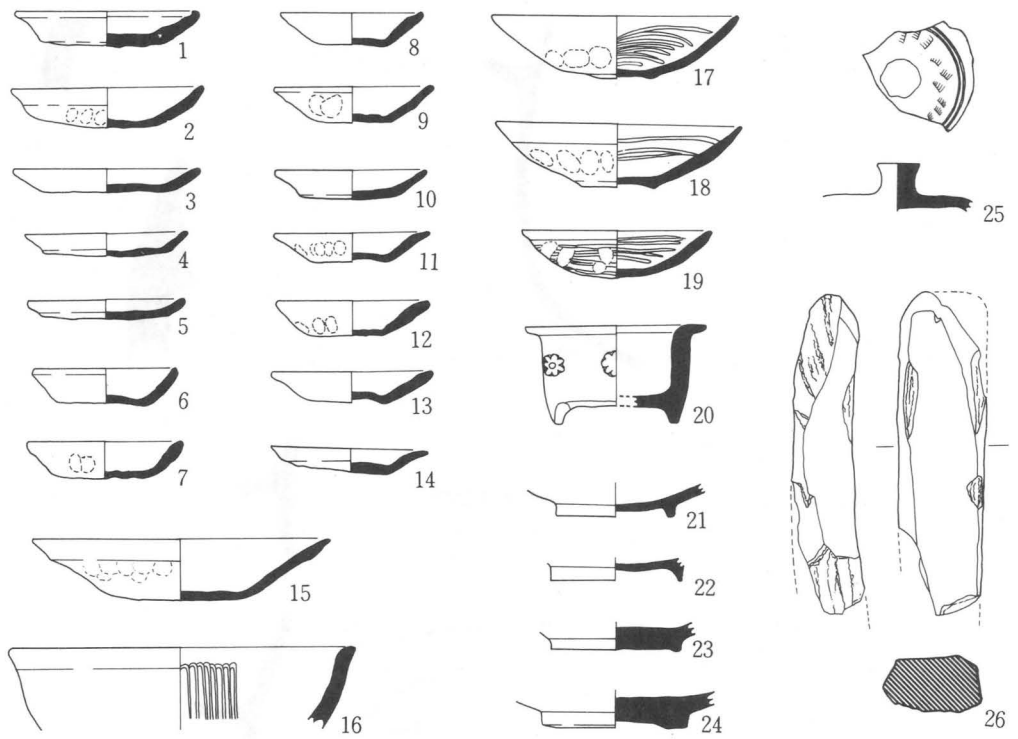
出土遺物は若江城が築城されて以後（15世紀以後）の遺物、若江城築城以前の中世遺物、中世の遺物のなかに二次的に含まれる古代以前の遺物、下層より出土した弥生中期の遺物に分けることができる。

溝2出土遺物 若江城築城以後に掘削されたとみられる溝2内からは、築城以前の遺物に混って、15世紀代の遺物が多数出土した。

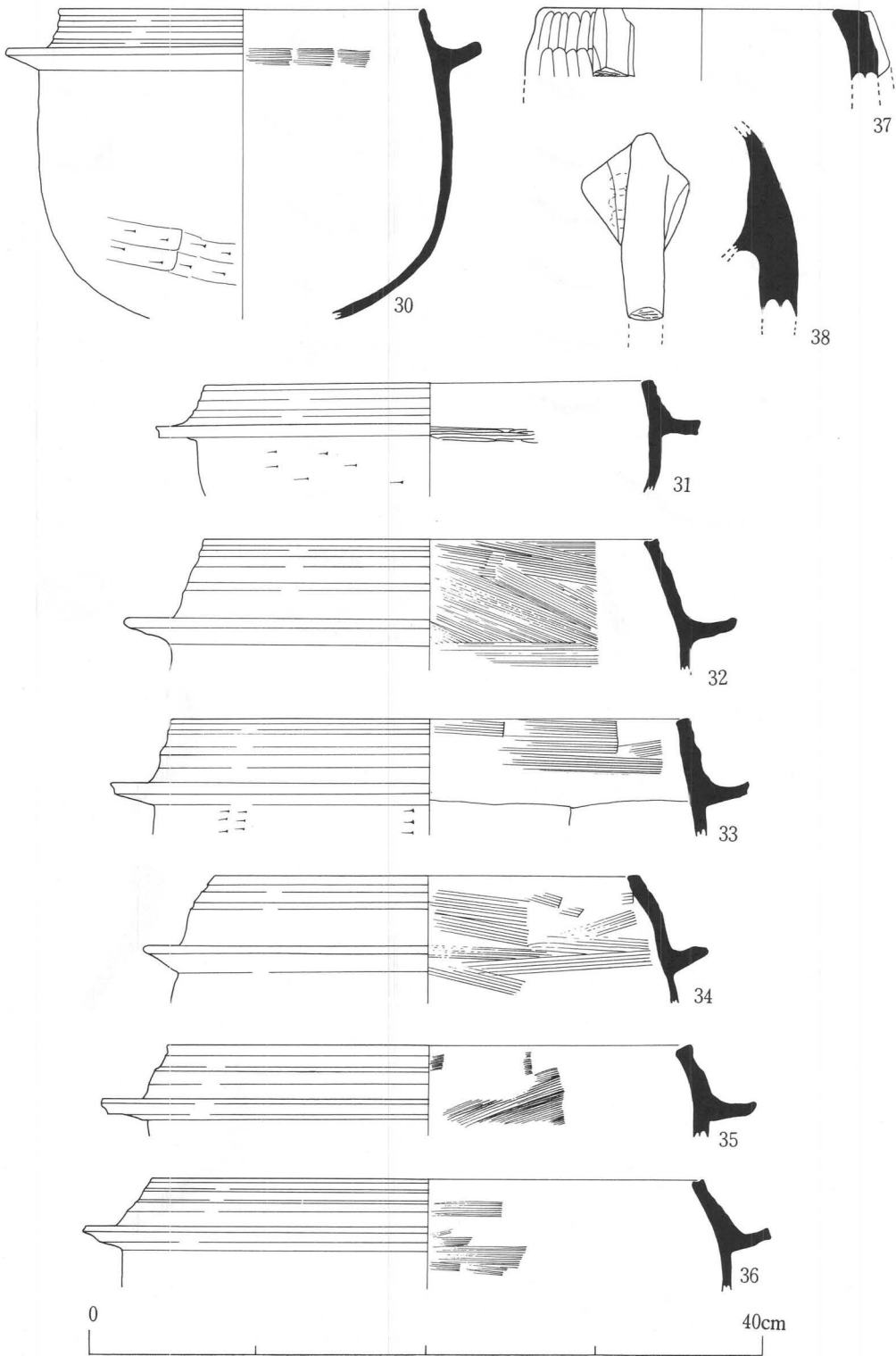
1～9・11～15は土師器皿で、15以外はいずれも小皿である。8～14は底面が凹入し、外反する口縁部の外面に強いユビオサエの痕跡を残す特徴より、15世紀に比定されるものである。

17～19は瓦器碗としては器高が低い終末期の型式に属するが、若江城築造以前の14世紀前半～中頃のものである。17・18は高台の痕跡をわずかに残すが、19は高台が消失している。いずれも内面に粗雑なラセン状暗紋が施されている。21・22は突出した高台をもつ13世紀前半～中頃の瓦器碗である。10は瓦器小皿、20は瓦器の香炉で、外面に花卉の押型紋が施されている。

16は青磁碗、23・24は白磁底部。25は二次堆積の須恵器蓋で、天井部に櫛による刺突列点紋を施した初期須恵器である。26は砥石。石材は頁岩とみられる。



第5図 溝2出土遺物実測図1 (1/4)



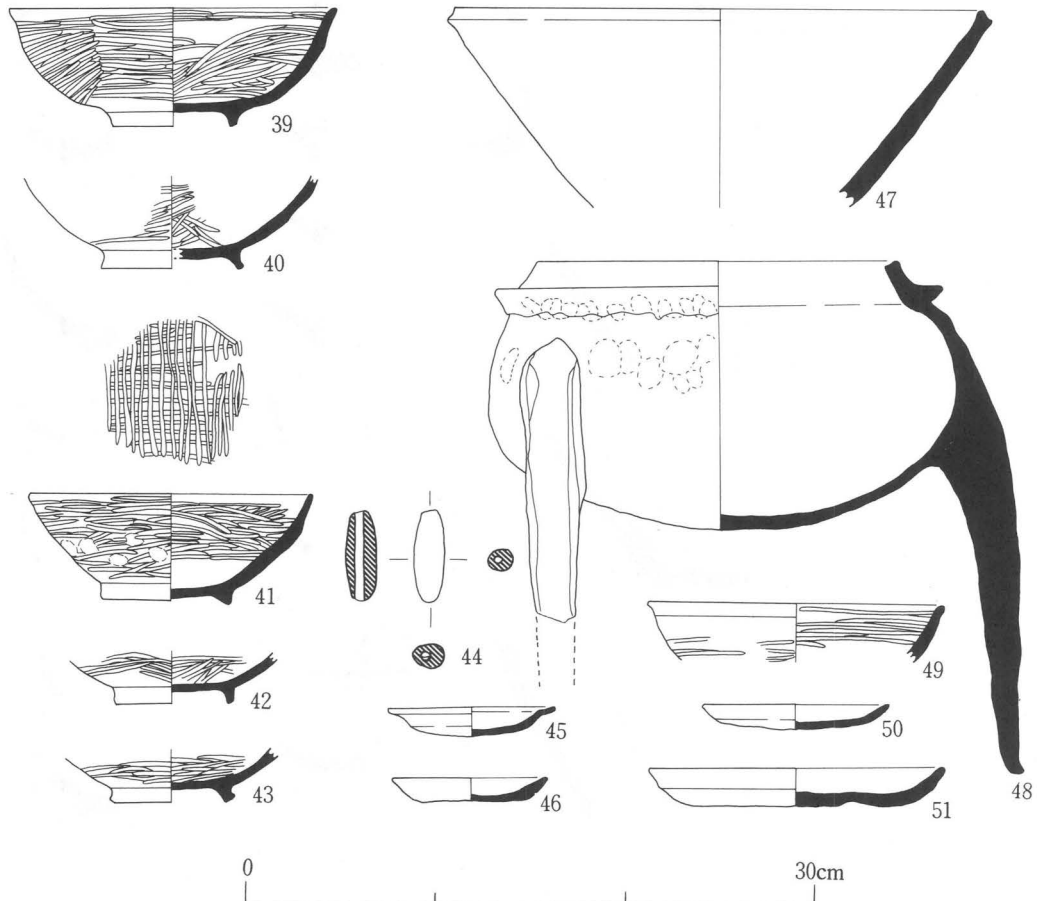
第6図 溝2出土遺物実測図2 (1/4)

27・28は外面に平行タタキを行う東播系の甕で、27は口縁部が短く立ち上がった後外反し、28は口端部外面に肥厚して玉縁状となるもの。29は備前焼の甕。肩部外面に格子のタタキメ、内面にユビオサエの痕を残す。口縁部は外側に折返し、端面を僅かに上下に肥厚させている。

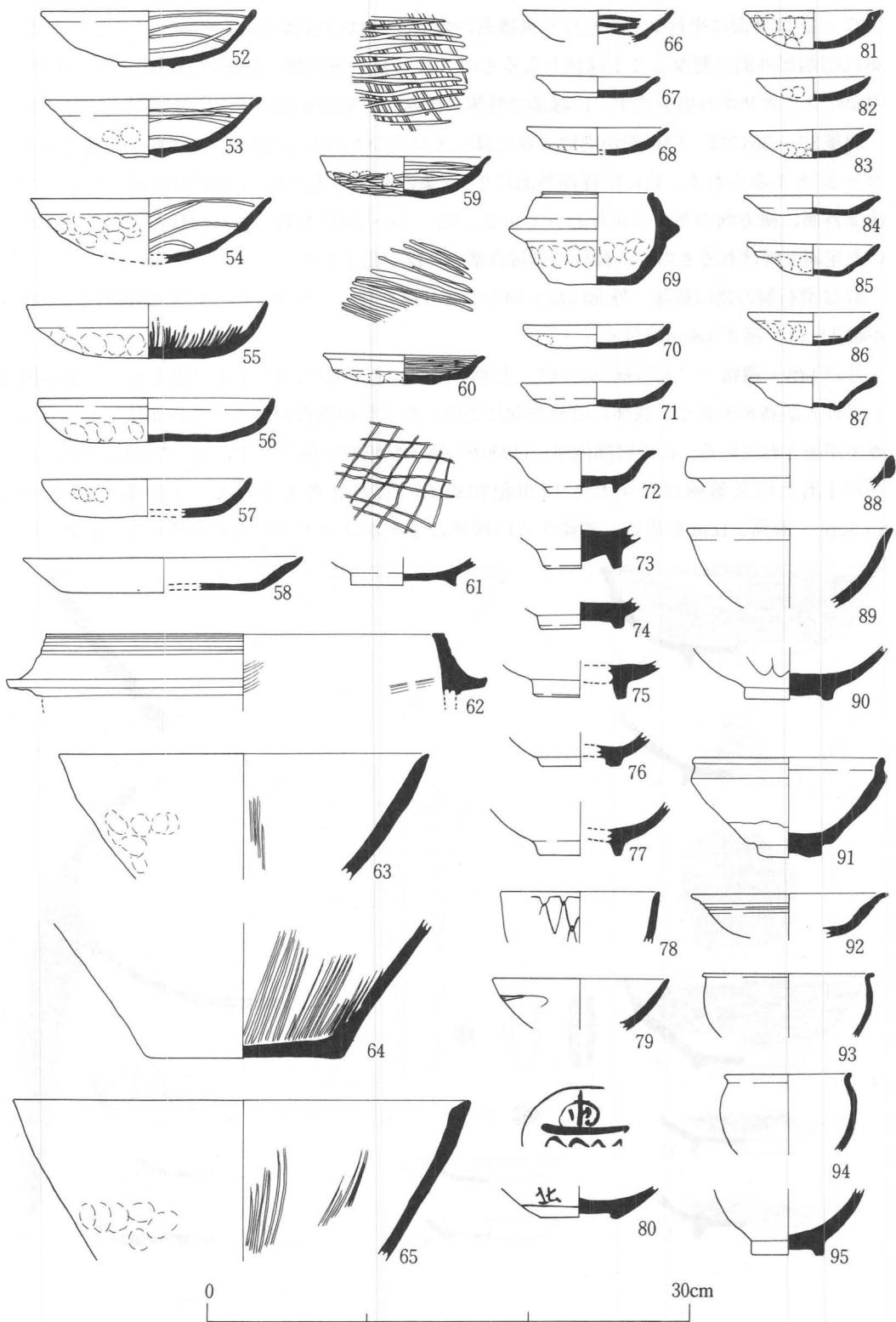
羽釜30～36には、口縁部が内傾ぎみに真っすぐ立つもの30～33と、口縁部が内弯するもの34～36とがみられる。共に口縁部外面に2～3条の凹線が施され、口縁部内面にヨコハケメ、体部外面に横方向のケズリが行われている。32・34・36は瓦質。38は同様の羽釜に三脚が付いた足鍋と呼ばれるもので、棒状の脚接合部の一部が出土した。

37は滑石製の鍋口縁部。外面に縦方向のケズリ痕を残し、ケズり出しによる縦方向の隆起帯が幅2.5cm・高さ0.8cmで付く。

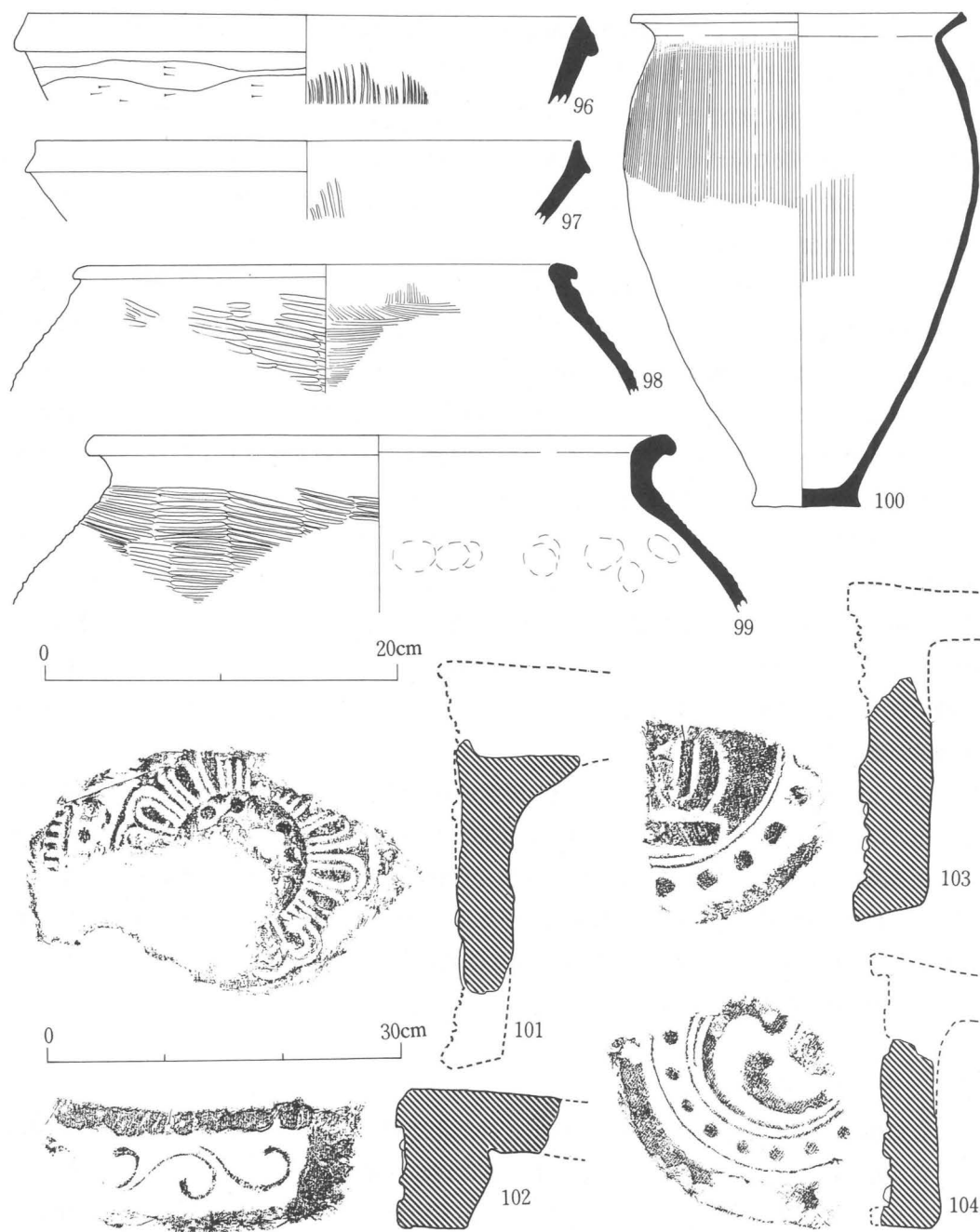
井戸1出土遺物 瓦器碗39～43、土師器皿51、捏鉢47は井戸1より出土した。瓦器碗はいずれも器高が大きく、底部には外方向に突出した大型の高台が付く。内外面は丁寧なヘラミガキが施されている。41の底部内面には細かい格子状暗紋が施されている。これらの特徴より、井戸1出土の瓦器碗はいずれも12世紀初め頃のものと考えられる。土師器皿51は口径15.5cm・器高2.1cmを測る。外傾する口縁部に丁寧なヨコナデが行われている。捏鉢47は、



第7図 溝7・11出土遺物実測図 (1/4)



第8図 包含層出土遺物実測図1 (1/4)



第9図 包含層出土遺物実測図2(1/4)・下層出土弥生土器実測図(1/4)、包含層出土軒瓦拓影(1/4)

口縁端部がヨコナデによってそのまま面をもっておわるもの。焼成は瓦質。

溝7・11出土遺物 土師器皿45は口縁部が外弯ぎみに折曲がり、端部はわずかに上方に肥厚する特徴をもつ。この特徴をもつ土師器皿の型式は12世紀代に比定される。溝の埋土上部より出土した移動用の煮沸用具である足釜は脚の一部を欠く以外はほぼ完形に復元できるも

の。口径19cm・高さ14.5cmの偏球形の胴部と内傾する口縁部をもち、口縁と胴部の境に短い鏝を貼付け、胴部には三方に脚を付けている。脚を除いた形状は羽釜と同じであるが、胴部の膨らみが大きく、短い鏝部よりも大きく外側に張り出している。脚は胴部の外側から下方に踏ん張るような形で取り付けられたもので、接地部は細くやや外に向く。この脚によって、胴部外面は地面より約13cmの高さが保たれている。この足釜の時期は体部の形状より12世紀頃に比定される。このほか土鍾44が出土している。

溝11からは、瓦器椀49と土師器皿46・50が出土した。いずれも12世紀代とみられる土器。

包含層出土遺物 52～54・61は瓦器椀で、52～54は器高が低く高台が退化した14世紀前半のもの。61は高台の形状より13世紀代のものとみられる。59・60・66～68は瓦器皿で、59は内外面にヘラミガキを行い、底部内面には細かい格子状暗紋が施されている。60は外面にユビオサエ痕を残すが、内面ヘラミガキと底部内面に平行暗紋が施されている。69は羽釜を模した瓦質のミニチュア品。鏝は短く断面三角形につまみ出したもの。

55は体部外面にユビオサエ痕を残し、内面に放射状暗紋を施した土師器杯。56～58は土師器中皿、70・71・81～87は土師器小皿である。72・76・77・78は白磁、73～75・89・90は青磁の椀。91は美濃焼の天目茶碗でほぼ完形品。78～80は伊万里焼の椀、92～95は唐津焼の鉢・椀である。62は羽釜、63～65・96・97は摺鉢。83・85・96は瓦質のもの、64は摺目の特徴より大和型の摺鉢、97は備前焼の摺鉢である。98・99は胴部外面に平行タタキメを残す東播系の甕である。

下層出土の弥生土器 100は完形の甕。肩部が張る胴部と、「く」の字に外反した口縁部の端部を上方につまみ上げる特徴から第Ⅳ様式に比定されるもの。胴部外面上半と内面にタテハケメによる調整が行われ、胴部外面下半は二次的な火熱により器表面が著しく剥離している。

瓦 101は複弁蓮華紋を施す白鳳様式の軒丸瓦。104は三巴紋、103は五輪塔紋を表した軒丸瓦、102は唐草紋を表した軒平瓦である。103は溝7より出土し、その他は包含層より出土した。103は平安後期、102・104は室町時代。

Ⅳ. まとめ

1. 府道部分で行われた第17次調査で検出された北に向かって延びる大溝の延長は、時期の異なる3条の溝として検出されたが、若江城の堀の一部かどうかは確認できなかった。
2. これら3条の溝のうち最も古いのは溝2で、出土遺物より若江城の時代と重なる15世紀に掘削されたものとみられる。次いですぐ西側に溝3が掘削され、これが埋もれた後に江戸時代になって再び溝2の位置に溝1を掘り直したものと思われる。
3. 若江城築城以前の遺構として、井戸・掘立柱列・条里型水田のものともみられる畦畔と溝などが検出された。中世の集落隣接地に検出された水田畦畔は若江遺跡では初めての例である。
4. 中世の遺構面の下約1mの第10層より弥生時代中期の土器が1点出土した。近年発見されている弥生後期の水田跡の他に中期の遺構が存在することを示唆するものである。

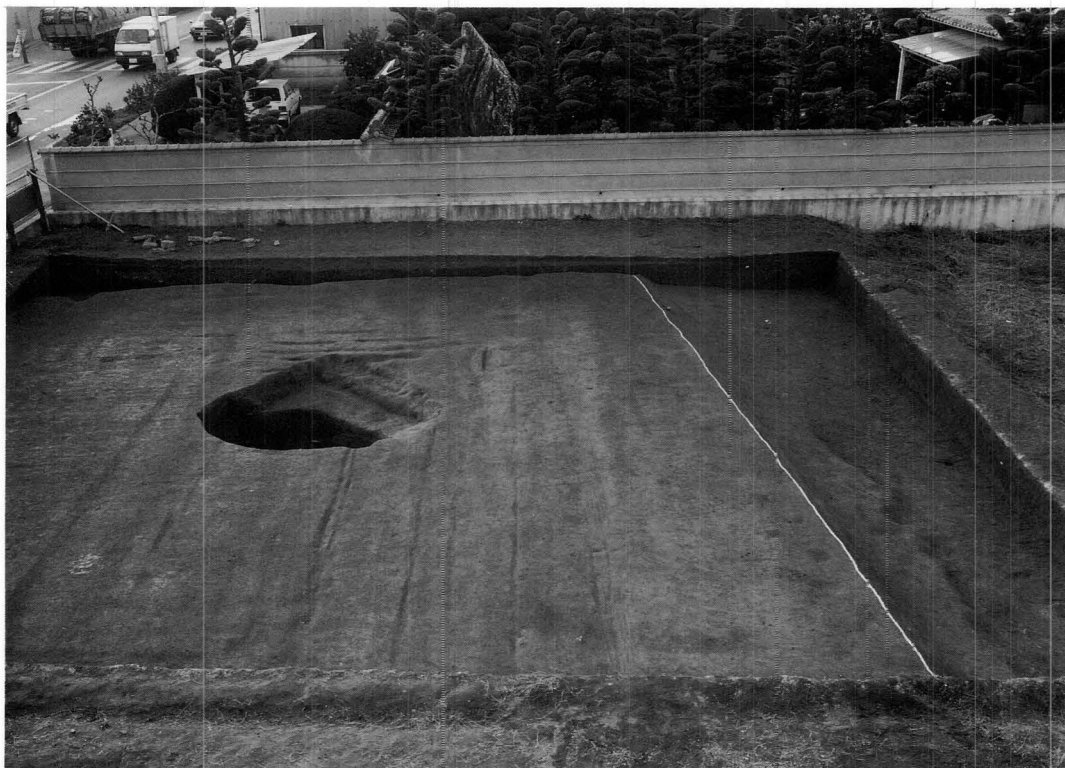
版 圖



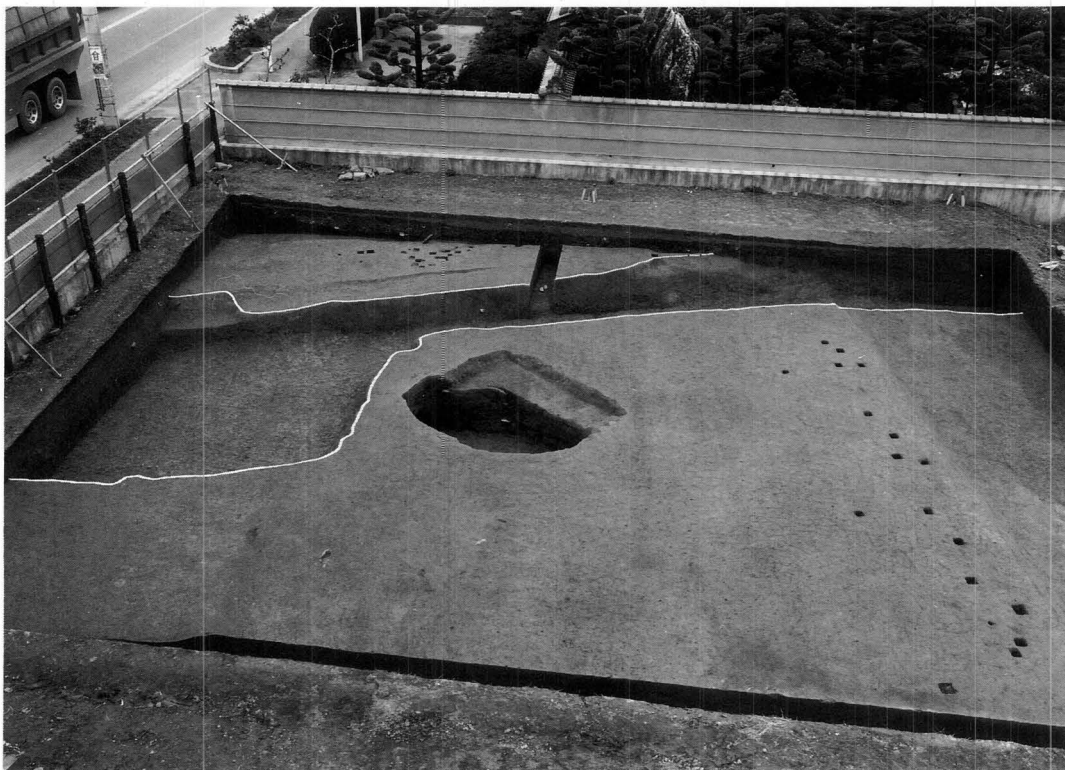
1. 発掘調査着手直後の作業風景



2. 調査地全景



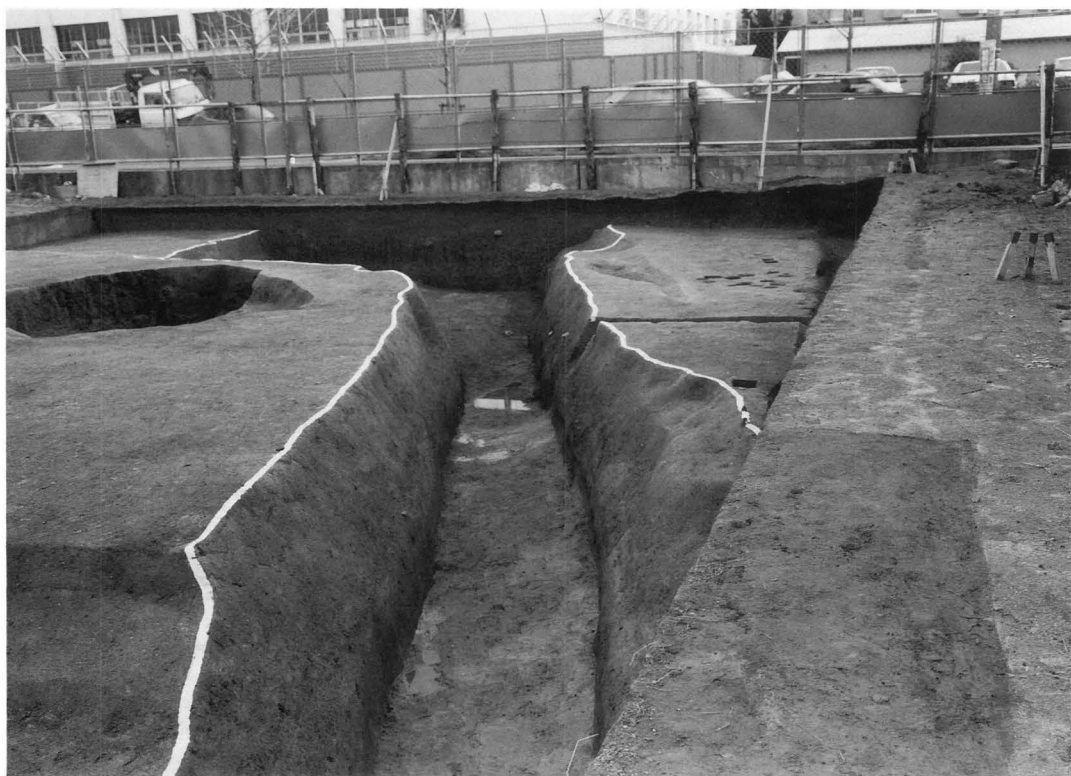
1. 耕作土直下の全景（右側の一段低い部分は水田、他は畑地、中央は試掘坑）



2. 溝1全景（東より）



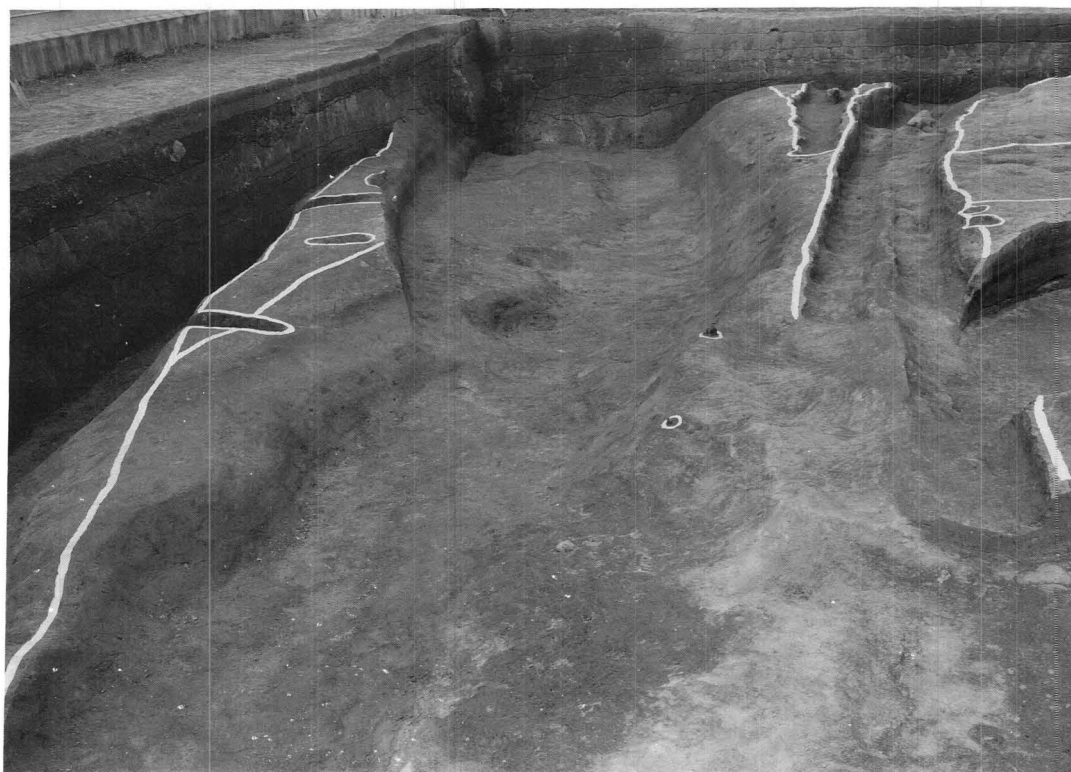
1. 溝1 池状部分 (西より)



2. 溝1 (北より)



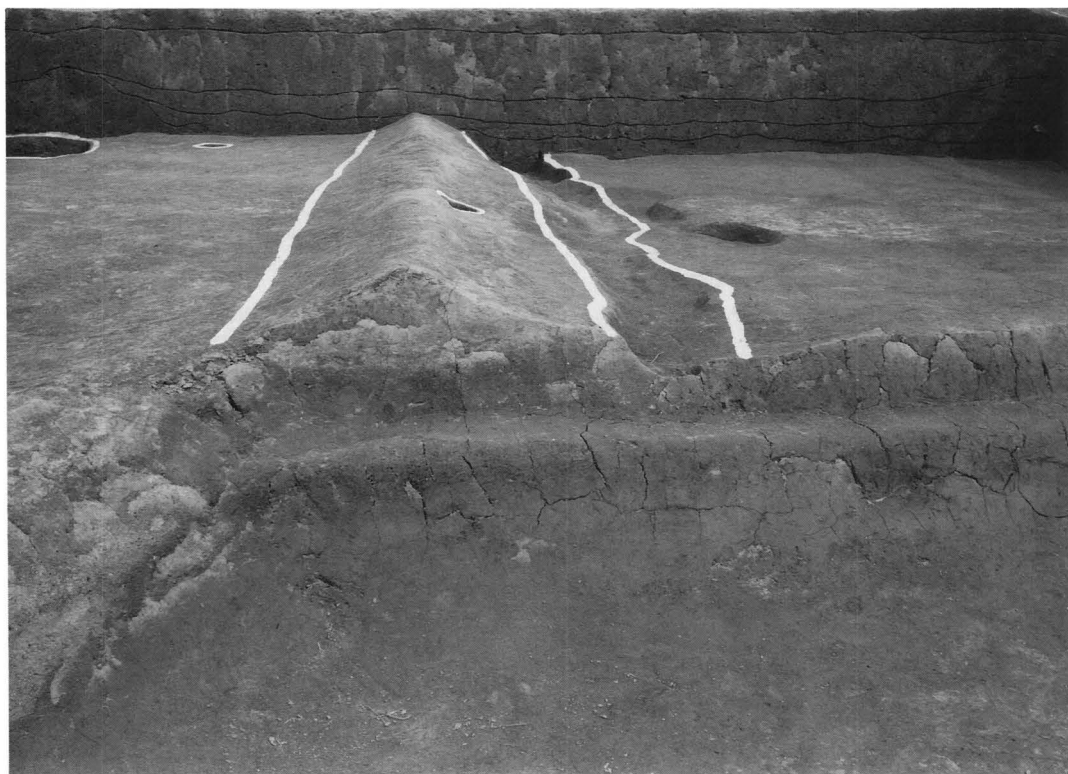
1. 溝2・溝3 (北より)



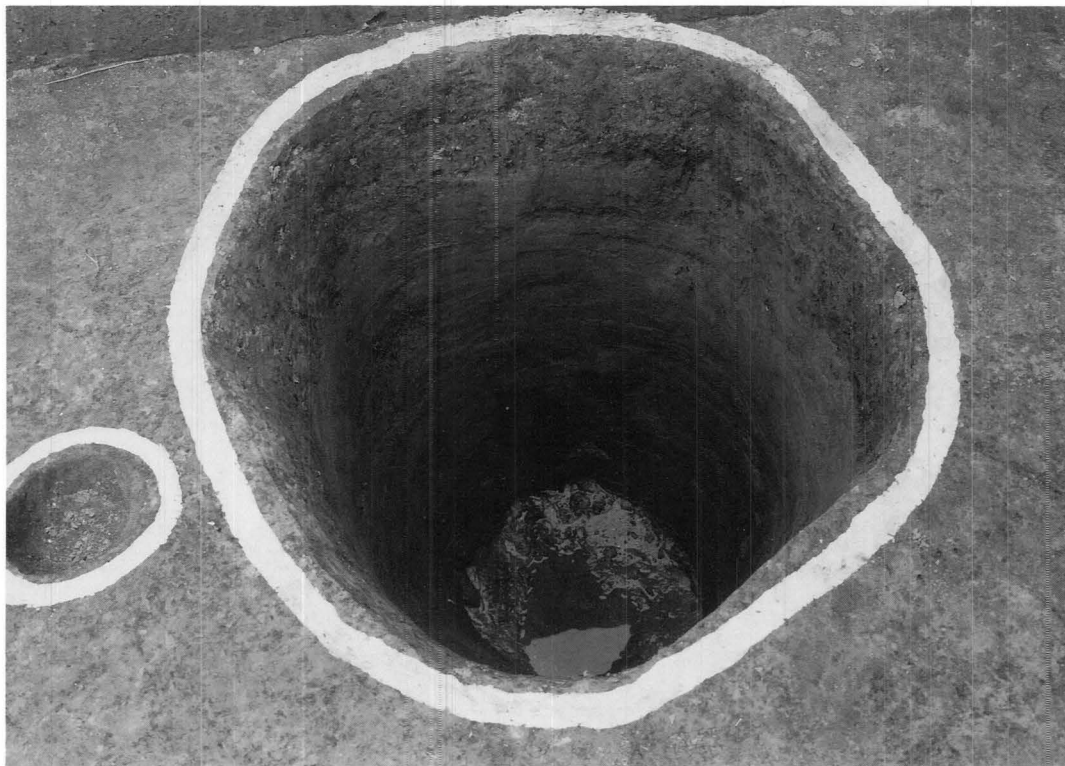
2. 溝2・溝3・溝7～9 (南より)



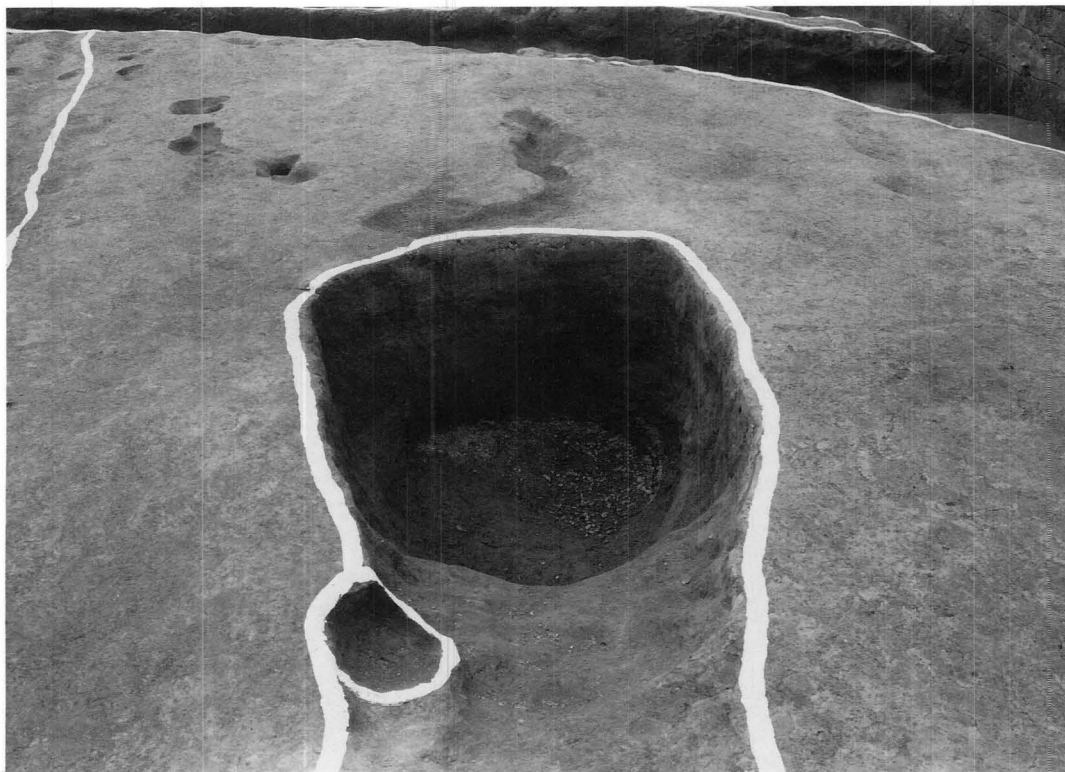
1. 第4c層下面の遺構全景(東より)



2. 畦畔・溝5(西より)



1. 井戸 1



2. 井戸 2



1. 溝7内上部の足釜出土状況



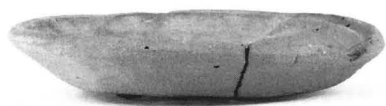
2. 井戸1内上部の瓦器碗出土状況



1. 包含層内の羽釜出土状況



2. 溝1池状部分内の俵出土状況



1



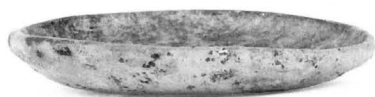
9



2



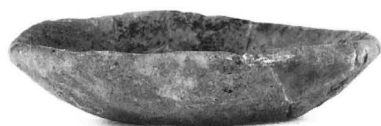
10



5



11



6



12



7



13



8

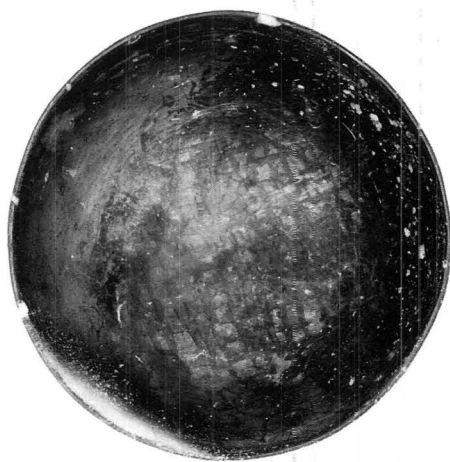


14

土師器小皿1・2・5～9・11～14、瓦器小皿10



17'



41'



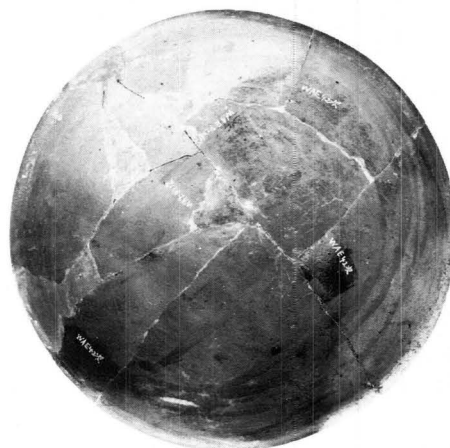
17



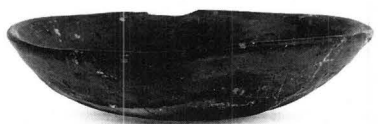
41



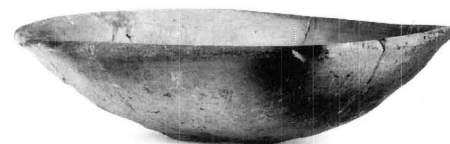
19'



52'



19



52



39



30



53



48



54



59



67



59



68

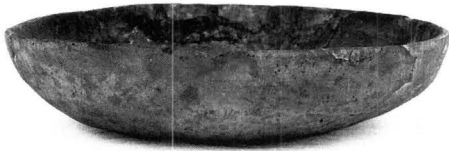
瓦器碗39・53・54、瓦器皿59・67・68、羽釜30、足釜48



45



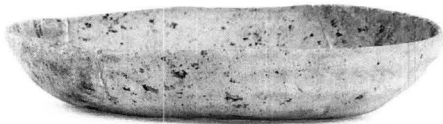
69



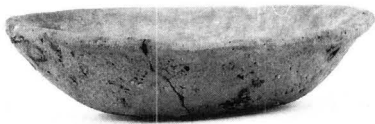
55



91



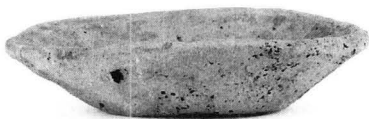
56



81



85



87

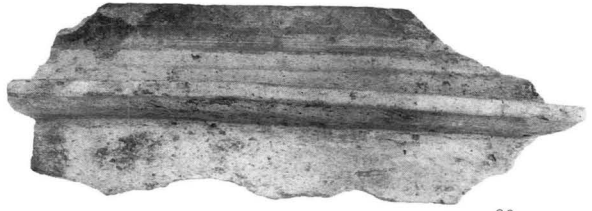


100

土師器皿45・55・56・81・85・87、ミニチュア羽釜69、天目茶碗91、弥生土器甕100



32



36



34

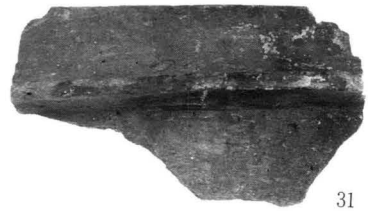


33

1. 羽釜



101



31

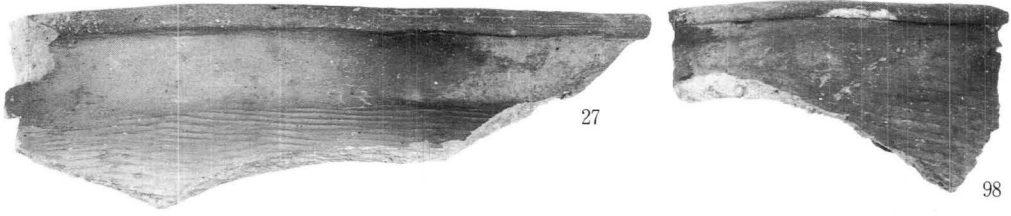


62

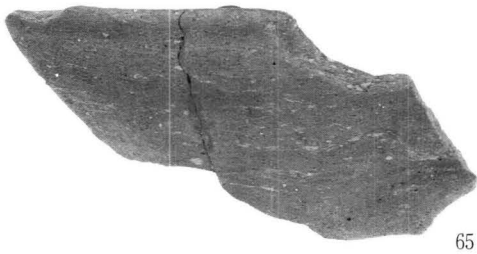
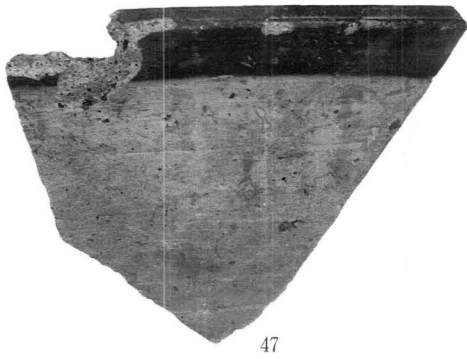


35

2. 羽釜



1. 東播系甕



2. こね鉢47、播鉢65、備前焼甕29

瓜生堂遺跡第38次発掘調査報告書

本文目次

I. はじめに	1
II. 環境	2
III. 調査概要	4
1. 第1ピット	5
層序	5
遺構	7
出土遺物	9
2. 第2ピット	12
層序	12
遺構	14
出土遺物	16
3. 第4ピット	23
層序	23
遺構	25
出土遺物	25
IV. まとめ	32

例言

1. 本書は東大阪市若江西新町1丁目内において東大阪市下水道部が計画した平成元年度公共下水道第31工区管渠築造工事に伴う工事に伴う、瓜生堂遺跡第38次調査の発掘調査報告書である。
2. 調査は財団法人東大阪市文化財協会が、東大阪市下水道部の委託を受けて実施した。
3. 主要な現地調査は、平成1年11月27日から平成2年3月23日まで断続的に福永信雄を担当として実施した。
4. 本報告の執筆は福永が担当したが、観察表は、整理部囑託の津田美智子が作成した。
5. 遺構写真は福永が撮影し、遺物写真撮影はG・Fプロに委託した。
6. 遺構実測図は調査に参加した全員で作成し、整図を津田が担当した。遺物実測図は、津田美智子・竹田博美・喜多裕子・西川美奈子・赤塚直美が、整図および観察表の作成は津田が行なった。なお、本書掲載の遺物の挿図番号は、図版番号と一致させている。
7. 遺構実測図の水準高はO.P値を用いた。
8. 現地調査および整理作業には、下記の方々の参加を得た。また、平成9年度の整理作業は整理部が担当した。

井上二郎・西浦寛次・中尾哲也・浅井総一郎・吉田裕彦・馬場美治・檜垣可奈代・竹田博美・喜多裕子・百合藤厚子・西川美奈子・赤塚直美・西村慶子

挿 図 目 次

第1図	周辺遺跡分布図	3
第2図	調査地位置図	4
第3図	第1ピット土層断面図	6
第4図	第1ピット第2遺構面平面実測図	8
第5図	第1ピット第1遺構面平面実測図	8
第6図	第1ピット出土弥生土器実測図	9
第7図	第1ピット出土須恵器実測図	10
第8図	第1ピット出土土師器実測図	11
第9図	第2ピット土層断面図	13
第10図	第2ピット第2遺構面平面実測図	14
第11図	第2ピット第1遺構面平面実測図	15
第12図	第2ピット出土弥生土器実測図	17
第13図	第2ピット出土弥生土器実測図	18
第14図	第2ピット出土弥生土器実測図	19
第15図	第2ピット出土弥生土器実測図	20
第16図	第2ピット出土弥生土器実測図	21
第17図	第2ピット出土土師器・須恵器実測図	22
第18図	第4ピット土層断面図	24
第19図	第4ピット出土弥生土器実測図	26
第20図	第4ピット出土弥生土器実測図	27
第21図	第4ピット出土弥生土器実測図	28
第22図	第4ピット出土弥生土器実測図	29
第23図	第4ピット出土弥生土器実測図	30
第24図	第2・第4ピット出土弥生時代石器実測図	31

表 目 次

表1	遺物観察表	33
----	-------	----

図 版 目 次

- 図版 1 調査地・土層断面 上.発掘現場周辺風景(南より)下.第1ピット東壁断面(西より)
- 図版 2 第1ピット土層断面 上.北・東壁上位断面(南西より)下.東壁上位断面(東より)
- 図版 3 第1ピット土層断面 上.北壁中位断面(南より)下.東壁中位断面内貝痕跡検出状況(西より)
- 図版 4 第1ピット土層断面 上.北壁下位断面(南より)下.北・東壁下位断面(南西より)
- 図版 5 第1ピット遺構 上.第2遺構面遺構検出状況(西より)下.第1遺構面遺構検出状況(北より)
- 図版 6 第1ピット遺構 上.須恵器出土状況(南西より)下.落ち込み検出状況(西より)
- 図版 7 第2ピット調査地・土層断面 上.調査風景(北より)下.南壁下位断面(南より)
- 図版 8 第2ピット土層断面 上.東壁下位断面(西より)下.東壁断面(第49層内)遺物出土状況(西より)
- 図版 9 第2ピット土層断面 上.東・南壁中位断面(北西より)下.東壁中位断面(西より)
- 図版 10 第2ピット土層断面 上.東壁中位断面(西より)下.南壁中位断面(北より)
- 図版 11 第2ピット土層断面 上.北壁中位断面(南より)下.北・東壁中位断面(南西より)
- 図版 12 第2ピット土層断面 上.東壁上位断面(西より)下.東壁上位断面(西より)
- 図版 13 第2ピット土層断面 上.南壁上位断面(北より)下.北壁上位断面(南より)
- 図版 14 第2ピット遺構 上.第13層内自然木出土状況(西より)下.第2遺構面遺構検出状況(東より)
- 図版 15 第2ピット遺構他 上.第1遺構面遺構検出状況(西より)下.作業風景(西より)
- 図版 16 第4ピット土層断面 上.東壁中位断面(西より)下.北壁中位断面(南より)
- 図版 17 第4ピット土層断面他 上.東壁上位断面(西より)下.作業風景(南西より)
- 図版 18 第1ピット出土遺物(弥生時代・土器) 上.壺(1~4)無頸壺(5)高杯(17)下.甕(6~9)大型甕(10・11)底部(12~15)
- 図版 19 第1ピット出土遺物(古墳時代・須恵器) 有蓋高杯蓋(22・23)有蓋高杯(19~21・24)無蓋高杯(26・27)
- 図版 20 第1ピット出土遺物(古墳時代・須恵器) 上.有蓋高杯蓋(18)甕(25)杯身(29・30)下.杯身(28)甕(31)器台(32)大型甕(33・34)
- 図版 21 第1ピット出土遺物(古墳・奈良時代・土師器) 上.皿(35)有蓋短頸壺(39)下.皿(36)浅鉢(37)杯蓋(38)甕(40・41)
- 図版 22 第2ピット出土遺物(弥生時代・土器、土製品) 上.壺(44~49)細頸壺(50~52)土製円板(58)下.底部(53~57・59~66)
- 図版 23 第2ピット出土遺物(弥生時代・土器) 上.壺(42・43)甕(71)大型甕(82・88・89)

- 図版24 第2ピット出土遺物(弥生時代・土器) 上.甕(69・70・72・73・75)大型甕(80・81・83~85)下.甕蓋(76~79)転用品(86・87)
- 図版25 第2ピット出土遺物(弥生時代・土器) 上.甕(40・132)甕蓋(129)下.底部(90~92・94~98)
- 図版26 第2ピット出土遺物(弥生時代・土器) 上.鉢(99・101~104)壺・鉢(100)台付鉢・高杯(105~108)台付鉢・台付無頸壺(114)下.脚部(109・111~113)高杯(115~117)
- 図版27 第2ピット出土遺物(弥生時代・土器) 上.短頸壺・水差形土器(118)壺底部(119・122)壺蓋(120・121)壺(123~126)下.鉢(128)甕(130)甕底部(131)脚部(133・135・136)水差形土器(134)
- 図版28 第2ピット出土遺物(古墳~平安時代・土器) 上.土師器杯(137~139)土師器丸底壺(141)黒色土器A類碗(142・146)土師器碗・皿(143)土師器鉢(144・145)土師器甕(147)下.須恵器杯蓋(150・151)須恵器杯身(140・152・153)須恵器壺(154)
- 図版29 第4ピット出土遺物(弥生時代・土器) 上.壺(155・157・158・165) 下.壺底部(160・161・169~173)
- 図版30 第4ピット出土遺物(弥生時代・土器) 上.壺(159・162~164・166~168)無頸壺(174)壺蓋(175・176)下.壺(156)甕(181)
- 図版31 第4ピット出土遺物(弥生時代・土器) 上.鉢・台付鉢(195)台付鉢(196) 鉢(197)高杯(225)下.甕(183~189)
- 図版32 第4ピット出土遺物(弥生時代・土器) 上.甕(177~180・182)大型甕(190~194)下.鉢(198~212)
- 図版33 第4ピット出土遺物(弥生時代・土器) 上.台付鉢(213)台付鉢・高杯(214~223)下.高杯(224・228)高杯・台付鉢(226・227)
- 図版34 第4ピット出土遺物(弥生時代・土器) 上.壺(229~234)下.底部(238・239・245・252)
- 図版35 第2・4ピット出土遺物(弥生時代・土器、石製品) 上.底部(236・237・240~244・246・251)下.石鏃(253~255)石核(256)用途不明石製品(259)砥石(262)
- 図版36 第2・4ピット出土遺物(弥生時代・石製品) 細部調整剥片(257)石剣(261)

瓜生堂遺跡第38次発掘調査報告

I はじめに

既往の調査と調査に至る経過

瓜生堂遺跡は河内平野の一画、旧河内国のほぼ中心に位置する。昭和40年に工業用水道管埋設工事の際に多量の弥生土器と青銅利器（銅剣ないし銅戈）が出土したことから、遺跡の存在がひろく知られた。その後、平成10年現在までに50次を越える調査が実施されており東大阪市域では最も調査の進んだ遺跡の一つといえる。

従前の調査の結果、本遺跡は標高約5mの旧大和川の形成した三角州上に営まれた集落跡で、近鉄奈良線八戸の里駅の南方、大阪府寝屋川流域南部下水道小阪ポンプ場を中心とした南北約1km、東西約0.5kmの範囲に広がる（第1図）ことが明らかになっている。南に接続して巨摩廃寺遺跡、若江北遺跡、山賀遺跡などが存在し、河内平野における弥生から古墳時代の遺跡密集地の一角を占める。

遺跡の開始は、弥生時代前期後半（畿内第I様式新段階）で断続的に古墳・奈良時代と中世に集落が営まれるが、弥生時代中期中葉から後期初頭に大規模に発展する。この時期の遺跡内からは、掘建柱建物を主とした居住域とともに本遺跡を著名にした盛土を残す方形周溝墓を中心とする墓域が3個所で知られている。他の拠点集落に見られる居住域を巡る環濠は、確認されていない。集落は後期中葉以降、南に隣接する巨摩廃寺遺跡などに移り水田域に変化する。

本遺跡の弥生時代中期の発展を示す土器をはじめ石器・木製品・金属製品や金属製品の鋳型など非常に豊富な遺物が出土している。河内湖の縁辺に位置することから、集落を支えた背景の一つに河内湖の水運が考えられている。

古墳時代は、小規模な集落が営まれていたことが河川などから出土する土器により想定されるが、実態は今のところ明らかではない。古墳時代中期後半から後期の埴輪が各所で出土し、小型低方墳などの古墳が存在したことを示している。

飛鳥時代の実態は、遺物も含めて明らかでない。奈良時代は、掘建柱建物や「若」と墨書のある須恵器などが検出され若江郡衙を想定する意見がある。

中世以降は、集落が営まれる時期もあるが南東に隣接する若江遺跡の周辺部としての位置付けが考えられている。近世には水田ないし畑地に変化した。

今回報告する第38次調査は、若江西新町1丁目内において東大阪市下水道部が計画した下水管理設工事に先だち発掘調査を実施したものである。

発掘調査は、本協会が東大阪市教育委員会の指導のもとに東大阪市下水道部の委託を受け行った。

Ⅱ 環境

河内平野はかつて縄文時代前期の海進により河内湾と呼ばれる海が侵入していた。この時代の終わり河内潟に変化し、本遺跡付近はその南縁部にあたる。弥生時代には河内湖に変わる。潟や湖には旧大和川の前身となる川が南から北に向かって幾筋も流れ込んでいた。湖の岸边にはこれらの川によって運ばれた土砂によって形成された三角州が広がり、流れ込む川は自然堤防を作り、背後には後背湿地が形成された。

人間活動の痕跡は、新家遺跡（本遺跡の北約1.5km）や山賀遺跡（南約1km）で少量の晩期中頃の土器が出土し、この頃から認められる。しかし、活動が本格化するのは弥生時代前期である。後背湿地が稲作の耕作地として早くから利用されたことが、若江北遺跡（南0.5km）で検出された前期初頭の水田址や土器などの遺物から窺える。当時の居住地は、自然堤防上や三角州などの微高地を選んで営まれた。

本遺跡は、弥生時代前期後半に小規模な集落が出現する。位置から見て若江北遺跡から派生したことが考えられる。山賀（前～後期）遺跡や本遺跡は河内湖南辺に営まれた大規模集落であり、河内における拠点集落の一つである。弥生時代中期に最も範囲を広げる。単に農耕の拡大だけでは後の時代の遺跡の在り方から見ても説明が困難で、この背景に川や湖を利用した水運がもたらす富などが考えらる。北東約0.5kmに所在する巨摩廃寺遺跡から出土した「貨泉」はその証拠の一つと考えられている。また、本遺跡においては環濠が検出されていないが、これも遺跡の性格を示しているのかもしれない。

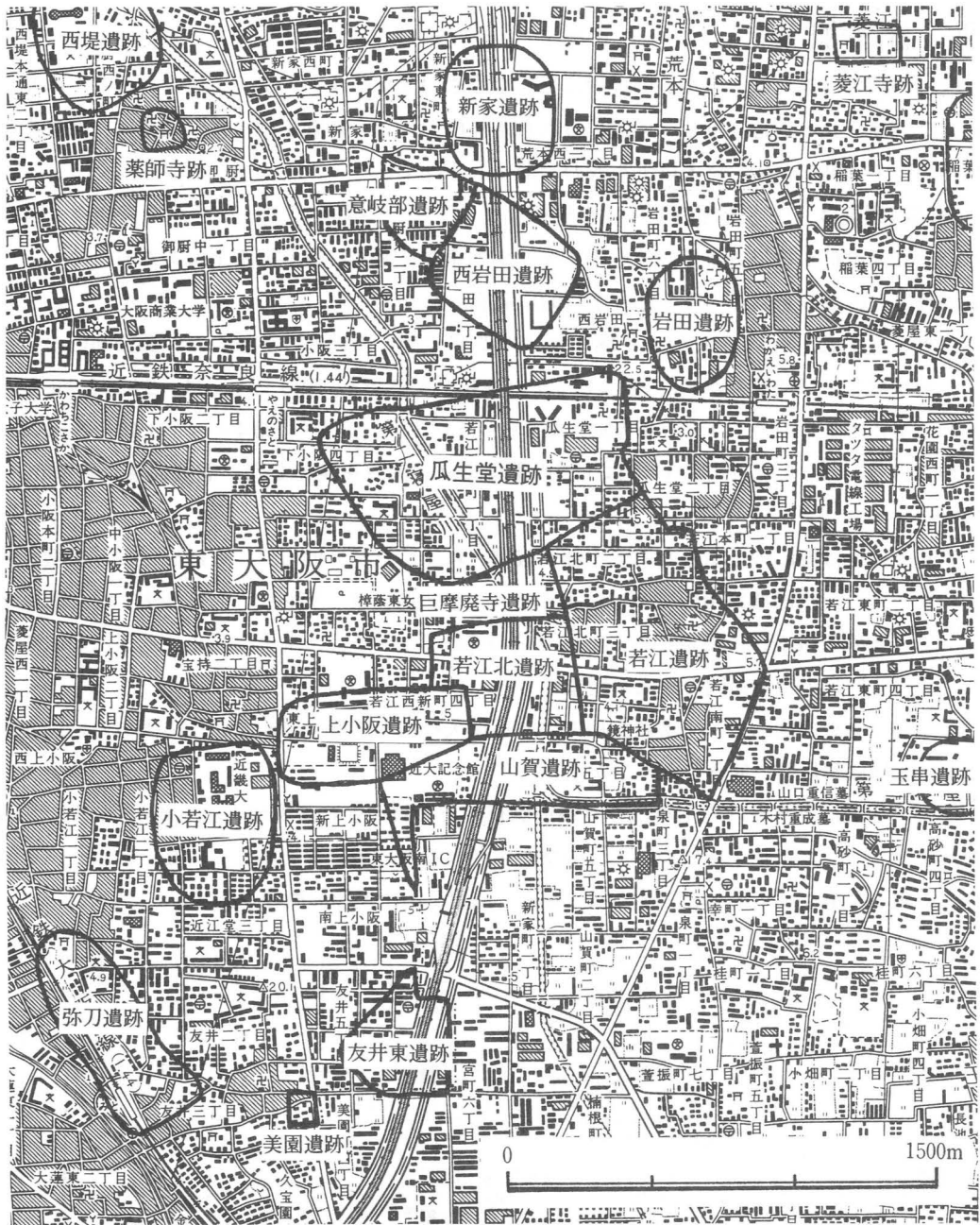
古墳時代は、北約0.5kmの西岩田遺跡（前期）より前代から続く水運に関係すると考えられる山陽・山陰地方の土器や大型の倉庫と考えられる掘立柱建物（中期前半）などが検出されている。中期後半と後期は仁徳記「堀江」の開削が伝えるように瀬戸内海への出口が狭められたためか、水運を窺わせる資料は見られない。

小型低方墳が、巨摩廃寺遺跡（中期後半）と山賀遺跡（後期前半）で検出されている。本遺跡からも古墳時代中から後期の埴輪が出土しており古墳の存在が想定できる。この種の古墳は、集落に隣接して営まれるため、検出地点の遠くないところに同時期の集落が存在すると予想されるが、実態は明らかでない。

飛鳥・奈良時代は、奈良時代後期の集落の一端が本遺跡で、山賀遺跡と友井東遺跡（本遺跡の南2km）から水田址が検出されている。本遺跡は上述した墨書土器の存在から若江郡衙を想定する考えもあるが、検出されている建物の規模が小さく遺物の量も少ない。むしろ、織田信長による若江城の大改築に伴う削平のため遺構は今のところ確認されていないが、遺物量の豊富さや種類の多さから見て後述する若江寺に隣接した地を考えるべきである。

寺院址は、飛鳥時代後期創建の若江寺（東約1km）あるいは白鳳時代に創建された西郡廃寺（南東約1.5km）が存在する。若江寺は、古代中央政権に直接結びつく瓦や唐三彩が出土しており河内における主要寺院の一つであることが判明している。

以降、室町時代に若江遺跡に存在した河内守護所（若江城）が示すように、本遺跡周辺は中



第1図 周辺遺跡分布図

世にいたるまで河内の中心として存在し、栄えた地域といえる。この背景には、やはり河内湖および旧大和川の水運や、河内国のほぼ中心に位置する地勢的条件を考える必要がある。弥生時代後期段階で本遺跡から巨摩廢寺遺跡の移住で明らかにされているように、接続する遺跡を含む限られた地域の中で、時代により自然条件の変化などに適応して人々が居住地を替えたものと考えられる。

Ⅲ 調査概要

今回の調査対象地は、下水道管理設にともなうものでシールド工法の工事であったため発進立孔と到達立孔・割込立坑として設けられた4個所のピット調査を行った。調査は、盛土を機械を用いて掘削した後、耕土以下を人力で掘り下げ行なった。

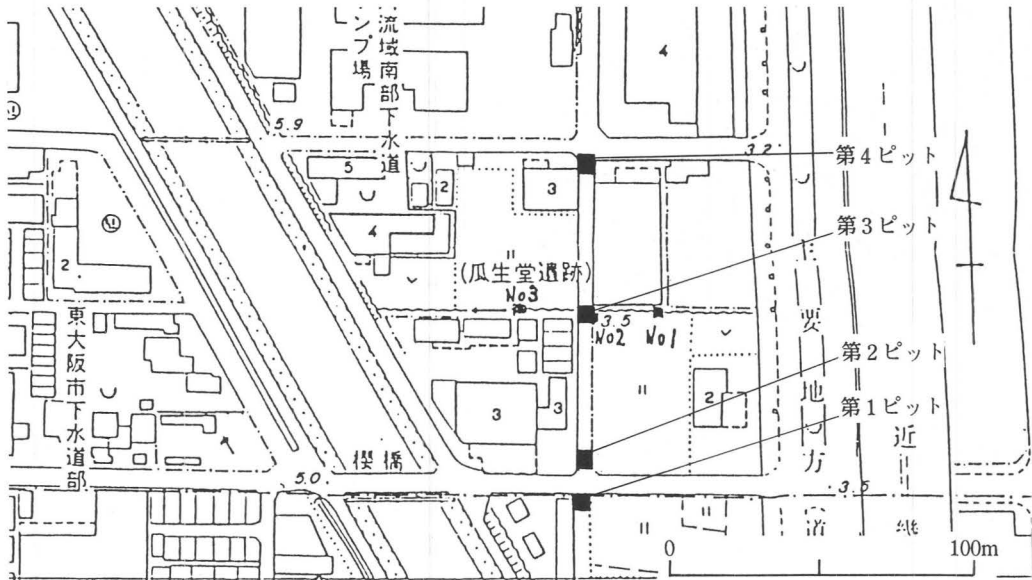
今回の調査は、下水管理設に伴う小規模なピット部分の調査であったが、調査地点(図2)が方形周溝墓群が検出されている小阪ポンプ場の東端を南北に通る道路上にあたるため、方形周溝墓群の広がりを確認することを主目的に実施した。

調査は、平成1年11月27日～平成2年3月23日の間に断続的に実施した。調査地区の名称は、南から北に順に第1ピット～第4ピットと仮称して進めた。第1ピットは、2.8×2.8mの正方形、第2ピット7.0×3.4mの長方形、第3ピット径3.5mの円形、第4ピット4.4×3.4mの長方形である。第3ピットについては工法の関係で立会調査を実施した。調査面積は約49m²である。

第4ピットは既設の下水管などで上部が破壊されていたが、他のピットはほとんど破壊されていなかった。土層観察用のアゼは、第1ピットは、東・北、第2ピット東・南・北、第4ピット東・北の矢板沿いに設定した。割込立坑の第3ピットは、ライナープレート工法が取られたため工法的に土層断面図の作成が困難であった。

この種の調査の制約で、土層観察用のアゼを鋼矢板沿いに残すしかないため雨あるいは湧水により土層観察以前に崩落した部分があった。

なお、今回は下水管理設工事に伴う事前調査のため破壊される現地表下約4.5mまでを調査対象とし、これより下部については破壊から免れるため調査を実施していない。以下、本調査を実施した第1・2・4ピットの順に層序、遺構、出土遺物の概要を記す。



第2図 調査地位置図

1. 第1ピット

桜橋通の南に隣接した地点に設定した東西2.8m、南北2.8mの正方形のピットである。

層序 (第3図)

東・北に土層断面を残して調査したが紙数の都合で、東壁断面を図示し説明する。

第1層 耕土 厚さ約2cmで、厚さから見て上部は農道開設時に削平を受けていると考えられる。上面のO.Pは4.1mである。

第4層 茶褐色シルト質粘土(床土) 厚さ約20cmで上面から耕作に伴うと考えられる落ち込み(堆積土は3層)が認められた。

第8層 灰褐色砂混じりシルト質粘土シルト 厚さ36cmである。

第9層 茶褐色シルト質粘土 厚さ約30cmで古墳時代中期後半から平安時代の土器を含む。上面(第1遺構面)で12世紀代のピット2・土壌1などを検出。平安時代に行われた客土の可能性が考えられる。上面のO.Pは3.7m前後である。

第10～第12層 黄褐色(10層)から茶褐色(12層)の砂層で、間層に11層の黄灰色シルト質粘土が認められる。庄内式土器・布留式土器の摩滅した土器片が含まれる。古墳時代前期～弥生時代後期の堆積層。

第13層 暗灰色シルト 厚さ4cmで部分的に存在した。

第14層 黒灰色シルト粘土 厚さ10cmで上面に凹凸が認められる。第2ピットの19層と同一である。

第15層 暗褐色シルト質粘土 厚さ3cmで炭化した植物遺体多数含む。第2ピットの20層と同一である。

第16層 緑灰色粘土 厚さ20cm前後でアシの葉や貝の痕跡のブロック(灰色シルト)を多数含む。

第17～第19層 暗緑灰色から黒灰色粘土 各層は厚さ10cm前後でいずれも層中に薄い炭の層が認められる。次に述べる20層が弥生時代中期の遺物包含層であるため、13～18層は弥生時代後期に堆積したと考えられる。また、17～18層は炭層の存在から水田の可能性が考えられる。

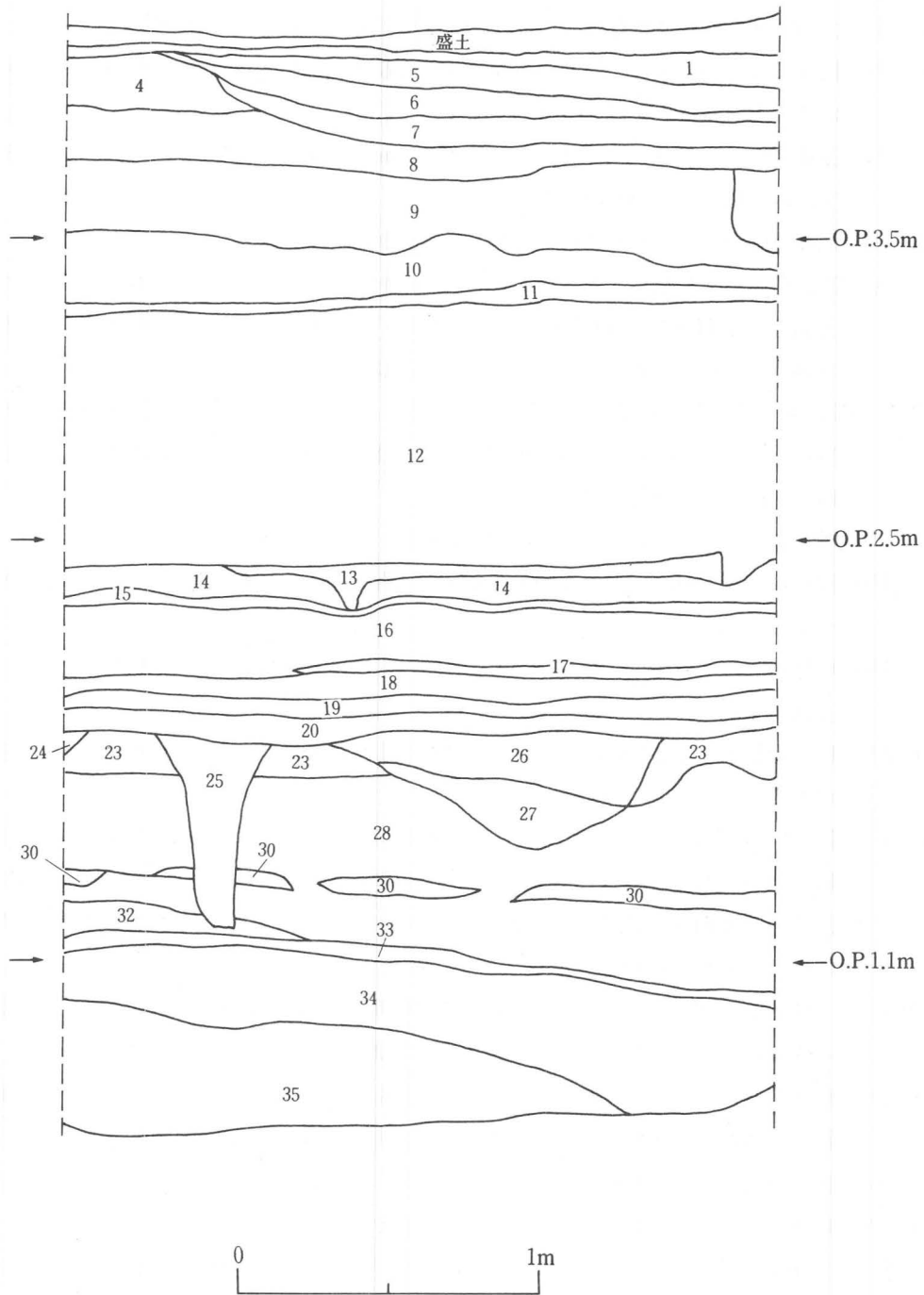
第20層 黒褐色砂質粘土 厚さ10cmで弥生時代中期後半(畿内第III～第IV様式)の土器などを多数含む。第2ピットの28層と同一である。

第23層 暗灰色シルト 厚さ18cmで上面(第2遺構面)から弥生時代中期後半のピット・溝・土壌などを検出。起伏が認められる。上面のO.Pは1.8m前後である。

第28層 黄灰色シルトから細砂 厚さ35cm前後でアシの葉を多数含む。無遺物層である。

第30層 緑灰色粘土 厚さ8cm前後で部分的に存在する。薄い炭層を含む。

以下、第31層緑灰色シルト、第32層青灰色シルト、第33層緑灰色粘土、第34層緑灰色シルト混じり粘土(炭層含む)、第35層青灰色シルトと続く。35層の上面は、北から南、東から西へ急な角度で傾斜している。第23層以下は無遺物層である。



第3図 第1ピット土層断面図

遺構

第1ピットで検出した遺構は、弥生時代・中世および近世から近代に属するものがある。以下、古い時期から順に概要を記す。

弥生時代中期の遺構「第2遺構面、図版5・上」

上述のように23層上面で土壌3基・ピット4個を確認した。

土壌

土壌としたが、調査区外に延びるものについては溝になる可能性も残る。

土壌Aは、平面形が楕円形を呈するものである。長軸48cm、短軸2cmで深さは、12cmである。断面形は、皿形を呈す。堆積土は、黒色シルト質粘土1層である。

土壌Bは、南東隅付近で検出した。平面形が楕円形を呈すると思われる。長軸80cm以上、短軸70cmで最大の深さは、15cmである。断面形は、皿形を呈す。堆積土は、2層で上層が黒灰色シルト、下層が青灰色シルトである。図5をはじめとする弥生土器が少量出土した。

土壌Cは南西隅で検出した。平面形が楕円ないし不整形円形を呈すると思われる。最大長辺90cm以上、最小短辺40cmで最大の深さは、15cmである。断面形は、皿形を呈す。堆積土は、黒色シルト質粘土1層である。図6・7をはじめとする弥生土器が少量出土した。

ピット

掘立柱建物の柱穴と考えられるピット4個を検出した。柱根の遺存は認められなかった。径20～40cmの平面形が円ないし楕円形を呈し、深さ20～60cmのものである。堆積土は、炭をわずかに含んだ暗灰色シルト質粘土である。建物の規模は復元できない。

中世の遺構「第1遺構面、図版5・下」

9層上面で土壌2基・ピット2個を検出した。

土壌

調査範囲の関係で土壌としたが、調査区外に延びるものについては溝になる可能性も残る。

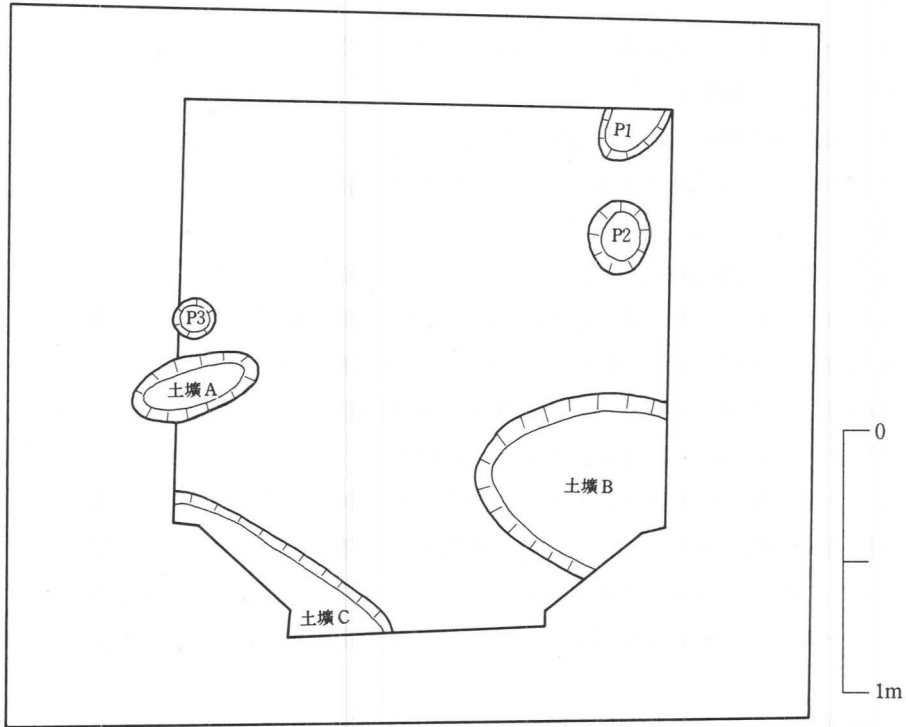
土壌1は、東西に主軸をもつ平面形が不整形円形を呈するものである。長軸100cm、短軸80cm以上で、深さは12cmである。断面形は、皿形を呈す。堆積土は、茶灰褐色シルト質粘土である。

土壌2は、土壌1の北に隣接して検出した。平面形が楕円形を呈する。長軸60cm、短軸54cmで、最大の深さは約42cmである。断面形は、皿形を呈す。堆積土は、茶灰褐色シルト質粘土である。

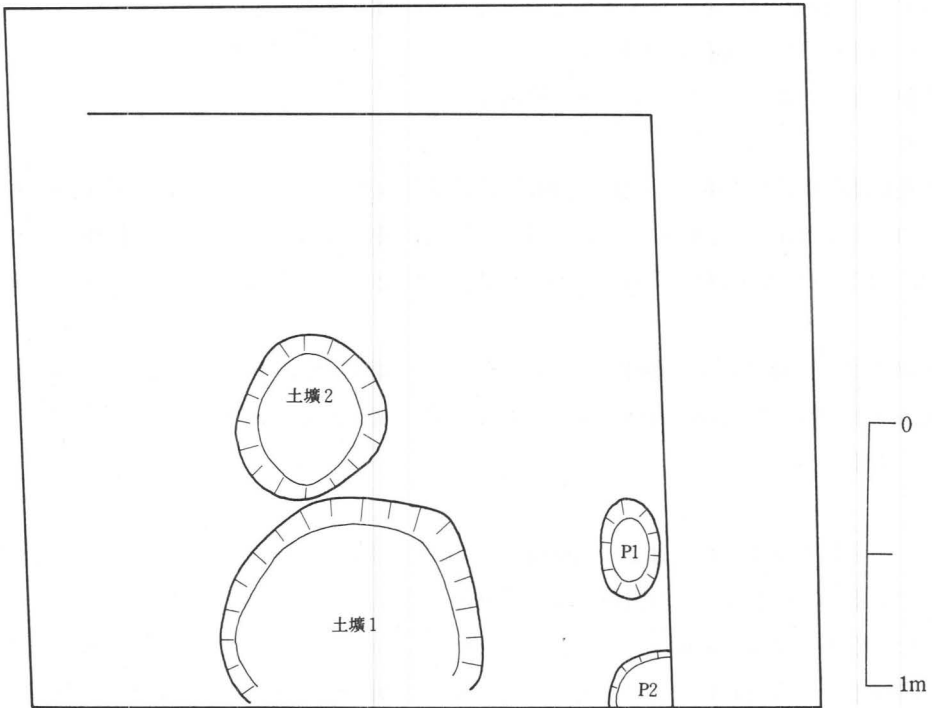
ピット

ピット2個を検出した。径20～30cmの平面形が円ないし楕円形を呈し、深さ10～28cmのものである。堆積土は、茶灰褐色シルト質粘土である。

また、近世の遺構「図版6・下」として、床土をベースにした落ち込みを1個所、確認した。北東隅付近から窪地状になっている。深さ20cmで断面形は浅い皿状を呈する。堆積土は上から茶褐色シルト質粘土、灰褐色シルト質粘土、灰色シルト質粘土の3層に別れる。



第4図 第1ピット第2遺構面平面実測図



第5図 第1ピット第1遺構面平面実測図

出土遺物

今回の調査では、コンテナ 個分の弥生時代後期から近代までの遺物が出土した。遺物の大半は、弥生時代中期の土器でコンテナ30個分である。他に、少量の須恵器・土師器・瓦器・陶磁器(近世～近代)・石器などが見られる。近世・近代の遺物は割愛し、中世以前の遺物について古い時期から遺構・包含層の順に、可能なかぎり図化し説明する。

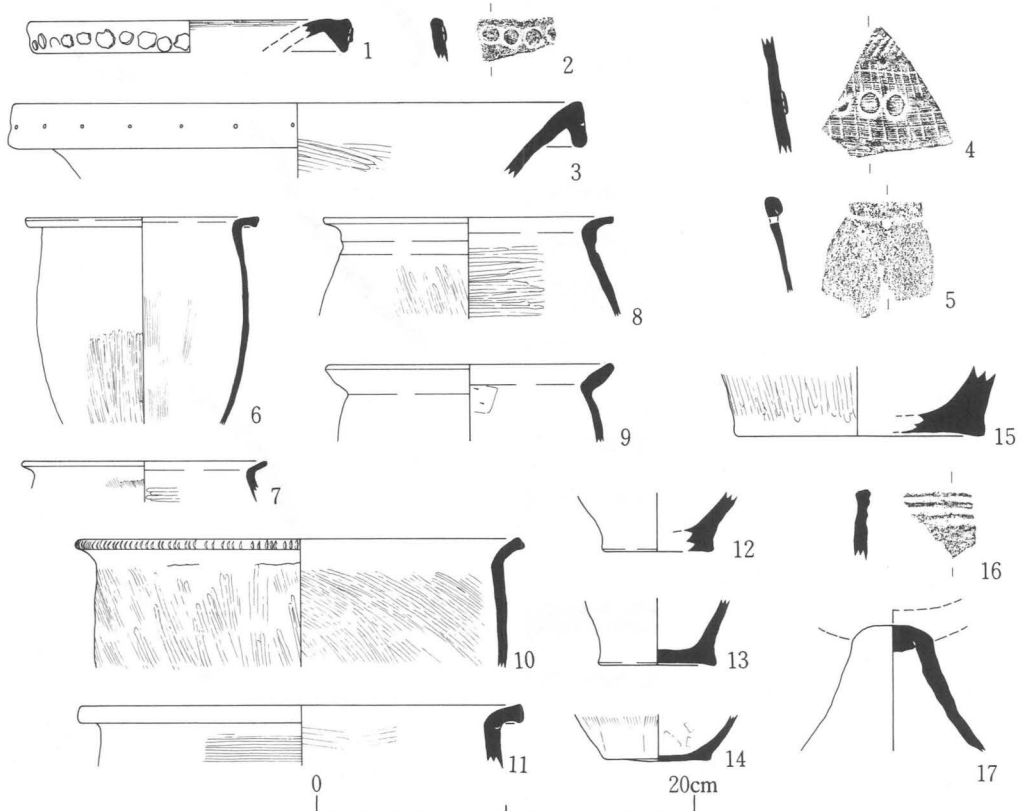
なお、本文では概要を記す。個々の遺物の詳細については、観察表を参照されたい。また、弥生土器のうち生駒西麓産としたのは、胎土に角閃石を含み茶褐色を呈するものである。以外の土器は、本遺跡で作られたものや他地域産のものも含まれると思われるが、識別が困難であるため一括した。石器は最後にまとめて説明する。

第1ピットから出土し図化できた遺物の内訳は、弥生土器(17点)土師器(7点)須恵器(16点)である。

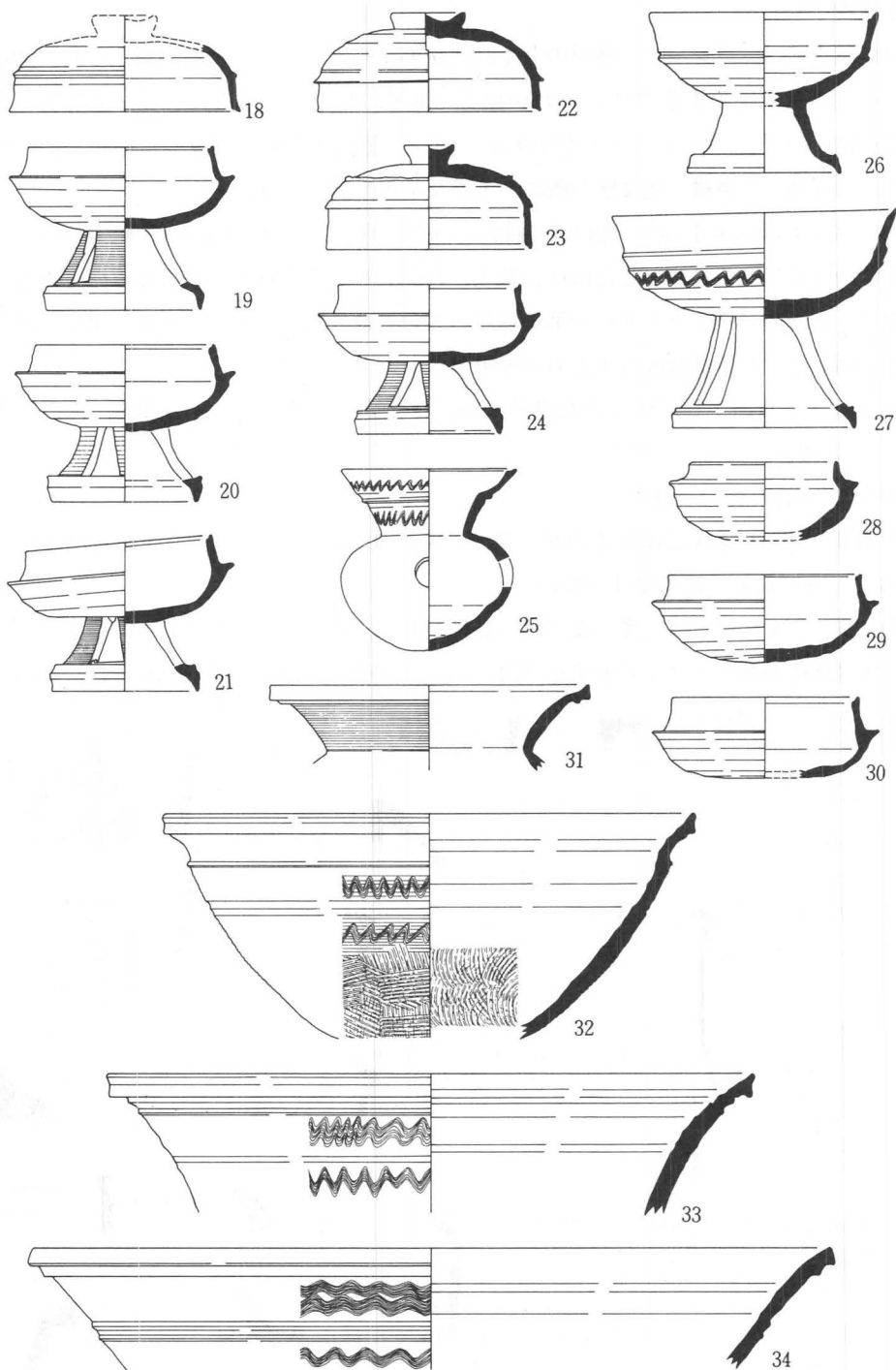
弥生時代の遺物(図1～17)

畿内第III～第IV様式に属するものが、第2遺構面の土壌B・Cと第20層から出土した。第2・第4ピットに比して出土量は少ない。

弥生土器(図1～17)は、甕・壺・鉢・高杯がある。壺は、口縁部を下方に拡張するものである。甕は体部外面をヘラミガキする(図6・8)とハケメで仕上げる(図10・11)がある。

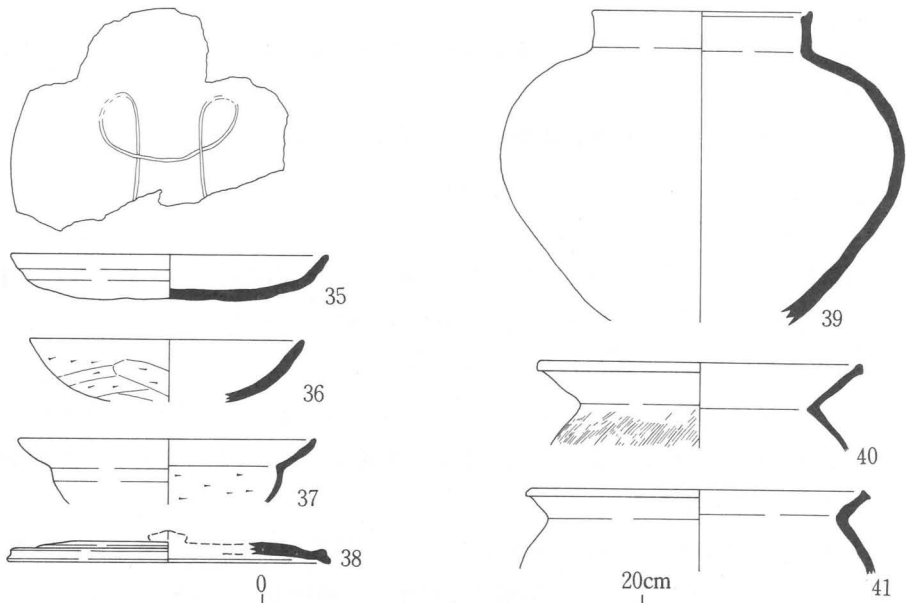


第6図 第1ピット出土弥生土器実測図



0 20cm

第7図 第1ピット出土須恵器実測図



第8図 第1ピット出土土師器実測図

古墳時代の遺物 (図18～34・37・40)

第10～12層中より2次堆積した庄内から布留式に属す土器が少量出土した。いずれも細片で摩滅が激しい。甕(図40)と浅鉢(37)を図示するにとどまる。

第9層から土師器・須恵器・黒色土器などが出土している。特に古墳時代中期後半に比定される須恵器(図18～30)の杯・高杯・甕、完形品ないしそれに近い状態で出土した。同時に、器台や甕も出土した。

このピットの南に連続して調査された第39次調査においても、隣接した狭い範囲から同時期の壺や捏鉢・子持ち壺などがまとまって出土している。上述したように埴輪などの出土から周辺に小形低方墳の存在が考えられる。平安時代の客土の際、調査地近隣に存在する小形低方墳ないしは、これに伴う祭祀土壌などが破壊されそこに収められていた遺物が一括して混入したものと考えられる。

奈良～平安時代の遺物 (図35・36・38・39)

図35・39の土師器皿と壺は、ほぼ完形の状態で出土した。形態から両者とも奈良時代後期に属すと思われる。あるいは、葎骨器ないしは胞衣壺として使用されていたものが混入した可能性も考えられる。

鎌倉時代の遺物

第1遺構面の遺構内などより少量、土師器・須恵器・瓦器などの細片が出土している。図化できるものはない。

2. 第2ピット

第1ピットと桜橋通を隔てた北側に設定した南北7.0 m 東西3.4 mの長方形のピットである。

層序 (第9図)

第1層 耕土 厚さ約20cmで道路開設時に削平を受けているところが多い。

第2層 暗褐色シルト (床土) 厚さ約20cmで耕土と同じく削平されており部分的に残る。
上面のO.Pは3.8 mである。

第3層 黄褐色シルト 厚さ24cmで古墳時代中期後半から平安時代の土器を含む。上面(第1遺構面)で12世紀代のピット・土壌などを検出。平安時代に行われた客土の可能性が考えられる。上面のO.Pは3.6 mである。

第4～第18層 全体の厚さ100cmで砂とシルトからなる。第17・18層は、茶褐色から灰白色の砂層で、庄内式土器・布留式土器の摩滅した土器片が含まれる。古墳時代～弥生時代後期の堆積層。

第19～第21層 全体の厚さ40cmで粘土ないしシルト質粘土からなる。弥生時代後期に堆積したと考えられる土層。第20層は、炭化した植物遺体を多数含む厚さ4cmの暗褐色シルト質粘土層で、水田の可能性が考えられる。第21層は、厚さ20cmの緑灰色粘土層で貝の痕跡やアシの茎・葉などを含む層である。第1ピットの16層と同一である。

第22～第44層 弥生時代中期後半(畿内第IV様式)の土器などを多数含む。次に述べる第45層の傾斜にそって南から北、東から西に向かい下がりながら堆積する。第42・第43層は、溝内の堆積土である。厚さは全体で約1 m。大きく7層に分層できるが上下の層の出土土器に時期差はなく、後述するように畿内第IV様式後半の比較的短い時期に形成されたものと考えられる。なお、上述のように南に12 m離れた第1ピットではこのような状況は認められなかった。

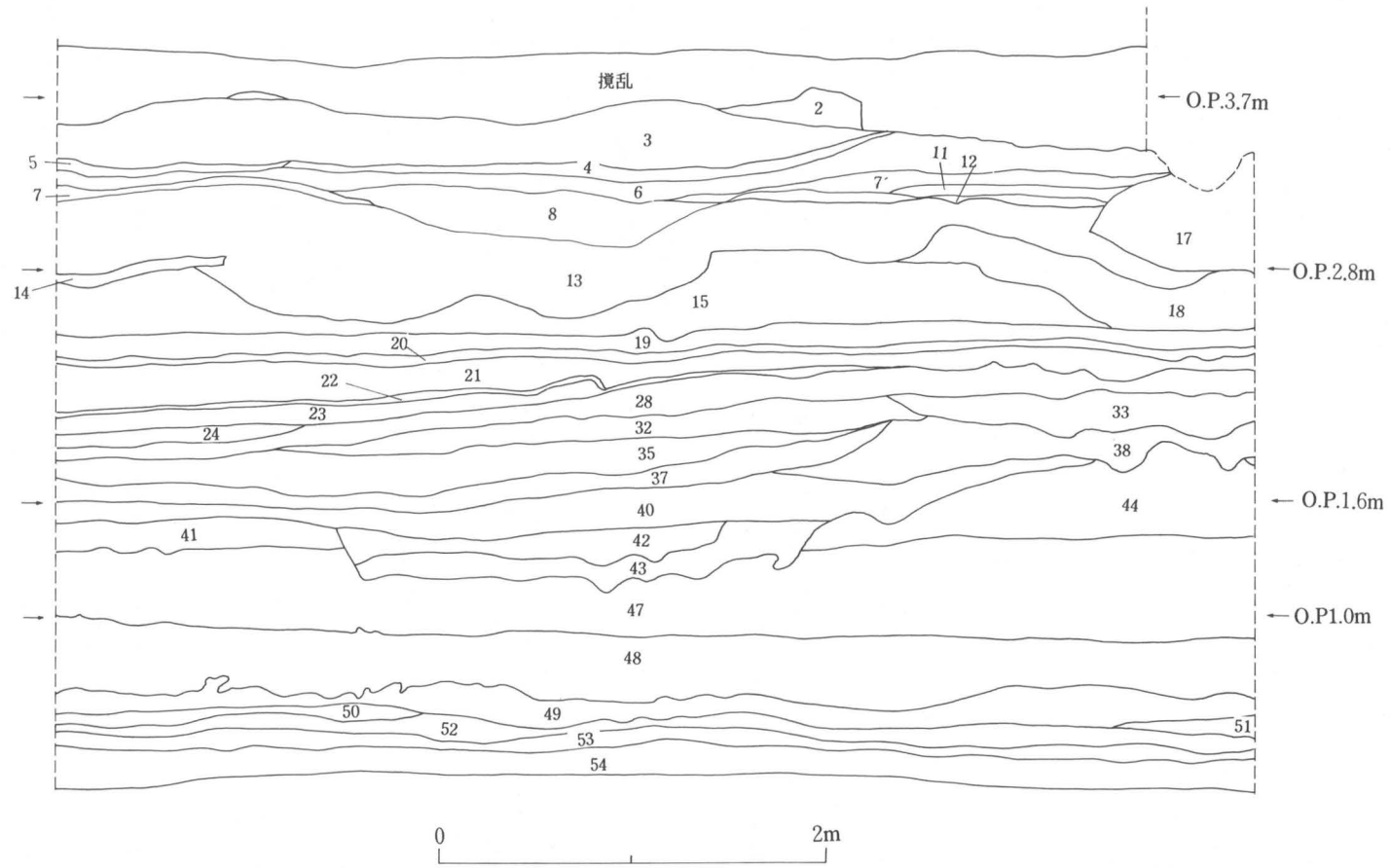
第45層 黄灰色細砂から中粒砂 上面(第2遺構面)で弥生時代中期後半のピット・溝・土壌などを検出。上面のO.Pは1.9～1.5 mである。南から北、東から西に向かい下がり、南端と北端で約40cm、東端と西端で50cmの比高差が認められる。

第47・48層 全体の厚さ50cmで緑灰色シルトから暗緑灰色粘土でアシの葉を多数含む。無遺物層である。47層上面から水平堆積が続く。

第49層 黒灰色粘土 厚さ10cm前後で上面は起伏に富む。河内平野部の地下に一般的に認められる縄文時代晩期から弥生時代前期に堆積したと考えられるアシを多数含んだ層である。層中より弥生時代前期に属す甕が1点、単独で出土した。

第50～53層 灰色シルト質粘土から暗緑灰色粘土である。第49層と同じく平野部で一般的に見られる層である。

第54層 茶灰色細砂～中粒砂 厚さ1 m以上堆積していることを確認した。



第9図 第2ピット土層断面図

遺構

第2ピットで検出した遺構は、弥生時代・中世に属するものがある。以下、古い時期から順に概要を記す。

弥生時代中期の遺構「第2遺構面、図版14・下」

上述のように44層上面で土壌2基・ピット1個・溝1条を確認した。遺構面を形成する黄灰色細砂～中流砂の性格上、遺構が流れやすいためか不明瞭なものが多い。いずれの遺構からも弥生土器が出土している。

土壌

土壌としたが、2基とも調査区外に延びるため溝あるいは性格不明の落ち込みになる可能性も残る。深さは、10～15cmで堆積土は、である。

ピット

南壁断面で確認した。径12cm、深さ26cmで堆積土は、黒灰色シルト質粘土である。

溝

1条の溝を確認した。長さ2m以上、幅1m、深さ0.17mで断面形は逆台形を呈し、北東から南西に走る溝である。堆積土は、上より緑灰色細砂、暗緑灰色シルト質粘土である。少量の弥生土器が出土した。

中世の遺構「第1遺構面、図版15・上」

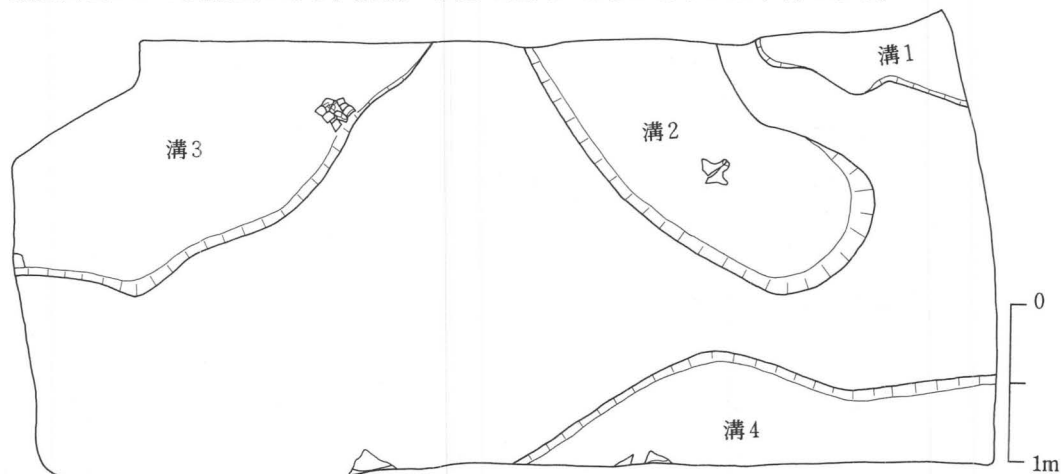
3層上面で土壌2基・ピット14個を検出した。

土壌

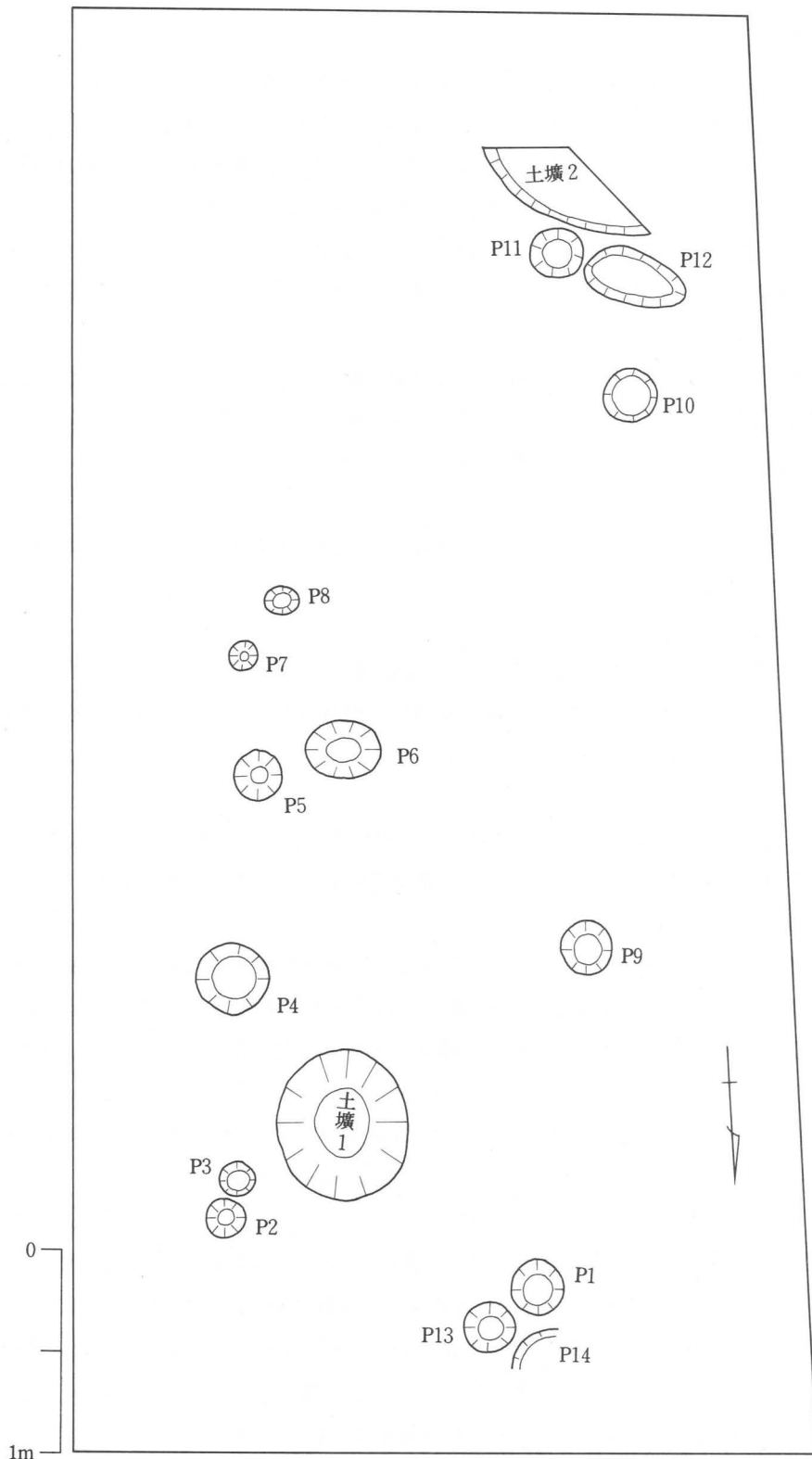
土壌1は、南北に主軸をもつ平面形が楕円形を呈するものである。長軸72cm、短軸60cmで深さは20cmである。断面形は、皿形を呈す。堆積土は、茶灰褐色シルト質粘土である。

ピット

径20～40cmの平面形が円ないし楕円形を呈し、深さ10～15cmのものである。堆積土は、茶灰褐色シルト質粘土である。規模から見て柱穴になるかどうかは不明である。



第10図 第2ピット第2遺構面平面実測図



第11図 第2ピット第1遺構面平面実測図

出土遺物

このピットから出土し図化できた遺物の内訳は、弥生土器（93点）土製品（1点）石器（7点）土師器（10点）須恵器（6点）黒色土器（2点）である。今回の調査では最も多くの遺物が出土した。他に、耕土および床土などから出土した17～18世紀代の丹波焼の播鉢や伊万里焼などがあるが、量も少なく細片のため説明を割愛する。

弥生時代の遺物（図42～136・254～256・259～262）

畿内第IV様式に属す土器と石器が、第2遺構面の溝2・3と第20～44層から出土した。他のピットに比して出土量が多い。

弥生土器（図42～136）は、壺・壺蓋・細頸壺・甕・甕蓋・鉢・台付鉢・水差形土器・高杯などがある。溝と包含層から出土した。溝出土品は量が少ない。溝出土土器を説明した後、包含層（20～44・49層）出土土器を説明する。

溝2出土土器

図136の高杯の脚部が1点図化できた。内面に煤が認められることから高杯が破損した後、甕の蓋として転用されたと考えられる。

溝3出土土器

図118の短頸壺ないし水差形土器、図122の壺底部、図132の甕Bの3点が図示できた。短頸壺ないし水差形土器は口縁部外面に凹線文を施す。甕Bは球形に近い体部をもち外面をヘラミガキで仕上げる。壺底部は、生駒西麓産である。

第49層出土土器

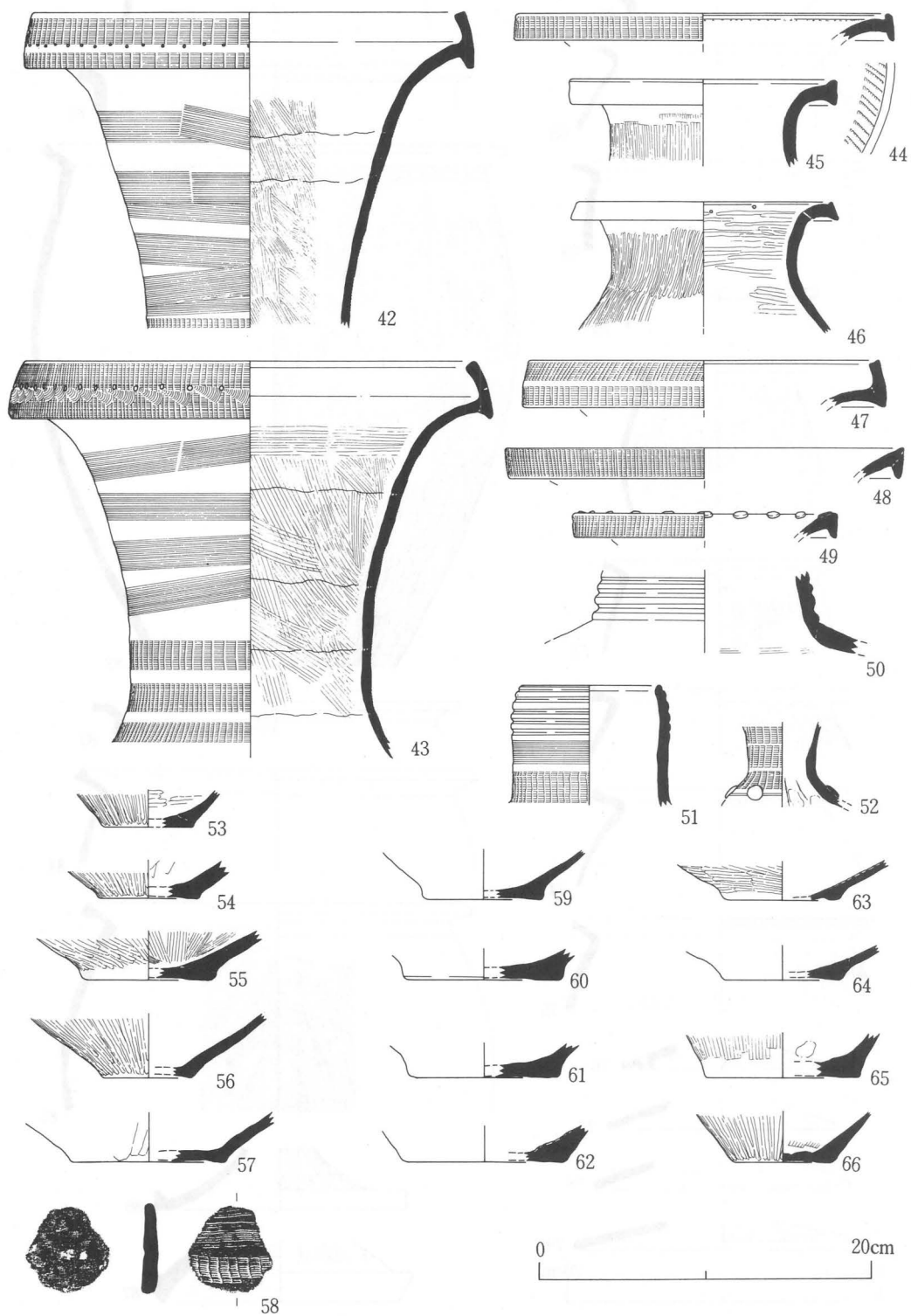
図127は、厚さ10cm前後のアシを多数含んだ黒灰色粘土層から単独で出土した無文の甕である。体部外面をハケメで仕上げる。生駒西麓産で弥生時代前期古段階に属す。

第20～44層出土土器

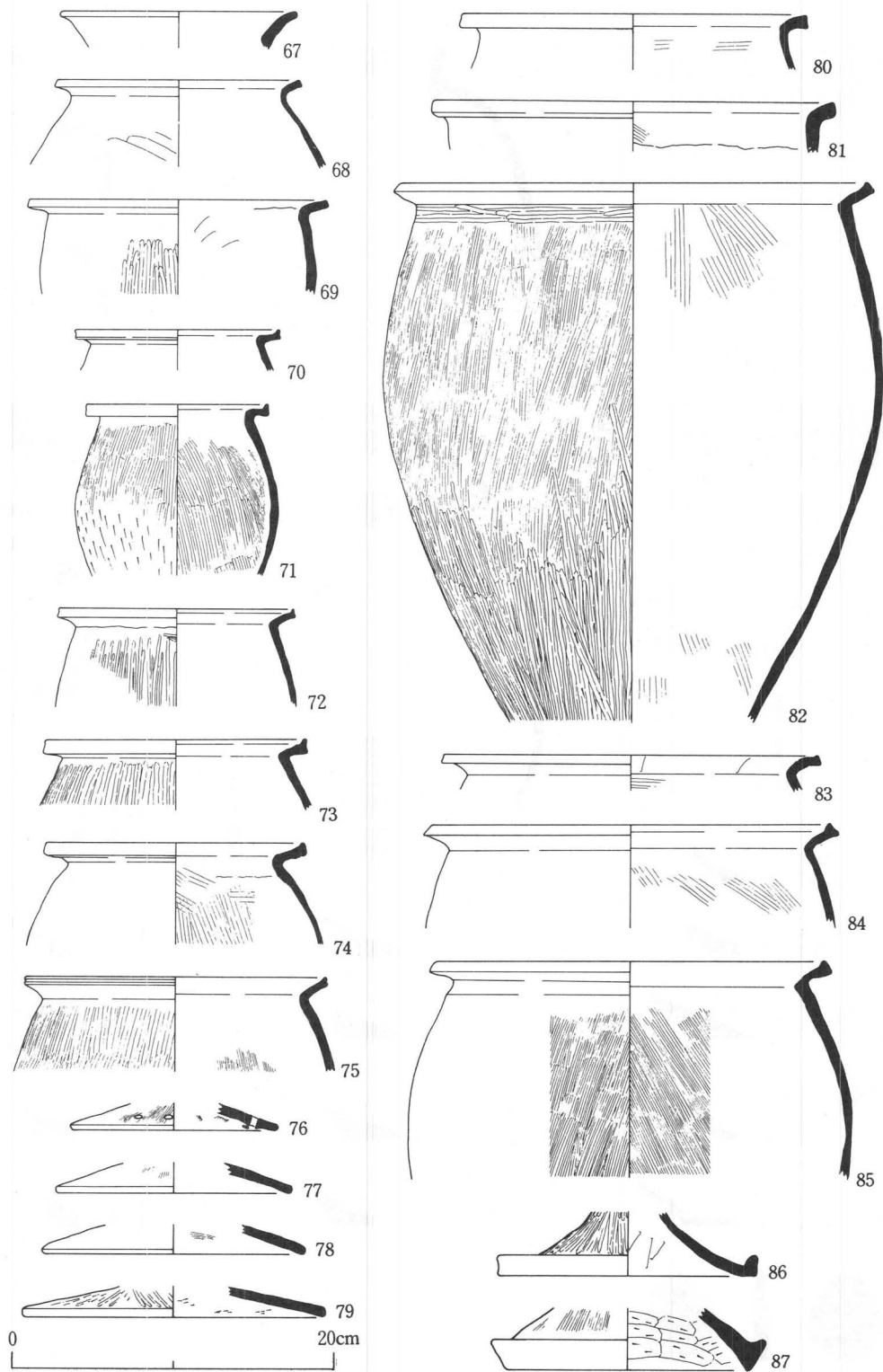
厚さ約1mの第20～44層から出土したもので廉状文を多用するものや、凹線文を施すものが見られる。個々の土器を見れば、第III様式に属すかと思われる古い要素をもつものも見られるが、包含層の上部と下部でいずれも凹線文をもつ土器が存在し、その他でも顕著な差は認められない。

本遺跡の従前の調査成果を参照すれば、ほぼ同時期のもので畿内第IV様式の限られた時期に属すものと考えられる。したがってここでは一括して説明する。

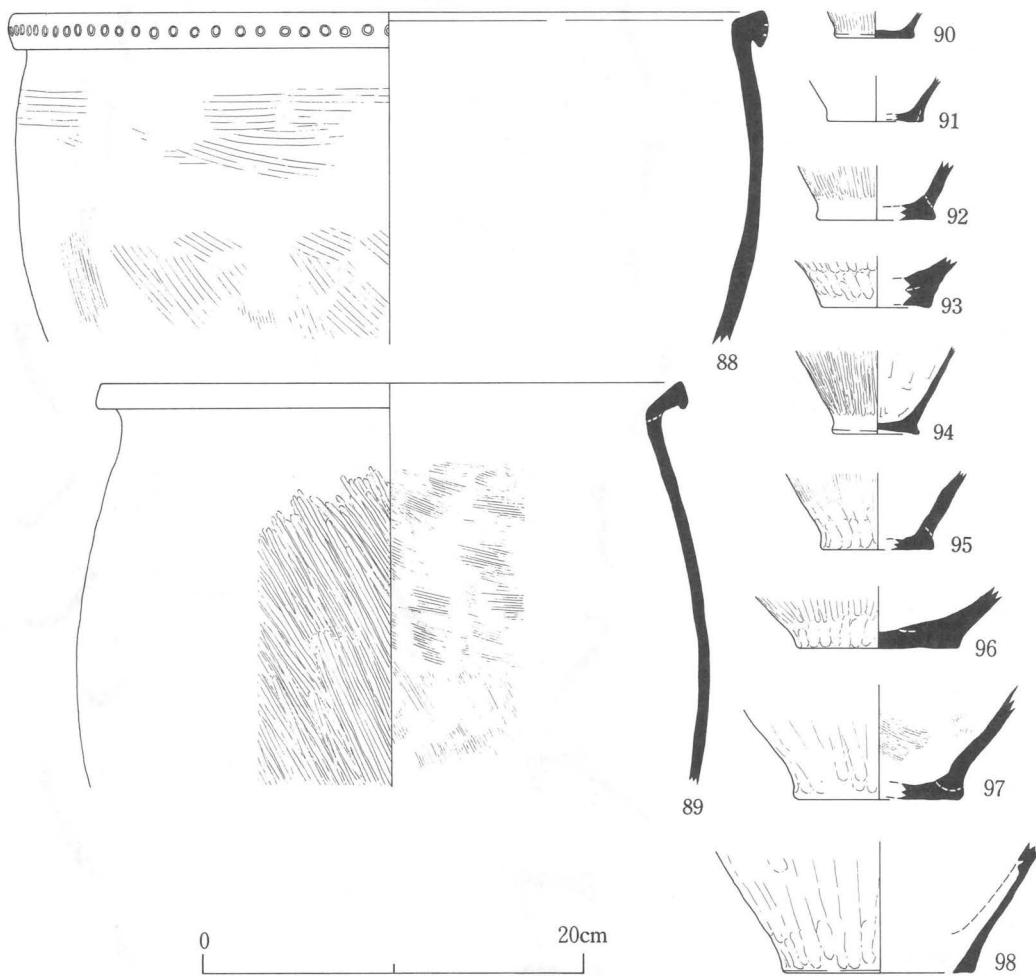
出土した土器の器種は、壺A（3点）・B（3点）・D（1点）E（2点）、細頸壺A（1点）・細頸壺B（1点）・細頸壺（1点）、壺蓋（2点）、甕B（11点）・大型甕B（8点）、甕蓋（4点）・高杯ないし甕蓋（2点）、台付鉢（1点）・台付鉢ないし高杯（4点）・台付鉢ないし台付無頸壺（1点）、鉢A（5点）・鉢B（2点）、水差形土器（2点）、高杯A（3点）脚部（5点）、甕蓋（1点）と壺底部（9点）壺・鉢底部（2点）甕・壺底部（2点）・甕底部（9点）・壺底部（11点）・高杯脚部（2点）計89点が図化できた。うち生駒西麓産は、48点である。



第12図 第2ピット出土弥生土器実測図



第13図 第2ピット出土弥生土器実測図



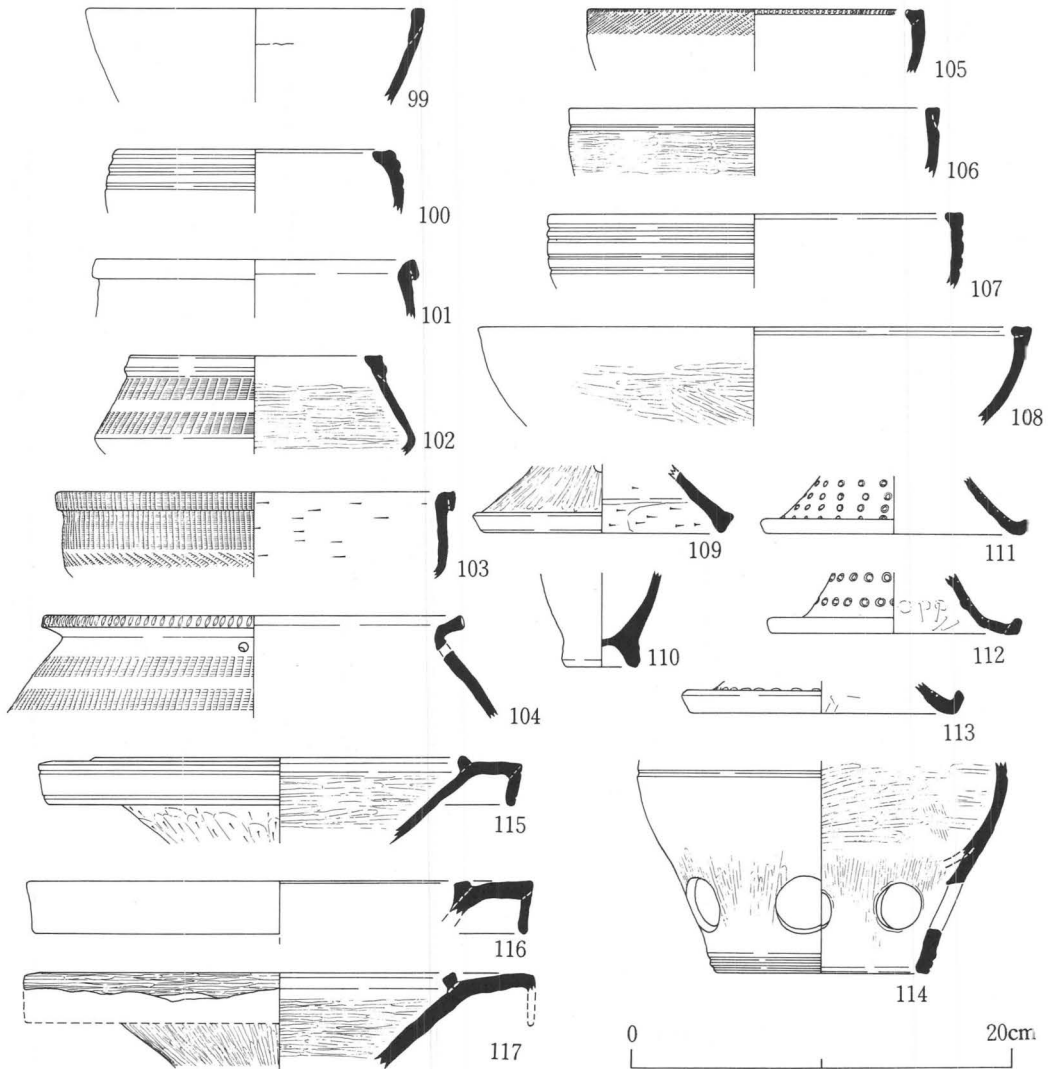
第14図 第2ピット出土弥生土器実測図

壺は図42・43のように幅の広い廉状文や櫛描き直線文で飾るもの他に、図45・46のように無文のものが見られる。また図51のように凹線文と廉状文、櫛描き直線文で飾る無頸壺も存在する。

図120・121は壺蓋である。口縁部に円孔が穿たれている。図121は、内外面ともにハケメを施し、生駒西麓産である。

甕は、図75・85のように外面をハケメで仕上げるものと、図72・73のようにヘラミガキを施すもの、図82のように両方を併用するものなどが見られる。図88の大型甕は口縁部外面に竹管による刺突文を施す。

図76～79・129の甕蓋は、内面に煤が付着する。これら専用で作られるもの以外に、甕の蓋には、破損した高杯あるいは台付鉢の脚部が転用されており煤が内面に付着しているものが多い。



第15図 第2ピット出土弥生土器実測図

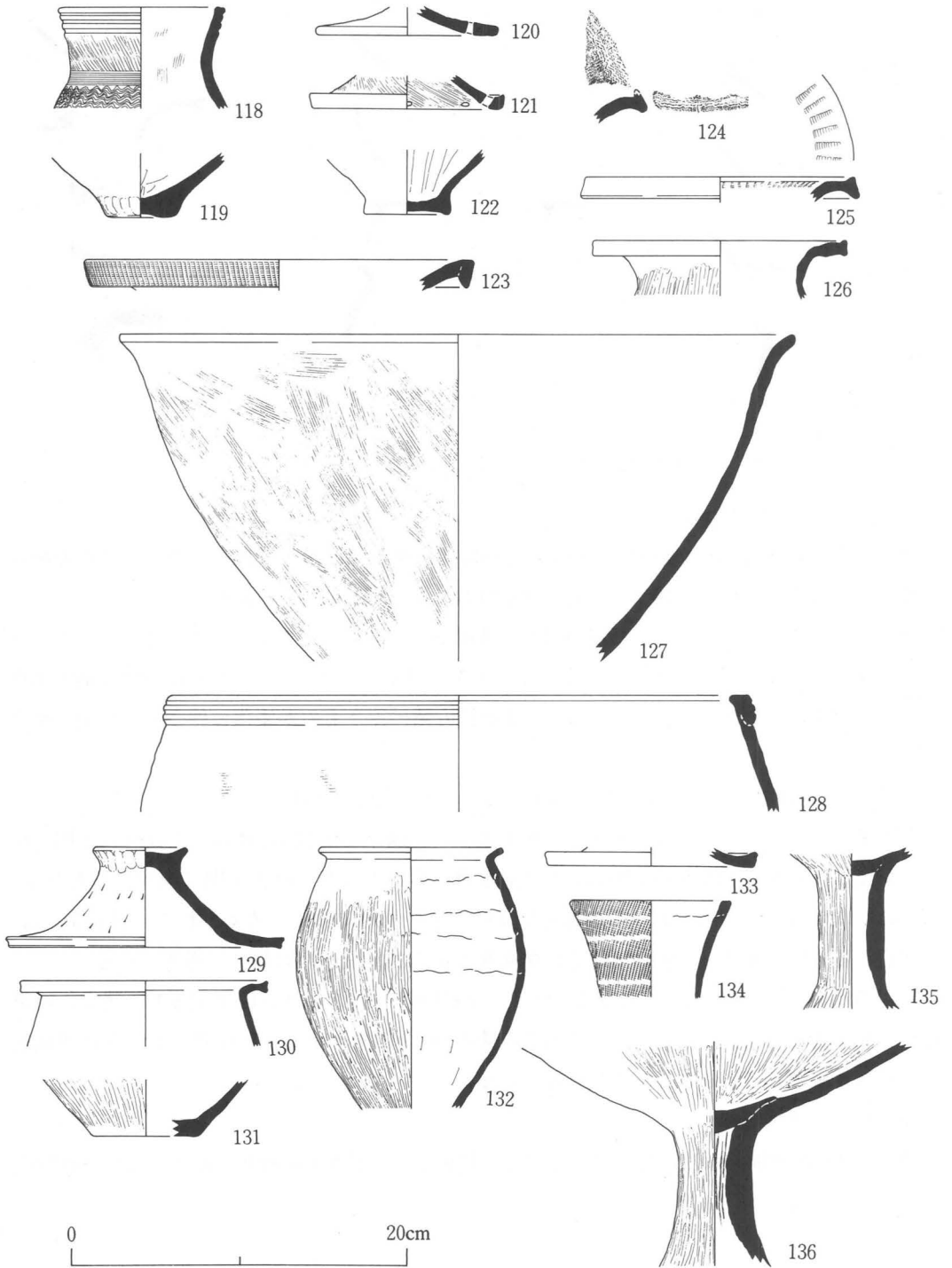
鉢ないしは、台付鉢は壺と同じく図99・106のように無文のものと図102・103のように廉状文で飾るもの、図107のように凹線文を施すものがある。

高杯は、図115のように口縁部に凹線文を施すものがある。図135・136の脚部と杯部の接合は、円盤充填で行われている。

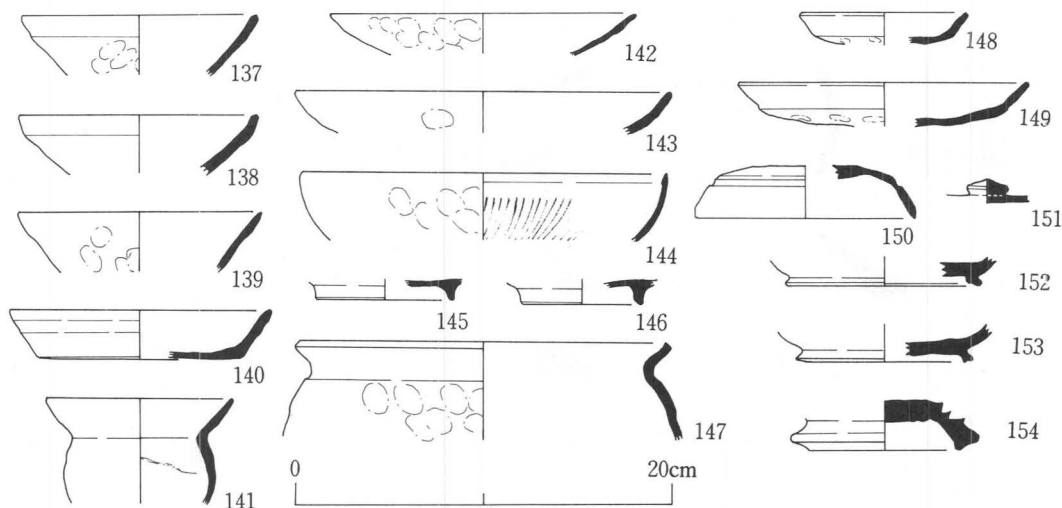
図118・134は、水差形土器と考えられる。外面を図118は凹線文・櫛描き直線文・波状文で図134は廉状文で飾る。

土製円板

図58は図示できた唯一の土製品で、櫛描直線文と廉状文が見られるため壺ないし鉢の転用品と考えられる。周縁部を打ち欠いただけの雑な作りである。



第16図 第2ピット出土弥生土器実測図



第17図 第2ピット出土土師器・須恵器実測図

古墳時代の遺物（図141・150）

第17～18層中より2次堆積した庄内から布留式に属す土器が少量出土した。いずれも細片で摩滅が激しい。布留式に属す小形丸底壺(図141)を図示するにとどまる。

平安時代の客土層と考えられる第3層から土師器・須恵器などが出土している。いずれも細片で、第1ピットで出土したようなまとまった量ではない。わずかに、6世紀中頃に属す須恵器杯蓋(図150)を図示できた。これが、小形低方墳に伴うものか集落に伴うものか明らかではない。

奈良から平安時代の遺物（図137～140・142～149・151～154）

第3層から土師器・須恵器・黒色土器が出土した。図144の土師器鉢は、奈良時代中期に属す。図137～139の土師器杯や図147の土師器甕は形態から奈良時代後期に属すと思われる。図140の須恵器杯や高台をもつ須恵器も奈良時代中～後期に属すと考えられる。図145・146の黒色土器A類の碗は、形態から見て11世紀後半から12世紀前半に属すと考えられる。

土師器小皿(図148)は、いわゆる「て」の字状口縁をもつもので12世紀後半に属す。10世紀代に属す遺物は出土していない。これらの遺物から第3層が平安時代後期にあたる12世紀後半に周辺を破壊して形成されたことが考えられる。

鎌倉時代の遺物

第1遺構面の遺構内などより少量の土師器・須恵器・瓦器などの細片が出土しているが図化できるものはない。

3. 第4ピット

本遺跡の中心に位置すると考えられている寝屋川流域南部下水道小阪ポンプ場の南東に隣接する場所に設定した東西3.4 m南北4.4 mの長方形のピットである。既設のガス管により西半分は、O.Pは1.7 m (G L - 2.2 m) まで攪乱を受けていた。また、この攪乱により土層の沈下が認められた。

層序 (第18図)

第1層 暗褐色シルト 厚さ約20cmである。上面のO.Pは3.0 mである。耕土と床土は、道路開設時に削平を受け存在しなかった。上部に盛土が約1 m認められる。第2ピット第2層に相当する。

第2層 黄褐色シルト質粘土 厚さ18cmで第2ピット第3層に相当するが遺構は検出できなかった。平安時代に行われた客土の可能性が考えられる。上面のO.Pは2.8 mである。

第3～第6層 全体の厚さ34cmで砂とシルトからなる。第3層は、茶褐色砂層である。第2ピット4～18層に相当するが、厚さは1/3程度である。

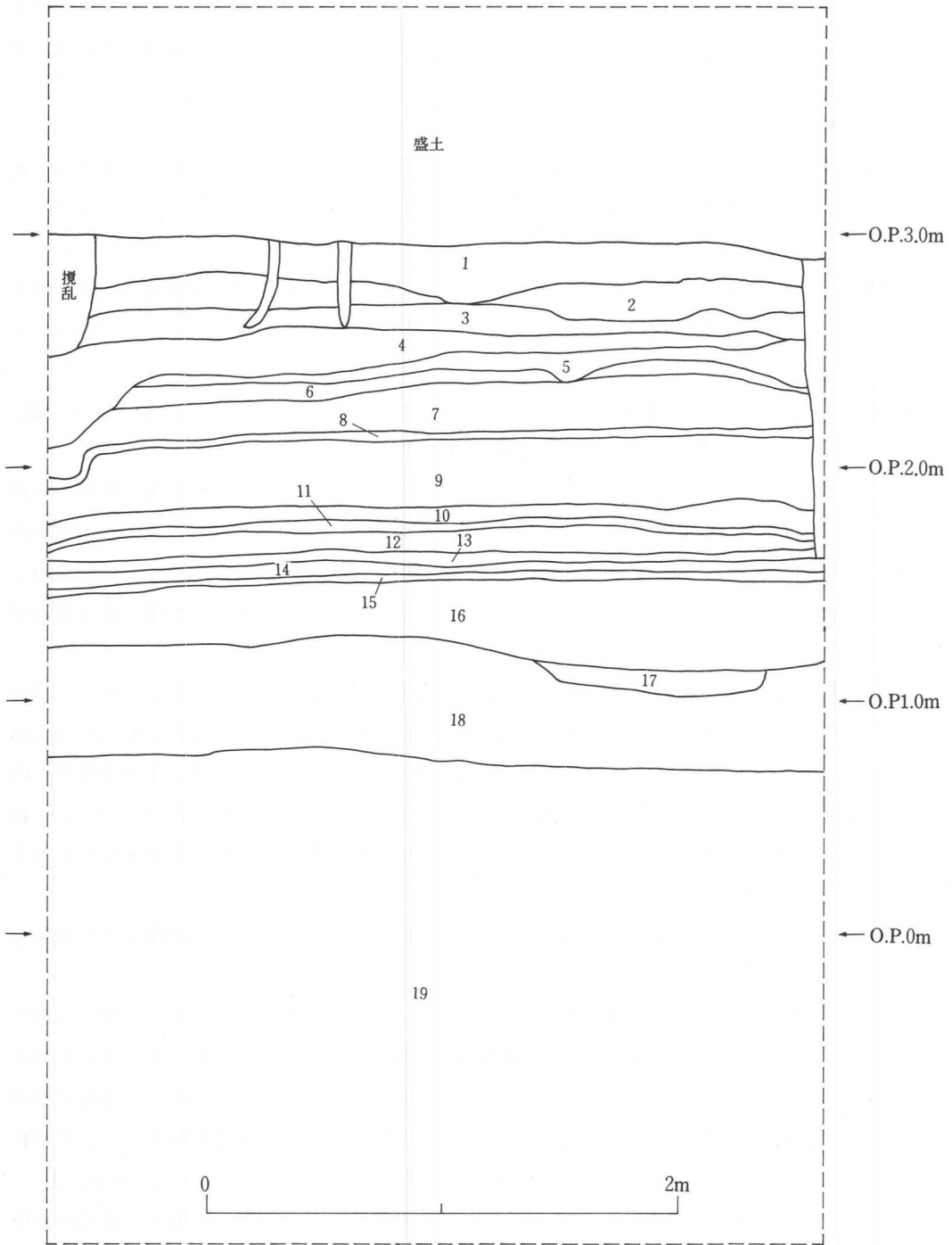
第7～第12層 全体の厚さ80cmで粘土ないしシルト質粘土からなる。弥生時代後期に堆積したと考えられる土層。第8層は、炭化した植物遺体を多数含む厚さ3cmの暗灰色粘土層で、水田の可能性が考えられる。第9層は、厚さ30cmの暗緑灰色粘土層で貝の痕跡やアシの茎・葉などを含む層である。第2ピット19～20層に相当するが上層とは逆に、厚さが2倍となる。

第13～第16層 厚さは全体で約40cm。上から黒灰色粘土、暗灰色粘土、黒灰色粘土、暗青灰色砂質粘土である。いずれの層からも弥生時代中期後半(畿内第IV様式)の土器が出土している。上下の層の出土土器に接合するものが見られる。土器全体でも時期差はなく、比較的短い時期に形成されたものと考えられる。第2ピット22～45層に相当するが、このピットでは後述する18層の堆積の影響を受け各層とも水平堆積に近い。

第17層 黄灰色細砂と青灰色砂質粘土の混合土。最大厚さ10cmで遺構内の堆積土と考えられる。

第18層 黄灰色細砂から中粒砂 厚さ50cmである。第1(23層)・2ピット(44層)に相当する。両ピットでは上面(第2遺構面)で弥生時代中期後半のピット・溝・土壇などを検出したがこのピットからは平面では検出できなかった。しかし、断面で遺構内堆積土と考えられる17層が認められることから本来、遺構が存在したと思われる。上面のO.Pは1.2 mである。上面はわずかな凹凸が認められるが水平堆積に近い。

第19層 灰白色細砂から中粒砂 厚さ210cm以上で無遺物層である。18層とは漸移的で境は明瞭でない。O.P-1.3 mまで確認した。第2ピットで認められた河内平野部で一般的に見られる47～53層は、存在しない。



第18図 第4ピット土層断面図

遺構

上層は、攪乱で明確でなく、下層の弥生時代に属す遺構も不整形なしみこみ状のものが存在したが、明確なものは検出できなかった。遺構面を構成する砂層が遺構を不明確なものとしたと考えられる。

出土遺物

このピットから出土し図化できた遺物の内訳は、弥生土器（98点）石器（3点）である。土師器・須恵器は、量も少なく細片で図化できるものがない。弥生土器に限れば、最も多く出土している。完形ないしは完形近くに復元できたものもある。

弥生時代の遺物（図155～252・253・257・258）

畿内第IV様式に属す土器と石器が、第13～16層から出土した。上述したように上下の層から出土したものに接合するものが見られ、土器全体から見ても時期差がないと考えられるため一括して説明する。

弥生土器（図155～252）は、壺・壺蓋・無頸壺・甕・甕蓋・鉢・台付鉢・水差形土器・高杯などがある。

出土した土器の器種は、壺A（4点）・B（2点）・C（3点）・D（1点）・F（2点）・G（1点）壺（6点）、無頸壺（1点）、壺蓋（2点）、甕A（1点）、甕B（11点）・甕（1点）・大型甕B（5点）、鉢Bないし台付鉢（1点）、台付鉢（2点）・台付鉢ないし高杯（12点）、鉢A（7点）・鉢B（9点）、高杯A（1点）・高杯D（1点）と壺底部（7点）壺・鉢底部（1点）甕・壺底部（9点）・甕底部（7点）・壺底部（5点）計98点が図化できた。うち生駒西麓産は、45点である。

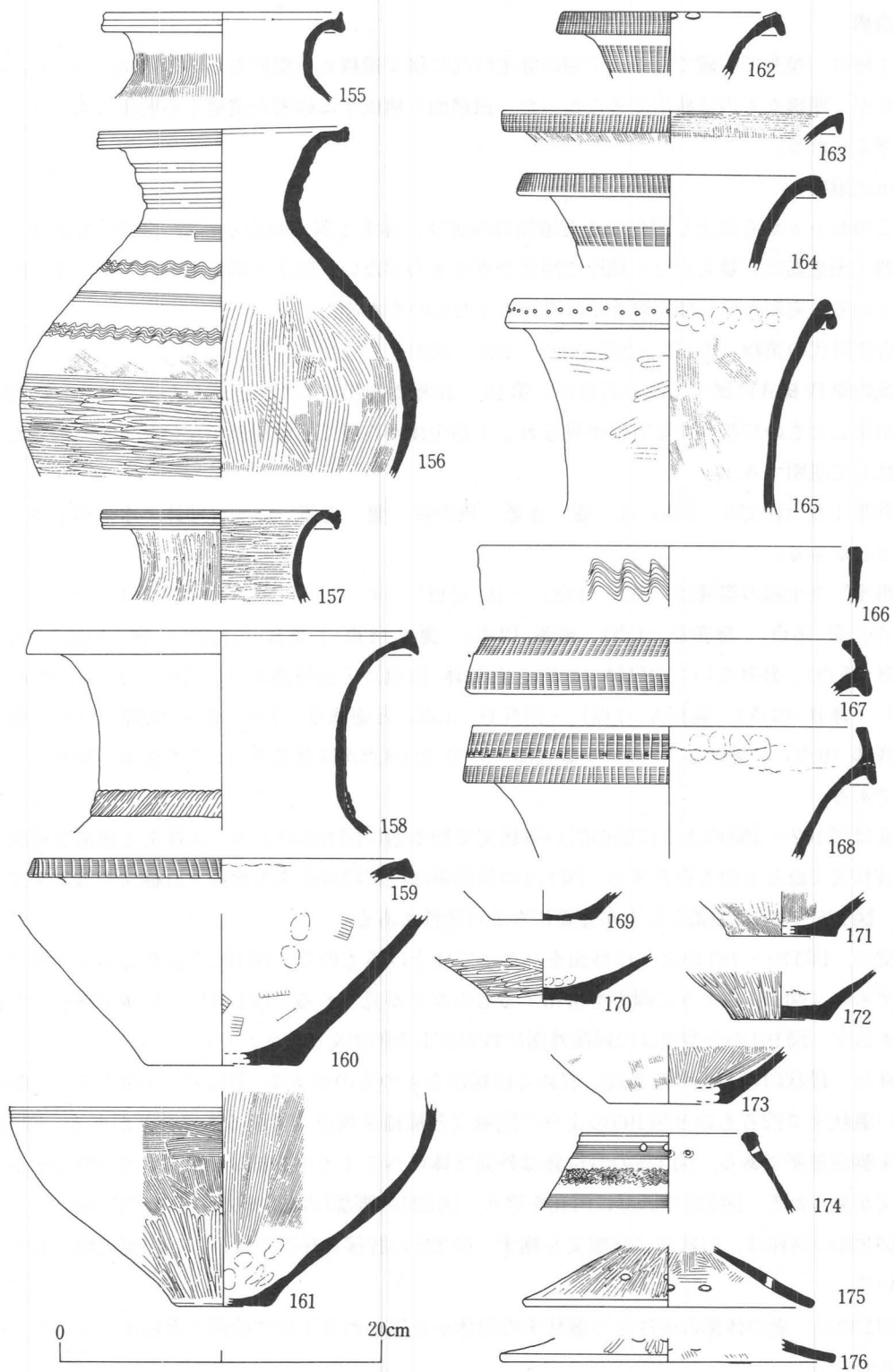
壺は図162・168のように幅の広い廉状文で飾る他に図156のように凹線文と櫛描き直線文や波状文で飾るものも存在する。図174の無頸壺は段状口縁をもち櫛描き直線文や波状文で飾る。図175・176は壺蓋としたが甕蓋になる可能性もある。

甕は、図170・181のように外面をハケメで仕上げるものと、図180のようにヘラミガキを施すもの、図184のように両方を併用するものなどが見られる。図188は、口縁部外面に凹線文を施す。図194の大型甕は口縁部外面に竹管による刺突文を施す。

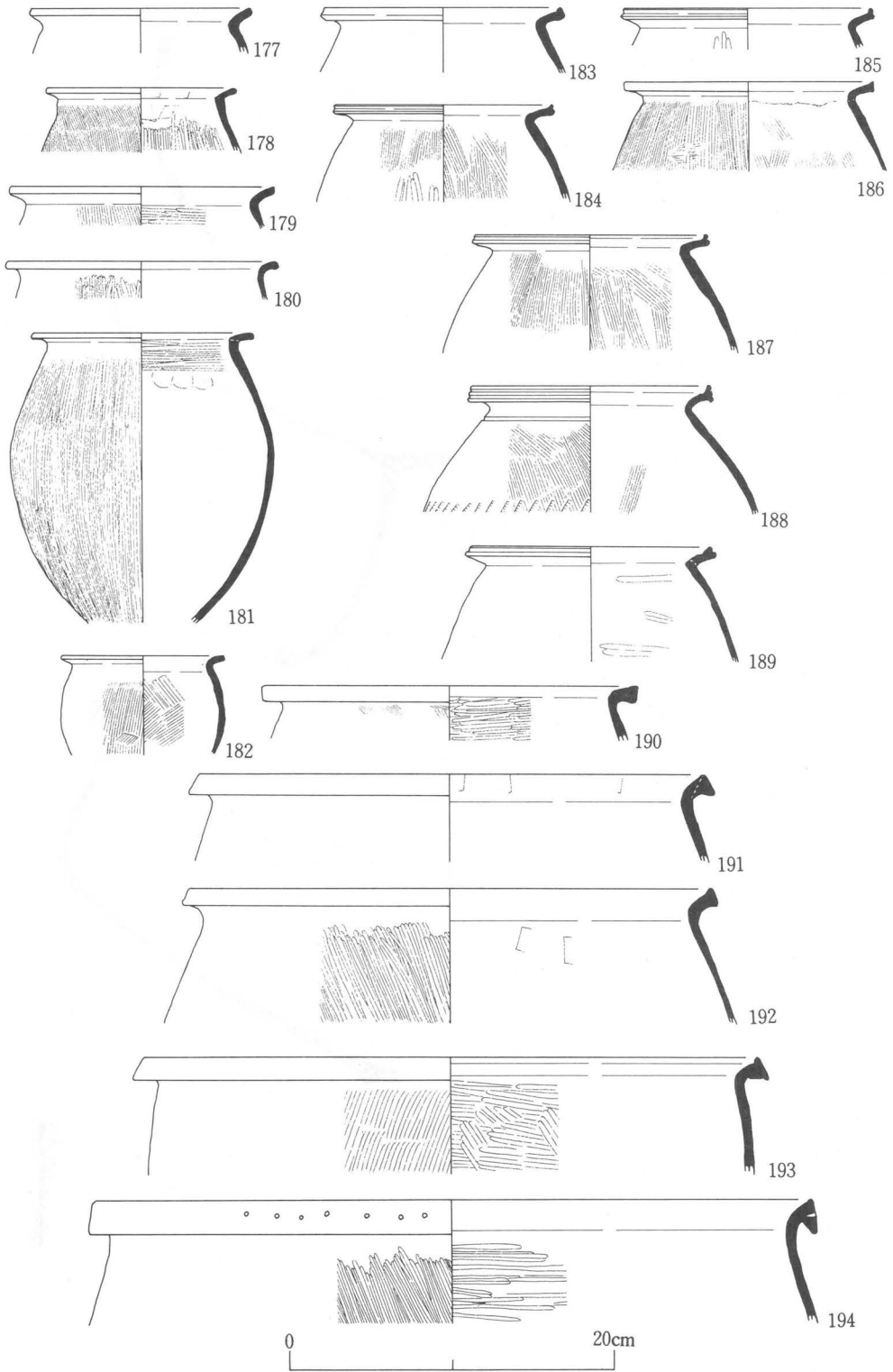
鉢は、段状口縁のものと素直に収める口縁部をもつものがある。図197・199のように幅の広い廉状文で飾るものと図195のように凹線文と櫛描き列点文で飾るものなどがある。図197は生駒西麓産である。図225の台付鉢は外面全体にヘラミガキを施し無文であるが図196は廉状文が見られる。図225は脚部に円孔を穿ち、図226の脚部には凹線文が施されている。

図224の高杯は、口縁部に凹線文を施す。図228の脚部と杯部の接合は、円盤充填で行われている。

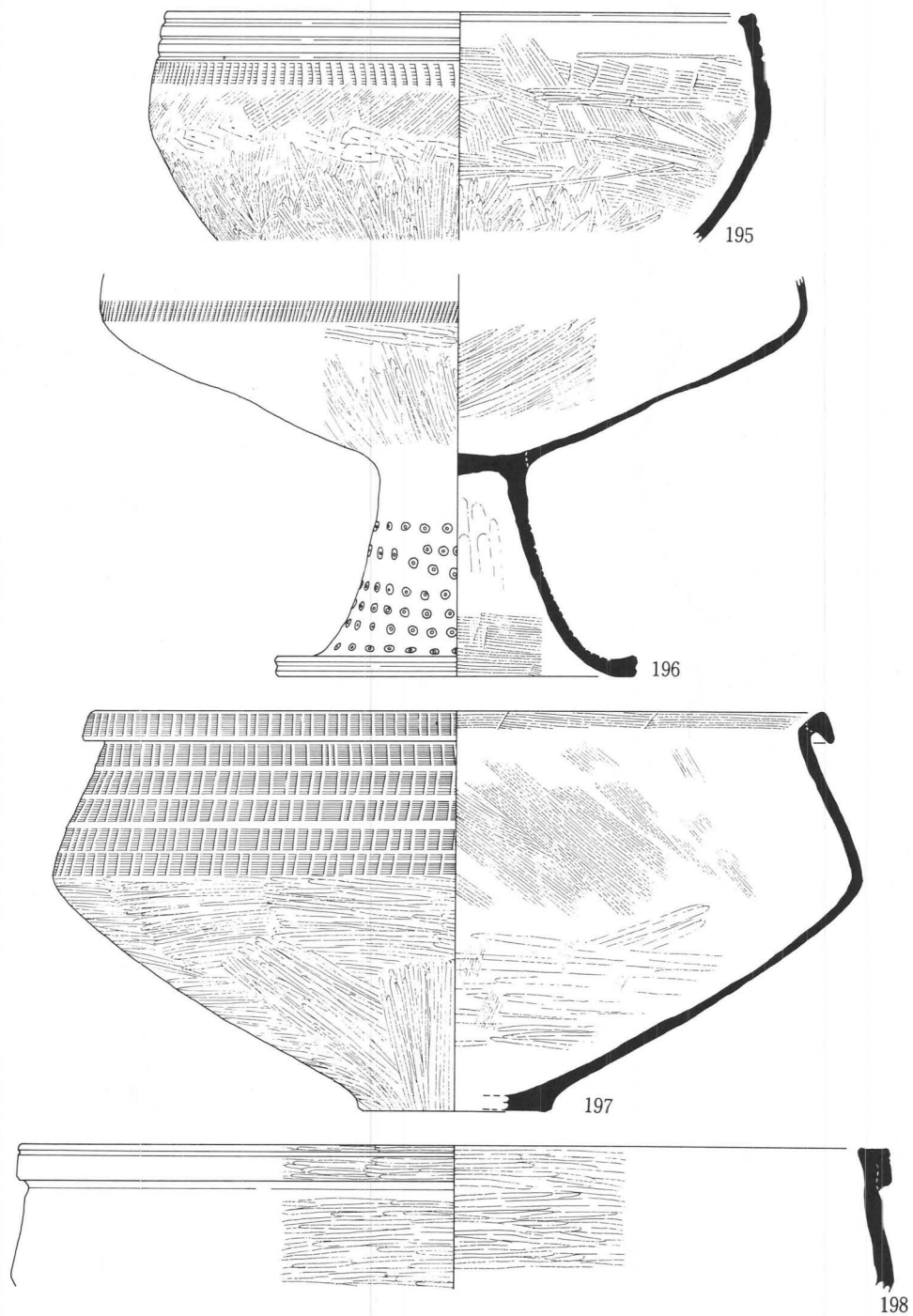
図230は、壺の体部の破片とて廉状文の原体かと思われる工具で絵画文が描かれていたと考えられる。



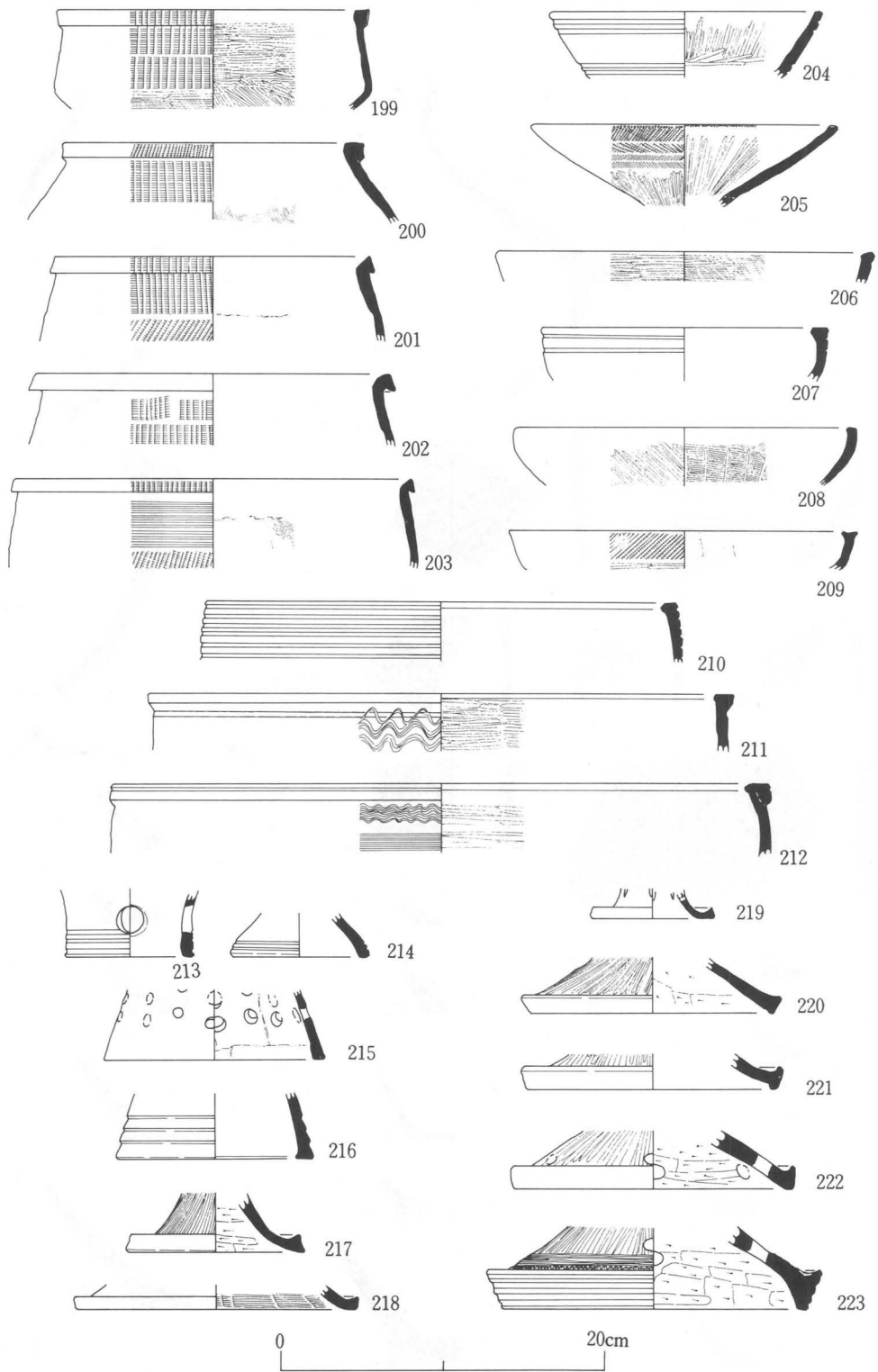
第19図 第4ピット出土弥生土器実測図



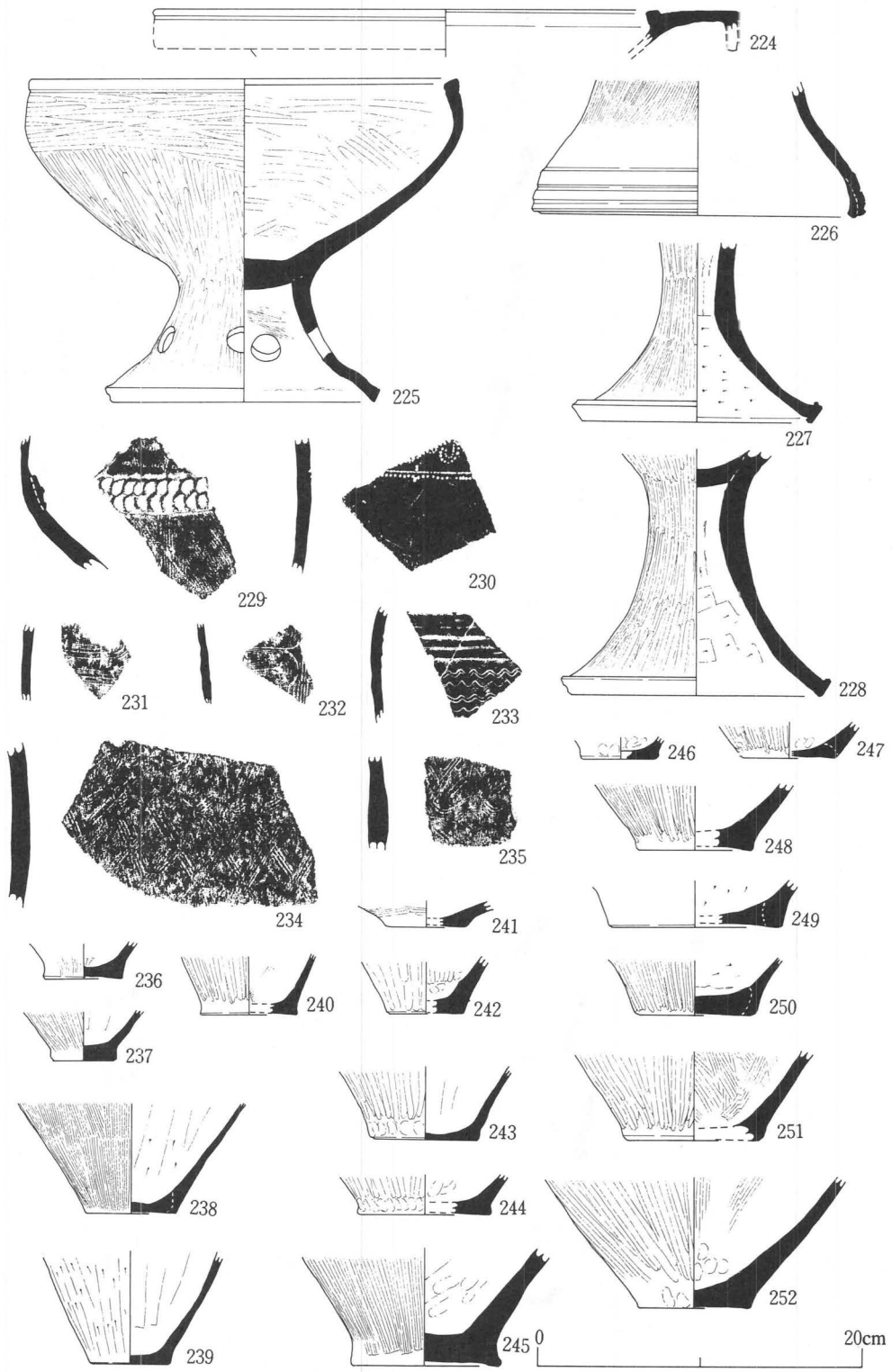
第20図 第4ピット出土弥生土器実測図



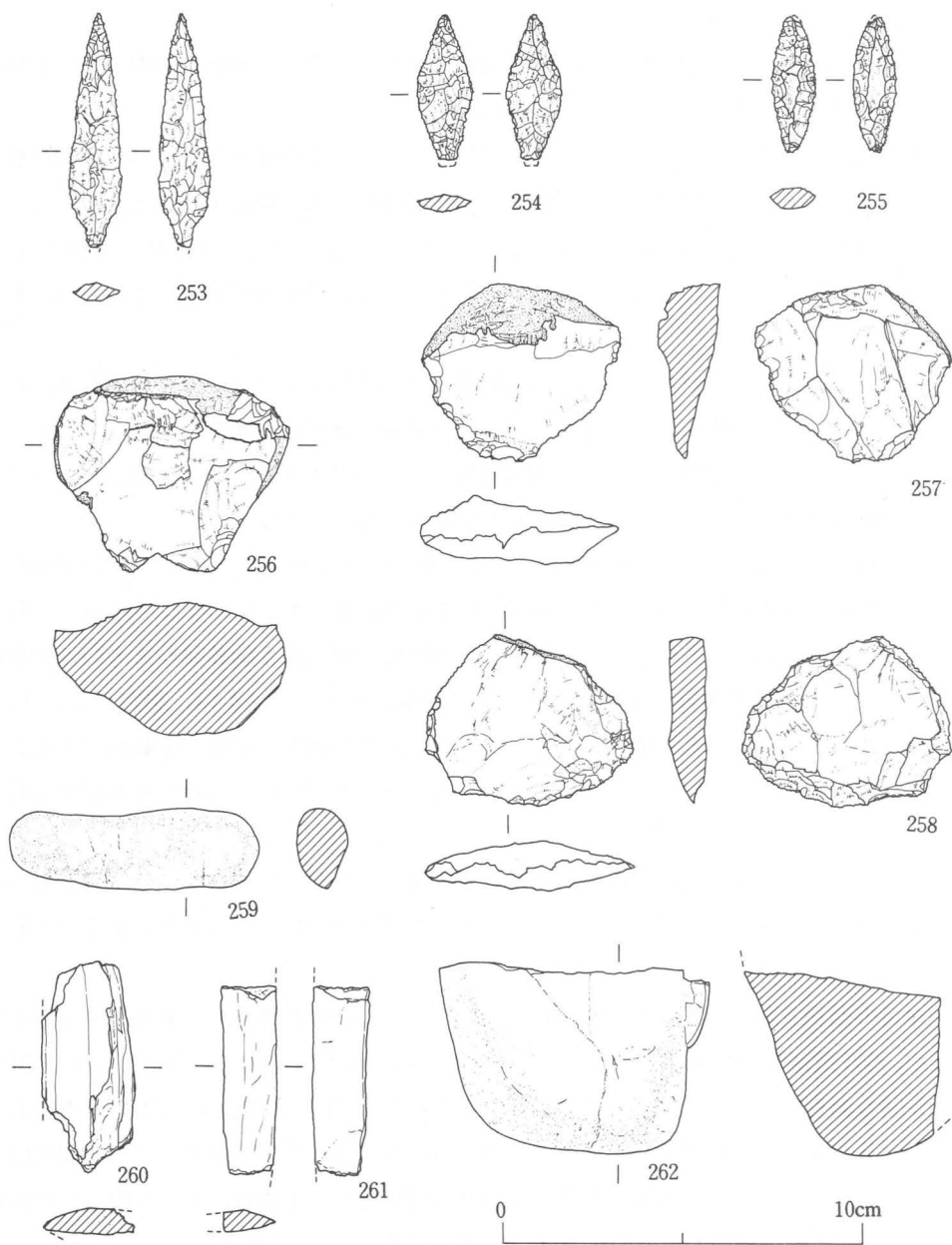
第21図 第4ピット出土弥生土器実測図



第22図 第4ピット出土弥生土器実測図



第23図 第4ピット出土弥生土器実測図



第24図 第2・第4ピット出土弥生時代石器実測図

石器

第2・4ピットの弥生時代の包含層から少量の石器が出土した。内訳は、石鏃3点、石核1点、細部調整薄片2点、用途不明石器1点、石剣2点、砥石1点である。

石剣は細片であるが、石鏃は、3点ともほぼ完形品である。石核が存在することから、本遺跡においても少なくとも石鏃は製作したものと考えられる。

IV まとめ

今回の調査は、下水管理設に伴う小規模な調査であったが多くの事柄が判明した。判明したことを以下、箇条書きにしてこの報告のまとめとする。

1. 本調査地付近で人が活動を開始しだすのは第2ピット第49層から弥生時代前期の甕が単独出土したことから、弥生時代前期の早い時期(畿内第I様式古・中段階)と考えられる。ただし、この時期は、同一層中にアシが多量含まれていることから見てアシ原状の地形であった。従って近くに居住地があったとは考えにくい。おそらく南の若江北遺跡からもたらされたものと考えられる。

2. 従来、調査地付近では弥生時代の方形周溝墓と弥生時代中期後半の住居が存在したことが知られており、この時期の瓜生堂遺跡においては墓域と住居とが明確に別れていなかったと考えられていた。今回の調査では、方形周溝墓検出地点のすぐ東南にあたる第4ピットでも墓に関する遺構は検出しておらず住居地域にあたる部分と考えられる。

3. 弥生時代の遺構面を形成する砂層は、かなり起伏に富んだものであったことが判明した。この起伏が今回の調査ではほぼそのまま検出されており集落の中心部ではない可能性が高い。

4. 第1ピットにおいて平安時代に破壊された小形低方墳に伴う副葬品かあるいは祭祀に用いられたと考えられる須恵器が多量に出土した。埴輪は出土していない。想定が正しければ、埴輪をもたない古墳であった可能性が高い。これは、従前の調査で埴輪が多数出土することから古墳の存在が考えられていたが、近隣に存在した小形低方墳の中でも階層差が認められることを示している。

5. 奈良時代から平安時代前期の遺構は確認できなかったが、胞衣壺ないしは蔵骨器ではないかと考えられる土師器壺と皿が出土した。今後、本遺跡においてこの時期の集落の実態の解明が待たれる。

6. 中世の遺構を第1・第2ピットで検出した。しかし、検出状況からすると中心的な部分ではなく、若江遺跡の縁辺部にあたるという従来からの見解が当を得ていることを示している。

7. 今回の調査で出土した弥生土器は、各ピットともほぼ同じ様相を示し古い要素をもつものも見られるが畿内第IV様式の中に収まると考える。北東50mで実施された第36次調査土壇1出土の土器と比べるとタタキ技法が存在しないため同様式の前半部分にあたる限られた時期の資料と考える。生駒西麓産の土器の多さは、山麓との関係の深さを物語る。

8. 従来、本遺跡においては木製品や石器類の未成品が出土しないことからムラの中で製作していないとの考えが出されていた。今回出土した石器の中に石核が見られることから、少なくとも石鎌などは製作していたと考えてよいのではなかろうか。

9. 小形低方墳に関係すると考えられる須恵器は、第39次調査で出土した子持ち壺などと併せ古墳時代中期後半に属す一括資料と考えられ重要である。今後、この地域の古墳を考える上で参考となろう。

觀 察 表

器形	番号	法量	形態の特徴	技法の特徴	色調	備考
弥生土器	壺A	1	口 16.8 高 (1.7) ○漏斗状にひろがる口縁部をもち、 口縁部は下方に拡張する。	○口縁部拡張面に、円形浮文を貼付ける。 ○内面横方向のヘラミガキ調整、外面ナデ調整を施す。	○内外面共にぶい 黄褐色10YR7/3・ 灰黄褐色10YR 4/2	○第1ビット 第20層
		2		○口縁部拡張面に、円形浮文を貼付ける。 ○内外面共に風化のため詳細不明。	○内外面共にぶい 橙色7.5YR7/4	○第1ビット 第20層
		3	口 29.5 高 (4.0) ○漏斗状にひろがる口縁部をもち、 口縁部は下方に拡張する。	○口縁部に円形の刺突文を施す。 ○内面斜方向のヘラミガキ調整、外面風化のため詳細不明。	○内面にぶい黄褐色 10YR4/3、外面 灰黄褐色10YR 4/2	○第1ビット 第9層断面 ○生駒西麓産
	壺体部	4		○櫛描きの列点文(9/cm)、縹状文(16/1.8cm) に円形浮文を貼付ける。 ○内面体部ナデ調整を施す。	○内面灰黄色2.5Y6 /2、外面にぶい 黄褐色10YR5/3	○第1ビット 第20層 ○生駒西麓産 ○黒斑
	無頸壺	5	○体部から口縁部は直線的につながり、 口縁部は折り返す。 ○口頸部境に円形の紐孔が見られる。	○内面ナデ調整、外面風化のため詳細不明。	○内面にぶい橙色 7.5YR7/4、外面に ぶい橙色7.5YR 7/3	○第1ビット 土壌B
	甕B	6	口 11.8 高 (11.0) ○内弯気味の体部に、鋭く外折する 口縁部。口縁部は面をもつ。	○内面板状工具によるナデのちユビナデ調整、 外面縦方向のヘラミガキ調整のち体部上部 ナデ消す。	○内外面共橙色5Y R6/8・2.5YR7/6、 ぶい褐色7.5YR 5/3	○第1ビット 土壌C ○外面煤付着
		7	口 12.8 高 (2.1) ○「く」の字形に外反する口縁部。	○内面ナデ調整、外面ハケメ(15/cm)調整を 施す。外面磨滅している。	○内外面共にぶい 黄褐色10YR5/4・ 黒褐色10YR2/2	○第1ビット 土壌C ○生駒西麓産
		8	口 15.2 高 (5.3) ○鋭く外折する口縁部。	○内面横方向のヘラミガキ調整、外面縦方向 のヘラミガキ調整を施す。	○内面にぶい橙色 7.5YR6/4、外面 橙色7.5YR6/6・ 褐色10YR4/1	○第1ビット 第20層 ○生駒西麓産
	甕	9	口 14.8 高 (4.1) ○「く」の字形に外反する口縁部。	○内外面共に風化のため詳細不明。	○内面暗灰黄色 2.5Y5/2、外面黄 褐色2.5Y5/3	○第1ビット 第9層 ○生駒西麓産
	大型甕 A	10	口 23.0 高 (6.8) ○やや内傾気味の体部から、「く」の 字形に外反する口縁部。口縁部 は面をもつ。	○口縁部面に刻目、内面体部ハケメ(9/cm) 調整、外面体部縦方向のヘラミガキ調整を 施す。	○内面灰黄色2.5Y 7/2、内面にぶい 黄褐色10YR7/2・ 黒褐色10YR2/2	○第1ビット 第20層
	大型甕 B	11	口 22.8 高 (3.1) ○やや内傾気味の体部から、鋭く外 折する口縁部。口縁部は面をも つ。	○内面ハケメ(4/cm)、外面ハケメ(8/cm)調 整を施す。	○内外面共にぶい 黄褐色10YR6/3 ・6/4	○第1ビット 第20層 ○生駒西麓産
	甕底部	12	底 5.5 高 (3.1) ○平底。	○内外面共にナデ調整を施す。	○内面灰黄褐色10 YR5/2、外面褐色 10YR4/1・ぶい 黄褐色10YR 4/3	○第1ビット 第20層 ○生駒西麓産
		13	底 6.1 高 (3.5) ○上げ底気味の底部。	○内面ナデ調整、外面風化のため詳細不明。	○内面灰白色10YR 8/2・淡褐色5YR 8/3外面淡赤褐色 2.5YR7/4・ぶい 黄褐色10YR7/2	○第1ビット 第20層
		14	底 5.6 高 (2.45) ○やや丸味をもつ底部。	○内面板状工具によるナデ調整、外面縦方向 のハケメ(5/cm)調整を施す。	○内面黒色10YR2/1 外面灰黄褐色10 YR5/2	○第1ビット 第20層 ○黒斑
	甕・壺 底部	15	底 13.1 高 (3.7) ○上げ底気味の底部。	○内面ナデ調整、外面縦方向のヘラミガキ調 整を施す。	○内面黄灰色2.5Y 5/1、外面にぶい 黄褐色10YR7/3・ 灰黄褐色10YR 6/2	○第1ビット 第20層
	壺・鉢	16	○直立気味の口縁部。口縁部は上 方に面をもつ。	○口縁部に3条の凹線文、内面ナデ調整、外 面風化のため詳細不明。	○内面黄灰色2.5Y 5/1・灰黄色2.5Y 6/1、外面灰黄褐 色10YR6/2・褐 灰色7.5YR5/1	○第1ビット 第20層
	高脚 杯部	17	○「ハ」の字形にひろがる脚柱部。	○内外面共に風化のため詳細不明。	○内面にぶい黄褐色 2.5Y5/3、外面 にぶい黄褐色10 YR5/3	○第1ビット 第9層 ○生駒西麓産

表1 遺物観察表

器形	番号	法量	形態の特徴	技法の特徴	色調	備考	
須 惠 器	有蓋 高杯蓋	18	口 13.2 高 (3.8)	○つまみ部欠失。 ○口縁部はやや外反し、口縁端部はわずかに凹面をもって内傾する。 ○天井部と口縁部を界する稜は短くやや鋭い。	○外面天井部1/2に回転ヘラケズリ調整、以外は回転ナデ調整を施す。	○内面暗青灰色5PB4/1、外面暗青灰色5B4/1、断面極暗赤褐色10R2/2	○第1ビット断面第9層一括
	有蓋 高杯	19	口 10.5 高 9.4 裾 8.9	○杯底部は丸く半球形をなし、受部は斜め上方に伸び、受部端部は丸くおさめる。口縁部は内傾し、口縁端部に凹面をもつ。 ○太く短い脚部は「ハ」の字形に外反し、裾部は凹凸を有する段をもつ。長方形スカシ窓を3方にもつ。	○外面杯底部2/3に回転ヘラケズリ調整、脚柱部に回転カキメ調整、以外は回転ナデ調整を施す。	○内外面共灰色N6/断面灰赤色10R4/2	○第1ビット断面第9層一括
		20	口 10.2 高 8.95 裾 8.3	○杯底部は丸く半球形をなし、受部は斜め上方に伸び、受部端部は丸くおさめる。口縁部は内傾し、口縁端部に凹面をもつ。 ○太く短い脚部は「ハ」の字形に外反し、裾部は凹凸を有する段をもつ。三角形スカシ窓を3方にもつ。	○外面杯底部2/3に回転ヘラケズリ調整、脚柱部に回転カキメ調整、以外は回転ナデ調整を施す。	○内面暗青灰色5B4/1、外面青灰色5B5/1	○第1ビット断面第9層一括
		21	口 10.7 高 8.5 裾 8.4	○杯底部は丸く半球形をなし、受部は斜め上方に伸び、受部端部は丸くおさめる。口縁部は内傾し、口縁端部に凹面をもつ。 ○太く短い脚部は「ハ」の字形に外反し、裾部は凹凸を有する段をもつ。三角形スカシ窓を3方にもつ。	○外面杯底部2/3に回転ヘラケズリ調整、脚柱部に回転カキメ調整、以外は回転ナデ調整を施す。	○内外面共青灰色5PB6/1	○第1ビット断面第9層一括
	有蓋 高杯蓋	22	口 12.7 高 5.6	○天井部中央につまみがつき、つまみは中央が凹む。 ○口縁部は直下になり、口縁端部はわずかに凹面をもって内傾する。 ○天井部と口縁部を界する稜は短く鋭い。	○外面天井部に2/3以上の回転ヘラケズリ調整、以外は回転ナデ調整を施す。	○内面暗青灰色5PB4/1、外面暗青灰色5B4/1、断面極暗赤褐色2.5YR3/2	○第1ビット断面第9層一括
		23	口 11.7 高 5.9	○天井部中央につまみがつき、つまみは中央が凹む。 ○口縁部は直下になり、口縁端部はわずかに凹面をもって内傾する。 ○天井部と口縁部を界する稜は短くやや鋭い。	○外面天井部に自然軸付着のため詳細不明。 ○外面つまみ部、口縁部、内面は回転ナデ調整を施す。 ○外面天井部に、重ね焼きの痕が残存する。	○内面青灰色5PB5/1外面オリーブ黒色10Y3/2、断面黒褐色7.5YR3/1	○第1ビット断面第9層一括
	有蓋 高杯	24	口 10.4 高 8.55 裾 8.2	○杯底部は丸く半球形をなし、受部は斜め上方に伸び、受部端部は丸くおさめる。口縁部は内傾し、口縁端部に凹面をもつ。 ○太く短い脚部は「ハ」の字形に外反し、裾部は凹凸を有する段をもつ。三角形スカシ窓を3方にもつ。	○外面杯底部2/3に回転ヘラケズリ調整、脚柱部に回転カキメ調整、以外は回転ナデ調整を施す。	○内面暗青灰色5PB3/1、外面暗青灰色5B4/1、断面極暗赤褐色5YR3/2	○第1ビット断面第9層一括
	觥	25	口 10.0 高 10.3	○短く外反する頸部から、さらに外弯する口縁部、口縁端部に凹面をもち、丸くおさめる。 ○口頸部の境に凸線がめぐる。 ○体部はほぼ球形をなし、底部はやや尖り気味。 ○体部のもっとも張り出したところに円形の孔を穿孔する。	○外面口頸部の凸線上下に波状文を施す。 ○内外面共に回転ナデ調整を行う。	○内外面共オリーブ灰色10Y6/2、断面灰色N7/	○第1ビット断面第9層一括
	無蓋 高杯	26	口 12.9 高 9.15 裾 8.8	○杯部は丸味をもつ底部から、口縁部は外反する。口縁端部は丸くおさめ、内側に段をもつ。 ○脚柱部は「ハ」の字形に外反し、裾部はさらに外弯する、裾端部は直下につまみ上げる。	○杯部外面底部2/3に回転ヘラケズリ調整、以外に回転ナデ調整を施す。 ○体底部と、口縁部の境にふい凸線をもつ。	○内面灰色7.5Y6/1、外面灰白色5Y7/2	○第1ビット断面第9層一括
		27	口 16.3 高 12.3 裾 10.4	○杯部は丸味をもつ底部から、口縁部は外反する。口縁端部はやや尖り気味におわる。 ○脚柱部は「ハ」の字形に外反し、裾部は凹凸を有する段をもつ。三角形スカシ窓を4方にもつ。	○杯部外面底部2/3に回転ヘラケズリ調整、以外に回転ナデ調整を施す。 ○体底部と、口縁部の境にふい凸線をもち、体部に波状文を施す。	○内外面共灰白色N8/、外面自然軸オリーブ灰色10Y6/2	○第1ビット断面第9層一括
杯身	28	口 8.2 高 (4.4)	○丸味をもつ体部から、口縁部は内折する。口縁端部は直上し丸くおさめる。 ○受部は水平にのび、端部はやや丸い。	○外面体部に2/3以上の回転ヘラケズリ調整、以外に回転ナデ調整を施す。	○内面暗青灰色10BG4/1、外面暗青灰色10BG3/1、断面灰赤色7.5R4/2	○第1ビット断面第9層	
	29	口 11.0 高 5.05	○丸味をもつ体底部から、口縁部は内傾する。口縁端部に凹面をもつ。受部は水平に伸び、受部端部は尖る。	○外面体底部に回転ヘラケズリ調整、以外に回転ナデ調整を施す。	○内外面青灰色5B5/1、外面自然軸灰白色7.5Y7/2	○第1ビット断面第9層	
	30	口 10.6 高 (4.55)	○ほぼ平らな底部から、口縁部は内傾する。口縁端部に凹面をもつ。受部は水平に伸び、受部端部は尖る。	○外面体底部に回転ヘラケズリ調整、以外に回転ナデ調整を施す。	○内外面共灰色N5/	○第1ビット断面第9層	
甕	31	口 18.2 高 (4.85)	○「く」の字形に外折する口縁部、口縁端部に凸線がめぐる。また口縁端部内面には凹面がみられる。	○外面頸部に回転カキメ調整、以外に回転ナデ調整を施す。	○褐色灰色5YR5/1、外面灰色7.5Y5/1	○第1ビット断面第9層	
器台	32	口 30.4 高 (12.7)	○脚部欠失。 ○外弯しながら上方へむかう深さのある体底部から、口縁部は屈曲し外反する。口縁端部に凸線がめぐる。丸くおさめる。 ○口体部の境に凸帯がめぐる。	○外面体部上位に、回転カキメ調整のち波状文、体底部内外面に同心円文タタキ調整、以外に回転ナデ調整を施す。	○内面灰色N5/1、外面暗青灰色5B3/1	○第1ビット断面第9層	

器形	番号	法量	形態の特徴	技法の特徴	色調	備考	
須恵器	大型甕	33	口 36.8 高 (8.1)	○外反しながら口縁部につづく。口縁端部に3本の凸線がめぐる。	○外面口頸部に2帯の波状文、以外は回転ナデ調整を施す。	○内面暗青灰色5BG4/1、外面暗青灰色5BG3/1	○第1ビット断面第9層一括
		34	口 45.6 高 (6.95)	○外反しながら口縁部につづく。口縁端部とその下方に凸線がめぐる。	○外面口頸部の凸線上下に波状文、以外は回転ナデ調整を施す。	○内断面暗赤灰色2.5YR3/1、外面暗青灰色5B4/1	○第1ビット断面第9層一括
土師器	皿	35	口 26.8 高 2.3	○平底の底部から、屈曲して外上方にひろがる口縁部。口縁端部は丸くおさめる。	○外面口縁部2回ヨコナデ調整、底部ユビ調整。内面底部に螺旋状の暗文を施す。	○内外面共橙色5YR6/6	○第1ビット断面第9層
		36	口 14.2 高 (3.3)	○丸味をもつ体部から、そのまま外方にひろがる口縁部。口縁端部は丸くおさめる。	○外面口縁部ヨコナデ調整、体部ヘラケズリ調整、内面ナデ調整を施す。	○内面黒色10YR2/1 外面にぶい橙色5YR7/4・淡黄色2.5Y8/3	○第1ビット第9層
	浅鉢	37	口 15.45 高 (3.5)	○丸味をもつ体部から、屈曲して外弯する口縁部。口縁端部はやや丸くおさめる。	○内外面共口縁部ヨコナデ調整、内面体部横方向のヘラミガキ調整、外面体部風化のため詳細不明。	○内面灰白色2.5Y8/2・灰黄色2.5Y7/2・灰白色2.5Y8/1	○第1ビット第12層断面 ○生駒西麓産2.5Y7/1
須恵器	杯蓋	38	口 16.9 高 (1.1)	○丸味をもつ平らな天井部から、彎曲してさらに下方に屈曲し、つまみだしたような口縁部をもつ。口縁部に稜をもつ。	○内外面共に回転ナデ調整を施す。	○内面灰黄褐色10YR6/2、外面灰黄色2.5Y7/2・灰白色2.5Y8/1	○第1ビット第9層
土師器	有蓋短頸壺	39	口 11.4 高 (16.4)	○底部欠失。 ○体部上半分1/3に最大径をもつ肩部から、体部下半はなだらかにすばまる。 ○口頸部は直立し、口縁端部は内面に凹面をもつ。	○内外面共に風化のため詳細不明。	○内外面共橙色5YR6/6	○第1ビット断面第9層
	甕	40	口 16.9 高 (4.65)	○鋭く「く」の字形に外折する口頸部。口縁端部は丸くおさめる。	○内外面共口縁部は板状工具によるナデ調整、内面体部横方向のケラケズリ調整、外面体部縦方向のハケメ(7/cm)調整を施す。	○内面灰白色2.5Y8/2・灰色5Y4/1、外面灰白色10YR8/2・灰色5Y6/1	○第1ビット第11層 ○生駒西麓産
		41	口 17.4 高 (4.55)	○「く」の字形に丸味をもって外反する口縁部。口縁端部は面をもつ。	○内外面共口縁部はヨコナデ調整、内面ナデ調整、外面風化のため詳細不明。	○内面橙色7.5YR6/6・ぶい褐色7.5YR5/4、外面明赤褐色5YR5/6	○第1ビット第9層
弥生土器	壺B	42	口 25.6 高 (19.0)	○筒状の頸部から、外反する口縁部をもち、口縁端部は上下に拡張する。口縁端部上方に面をもつ。	○口縁端面に2帯からなる櫛描簾状文(17/1.7cm)、長い頸部に櫛描直線文(同原体)と簾状文、内面頸部にハケメ(7/cm)調整を施す。内面やや磨滅している。	○内面灰色5Y5/1、外面にぶい橙色5YR6/3	○第2ビット第28層東壁断面・第35層 ○生駒西麓産
		43	口 27.0 高 (23.9)	○筒状の頸部から、外反する口縁部をもち、口縁端部は上方に拡張する。口縁端部上方に面をもつ。	○口縁端面に2帯からなる櫛描簾状文(15/1.7cm)とその間に扇形文と円形刺突文を穿つ。長い頸部に櫛描直線文(同原体)と簾状文、内面頸部にハケメ(5/cm)調整を施す。	○内面灰黄色2.5Y4/1、外面灰黄色2.5Y6/2	○第2ビット第35層 ○生駒西麓産
	壺D	44	口 22.3 高 (1.65)	○外反する口縁部に、口縁端部はわずか上下に肥厚する。	○外面口縁端面に櫛描簾状文(8/cm)、内面口縁部に櫛描点文(同原体?)が施される。	○内面灰白色2.5Y8/2、外面にぶい黄褐色10YR7/3	○第2ビット第35層
	壺E	45	口 16.0 高 (5.3)	○短い筒状の頸部に、外反する口縁部。口縁端部はわずかに上下に肥厚する。	○内面ナデ調整、外面頸部縦方向のハケメ(11/1.4cm)調整を施す。	○内面灰黄褐色10YR6/2、外面灰黄色2.5Y6/2	○第2ビット第35層
		46	口 15.4 高 (8.0)	○短い筒状の頸部に、外反する口縁部。口縁端部はわずかに上下に肥厚する ○口縁部に蓋を覆じるための円形の紐孔を穿つ。	○内面横方向、外面縦方向のハケメ(4/cm)調整を施す。	○内面にぶい黄褐色10YR6/3、外面灰黄褐色10YR5/2	○第2ビット七半第32層 ○生駒西麓産
	壺B	47	口 21.0 高 (2.85)	○外反する口縁部に、上方に拡張する口縁部。	○外面口縁端面に2帯の櫛描簾状文(9/1.2cm)、外面頸部ヘラミガキ調整、内面ヨコナデ調整を施す。	○灰黄褐色10YR5/2・4/2、外面灰色5Y5/1・黄褐色2.5Y4/1・黒褐色2.5Y3/1	○第2ビット第35層・断面第29層 ○生駒西麓産
	壺A	48	口 23.6 高 (1.8)	○外反する口縁部に、口縁端部は下方へ拡張する。	○口縁端面に櫛描簾状文(10/cm)、口縁部内外面共にヨコナデのちナデ調整を施す。	○内外面共にぶい黄褐色10YR6/3、ぶい黄褐色10YR5/3	○第2ビット第35層 ○生駒西麓産
		49	口 15.4 高 (1.6)	○外反する口縁部に、口縁端部は下方へ拡張する。	○口縁端面に櫛描簾状文(8/cm)、口縁部内面に円形浮文を貼り付ける。	○内面にぶい黄褐色10YR5/3、外面にぶい黄褐色10YR5/4・灰黄褐色10YR4/2	○第2ビット第35層 ○生駒西麓産

器形	番号	法量	形態の特徴	技法の特徴	色調	備考	
弥生土器	細頸壺 B	50	○口縁部、体底部欠失。	○外面頸部境に凹線文、体部は風化のため詳細不明。内面ハケメ調整のちナデ調整を施す。内面磨減している。	○内外面共にぶい黄褐色 10YR6/3・7/3	○第2ビット南半第28層・第35層	
	細頸壺 A	51	口 8.2 高 (7.2)	○細長い筒状の頸部に、口縁部は内湾しておわる。	○外面口縁部に5条の凹線文、櫛描直線文(12/1.4cm)、櫛描簾状文(同原体?)が施されるが、磨減している。内面はナデ調整を行う。	○内外面共にぶい橙色 7.5YR7/3・橙色 7.5YR6/6	○第2ビット第35層東壁断面
	細頸壺	52	○口縁部、体底部欠失。	○外面頸部から体部に櫛描簾状文(8/cm)と円形浮文を貼り付け、内面頸部にナデ調整、頸部体部境にはシボリメが見られる。	○内面暗灰黄色 2.5Y5/2、外面にぶい黄褐色 10YR5/3・黒褐色 10YR2/2	○第2ビット南半第28層 ○生駒西麓産	
	壺底部	53	底 5.1 高 (2.2)	○平底。	○外面縦方向、内面体部横方向のヘラミガキ調整、内外面底部ナデ調整を施す。	○内面浅灰色 2.5Y7/3、外面灰黄褐色 10YR5/2	○第2ビット第35層 ○黒斑
		54	底 5.8 高 (2.3)	○上げ底の底部。	○外面縦方向のヘラミガキ調整、内面板状工具によるナデ調整を施す。	○内外面共にぶい黄褐色 10YR6/3	○第2ビット北半第32層 ○外面煤付着
		55	底 7.3 高 (2.9)	○上げ底の底部。	○外面斜方向のヘラミガキ調整、内面縦方向のハケメ調整を施す。内外面とも磨減している。	○内面黄褐色 2.5Y5/3、外面にぶい黄褐色 10YR5/3	○第2ビット第35層 ○生駒西麓産
		56	底 5.3 高 (3.9)	○上げ底の底部。	○外面縦方向のヘラミガキ調整、内面ナデ調整を施す。外面磨減している。	○内面灰白色 2.5Y8/2、外面にぶい黄褐色 10YR7/2	○第2ビット第35層
		57	底 9.0 高 (3.0)	○やや上げ底の底部。	○外面縦方向のヘラミガキとヘラケズリ調整、内面ナデ調整を施す。	○内面にぶい黄褐色 10YR7/2・7/3、外面灰黄褐色 10YR6/2	○第2ビット北半第32層
	土製板	58	縦横厚 5.2 5.2 0.9	○壺ない鉢の転用品。周縁を打ち欠いただけの簡単なつくりである。	○外面櫛描直線文(13/1.6cm)と櫛描簾状文、内面横方向のナデ調整を施す。	○内外面共灰黄褐色 10YR4/2・にぶい黄褐色 10YR4/3	○第2ビット第35層 ○生駒西麓産 ○黒斑
	壺底部	59	底 6.9 高 (3.0)	○上げ底の底部。	○内外面共に風化のため詳細不明。	○内面にぶい褐色 7.5YR5/3、外面暗灰黄色 2.5Y4/2	○第2ビット第35-38層 ○生駒西麓産
60		底 9.0 高 (1.9)	○上げ底の底部。	○内外面共にナデ調整を施す。	○内面黄灰色 2.5Y6/1、外面黄褐色 2.5Y5/3・黒褐色 2.5Y3/1	○第2ビット南半第28層 ○生駒西麓産	
61		底 8.9 高 (2.0)	○中央部が上げ底の底部。	○内外面共にナデ調整を施す。	○内面黒褐色 10YR3/2・灰黄褐色 10YR3/2、外面灰黄褐色 10YR5/2~4/2	○第2ビット南半第28層 ○生駒西麓産	
62		底 9.3 高 (2.1)	○やや上げ底の底部。	○外面縦方向のヘラミガキ調整のちナデ調整、内面風化のため詳細不明。	○内面暗灰黄色 2.5Y5/2、外面灰白色 2.5Y8/2	○第2ビット第35層	
壺・鉢底部	63	底 6.3 高 (2.3)	○上げ底の底部。	○外面横方向のヘラミガキ調整、内面剝離のため詳細不明。外面磨減している。	○内面暗灰黄色 2.5Y5/2、外面にぶい黄褐色 10YR5/2・黒褐色 10YR3/1	○第2ビット第35層 ○生駒西麓産 ○外面煤付着	
	64	底 6.85 高 (2.2)	○上げ底。	○外面風化のため詳細不明、内面ナデ調整を施す。内面磨減している。	○内面にぶい褐色 7.5YR5/4、外面灰褐色 7.5YR4/2	○第2ビット第35層 ○生駒西麓産	
甕・壺底部	65	底 9.0 高 (2.7)	○やや上げ底の底部。	○外面縦方向のハケメ(4/cm)調整、内面ナデ調整を施す	○内外面共にぶい黄褐色 10YR7/3・橙色 5R6/6	○第2ビット第35層	
	66	底 5.8 高 (3.1)	○やや上げ底の底部。	○外面縦方向のヘラミガキ調整、内面板状工具によるナデ調整を施す。外面一部磨減している。	○内面灰黄褐色 10YR5/2、外面にぶい黄褐色 10YR7/2	○第2ビット第35層	
甕B	67	口 14.2	○「く」の字形に外反する口縁部に、口縁端部は丸くおさめる。	○内外面共に風化のため詳細不明。	○内外面共橙色 5YR6/6	○第2ビット第35層断面	
	68	口 14.7 高 (5.4)	○張りのある体部から、なだらかに外反する口縁部。口縁端部は面をもつ。	○外面板状工具によるナデ調整、内面ナデ調整を施す。内外面共に磨減している。	○内面灰黄色 2.5Y6/2、外面灰黄褐色 10YR5/2	○第2ビット北半第28層 ○生駒西麓産	
	69	口 18.4 高 (5.85)	○直立気味の体部から鋭く外折する口縁部。口縁端部は面をもつ。	○外面縦方向のヘラミガキ調整、内面板状工具によるナデ調整を施す。	○内面にぶい黄褐色 10YR4/3、外面黒褐色 10YR2/2	○第2ビット第35-38層 ○生駒西麓産 ○外面煤付着	

器形	番号	法量	形態の特徴	技法の特徴	色調	備考	
弥生土器	甕B	70	口 12.5 高 (2.55)	○鋭く外折する口縁部に、口縁端部は上方につまみ上げる。	○外面風化のため詳細不明、内面ナデ調整を施す。	○内面にぶい橙色5YR6/4、外面橙色2.5YR6/6	○第2ビット南半第28層
		71	口 11.1 高 (10.7)	○中央部を最大径とする体部から鋭く外折する口縁部。口縁端部は上方につまみ上げる。	○外面ハケメ(4/cm)のち、ヘラミガキのち、ヘラケズリ調整、内面ハケメ調整を施す。外面一部磨減している。	○内面にぶい黄橙色10YR6/3、外面灰黄褐色10YR5/2	○第2ビット第35層、断面第29層
		72	口 14.6 高 (6.0)	○「ハ」の字形にひろがる体部から鋭く外折する口縁部。口縁端部は上方につまみ上げる。	○外面ハケメ(3/cm)調整、内面ナデ調整を施す。	○内面にぶい黄褐色10YR5/4、外面暗褐色10YR3/3	○第2ビット第35層 ○生駒西麓産 ○外面煤付着
		73	口 15.8 高 (4.35)	○「ハ」の字形にひろがる体部から鋭く外折する口縁部。口縁端部は上方につまみ上げる。	○外面ハケメ(4/cm)調整、内面ナデ調整を施す。	○内面にぶい褐色7.5YR6/3、外面灰黄褐色10YR5/2	○第2ビット第35層 ○生駒西麓産
		74	口 15.8 高 (6.25)	○丸味をもつ体部から鋭く外折する口縁部。口縁端部は上方につまみ上げる。	○外面ナデ調整、内面ハケメ(4/cm)調整を施す。	○内面にぶい黄褐色10YR7/2・にぶい黄褐色10YR5/3、灰黄褐色10YR4/2外面黒色10YR2/1	○第2ビット第55層東壁断面 ○外面煤付着
		75	口 18.4 高 (5.8)	○丸味をもつ体部から「く」の字形に外反する口縁部口縁端部は上方につまみ上げる。	○外面縦方向のハケメ(3/cm)調整、内面ハケメのちナデ調整を施す。	○内面灰白色2.5Y7/1、外面灰黄色2.5Y7/2	○第2ビット側溝 ○外面煤付着
	甕蓋	76	口 12.6 高 (1.6)	○「ハ」の字形にひろがる笠形。円形の紐穴を穿つ。	○外面ハケメ調整、内面ナデ調整を施す。	○内外面共灰黄褐色10YR5/2・灰黄色2.5Y5/1	○第2ビット南半第28層 ○生駒西麓産
		77	口 14.1 高 (1.85)	○「ハ」の字形にひろがる笠形。	○内外面共にナデ調整を施す。外面磨減している。	○内面にぶい黄褐色10YR6/3・灰黄褐色10YR4/2、外面にぶい黄褐色10YR7/3・灰黄褐色10YR4/2	○第2ビット南半第28層
		78	口 16.0 高 (1.7)	○「ハ」の字形にひろがる笠形。	○外面風化のため詳細不明、内面ハケメ(5/cm)調整を施す。	○内面灰白色2.5Y8/2・暗灰黄色2.5Y5/2、外面灰白色2.5Y8/2・黒色2.5Y2/1	○第2ビット断面第32層東壁断面 ○黒斑
		79	口 18.6 高 (1.8)	○「ハ」の字形にひろがる笠形。	○内外面共に風化のため詳細不明。	○内外面共にぶい黄褐色10YR7/3・灰黄褐色10YR6/2	○第2ビット第35層 ○内外面共煤付着
	大型甕B	80	口 21.0 高 (3.4)	○鋭く外折する口縁部。口縁端部は面をもつ。	○内外面共にナデ調整を施す。	○内面暗灰黄色2.5Y5/2、外面黄褐色2.5Y5/3	○第2ビット第35層 ○生駒西麓産 ○内外面共煤付着
		81	口 24.7 高 (3.1)	○「く」の字形に外反する口縁部。口縁端部は面をもつ。	○内外面共に板状工具によるナデ調整を施す。	○内外面共黄褐色2.5Y5/3	○第2ビット第35層 ○生駒西麓産
		82	口 28.6 高 (33.3)	○中央部に最大径をもつ体部に、口縁部は鋭く「く」の字形に外反する。口縁端部は面をもつ。	○外面ハケメ(9/cm)とヘラミガキ調整、内面ハケメ(3/cm)調整を施す。内面体部磨減している。	○内外面共灰黄色2.5Y7/2	○第2ビット第35層東壁断面
		83	口 22.8 高 (2.2)	○鋭く外折する口縁部。口縁端部は上方につまみ上げる。	○外面ナデ調整、内面板状工具によるナデ調整。	○内面にぶい黄褐色10YR5/3、外面にぶい橙色7.5YR6/4	○第2ビット第35層東壁断面 ○生駒西麓産
		84	口 24.3 高 (6.4)	○「く」の字形に外反する口縁部。口縁端部は上方につまみ上げる。	○外面ナデ調整、内面ハケメ(5/cm)調整を施す。内外面共に磨減している。	○内外面共にぶい橙色7.5YR7/4・6/4	○第2ビット第35層
85		口 23.6 高 (13.45)	○丸味をもつ体部に、「く」の字形に外反する口縁部。口縁端部は上方につまみ上げる。	○内外面共にハケメ(9/cm)調整を施す。	○内外面共黒褐色10YR3/2・にぶい黄褐色10YR5/3	○第2ビット第35層 ○生駒西麓産 ○黒斑	
高杯・甕蓋	86	楕 15.7 高 (3.85)	○「ハ」の字形に広がる裾部。 ○甕蓋に転用。	○外面ヘラミガキ調整、内面板状工具によるナデ調整を施す。外面磨減している。	○内面褐色10YR4/6・にぶい黄褐色10YR5/4、外面にぶい褐色7.5YR5/4・褐色10YR4/6	○第2ビット第35層東壁断面 ○生駒西麓産	

器形	番号	法量	形態の特徴	技法の特徴	色調	備考	
弥生土器	高杯・甕蓋	87	裾高 7.25 高 (3.8)	○丸味を帯びた「ハ」の字形に広がる裾部。 ○甕蓋に転用。	○外面縦方向のヘラミガキ調整、内面ヘラケズリ調整を施す。	○内面にぶい橙色7.5YR7/4・黒褐色7.5YR3/2、外面淡橙色5YR8/4	○第2ピット南半第28層
	大型甕B	88	口 39.0 高 (17.6)	○直立気味の丸味をもった体部に、鋭く外折する口縁部。口縁端部は折り返す。	○口縁部端面に円形竹管文による刺突文。 ○外面体部ハケメ(5/2cm,6/cm)のちナデ調整、内面ナデ調整を施す。	○内面にぶい黄褐色10YR6/3、外面にぶい黄褐色10YR5/3	○第2ピット断面第32層東壁断面、北壁断面第28層、第35層
		89	口 30.0 高 (21.2)	○なだらかに丸味をもつ体部に、「く」の字形に外反する口縁部。口縁端部は下方に拡張する。	○外面ヘラミガキ調整、内面ハケメ調整を施す。	○内面にぶい黄褐色10YR5/3、外面にぶい黄褐色10YR4/3・黒褐色10YR3/2	○第2ピット第35層東壁断面 ○生駒西麓産 ○外面煤付着
	甕底部	90	底 3.9 高 (1.4)	○平底。	○外面縦方向のハケメ(4/cm)調整、内面ナデ調整を施す。	○内面灰黄色2.5Y7/2、外面淡黄色2.5Y8/3・灰黄褐色10YR6/2	○第2ピット南半第28層 ○黒斑
		91	底 4.9 高 (2.35)	○やや上げ底の底部。	○外面ヘラミガキのちナデ調整、内面ナデ調整を施す。	○内面にぶい橙色2.5YR6/4、外面にぶい橙色5YR6/4	○第2ピット第35層
		92	底 5.9 高 (3.2)	○平底。	○外面縦方向のヘラミガキ調整、内面ナデ調整を施す。外面磨滅している。	○内面にぶい褐色7.5YR5/4・黒褐色10YR3/2、外面暗褐色10YR3/3	○第2ピット第35層 ○生駒西麓産 ○外面煤付着
		93	底 5.6 高 (2.6)	○上げ底の底部。	○外面縦方向のヘラミガキ調整、内面ナデ調整を施す。	○内面にぶい橙色7.5YR7/4、外面にぶい褐色7.5YR6/3・5/3	○第2ピット南半第28層
		94	底 4.4 高 (4.65)	○上げ底の底部。	○外面縦方向のヘラミガキ調整、内面板状工具によるナデ調整を施す。	○内面にぶい黄褐色10YR5/3、外面黒褐色10YR3/1	○第2ピット第35層 ○生駒西麓産 ○内外面共煤付着
		95	底 5.7 高 (4.1)	○平底。	○外面縦方向のハケメ(5/cm)調整、内面ナデ調整を施す。	○内面灰黄色2.5Y5/1、外面黒褐色10YR2/2	○第2ピット第35～38層 ○外面煤付着
		96	底 8.2 高 (3.2)	○平底。	○外面縦方向のヘラミガキ調整、内面ナデ調整を施す。	○内面にぶい黄褐色10YR5/3、外面にぶい黄褐色10YR6/3	○第2ピット第32層 ○生駒西麓産
	97	底 8.4 高 (6.0)	○平底。	○外面縦方向のヘラケズリ調整、内面ハケメ(6/cm)調整を施す。	○内面にぶい黄褐色10YR6/3、外面灰黄色2.5Y7/2	○第2ピット北半第32層 ○生駒西麓産	
	98	底 9.7 高 (6.9)	○平底?	○外面ナデ調整、内面剥離のため詳細不明。	○内面黒褐色10YR3/2、外面にぶい黄褐色10YR7/3	○第2ピット第32層 ○黒斑	
鉢B	99	口 17.5 高 (5.0)	○直線的に外方へひろがる体部から、直立する口縁部。口縁端部は面をもつ。	○内外面共に風化のため詳細不明。	○内面にぶい褐色7.5YR6/3、外面灰褐色7.5YR4/2	○第2ピット北半第32層 ○生駒西麓産 ○黒斑	
壺・鉢	100	口 14.3 高 (3.35)	○内湾する体部から、口縁部は内折する。上方に面をもつ。	○外面口縁部に3条の凹線文、内面ナデ調整を施す。	○内外面共にぶい黄褐色10YR6/3	○第2ピット南半第32層 ○生駒西麓産	
鉢A	101	口 16.7 高 (3.1)	○内傾する体部から、口縁部は屈曲して外折し、さらに下方に折り、段状口縁とする。	○外面ナデ調整、内面板状工具によるナデ調整を施す。	○内外面共にぶい黄褐色10YR5/3	○第2ピット第35層 ○生駒西麓産	
	102	口 13.1 高 (5.2)	○体部下半に最大径をもち、直線的に内傾し口縁部につづく。口縁部は折返し、段状口縁とする。	○外面口縁部に幅の広い凹線文、体部に2帯からなる櫛描簾状文(13/1.4cm)、内面は横方向のヘラミガキ調整を施す。	○内面にぶい黄褐色10YR5/3、外面にぶい黄褐色10YR6/3	○第2ピット断面第32層東壁断面	
	103	口 20.6 高 (4.6)	○直立する体部から、口縁部は折返し、段状口縁とする。	○外面口縁部から体部にかけて櫛描簾状文(11/cm)と同原体と思われる扇形文が見られる。内面は横方向のナデ調整を施す。	○内面にぶい橙色7.5YR6/4、外面橙色7.5YR6/6	○第2ピット断面第32層東壁断面 ○生駒西麓産	
	104	口 21.6 高 (5.4)	○内傾する体部から、口縁部は「く」の字形に外反する。口縁端部は面をもち、刻目を施す。 ○口頸部境に蓋の紐穴が穿孔されている。	○外面体部に櫛描簾状文、内面は風化のため詳細不明。	○内面灰黄褐色10YR5/2、外面にぶい褐色7.5YR5/3	○第2ピット北半第28層 ○生駒西麓産	

器形	番号	法量	形態の特徴	技法の特徴	色調	備考
弥生土器	台付鉢・高杯 105	口 17.3 高 (3.3)	○丸味を帯びる体部から、口縁部は屈曲して内折する。上方に面をもつ。	○外面口縁端面の内外に刻目、口縁部に簾状文手法の斜列点文、内面はナデ調整を施す。	○内外面共に黄褐色10YR6/4・にぶい黄褐色10YR5/4	○第2ビット北半28層 ○生駒西麓産
	106	口 19.1 高 (3.6)	○やや丸味を帯びる体部から、口縁部は折返し、段状口縁とする。	○外面口体部境に凹線文、体部に横方向のヘラミガキ調整、内面はナデ調整が施される。	○内外面共に黄褐色10YR7/2・7/3	○第2ビット第35層
	107	口 21.6 高 (3.9)	○やや丸味を帯びる体部から、口縁部内側に肥厚する。上方に面をもつ。	○外面4条からなる凹線文、内面は横方向のナデ調整が施される。	○内面明褐色7.5YR5/6、外面橙色7.5YR6/6・灰黄色2.5Y6/2	○第2ビット断面第32層裏壁断面
	108	口 28.4 高 (5.2)	○桶形の体部から、口縁部は上方にまっすぐのび、上方に面をもつ。	○外面横方向のヘラミガキ調整、内面ナデ調整を施す。	○内面にぶい橙色7.5YR7/3・6/4、外面にぶい橙色7.5YR6/4・にぶい黄褐色10YR7/3	○第2ビット第35層
脚部	109	裾 12.5 高 (3.5)	○高杯あるいは台付鉢の脚部。 ○「ハ」の字形にひろがる脚部、裾端部は面をもつ。 ○脚柱部に円孔を穿つ。	○外面縦方向のヘラミガキ調整、内面横方向のヘラケズリ調整を施す。	○内外面共に黄褐色10YR5/3、灰色5Y6/1	○第2ビット西半第28層 ○生駒西麓産
台付鉢	110	底 3.5 高 (5.1)	○「ハ」の字形の脚部をもち、なだらかに外弯しながら上方へのびる。	○外面風化のため詳細不明、内面ナデ調整を施す。	○内外面共淡黄色2.5Y8/3・にぶい黄褐色10YR7/4・橙色7.5YR6/6	○第2ビット第35層
脚部	111	裾 13.2 高 (3.0)	○高杯あるいは台付鉢の脚部。 ○「ハ」の字形にひろがる脚部、裾端部は上方に屈曲し、面をもつ。	○外面円形竹管による無数の刺突文、内面ナデ調整を施す。	○内面にぶい赤褐色5YR4/4・灰黄褐色10YR5/2、外面にぶい赤褐色5YR5/4・灰黄褐色10YR5/2・黒褐色10YR5/2	○第2ビット第32層 ○生駒西麓産
	112	裾 12.8 高 (3.15)	○高杯の脚部。 ○「ハ」の字形にひろがる脚部、裾端部は上方に屈曲し、面をもつ。	○外面円形竹管による無数の刺突文、内面板状工具によるナデ調整を施す。	○内面暗灰黄色2.5Y5/2、外面灰黄褐色10YR5/2	○第2ビット北半第32層 ○生駒西麓産
	113	裾 13.7 高 (1.65)	○高杯の脚部。 ○「ハ」の字形にひろがる脚部、裾端部は上方に屈曲し、面をもつ。	○外面円形竹管による刺突文、内面ナデ調整を施す。	○内面黒褐色10YR5/3・にぶい黄褐色10YR5/3、外面にぶい黄褐色10YR5/3	○第2ビット第32層 ○生駒西麓産 ○蓋への転用品
台付鉢・台付無頸壺	114	底 11.2 高 (11.1)	○外弯しながら外方にひろがる台部。 ○台部下に円形の透かし窓をもつ。	○外面裾部と台部中位に凹線文、内面縦方向のハケメ調整のち横方向のヘラミガキ調整を行う。内外面ともに磨滅している。	○内外面共淡黄色2.5Y7/3・灰黄色2.5Y7/2	○第2ビット第28層、側溝
高杯A	115	口 24.9 高 (4.5)	○杯部は下半が斜め上方にのび、口縁部は屈曲し、水平に張り出す。口縁端部はさらに下方に拡張する。 ○口体部境に凸帯がめぐる。	○口縁拡張部に2条の凹線文、外面体部に縦方向のヘラケズリ調整、内面横方向のヘラミガキ調整を施す。	○内外面共褐色10YR4/4・灰黄褐色10YR4/2	○第2ビット第32層 ○生駒西麓産 ○外面保付着
	116	口 26.1 高 (2.8)	○杯部は斜め上方にのび、口縁部は屈曲し、水平に張り出す。口縁端部はさらに下方に拡張する。 ○口体部境に凸帯がめぐる。	○内外面共にナデ調整を施す。	○内外面共に黄褐色10YR5/3・4	○第2ビット北半第28層 ○生駒西麓産
	117	口 26.9 高 (5.1)	○杯部は下半が斜め上方にのび、口縁部は屈曲し、水平に張り出す。口縁端部はさらに下方に拡張すると思われる。 ○口体部境に凸帯がめぐる。	○内外面共にヘラミガキ調整を施す。	○内面にぶい黄褐色10YR5/3・黒褐色10YR3/2、外面にぶい黄褐色10YR6/3・黒褐色10YR3/2	○第2ビット第38層 ○黒斑 ○蓋への転用品
短頸壺 水差形 土器	118	口 8.9 高 (6.1)	○ゆるやかに「く」の字形に外反する口頸部。口縁端部は面をもつ。	○口縁端面に凹線文。 ○内外面共にハケメ調整のち、外面に櫛描直線文・波状文(8/1.5cm)を施す。	○内面灰黄褐色10YR5/2、外面黒褐色10YR3/2	○第2ビット第2遺構面溝3
壺底部	119	底 3.1 高 (3.8)	○中央が上げ底の底部。	○内面板状工具によるナデ調整、外面風化のため詳細不明。	○内外面灰白色2.5Y8/2	○第2ビット第32層 ○黒斑
壺蓋	120	口 10.5 高 (1.65)	○「ハ」の字形にひろがる口縁部。 ○口縁部に円孔が穿孔される。	○内外面共に風化のため詳細不明。	○内外面共に黄褐色10YR7/3・6/3	○第2ビット断面第28層
	121	口 11.1 高 (1.95)	○「ハ」の字形にひろがる口縁部、口縁端部は上方に拡張される。 ○口縁部に円孔が穿孔される。	○内外面共にハケメ(6/cm)調整を施す。	○内外面共灰黄褐色10YR4/2・黒褐色10YR5/2	○第2ビット断面第29層 ○生駒西麓産
壺底部	122	底 4.8 高 (3.8)	○上げ底の底部。	○内面板状工具によるナデ調整、外面風化のため詳細不明。	○内面灰黄色2.5Y6/2、外面黄褐色2.5Y5/3・灰色N5/	○第2ビット第2遺構面溝3 ○生駒西麓産

器形	番号	法量	形態の特徴	技法の特徴	色調	備考
弥生土器	壺 A	123 口 22.8 高 (1.8)	○漏斗状にひろがる口縁部をもち、口縁部は下方に拡張する。	○口縁部拡張面と外面体部に櫛描簾状文(10/cm)を施す。 ○内面はヨコナデ調整を施す。	○内面にぶい黄橙色 10YR6/K3・にぶい黄褐色 10YR 5/4、外面にぶい黄橙色 10YR6/4・にぶい黄褐色 10YR4/3	○第2ピット断面第28層 ○生駒西麓産
	壺 C	124	○外反する口縁部に、口縁部はわずかに上下に肥厚する。	○口縁部と内面口縁部に櫛描波状文を施す。	○内面にぶい橙色 7.5YR7/3、外面にぶい橙色 5YR6/4・橙色 5YR6/2	○第2ピット断面第28層
		125 口 15.7 高 (1.45)	○外反する口縁部に、口縁部はわずかに上下に肥厚する。	○内面口縁部に櫛描扇形文(11/1.4cm)、外面はヨコナデ調整を施す。	○内外面共にぶい黄橙色 10YR6/3	○第2ピット断面第28層
		126 口 14.8 高 (3.6)	○筒状の頸部から、口縁部は外反する。口縁部はわずかに上下に肥厚する。	○内面横方向のナデ調整、外面縦方向のハケメ (6/cm)調整を施す。内面磨減している。	○内面にぶい黄橙色 10YR5/3、外面にぶい黄褐色 10YR5/3・灰黄褐色 10YR4/2	○第2ピット断面第28層 ○生駒西麓産
甕 B	127	口 39.6 高 (19.4)	○なだらかに外弯する体部から、口縁部は外反する。	○内面風化のため詳細不明、外面ハケメ(10/cm)調整を施す。外面磨減している。	○内面灰黄褐色 10YR5/2、外面灰黄褐色 10YR4/2	○第2ピット断面第40層断面 ○生駒西麓産
鉢 A	128	口 33.7 高 (6.95)	○直線的に内傾気味の体部から、口縁部は外方に折り返す。	○口縁部外面に2条の凹線文、外面体部上位に櫛描直線文と刺突文が施されていると思われるが、風化のため詳細不明。内面横方向のナデ調整。	○内面褐色 10YR 6/1、外面にぶい黄褐色 10YR6/4	○第2ピット断面第29層
甕蓋	129	口 16.0 高 5.9	○笠形を呈する。	○内面ナデ調整、外面体部ヘラケズリ調整、つまみ部ユビオサエ調整を施す。口縁部面に強いヨコナデによる凹線状のへこみが見られる。	○内面黒色 10YR1.7/1、外面にぶい橙色 5YR6/4	○第2ピット断面第29層
甕 B	130	口 14.5 高 (3.9)	○直立気味の体部から、口縁部は鋭く外折する。	○内外面共にナデ調整を施す。	○内面にぶい黄褐色 10YR5/3、外面黒色 10YR1.7/1	○第2ピット断面第29層 ○外面煤付着
甕底部	131	底 6.0 高 (3.3)	○平底。	○内面ナデ調整、外面縦方向のヘラミガキ調整を施す。	○内面にぶい褐色 7.5YR6/3、外面にぶい黄褐色 10YR 6/3	○第2ピット断面第29層
甕 B	132	口 10.7 高 (15.6)	○体部中央に最大径をもち、なだらかに湾曲する体部から口縁部は「く」の字形に外反する。	○内面ナデ調整、外面縦方向のヘラミガキ調整を施す。外面磨減している。	○内外面共にぶい黄褐色 10YR5/2・にぶい黄褐色 10YR2/2	○第2ピット断面第2遺構面溝3
高杯・台付鉢脚部	133	裾 12.0 高 (1.1)	○「ハ」の字形にひろがる裾部。	○内外面共にナデ調整を施す。	○内外面共灰黄褐色 10YR5/2・にぶい黄褐色 10YR 5/3	○第2ピット断面第29層 ○生駒西麓産
水差形土器	134	口 9.2 高 (5.7)	○なだらかに外反する口縁部。口縁部上部に面をもつ。	○内面ナデ調整、外面櫛状工具による列点文を施す。外面磨減している。	○内外面共にぶい黄褐色 10YR5/4	○第2ピット断面中30層 ○生駒西麓産
高杯	135		○筒状の脚柱部から、裾部は「ハ」の字形に外反する。	○内面ナデ調整、外面縦方向のヘラミガキ調整を施す。外面磨減している。	○内面灰黄褐色 10YR5/2・にぶい黄褐色 10YR5/3、外面橙色 5YR5/6・にぶい黄褐色 10YR5/3	○第2ピット断面第29層 ○生駒西麓
	136		○筒状の脚柱部と、大きく外反する杯部をもつ。	○内面杯部・外面縦方向のヘラミガキ調整、内面脚柱部シボリメが見られる。外面磨減している。	○内面黒褐色 7.5YR 2/2、外面灰黄褐色 10YR4/2	○第2ピット断面第2遺構面溝2 ○甕蓋に転用?
土師器	杯 B	137 口 12.4 高 (3.25)	○外傾する口縁から体部をもつ。口縁部は丸くおさめる。	○口縁部は強いヨコナデ、体部はユビオサエ調整を施す。	○内外面共橙色 7.5YR6/6	○第2ピット第2層下
	杯 A	138 口 12.4 高 (3.2)	○外傾する体部から口縁部は内弯する。口縁部は丸くおさめる。	○口縁部は強いヨコナデ、内面体部はナデ調整、外面体部は風化のため詳細不明。	○内外面共橙色 5YR6/6・7.5YR7/6	○第2ピット第1層
	杯 B	139 口 12.9 高 (3.25)	○外傾する口縁から体部をもつ。口縁部は尖り気味。	○口縁部はヨコナデ、内面体部はナデ調整、外面体部はユビオサエ調整を施す。	○内面橙色 7.5YR 6/6外面にぶい黄褐色 10YR7/4	○第2ピット第1層下
須恵器	杯 A	140 口 13.8 高 2.6	○平らな底部から、斜めに上にひろく口縁部をもつ。口縁部は尖り気味。	○内外面共にロクロナデ調整を施す。	○内外面共灰色 5Y6/1・7.5Y6/1	○土城2

器形	番号	法量	形態の特徴	技法の特徴	色調	備考	
土器	丸底壺	141	口 9.9 高 (5.65)	○球形の体部から、口縁部は屈曲して外方にのびる。口縁端部はやや尖り気味。	○口縁部ヨコナデ、内面体部ナデ調整、外面風化のため詳細不明。	○内外面共 橙色 7.5YR6/6	○第2ビット 第3層
	黒色土器A碗	142	口 16.0 高 (2.2)	○外傾する口縁から体部をもつ。口縁端部はやや丸くおさめる。	○口縁部はヨコナデ、内面体部風化のため詳細不明、外面体部ユビオサエ調整を施す。	○内面～外面口縁部黒褐色10YR3/1・外面にぶい黄褐色10YR7/3	○第2ビット 第1層
	碗・皿B	143	口 19.6 高 (2.25)	○体部から口縁部にかけて内湾する。	○内外面共に風化のため詳細不明。	○内面にぶい橙色7.5YR6/4・灰黄褐色10YR4/2、外面橙色7.5YR6/6・にぶい黄褐色10YR6/6	○第2ビット 第1層
	鉢B・C	144	口 19.3 高 (3.7)	○内湾気味の体部から、口縁部は直立する。口縁端部は内側に肥厚する。	○口縁部はヨコナデ、内面体部に放射状の暗文、外面体部は風化のため詳細不明。	○内面にぶい黄褐色10YR5/4・にぶい橙色7.5YR6/4、外面にぶい黄褐色10YR5/4・にぶい褐色7.5YR5/4	○第2ビット 第1層
	鉢C	145	口 7.2 高 (1.1)	○平底に近い底部に高台がつく。	○内面風化のため詳細不明、外面ナデ調整を施す。	○内外面共にぶい橙色7.5YR7/4	○第2ビット 第1層
	黒色土器A碗	146	底 6.3 高 (1.3)	○平底に近い底部に高台がつく。	○内面風化のため詳細不明、外面ナデ調整を施す。	○内面黒色10YR2/1、外面にぶい橙色7.5YR6/4・橙色7.5YR6/6	○第2ビット 第1層
	甕A	147	口 19.3 高 (5.2)	○丸味をおびる体部に、口縁部は強く外反する。口縁端部は上方につまみあげ、面をもつ。	○口縁部ヨコナデ、内面ナデ調整、外面ユビ調整を施す。	○内面橙色5YR6/8・明赤褐色5YR5/8、外面橙色5YR6/6・明赤褐色2.5YR5/8	○第2ビット 第1層
	小皿	148	口 8.6 高 (1.65)	○やや平底から内湾気味の体部、口縁部はわずかに外反する。口縁端部は内側に沈線をもつ。	○口縁部ヨコナデ、内面一定方向のナデ調整、外面ユビ調整を施す。	○内外面共にぶい橙色7.5YR7/4・褐色7.5YR7/6	○第2ビット 第1層下
	皿B	149	口 15.1 高 (2.35)	○丸味をおびる底部から、屈曲し口縁部は外傾する。口縁端部は丸くおさめる。	○口縁部ヨコナデ、内面一定方向のナデ調整、外面ユビ調整を施す。	○内面橙色5YR6/6、外面橙色5YR6/6・7.5YR6/6	○第2ビット 第1層
須恵器	蓋	150	口 11.4 高 (2.75)	○扁平な天井部に、外面口縁部と天井部境に1条の沈線を巡らすことにより、稜とする。	○外面天井部にクロロヘラケズリ、以外はクロコナデ調整を施す。	○内面灰色5Y5/1、外面オリーブ灰色2.5GY6/1	○第2ビット 第1層
		151		○天井部に扁平な宝珠つまみをもつ。	○内外面共にクロコナデ調整を施す。	○内外面共 灰色 N5/	○第2ビット 第1層下
	杯B	152	底 10.1 高 (1.5)	○平らな底部に、外傾する高台をもつ。	○内外面共にクロコナデ調整を施す。	○内面灰白色N7/、外面灰色10Y6/1	○第2ビット 第3層
		153	底 8.4 高 (2.0)	○平らな底部に、外傾する高台をもつ。	○内外面共にクロコナデ調整を施す。	○内外面共 灰白色 5Y7/1・灰色5Y6/1	○第2ビット 第1層
	壺	154	底 7.8 高 (2.65)	○平らな底部に、「ハ」の字形に外反する高台をもつ。	○内外面共にクロコナデ調整を施す。	○内面灰白色2.5Y7/1、外面灰色N6/・5/	○第2ビット 第1層、第1層下
弥生土器	壺C	155	口 14.6 高 (5.6)	○筒状の頸部に外反する口縁部、口縁端部は面をもち、上下に肥厚する。	○口縁部端面に1条の凹線文を施す。 ○内面ナデ調整、外面ハケメ(6/cm)調整を行う。	○内面明褐色7.5YR7/2、外面にぶい黄褐色10YR7/3・にぶい橙色7.5YR6/4	○第4ビット 第13層
		156	口 15.0 高 (21.8)	○腹部中央が最大径となる算盤型をもつ体部に、頸部は外傾し、口縁部はさらに外反する。口縁端部は面をもち、やや上下に肥厚する。	○口縁部端面に2条の凹線文を施す。 ○内面体部に縦方向のハケメ(3/cm・7/cm)調整、外面頸部に3条の凹線文、肩部から体部中央に輪描直線文と波状文(共に原体幅4/0.75cm)、体部下位に細かいハケメ調整後横方向のヘラミガキ調整を行う。	○内外面共にぶい赤褐色10YR6/4・にぶい黄褐色10YR7/3・灰黄褐色10YR6/2・5/2	○第4ビット 第13層第16層 ○外面煤付着
		157	口 14.5 高 (5.8)	○筒状の頸部に外反する口縁部、口縁端部は面をもち、上下に肥厚する。	○口縁部端面に3条の凹線文を施す。 ○内面横方向、外面縦方向のヘラミガキ調整を行う。	○内外面共 灰黄色 2.5Y6/2	○第4ビット 第13層
	壺F	158	口 23.4 高 (12.7)	○筒状の頸部から外湾しながら口縁部につづく。口縁端部は面をもち、上下に肥厚する。 ○頸部体部に貼付け凸帯をもつ。	○内外面共に風化のため詳細不明。 ○頸部体部の凸帯は輪描きによる押捺。	○内面赤褐色10YR6/6・淡赤褐色2.5YR7/4、外面橙色2.5YR6/6・淡赤褐色2.5YR7/4	○第4ビット 第13層、

器形	番号	法量	形態の特徴	技法の特徴	色調	備考	
弥生土器	壺 D	159	口 23.0 高 (1.5)	○外反する口縁部に、口縁端部はそのまま面をもっておわる。	○口縁部端面に櫛描縲状文(8/cm)を施す。 ○内面風化のため詳細不明、外面ヨコナデ調整を行う。	○内面にぶい褐色7.5YR5/4・灰黄褐色10YR4/2、外面にぶい橙色7.5YR6/4	○第4ビット第13層
	壺底部	160	底 9.4 高 (9.5)	○平底。	○内面板状工具によるナデ調整、外面風化のため詳細不明。	○内外面共灰黄褐色10YR5/2・にぶい黄褐色10YR6/3	○第4ビット第16層
		161	底 5.4 高 (13.45)	○平底。	○内面縦方向のハケメ(13/cm)調整、外面櫛描直線文、横・縦方向のハケメ調整後、縦方向のヘラミガキ調整を施す。 ○内外面共に磨滅している。	○内面灰白色2.5Y 8/2・灰黄色2.5Y 6/2、外面灰黄褐色10YR6/2・4/2	○第4ビット第13層 ○外面煤付着 ○黒斑
	壺 A	162	口 6.7 高 (4.15)	○漏斗状にひろがる口縁部をもち、口縁端部は下方に拡張する。	○口縁端部拡張面と頸部に櫛描縲状文(17/1.75cm)、内面口縁部に円形浮文を施す。	○内面褐色7.5YR 4/3・4/4、外面灰黄褐色10YR5/2・4/2	○第4ビット第13層 ○生駒西麓産
		163	口 20.9 高 (2.05)	○漏斗状にひろがる口縁部をもち、口縁端部は下方に拡張する。	○口縁端部拡張面に櫛描縲状文(10/1.15cm、原体不明)を施す。 ○外面体部、内面にハケメ(6/cm)調整を行う。	○内外面共にぶい黄褐色10YR5/3	○第4ビット第13層 ○生駒西麓産
		164	口 18.0 高 (5.9)	○漏斗状にひろがる口縁部をもち、口縁端部は下方に拡張する。	○口縁端部拡張面、外面頸部に櫛描縲状文(10/1.25cm)を施す。 ○内面風化のため詳細不明。	○内外面共にぶい黄褐色10YR5/4	○第4ビット第13層 ○生駒西麓産 ○蓋蓋に転用
		165	口 19.2 高 (13.4)	○長い頸部から、漏斗状にひろがる口縁部をもち、口縁端部は下方に拡張する。	○口縁端部拡張面に円形刺突文を施す。 ○内面ハケメ調整、外面ヘラミガキ調整を行う。内外面共に磨滅している。	○内面黄褐色2.5Y 5/3、外面灰黄褐色10YR5/2	○第4ビット第13層、第16層 ○生駒西麓産 ○黒斑
	壺 G	166	口 23.6 高 (3.8)	○口縁部を上方に拡張し、口縁端部に面をもつ。	○口縁部拡張面に櫛描波状文を施す。 ○内外面共に磨滅している。	○内面橙色2.5YR 6/6外面橙色2.5YR7/6・にぶい橙色7.5YR7/3	○第4ビット第16層
	壺 B	167	口 22.8 高 (3.55)	○外反する口縁部から、口縁端部は上下に拡張する。	○口縁部拡張面に櫛描縲状文(7/cm)を施す。 ○内外面共に横方向のナデ調整を施す。	○内面灰黄褐色10YR4/2、外面にぶい橙色7.5YR7/4・5YR6/4	○第4ビット第16層 ○蓋蓋に転用
		168	口 24.4 高 (8.3)	○外反する口縁部から、口縁端部は上下に拡張する。	○口縁部拡張面に櫛描縲状文(9/cm)、円形刺突文を施す。 ○内外面共にナデ調整を行う。磨滅している。	○内面黄灰色2.5Y 5/1・暗灰黄色2.5Y5/2、外面灰黄色2.5Y6/2・灰黄褐色10YR5/2	○第4ビット第13層、第16層 ○生駒西麓産
	壺底部	169	底 6.1 高 (1.8)	○平底。	○内面ナデ調整、外面風化のため詳細不明。	○内面にぶい黄褐色10YR7/2・2.5YR6/3、外面にぶい橙色7.5YR7/3・橙色2.5YR7/6	○第4ビット第14層断面 ○黒斑
		170	底 6.2 高 (3.15)	○中央が上げ底の底部。	○内面ナデ調整、外面ヘラミガキ調整を施す。	○内外面共にぶい黄褐色10YR6/3・にぶい黄褐色10YR5/3	○第4ビット第13層 ○生駒西麓産
		171	底 6.6 高 (2.75)	○中央が上げ底の底部。	○内面ナデ調整、外面体部縦方向のヘラミガキ調整のちナデ調整、外面底部ヘラケズリ調整を施す。	○内面にぶい黄褐色10YR7/3、外面にぶい褐色7.5YR 6/3・5/3	○第4ビット第14層断面
		172	底 5.8 高 (3.15)	○中央が上げ底の底部。	○内面板状工具によるナデ調整、外面体部縦方向のヘラミガキ調整、外面底部ヘラケズリ調整を施す。	○内面灰黄色2.5Y 7/3、外面淡黄色2.5Y8/3	○第4ビット第16層 ○黒斑
		173	底 7.1 高 (3.6)	○平底?	○内面ハケメ(5/cm)調整、外面風化のため詳細不明。	○内面黄灰色2.5Y 6/1・暗灰黄色2.5Y5/2、外面暗褐色10YR3/3	○第4ビット第16層 ○生駒西麓産 ○外面煤付着 ○蓋へ転用?
	無頸壺	174	底 10.7 高 (5.1)	○直線的に内傾する体部から口縁部。口縁端部は折り返して肥厚し、上方に面をもつ。 ○口縁部に2個の紐孔が2ヶ所みられる。	○内面ナデ調整、外面口縁端部に凹線文、体部に櫛描縲状文(9/1cm)と波状文(8/0.9cm)を施す。	○内面にぶい黄褐色10YR6/3、外面にぶい黄褐色10YR7/3	○第4ビット第13層、側溝(第13層)
壺蓋	175	口 17.6 高 (3.75)	○直線的に「ハ」の字形にひろく口縁部。 ○口縁部に紐孔が穿孔されている。	○内面ハケメ(5/cm)調整、外面縦方向のヘラミガキ調整を施す。	○内外面共にぶい黄褐色10YR7/2・7/3、灰黄褐色10YR6/2	○第4ビット断面16層、側溝(第13層)	
	176	口 20.4 高 (1.4)	○「ハ」の字形にひろく口縁部。	○内面ハケメ調整、外面ヘラミガキ調整を施す。	○内面にぶい黄褐色10YR4/3、外面暗灰黄色2.5Y5/2	○第4ビット断面14層、第16層 ○生駒西麓産	

器形	番号	法量	形態の特徴	技法の特徴	色調	備考	
弥生土器	甕	177	口 13.4 高 (2.75)	○「く」の字形に外反する口縁部。口縁端部は丸くおさめる。	○内外面共に風化のため詳細不明。	○内面 灰黄褐色 10YR4/2・暗褐色 10YR3/3・外面 黒褐色 10YR2/2・2/3	○第4ビット 第13層 ○生駒西麓産 ○外面煤付着
	甕 B	178	口 11.4 高 (4.05)	○内傾する体部に屈曲して「く」の字形に外反する口縁部。口縁端部はやや面をもつ。	○内面口縁部横方向の板状工具によるナデ調整、体部縦方向のヘラミガキ調整、外面縦方向のハケメ(10/cm)調整を施す。内外面共に磨滅している。	○内面 灰黄褐色 10YR6/2・外面に ぶい黄褐色 10YR4/3・黒褐色 10YR4/3	○第4ビット側 溝(第13層) ○生駒西麓産
		179	口 16.0 高 (2.6)	○「く」の字形に外反する口縁部。口縁端部は面をもつ。	○内面横方向のヘラミガキ調整、外面縦方向のハケメ調整を施す。内外面共に磨滅している。	○内面 褐色 10YR4/4 外面に ぶい黄褐色 10YR5/3	○第4ビット 第16層 ○生駒西麓産
		180	口 16.4 高 (2.35)	○「く」の字形に外反する口縁部。口縁端部はやや丸味をもつ。	○内面ナデ調整、外面縦方向のヘラミガキ調整を施す。	○内外面共 黒褐色 7.5YR3/2・3/1	○第4ビット 第16層 ○生駒西麓産 ○内外面煤付着
		181	口 13.2 高 (17.9)	○体部中央に最大径をもち、屈曲して鋭く外折する口縁部。口縁端部は面をもつ。	○内面体部上位横方向のヘラミガキ調整、体部中央はナデ調整、外面縦方向のヘラミガキ調整を施す。	○内面 暗灰黄色 2.5YR4/2・にぶい黄褐色 10YR5/3・外面に ぶい赤褐色 5YR5/3・にぶい黄褐色 10YR7/3	○第4ビット断面 16層、第13層 ○生駒西麓産 ○外面煤付着
	甕 A	182	口 9.9 高 (6.1)	○球形の体部に「く」の字形に外反する口縁部。口縁端部はやや丸くおさめる。	○口縁端部に刻目、内外面共体部ハケメ(6/cm)調整、外面体部下位縦方向のヘラズリ調整を施す。	○内面に ぶい黄褐色 10YR7/3・外面に ぶい黄褐色 10YR7/3・褐灰色 10YR4/1	○第4ビット 第13層 ○外面煤付着
	甕 B	183	口 14.3 高 (4.05)	○「く」の字形に外反する口縁部。口縁端部は上方につまみ上げ、面をもつ。	○内外面共にナデ調整を施す。	○内面に ぶい黄褐色 10YR6/3・外面に ぶい褐色 7.5YR5/4	○第4ビット 第16層
		184	口 13.4 高 (6.0)	○「く」の字形に外反する口縁部。口縁端部は上方につまみ上げ、面をもつ。	○口縁部端面に凹線文、内面縦方向のハケメ(5/cm)調整、外面縦方向のヘラミガキ調整を施す。	○内外面共 灰黄褐色 10YR6/2・褐灰色 10YR5/1	○第4ビット 第16層
		185	口 15.1 高 (2.45)	○「く」の字形に外反する口縁部。口縁端部は上方につまみ上げ、面をもつ。	○口縁部端面に凹線文、内面ナデ調整、外面ヘラミガキ調整を施す。	○内外面共 黒褐色 10YR3/1	○第4ビット 第16層 ○外面煤付着
		186	口 15.35 高 (5.55)	○「く」の字形に外反する口縁部。口縁端部は上方につまみ上げ、面をもつ。	○内面板状工具によるナデ調整、外面縦方向のハケメ(10~12/cm)調整を施す。	○内面 灰黄褐色 10YR4/2・にぶい黄褐色 10YR4/3・外面 黒褐色 10YR3/2・2/2	○第4ビット 第13層 ○生駒西麓産 ○外面煤付着
		187	口 14.3 高 (7.3)	○「く」の字形に外反する口縁部。口縁端部は上方につまみ上げ、面をもつ。	○口縁部端面に凹線文、内外面体部は縦方向のハケメ(5/cm)調整を施す。	○内面 黒褐色 10YR3/2・2/2・外面 灰黄褐色 10YR4/2	○第4ビット 第13層 ○外面煤付着
		188	口 14.5 高 (7.9)	○「く」の字形に外反する口縁部。口縁端部は上方につまみ上げ、面をもつ。	○口縁部端面に2条の凹線文、内外面共にハケメ(10/cm)調整、外面体部下位にヘラ状工具による列点文を施す。内面風化のため詳細不明。	○内外面共に ぶい黄褐色 10YR7/2	○第4ビット断面 第13層 ○外面煤付着
		189	口 14.8 高 (7.1)	○「く」の字形に外反する口縁部。口縁端部は上方につまみ上げ、面をもつ。	○口縁部端面に凹線文、内外面共にヘラミガキ調整と思われるが、風化のため詳細不明。	○内面 暗褐色 10YR3/3・外面 灰黄褐色 10YR6/2・4/2	○第4ビット 第13層 ○生駒西麓産 ○外面煤付着
	大型甕 B	190	口 22.9 高 (3.3)	○鋭く外折する口縁部。口縁端部は面をもつ。	○内面口縁部板状工具によるナデ調整、体部横方向のヘラミガキ調整、外面ハケメ?調整のちナデ調整を施す。	○内面 灰黄褐色 10YR5/2・外面 灰黄褐色 10YR4/2	○第4ビット 第13層 ○生駒西麓産
	191	口 31.1 高 (5.4)	○ゆるやかに「く」の字形に外反する口縁部。口縁端部は下方に肥厚し、面をもつ。	○内面口縁部板状工具によるナデ調整、内外面共体部ナデ調整を施す。	○内面 暗灰黄色 2.5Y5/2・黄灰色 2.5Y4/1・外面 暗灰黄色 2.5Y4/2	○第4ビット断面 16層 ○生駒西麓産	
	192	口 32.2 高 (8.4)	○ゆるやかに「く」の字形に外反する口縁部。口縁端部は面をもつ。	○内面板状工具によるナデ調整、外面縦方向のヘラミガキ調整を施す。	○内面 暗灰黄色 2.5Y5/2・黄褐色 2.5Y5/3・外面 灰黄褐色 10YR5/2・にぶい黄褐色 10YR6/3	○第4ビット断面 16層 ○生駒西麓産	

器形	番号	法量	形態の特徴	技法の特徴	色調	備考
弥生	大型甕 B	193 口 37.3 高 (7.15)	○鋭く外折する口縁部。口縁端部は上下につまみ、面をもつ。	○内外面共にハケメ(4/cm)調整を施す。外面磨減している。	○内面灰白色2.5Y 8/2、外面にぶい黄褐色10YR7/2	○第4ビット第16層
		194 口 44.0 高 (7.65)	○鋭く外折する口縁部。口縁端部は下方に拡張し、面をもつ。	○口縁端部に凹形刺突文、内面横方向、外面縦方向のヘラミガキ調整を施す。	○内面黄灰色2.5Y 5/1、外面にぶい黄褐色10YR6/3・暗灰黄色2.5Y5/2	○第4ビット第16層 ○生駒西麓産
土器	鉢B・台付鉢	195 口 35.0 高(13.6)	○外傾する体部から、屈曲して直線形に内傾する口縁部。口縁端部上方に面をもつ。	○外面口縁部に2条の凹線文、櫛描列点文(8/1.3cm)の文様を施し、体部にハケメ(5/cm)調整のち、ヘラミガキ調整、内面にハケメ調整とヘラミガキ調整を施す。	○内外面共にぶい黄褐色10YR5/3	○第4ビット第16層、側溝(第13層) ○生駒西麓産
	台付鉢	196 裾 20.7 高(23.8)	○鉢口縁部欠失。 ○「ハ」の字形にひろがる脚柱部。	○鉢部最大径と思われる位置に櫛描列点文、内外面底部にヘラミガキ調整。脚柱部外面に凹形竹管による刺突文、裾部内面に横方向のハケメ(10/cm)調整を施す。	○内外面共にぶい黄褐色10YR6/3・ぶい黄褐色10YR5/3・4/3	○第4ビット断面16層、側溝(第13層) ○生駒西麓産
鉢 A		197 口 42.6 高 23.7 底 10.6	○やや上げ底の底部から、直線的に外方にひろがる体部。屈曲して内傾しながら上方へのび、口縁部は外折する。口縁端部は下方に折り返す。	○内面ハケメ(8/cm)調整、外面体部下位ヘラミガキ調整口縁部から体部上位櫛描状文(15/1.4cm)を施す。	○内外面共灰黄褐色10YR5/2・黄褐色2.5Y5/1・黒褐色10YR3/2、2/2	○第4ビット第13層、第16層 ○生駒西麓産
		198 口 50.7 高 (8.45)	○直立する口縁部、口縁部上縁を折り返し段状に成形する。	○口縁部外面に1条の沈線、内外面共に横方向のヘラミガキ調整を施す。	○内面にぶい黄褐色10YR6/4、外面褐色10YR4/4	○第4ビット第13層 ○生駒西麓産 ○黒斑
		199 口 18.9 高 (6.15)	○体部下位に稜をもち、内傾しながら直線的に上方へのびる体部、口縁部は折り返し段をもつ。	○内面体部上位と外面底部に横方向のヘラミガキ調整、内面底部斜方向のハケメ(6/cm)調整、外面口縁部櫛描状文(19/1.95cm)を施す。	○内外面共灰黄褐色10YR5/2・にぶい赤褐色5YR 5/3	○第4ビット第16層 ○生駒西麓産
		200 口 18.0 高 (4.95)	○内傾しながら直線的に上方へのびる体部。口縁部は折り返し段をもつ。	○内面縦方向のハケメ(7/cm)調整、外面口縁部櫛描状文(35/2.8cm)を施す。外面磨減している。	○内面にぶい黄褐色10YR5/3、外面にぶい褐色7.5YR5/4	○第4ビット第16層 ○生駒西麓産
		201 口 19.0 高 (5.2)	○内傾しながら直線的に上方へのびる体部。口縁部は折り返し段をもつ。	○内面ナデ調整、外面口縁部櫛描状文(25/2.5cm)、体部中央櫛描列点文を施す。	○内面にぶい黄褐色10YR4/3・暗褐色10YR5/4、外面にぶい黄褐色10YR5/4・黒褐色10YR3/2	○第4ビット第13層 ○生駒西麓産
		202 口 21.4 高 (4.35)	○内傾しながら直線的に上方へのびる体部。口縁部は折り返し段をもつ。	○内面ナデ調整、外面口縁部ヘラによる列点文、体部櫛描状文(12/1.2cm)を施す。	○内面にぶい赤褐色5YR5/3・4/3、外面にぶい橙色7.5YR6/4	○第4ビット第13層 ○生駒西麓産
		203 口 24.1 高 (5.45)	○内傾しながら直線的に上方へのびる体部。口縁部は折り返し段をもつ。	○内面ハケメ調整、外面口縁部櫛描状文、体部櫛描直線文、櫛描列点文を施す。	○内面にぶい黄褐色10YR4/3、外面にぶい黄褐色10YR5/3・褐灰色10YR4/1	○第4ビット第16層 ○生駒西麓産
	鉢 B		204 口 16.2 高 (4.1)	○直線的に外上方へのびる口縁から体部。口縁端部はやや丸くおさめる。	○内面ヘラミガキ調整、外面凹線文を施す。	○内外面共にぶい黄褐色7.5YR7/3
		205 口 18.1 高 (5.0)	○直線的に外上方へのびる口縁から体部。口縁端部はやや丸くおさめる。 ○体部に把手の痕あり。	○口縁端部に刻目、内外面体部ヘラミガキ調整、外面口縁部櫛描列点文とヘラ描列点文を施す。	○内面灰黄褐色10YR 5/2・褐灰色10YR4/1、外面にぶい黄褐色10YR5/3・褐灰色10YR4/1	○第4ビット第16層 ○黒斑
		206 口 23.0 高 (1.9)	○直線的に上方へのびる口縁部。口縁端部は面をもつ。	○内外面共に横方向のヘラミガキ調整を施す。	○内面にぶい黄褐色10YR4/3、外面にぶい黄褐色10YR5/3・黒褐色10YR3/2	○第4ビット第16層 ○生駒西麓産
		207 口 17.5 高 (3.35)	○内湾しながら上方へのびる口縁部。口縁端部は面をもつ。	○内面ナデ調整、外面凹線文を施す。	○内外面共橙色7.5YR7/6	○第4ビット側溝(第13層)
		208 口 20.0 高 (3.6)	○内湾しながら上方へのびる口縁部。口縁端部は面をもつ。	○内面横方向のハケメ調整のち縦方向のヘラミガキ調整、外面斜方向のヘラミガキ調整を施す。	○内面にぶい黄褐色10YR6/3、外面にぶい黄褐色10YR5/3	○第4ビット第16層 ○生駒西麓産
		209 口 20.9 高 (2.35)	○内湾しながら上方へのびる口縁部。口縁端部は面をもつ。	○内面板状工具によるナデ調整、外面口縁部櫛描状文、体部横方向のヘラミガキ調整を施す。	○内面黒褐色10YR3/2、外面暗灰黄色2.5Y5/2	○第4ビット第13層 ○生駒西麓産

器形	番号	法量	形態の特徴	技法の特徴	色調	備考	
弥生土器	鉢 B	210	口 28.8 高 (3.7)	○やや内傾気味の直線的に上方へ のびる口縁部。口縁端部は面をもつ。	○内面ナデ調整、外面凹線文を施す。	○内面にぶい橙色 5YR7/4、外面橙 色5YR6/6	○第4ビット削 溝(第13層)
		211	口 35.5 高 (3.5)	○直線的に上方へ伸びる口縁部。口 縁端部は折り返し、段をもつ。	○内面横方向のヘラミガキ調整、外面凹線文 のち櫛描波状文(6/2cm)。	○内面にぶい黄橙 色10YR6/3・灰黄 褐色10YR5/2、 外面にぶい黄橙 色10YR7/3・ぶ い橙色7.5YR7/4 ・5YR7/4	○第4ビット削 溝(第13層)
		212	口 39.9 高 (4.5)	○内湾する口縁部。口縁端部は折り 返し、段をもつ。	○内面ナデ調整、外面口縁部櫛描波状文・直 線文(8/1cm)を施す。	○内面にぶい褐色 7.5YR6/3、外面 にぶい黄褐色 10YR5/3	○第4ビット削 溝(第13層) ○生駒西麓産
	台付鉢	213	裾 7.6 高 (4.1)	○外上方に直線的にのびる脚部。裾 部に円形の透かし窓が4ヶ所に穿 孔される。	○内外面共ナデ調整、外面裾部に凹線文を施 す。	○内外面共浅黄色 2.5Y7/3	○第4ビット 第13層
	台付鉢・高杯	214	裾 8.1 高 (2.75)	○「ハ」の字形にひろがる脚部。	○内外面共ナデ調整、外面裾部に2条の沈線 を施す。	○内外面共灰白色 10YR8/2	○第4ビット 第13層
		215	裾 13.6 高 (4.3)	○「ハ」の字形にひろがる脚部。脚 部全体に円形の透かしが無数に穿 孔される。	○内外面共ナデ調整、内面裾部に1条の沈線 を施す。	○内外面共にぶい 黄褐色10YR4/3	○第4ビット 第13層 ○生駒西麓産
		216	裾 12.1 高 (4.1)	○「ハ」の字形にひろがる脚部。	○内外面共にナデ調整、外面裾部に3条の凹 線文を施す。	○内面にぶい黄橙 色10YR7/2・灰 黄褐色10YR6/2 ・5/2、外面灰黄 褐色10YR5/2	○第4ビット 第13層 ○黒斑
		217	裾 10.8 高 (3.65)	○「ハ」の字形にひろがる脚部。裾 端部に面をもつ。	○内面横方向のヘラケズリ調整、外面縦方向 のハケメ(5/cm)調整を施す。	○内面黒褐色10YR 2/2、外面にぶい 黄褐色10YR6/3・ 褐色10YR4/1	○第4ビット 第13層 ○内面保付着 ○蓋蓋に転用
		218	裾 16.8 高 (1.5)	○「ハ」の字形にひろがる脚部。裾 端部に面をもつ。	○内面ハケメ(10/cm)調整、外面ナデ調整を 施す。	○内外面共灰黄褐 色10YR5/2	○第4ビット 第16層 ○生駒西麓産
		219	裾 7.6 高 (1.8)	○「ハ」の字形にひろがる脚部。裾 端部に面をもつ。円形の透かし窓 が穿孔される。	○内外面共ナデ調整を施す。	○内面褐色10YR 4/1、外面にぶい 黄褐色10YR5/4	○第4ビット 第13層 ○生駒西麓産
		220	裾 14.8 高 (3.5)	○「ハ」の字形にひろがる脚部。裾 端部に面をもつ。	○内面脚柱部ヘラケズリ調整、裾部に1条の 凹線がめぐる。外面縦方向のヘラミガキ調 整を施す。	○内外面共浅黄色 2.5Y7/3	○第4ビット削 溝(第13層)
		221	裾 15.2 高 (2.25)	○「ハ」の字形にひろがる脚部。裾 端部は上下つまみあげ、面をも つ。	○内面ナデ調整、外面縦方向のヘラミガキ調 整を施す。	○内面にぶい橙色 7.5YR7/4・浅黄 褐色10YR8/3、 外面にぶい黄橙 色10YR7/3	○第4ビット 第13層
		222	裾 17.0 高 (3.6)	○「ハ」の字形にひろがる脚部。裾 端部は上方につまみあげ、面をも つ。円形の透かし窓が穿孔される。	○内面横方向のヘラケズリ調整、外面縦方向 のヘラミガキ調整を施す。	○内面灰黄褐色10 YR4/2・にぶい 黄褐色10YR6/4、 外面にぶい橙色 5YR6/4灰黄褐色 10YR6/2	○第4ビット第 14層断面
223		裾 18.6 高 (5.1)	○丸味をおびた「ハ」の字形にひろ がる脚部。裾端部は上方につまみ あげ、面をもつ。円形の透かし窓 が穿孔される。	○内面横方向のヘラケズリ調整、外面縦方向 のヘラミガキ調整のち、へら描直線文・刻 目、裾端部に4条の凹線文を施す。	○内面灰白色10YR 8/2、外面灰白色 2.5YR8/2	○第4ビット 第13層	
高杯 A	224	口 36.0 高 (2.25)	○水平に張り出した口縁部から、口 縁端部は下方拡張する。	○内外面共に風化のため詳細不明。外面口縁 端部に凹線文を施す。	○内外面共にぶい 黄褐色10YR7/2・ 7/3	○第4ビット 第13層	
高杯 D	225	口 26.0 高 20.0 裾 16.0	○「ハ」の字形にひろがる脚柱部か ら、浅鉢形の杯部をもつ。口縁部 は内傾し、口縁端部は外反する。 脚部には円形の透かし窓が穿孔さ れる。	○杯部内面と外面にヘラミガキ調整、脚部内 面ハケメ(20/cm)調整を施す。	○内外面共にぶい 黄褐色10YR7/3	○第4ビット第 13層、断面14 層	
高杯・ 台付鉢	226	裾 19.1 高 (8.4)	○丸味をおびた「ハ」の字形にひろ がる脚部。	○内面風化のため詳細不明、外面脚部縦方向 のハケメ(5/cm)調整、裾部3条の凹線文を 施す。	○内面橙色5YR6/6、 外面にぶい黄橙 色10YR7/3	○第4ビット、 断面14層	
	227	裾 14.2 高 (11.2)	○筒状の脚柱部から、「ハ」の字形に ひろがる裾部。裾端部は上下につ まみだされる。	○内面脚柱部シボリメ、裾部横方向のヘラケ ズリ調整、外面縦方向のヘラミガキ調整を 施す。	○内面橙色2.5YR 6/6淡赤褐色2.5 YR7/4、外面橙色 2.5YR6/6、にぶい 黄褐色10YR7/3	○第4ビット 第16層	

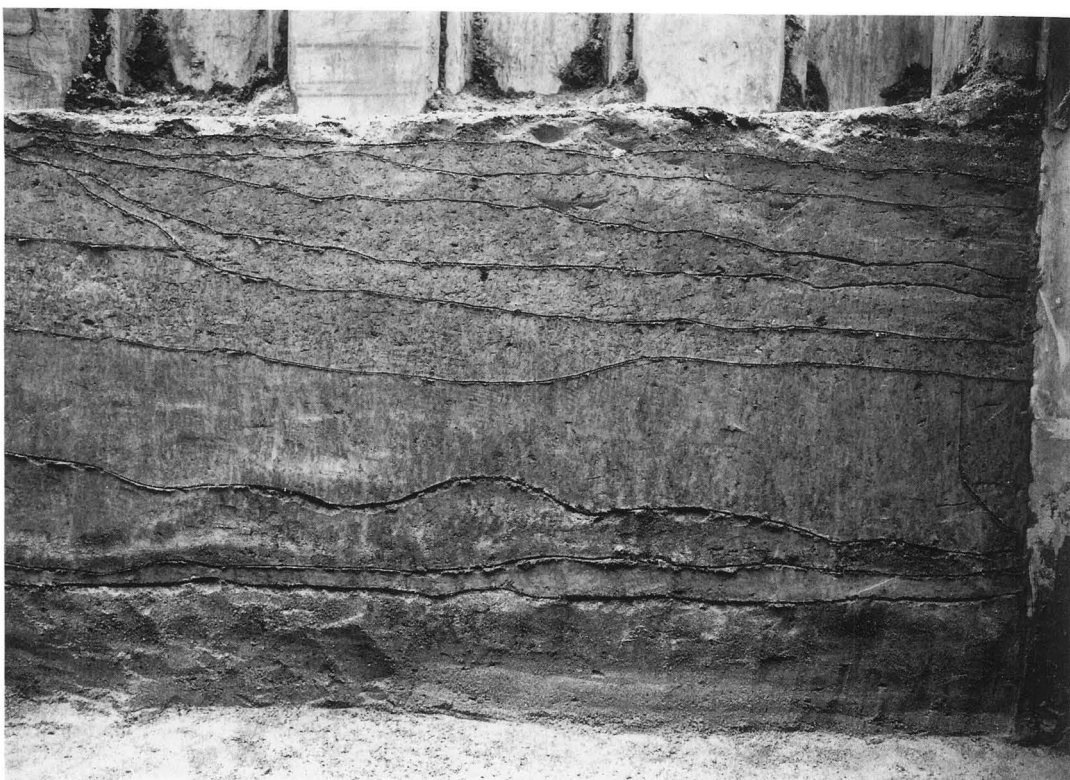
器形	番号	法量	形態の特徴	技法の特徴	色調	備考	
弥生土器	高杯	228	裾 15.1 高 (13.3)	○筒状の脚柱部から、「ハ」の字形にひろがる裾部。裾端部は上方につまみだされる。	○内面脚柱部シボリメ、裾部横方向のヘラケズリ調整、外面縦方向のヘラミガキ調整を施す。	○内面 灰黄褐色 10YR5/2・4/2、外面 灰黄褐色 10YR5/2 にぶい黄褐色 10YR5/3	○第4ビット 第16層 ○生駒西麓産 ○黒斑
	壺 F	229		○頸部と体部の境にユビによる押捺の凸帯を貼付けている。	○内面剝離のため詳細不明、外面縦方向のハケメ調整を施す。	○内外面 共淡黄色 2.5Y8/3	○第4ビット 第16層
	壺	230			○内面横方向のヘラミガキ調整、外面板状工具?によるナデ調整のち、櫛描による絵画文様を施す。	○内外面 共暗灰黄色 2.5Y5/2、にぶい黄色 2.5Y6/3	○第4ビット 第13層 ○生駒西麓産
		231			○内面縦方向のナデ調整、外面櫛描擬流水文を施す。	○内面 褐灰色 5YR 4/1 外面 灰褐色 5YR4/2・淡赤褐色 2.5YR7/4	○第4ビット 第13層
		232			○内面剝離のため詳細不明、外面櫛描麻状文のち流水文を施す。	○内外面 共灰黄褐色 10YR4/2	○第4ビット 第16層 ○生駒西麓産
		233			○内面ユビ調整、外面凹線文・櫛描波状文を施す。	○内面にぶい黄褐色 10YR4/3、外面 灰黄褐色 10YR 5/2・にぶい褐色 7.5YR5/4	○第4ビット 第13層
		234			○内面縦方向のハケメ調整、外面櫛描波状文・斜格子文を施す。	○内面 灰白色 2.5Y 8/2、外面にぶい黄褐色 10YR7/2	○第4ビット 断面 14層、側溝 (第13層)
		235			○内面ハケメ調整、外面櫛描斜格子文のち、波状文を施す。	○内面にぶい黄褐色 10YR7/3・6/4、外面にぶい黄褐色 10YR7/3	○第4ビット 第13層
	甕底部	236	底 4.7 高 (2.3)	○中央が上げ底の底部。	○内面板状工具によるナデ調整とユビナデ調整、外面ヘラミガキ調整、底部ユビナデ調整を施す。	○内面 灰黄褐色 10YR6/2・にぶい黄褐色 10YR 6/3、外面 灰黄褐色 10YR6/2・5/2	○第4ビット 第13層
		237	底 3.7 高 (3.1)	○平底。	○内面板状工具によるナデ調整、底部ナデ調整、外面縦方向のハケメ(4/cm)調整、底部ユビナデ調整を施す。	○内面 黄灰色 2.5Y 5/1、外面にぶい褐色 7.5YR5/4・褐灰色 10YR5/1	○第4ビット 第13層 ○生駒西麓産
		238	底 5.5 高 (6.85)	○中央が上げ底の底部。	○内面縦方向のヘラケズリ調整とユビナデ調整、外面縦方向のハケメ(11/cm)調整、底部板状工具によるナデ調整を施す。外面磨減している。	○内面 灰黄色 2.5Y 7/2・6/2、外面 黄灰色 2.5Y6/1・灰黄色 2.5Y7/2	○第4ビット 第13層
		239	底 4.5 高 (7.05)	○平底。	○内面板状工具によるナデ調整、底部ユビナデ調整、外面縦方向のヘラケズリ調整を施す。底部風化のため詳細不明。外面磨減している。	○内面 灰黄褐色 10YR6/2、外面にぶい黄褐色 10YR 5/3、灰黄褐色 10YR5/2	○第4ビット 第16層
		240	底 6.0 高 (3.8)	○中央が上げ底の底部。	○内面ナデ調整、外面縦方向のヘラミガキ調整を施す。外面磨減している。	○内面 灰黄褐色 10YR5/2、外面 黒色 10YR2/1	○第4ビット 断面 14層
	壺・鉢底部	241	底 4.9 高 (1.6)	○中央が上げ底の底部。	○内面板状工具によるナデ調整、外面横方向のヘラミガキ調整を施す。底部風化のため詳細不明。	○内外面 共暗灰黄色 2.5Y5/2・4/2	○第4ビット 断面 13-3層 ○生駒西麓産
	甕底部	242	底 4.3 高 (3.6)	○平底。	○内面ユビオサエ調整、外面縦方向のヘラミガキ調整を施す。	○内面 暗灰黄色 2.5 Y5/2、外面 黄褐色 2.5Y5/3	○第4ビット 第13層 ○生駒西麓産
		243	底 6.3 高 (4.6)	○平底。	○内面ユビナデ調整、外面縦方向のヘラケズリ調整を施す。底部風化のため詳細不明。	○内外面 共にぶい黄褐色 10YR5/3・4/3	○第4ビット 断面 14層 ○生駒西麓産 ○黒斑
甕・壺底部	244	底 7.8 高 (2.5)	○中央が上げ底の底部。	○内面ユビナデ調整、外面縦方向のヘラミガキ調整、底部ユビナデ調整を施す。	○内面にぶい黄褐色 10YR5/3、外面にぶい黄褐色 10YR5/3・黄灰色 2.5Y4/	○第4ビット 第13層 ○生駒西麓産	
	245	底 9.0 高 (7.3)	○中央が上げ底の底部。	○内面ユビナデ調整、外面縦方向のハケメ(5/cm)調整をす。底部風化のため詳細不明。	○内面 橙色 7.5YR 7/6 外面にぶい黄褐色 10YR7/4・6/3	○第4ビット 第13層 ○外面煤付着 ○黒斑	

器形	番号	法量	形態の特徴	技法の特徴	色調	備考
弥生土器	246	底高 4.35 高 (1.35)	○中央が上げ底の底部。 ○底部中央に穿孔。	○内面ユビオサエ調整、外面体・底部ユビナデ調整を施す。	○内面黄褐色2.5Y5/3、外面暗灰黄色2.5Y4/2	○第4ビット第16層 ○生駒西麓産
	247	底高 5.7 高 (2.3)	○中央が上げ底の底部。	○内面ユビナデ調整、外面縦方向のヘラミガキ調整、底部ユビナデ調整を施す。	○内面灰黄色2.5Y6/2、外面暗灰黄色2.5Y5/2	○第4ビット第13層
	248	底高 3.5 高 (4.1)	○中央が上げ底の底部。	○内面ユビナデ調整、外面縦方向のヘラミガキ調整、底部ユビナデ調整を施す。	○内面にぶい黄橙色10YR7/2、外面灰黄褐色10YR6/2	○第4ビット第13層
	249	底高 10.2 高 (2.95)	○中央が上げ底の底部。	○内面ヘラケズリ調整、外面体・底部ユビナデ調整を施す。	○内面にぶい黄橙色10YR7/2、外面灰黄褐色10YR6/2	○第4ビット第16層
	250	底高 6.75 高 (3.55)	○中央が上げ底気味の底部。	○内面横方向のヘラケズリ調整、外面縦方向のヘラミガキ調整、底部板状工具によるナデ調整を施す。内外面共磨減している。	○内面暗灰黄色2.5Y5/2・にぶい赤橙色5YR5/4、外面灰黄色2.5Y6/2	○第4ビット第16層
	251	底高 8.1 高 (5.55)	○平底?	○内面乱方向のハケメ(3~5/cm)調整、外面縦方向のヘラミガキ調整を施す。	○内面にぶい黄色2.5Y6/3、外面にぶい黄橙色10YR7/3・灰黄褐色10YR4/2	○第4ビット第13層、側溝(第13層) ○外面煤付着
	252	底高 6.6 高 (8.2)	○中央が上げ底の底部。	○内面縦方向のハケメ調整、底部ユビオサエ調整、外面縦方向のヘラミガキ調整、底部ヘラケズリのちユビナデ調整を施す。内外面共磨減している。	○内面にぶい黄橙色10YR6/3・にぶい黄褐色10YR5/3、外面灰黄褐色10YR6/2・にぶい黄橙色10YR7/2	○第4ビット断面14層、側溝(第13層)
石製品	石 鎌	253	長幅厚重 (6.5) 1.45 0.5 4.0 g	○凸基有茎式。 ○両端わずかに欠失。 ○中央断面形片凸。		○暗灰色 ○第4ビット断面14層 ○サヌカイト製
		254	長幅厚重 (4.0) 1.95 0.45 2.3 g	○凸基有茎式。 ○基部欠失。 ○中央断面形両凸。		○暗灰色 ○第2ビット第35層 ○サヌカイト製
		255	長幅厚重 (3.75) 1.2 0.55 2.7 g	○凸基有茎式。 ○先端一部欠失。 ○中央断面形やや六角形。	○基部にサヌカイト表皮残存。	○暗灰色 ○第2ビット第35層 ○サヌカイト製
	石 核	256	長幅厚重 (5.4) 6.45 3.65 140.2 g	○5ヶ所の打点がみられる。	○古い剝離面と2次的な剝離面をもつ。 ○片面にサヌカイト表皮残存。	○暗灰色・灰色 ○第2ビット第35層 ○サヌカイト製
		細部調整剥片	257	長幅厚重 (4.95) 5.4 1.6 36.9 g	○尖端部には細部調整がみられる。	○一部にサヌカイト表皮残存。
	258		長幅厚重 (4.75) 5.7 1.0 34.1 g	○側縁に細部調整がみられる。	○一部にサヌカイト表皮残存。	○暗灰色 ○第4ビット第13層 ○サヌカイト製
用途不明	259	長幅厚重 (2.3) 6.95 0.9 26.0 g	○磨製。		○灰色 ○第2ビット第35層	
石 剣	260	長幅厚重 (5.85) (2.55) (0.7) 14.5 g	○磨製。 ○片面剝離。 ○表面一部磨き痕あり。		○暗灰色 ○第2ビット南半 ○粘板岩製	
	261	長幅厚重 (5.25) (1.55) (0.55) 7.1 g	○磨製。 ○両面に磨き痕あり。		○暗灰色 ○第2ビット北半 ○頁岩製	
砥石	262	長幅厚重 (5.3) (7.5) (5.4) 275.0 g	○一部に砥面。		○灰色 ○第2ビット第35層	

図 版

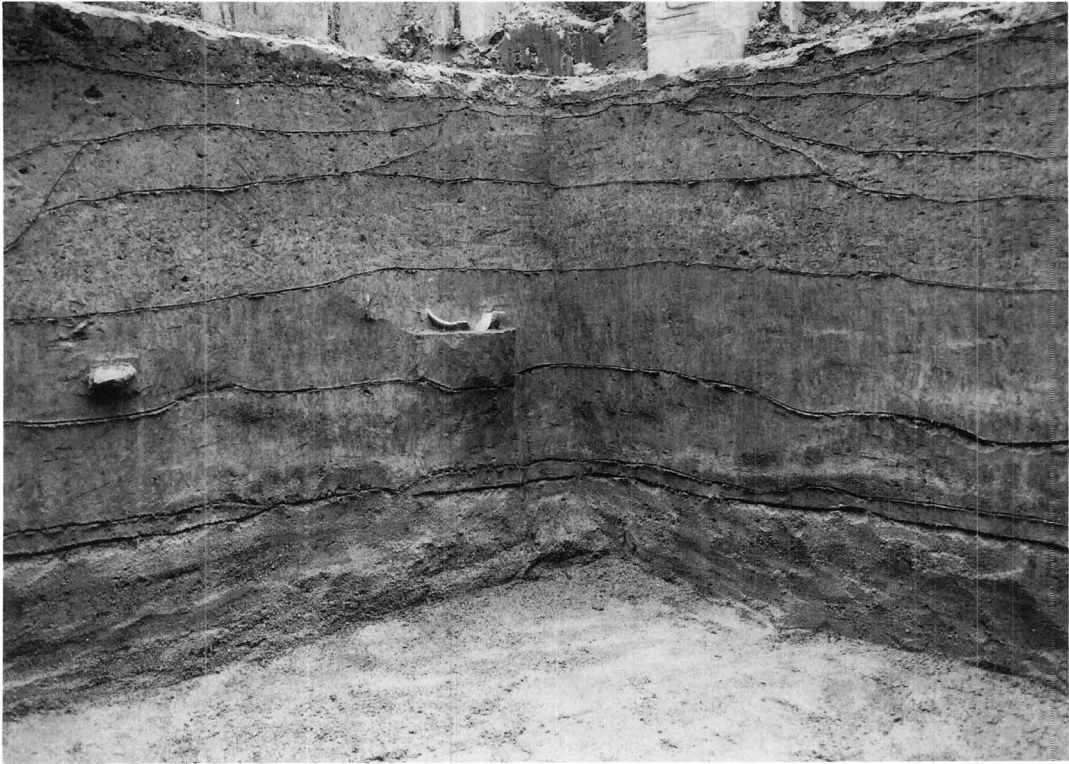


発掘現場周辺風景（南より）

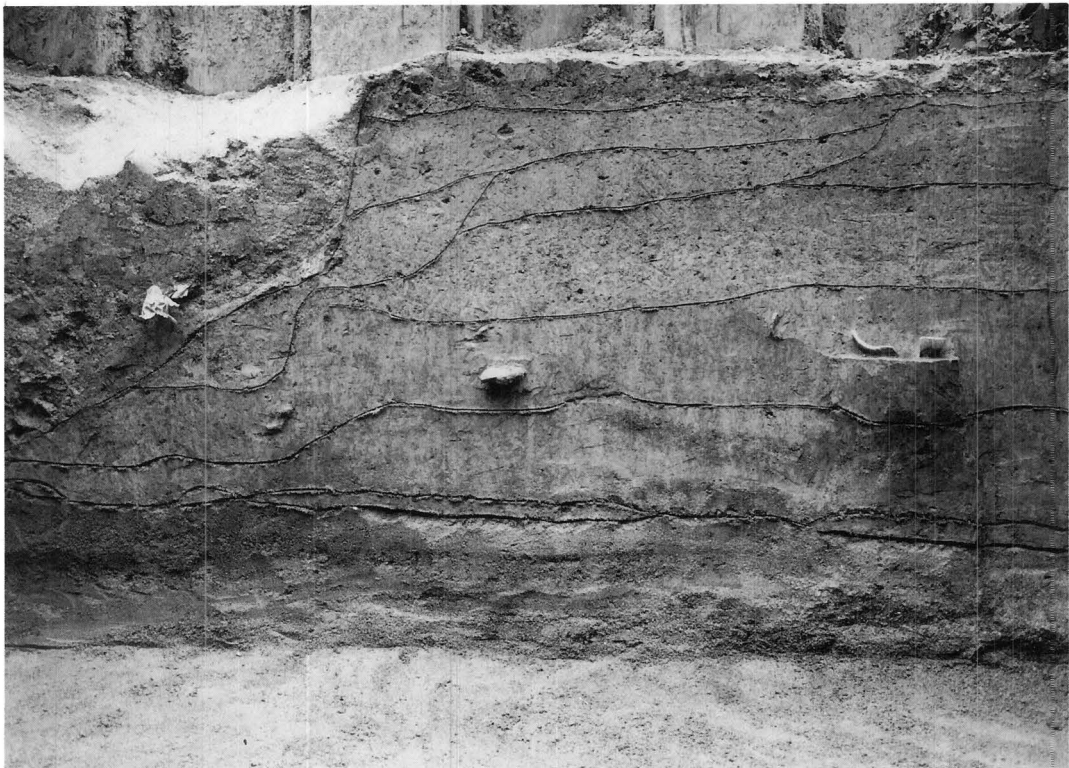


第1ピット東壁断面（西より）

図版2
第1ピット土層断面



北・東壁上位断面（南西より）



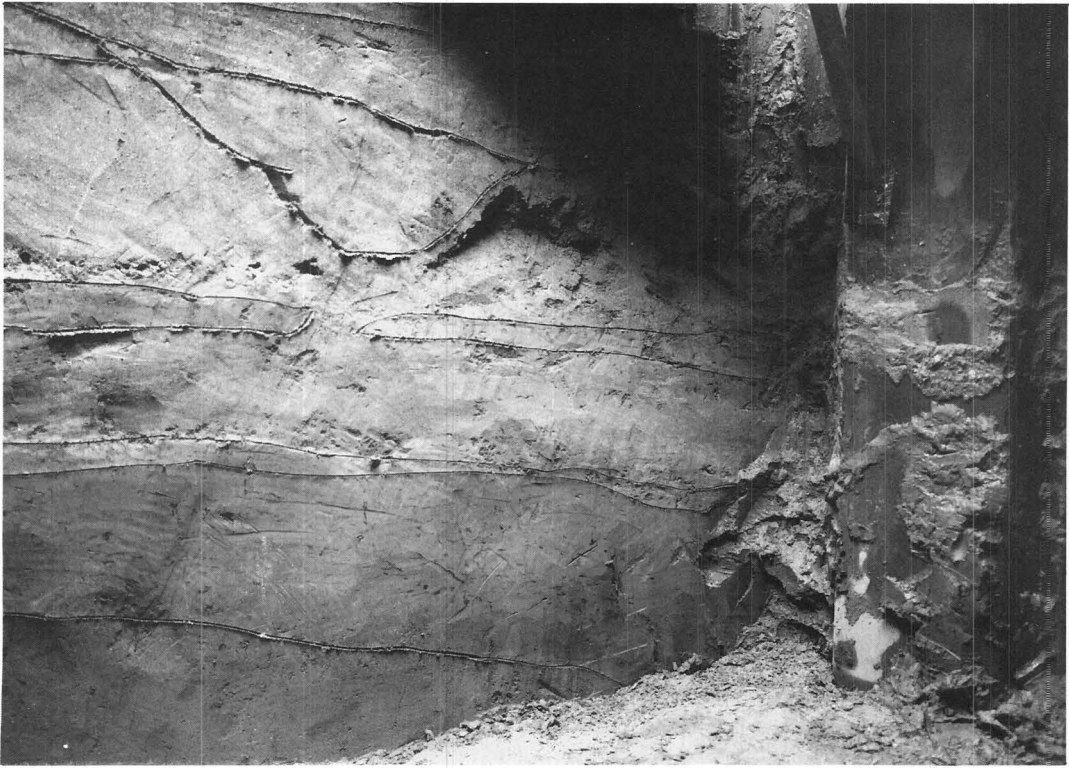
東壁上位断面（東より）



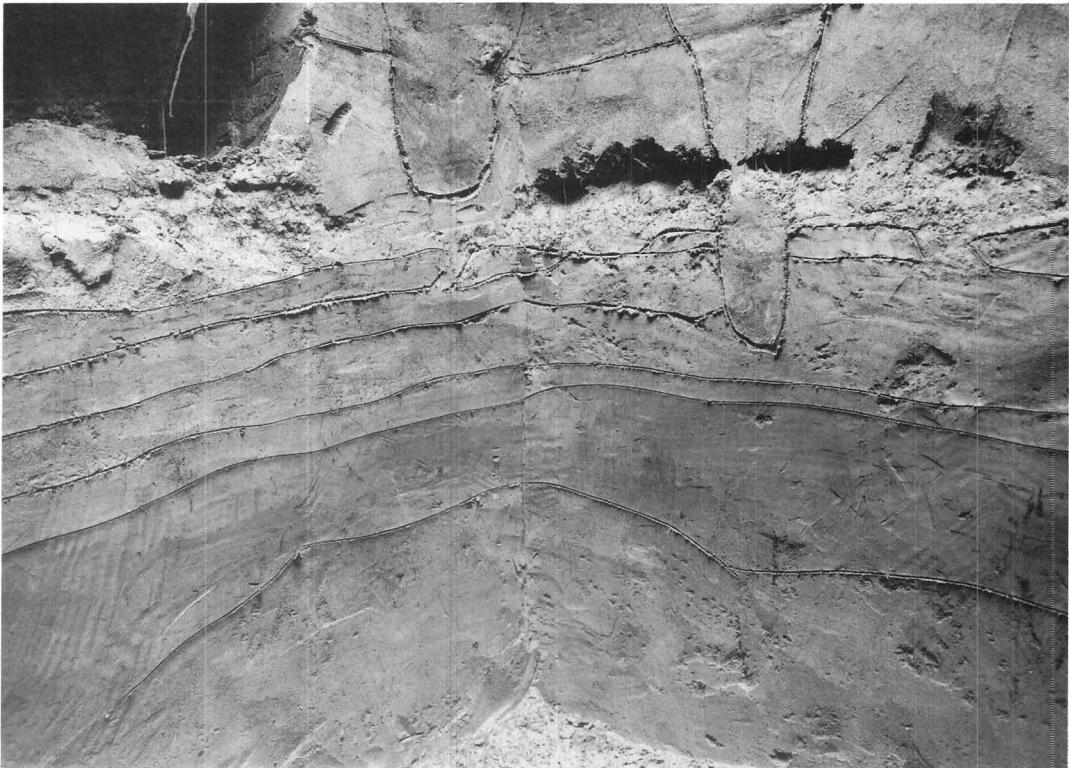
北壁中位断面（南より）



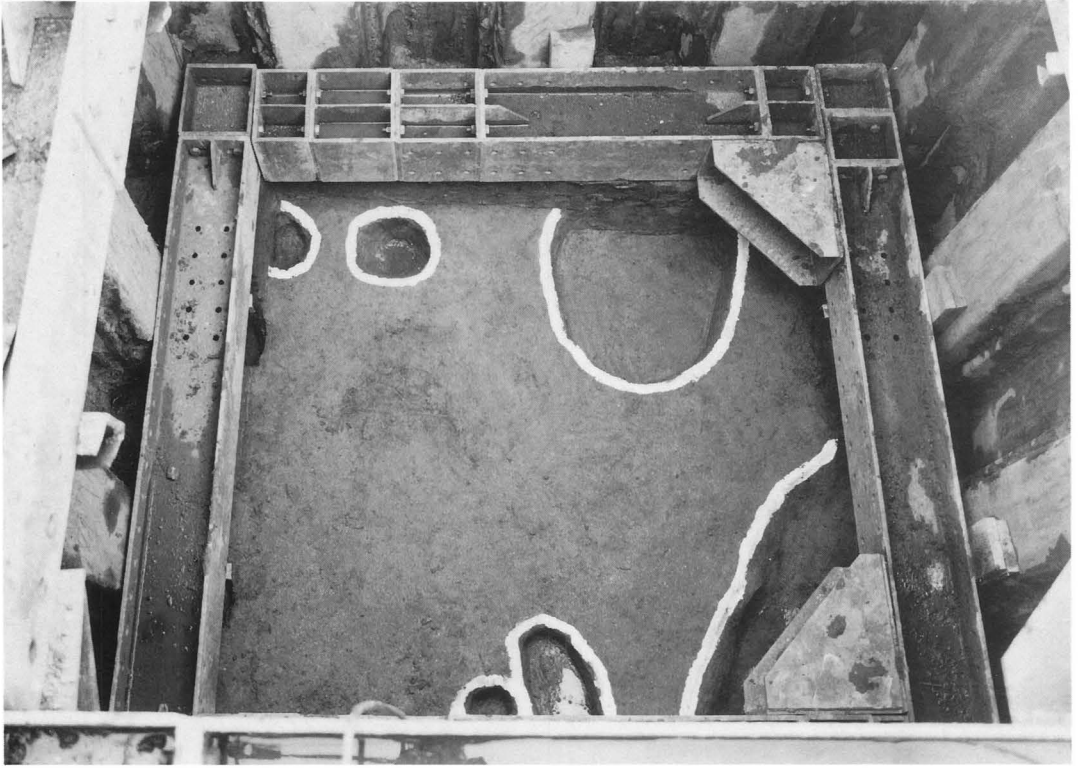
東壁中位断面内具痕跡検出状況（西より）



北壁下位断面（南より）



北・東壁下位断面（南西より）



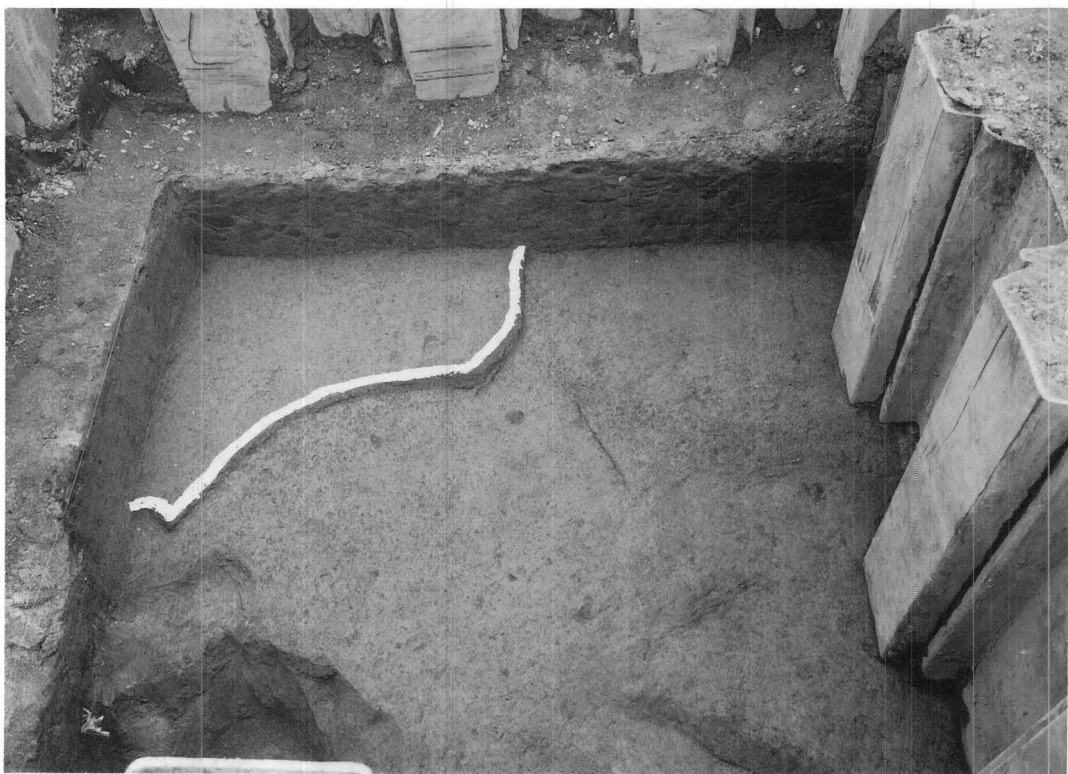
第2遺構面遺構検出状況（西より）



第1遺構面遺構検出状況（北より）



須恵器出土状況（南西より）



落ち込み検出状況（西より）

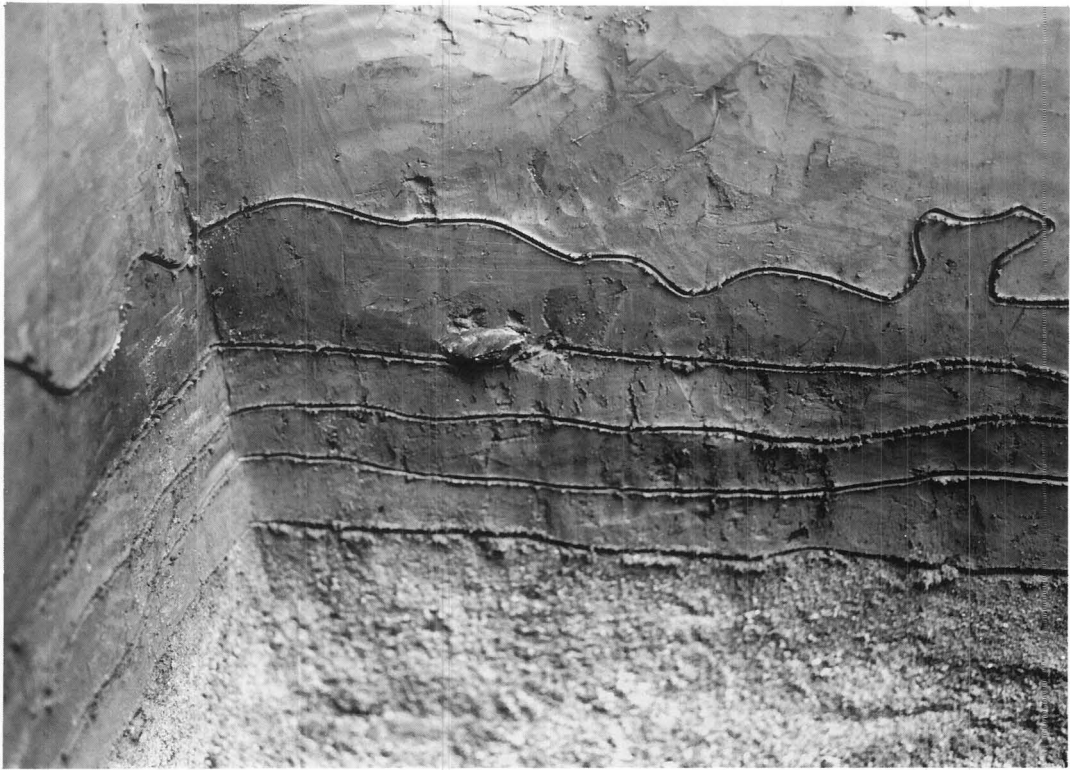


調査風景 (北より)



南壁下位断面 (南より)

図版 8
第2ピット土層断面



東壁下位断面（西より）



東壁断面（第49層内）遺物出土状況（西より）



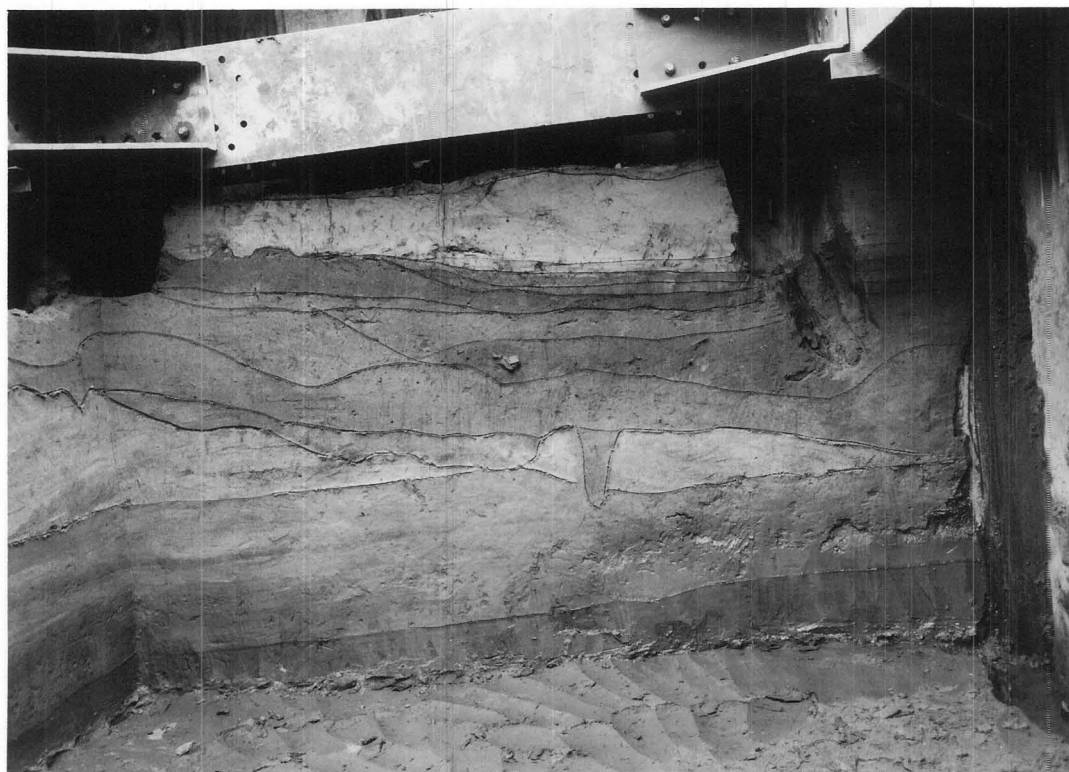
東・南壁中位断面（北西より）



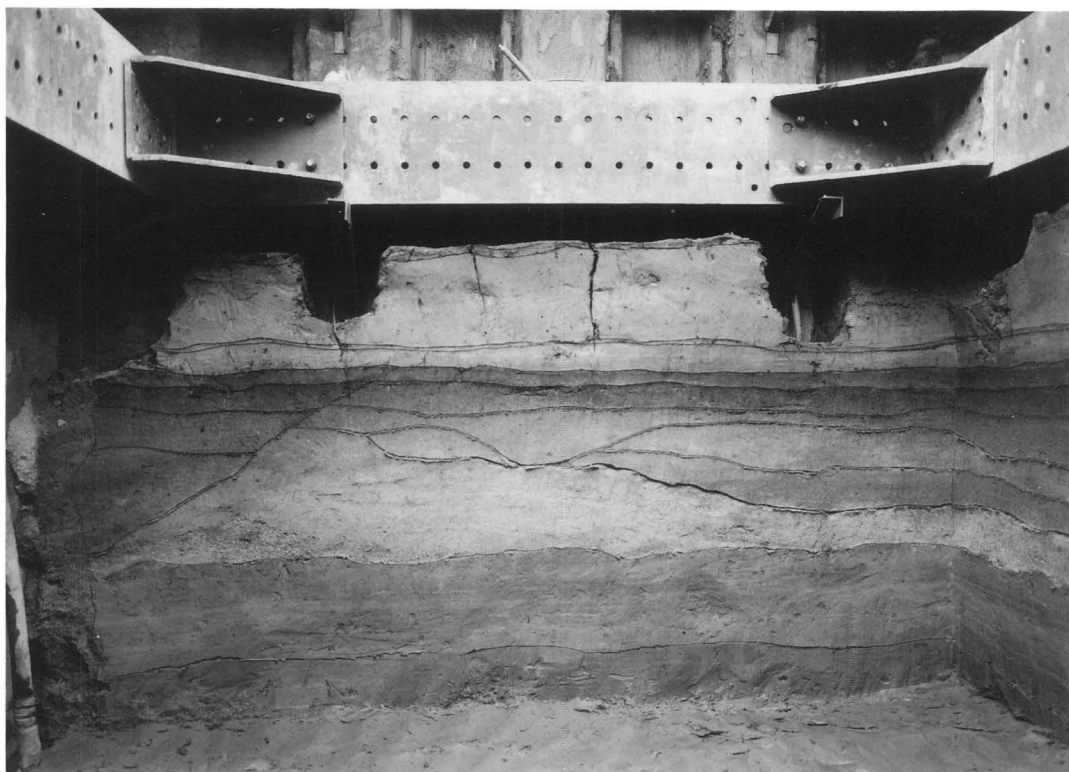
東壁中位断面（西より）



東壁中位断面（西より）



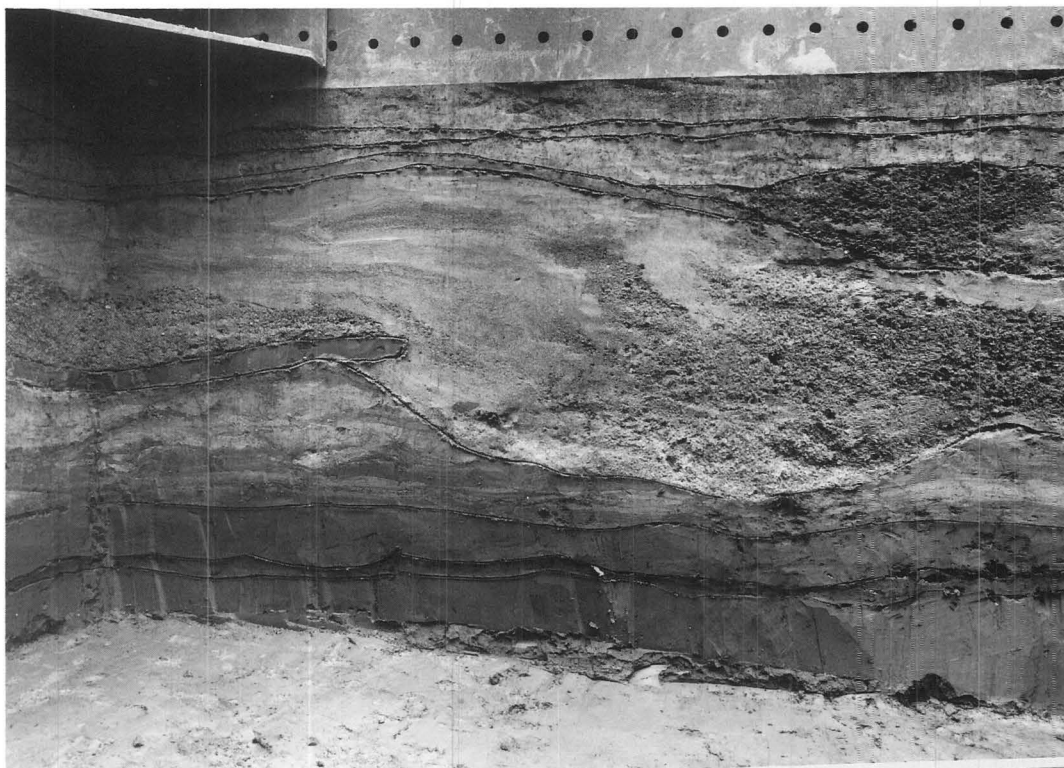
南壁中位断面（北より）



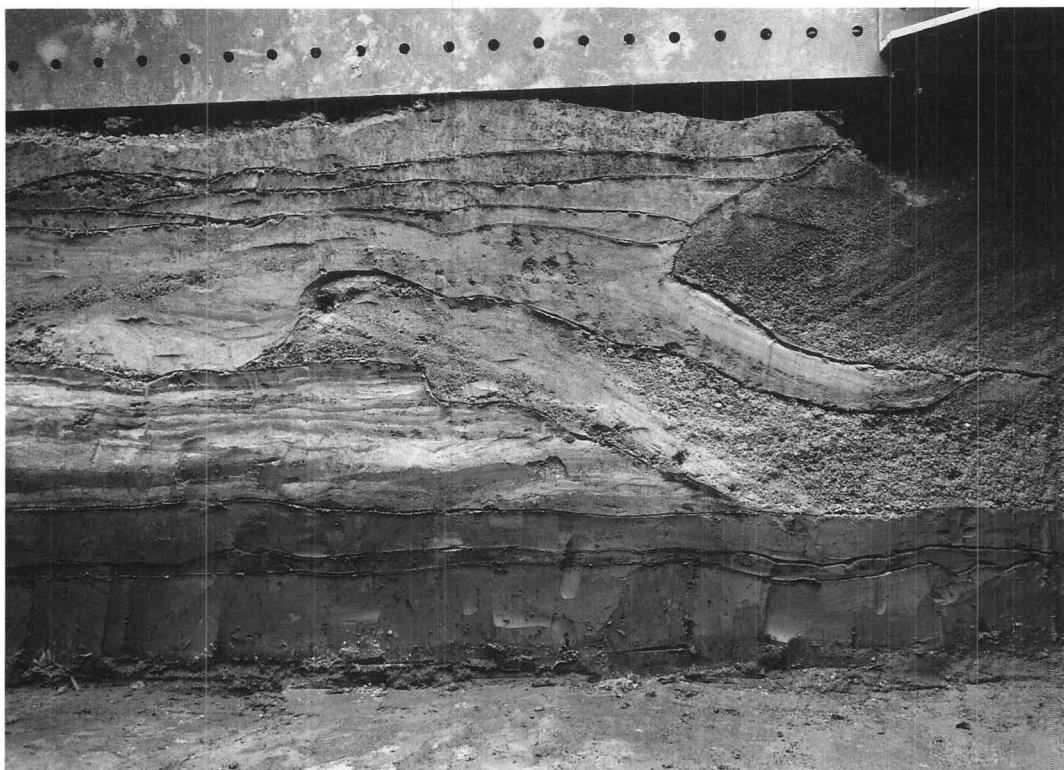
北壁中位断面 (南より)



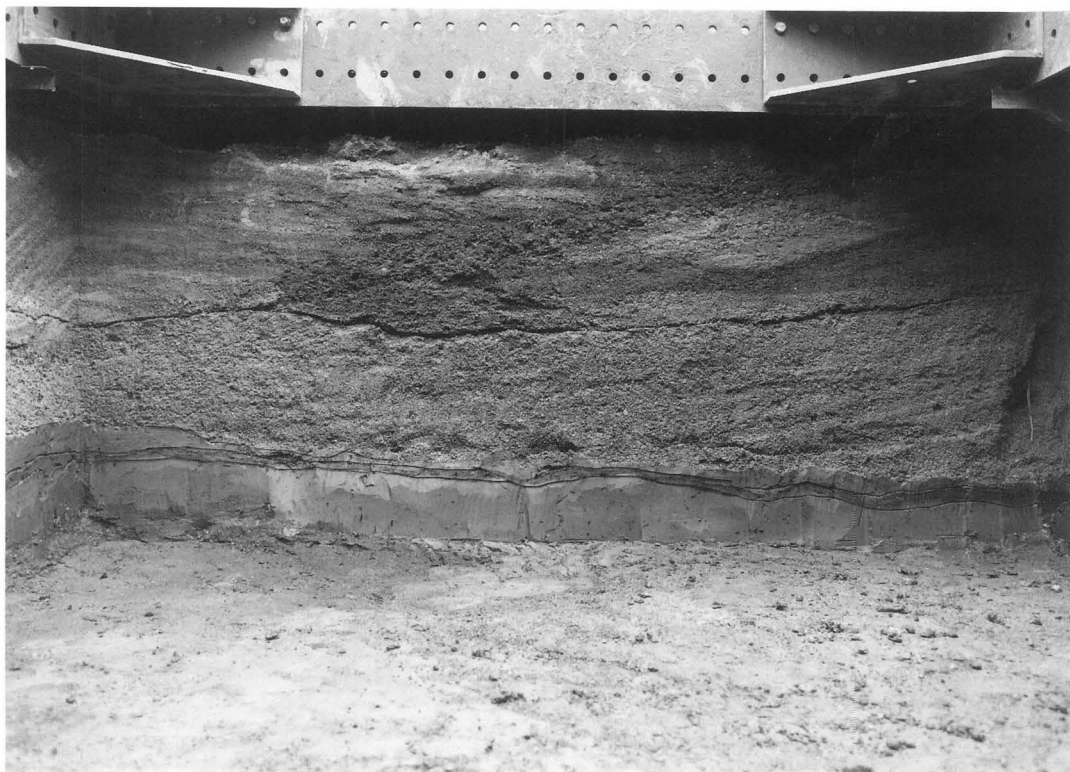
北・東壁中位断面 (南西より)



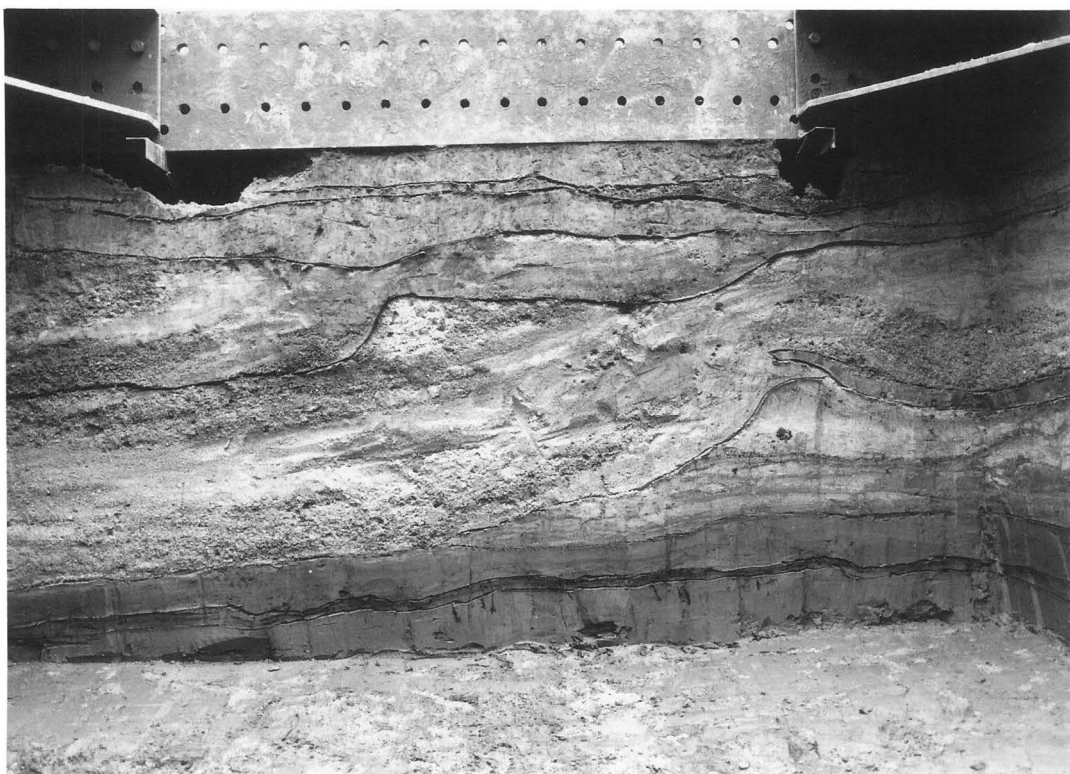
東壁上位断面（西より）



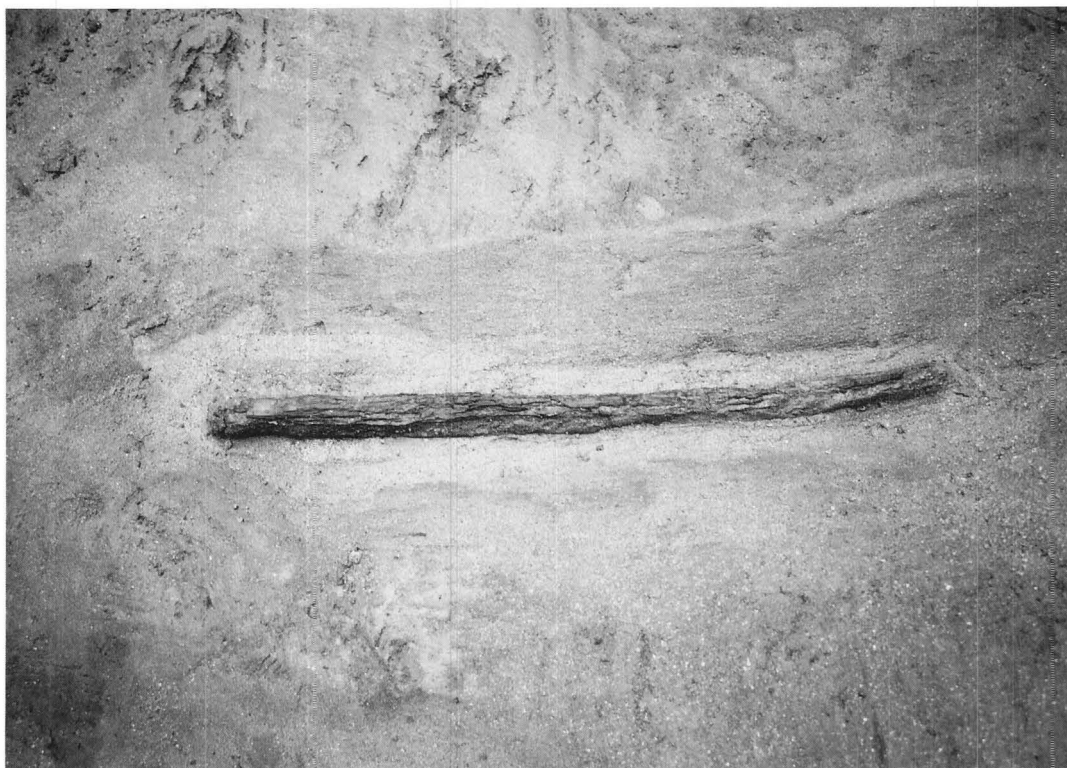
東壁上位断面（西より）



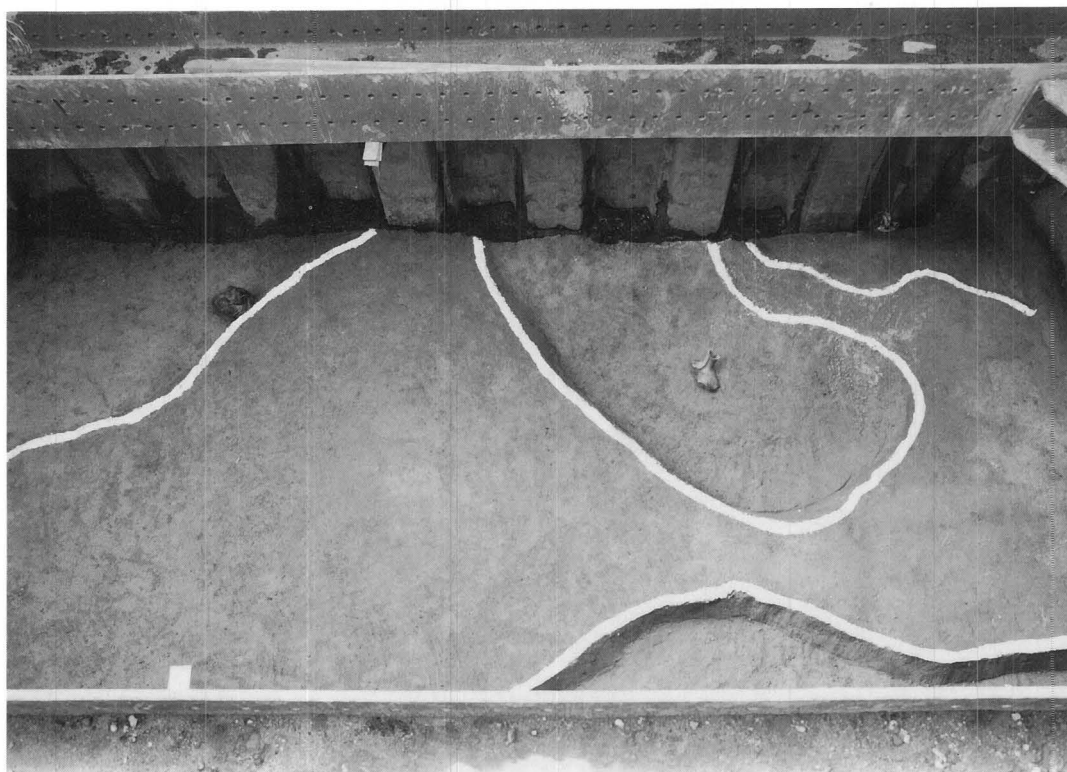
南壁上位断面（北より）



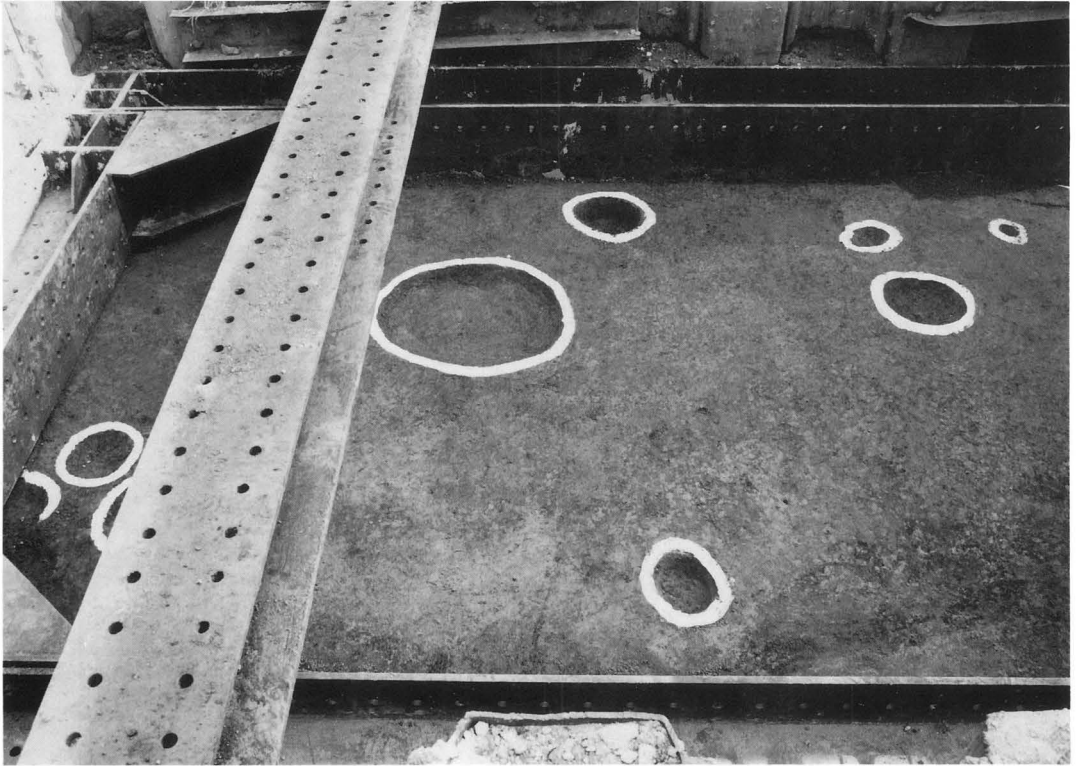
北壁上位断面（南より）



第13層内自然木出土状況（西より）



第2遺構面遺構検出状況（東より）

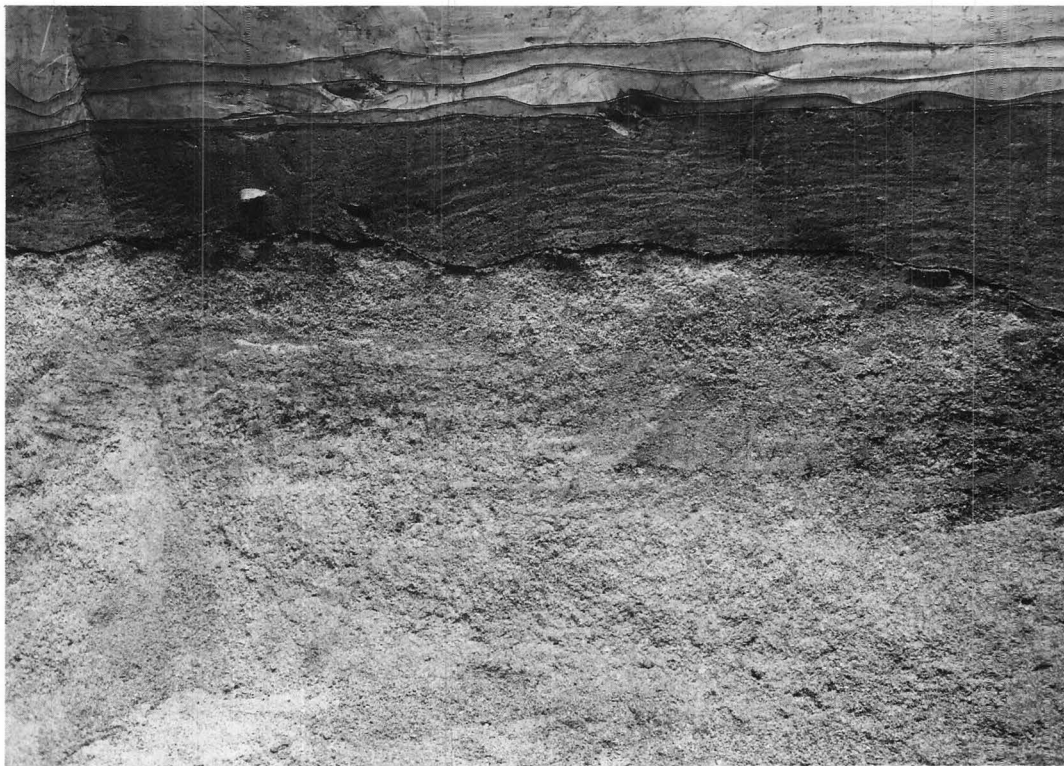


第1遺構面遺構検出状況（西より）

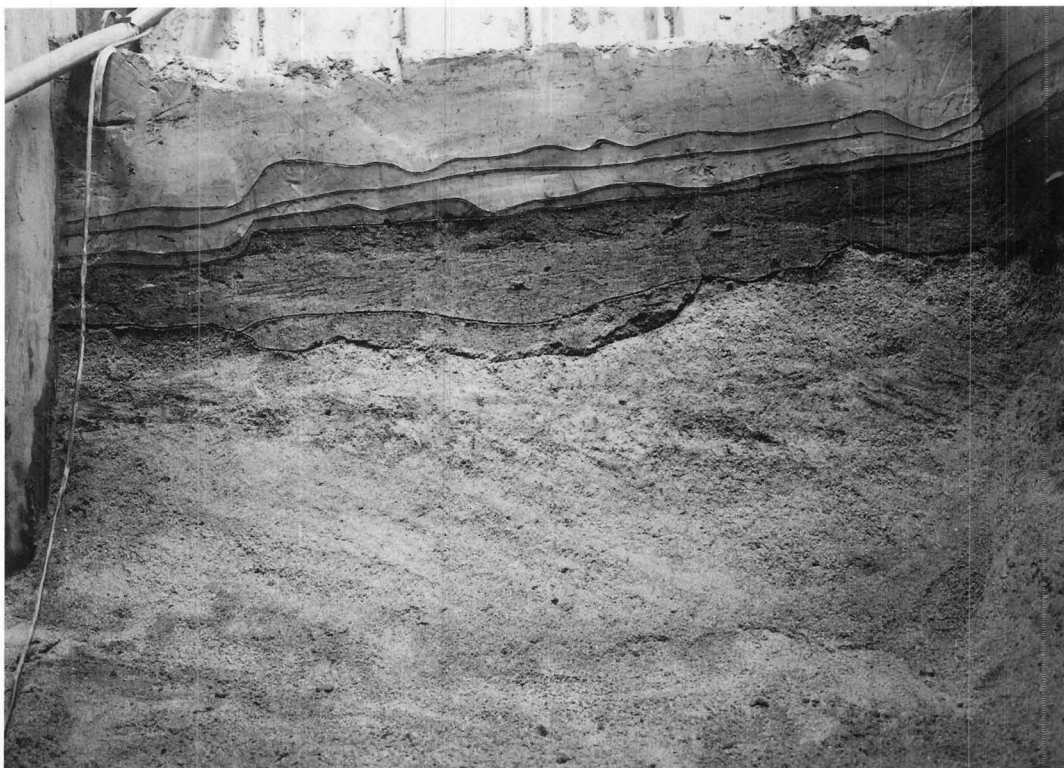


作業風景（西より）

図版 16
第4ピット土層断面



東壁中位断面（西より）



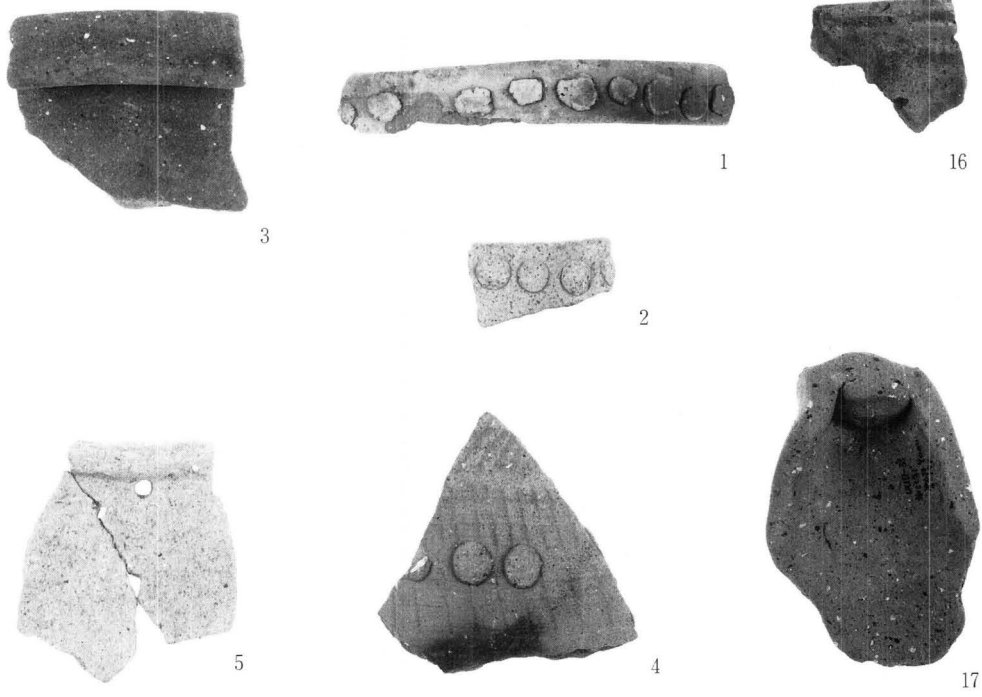
北壁中位断面（南より）



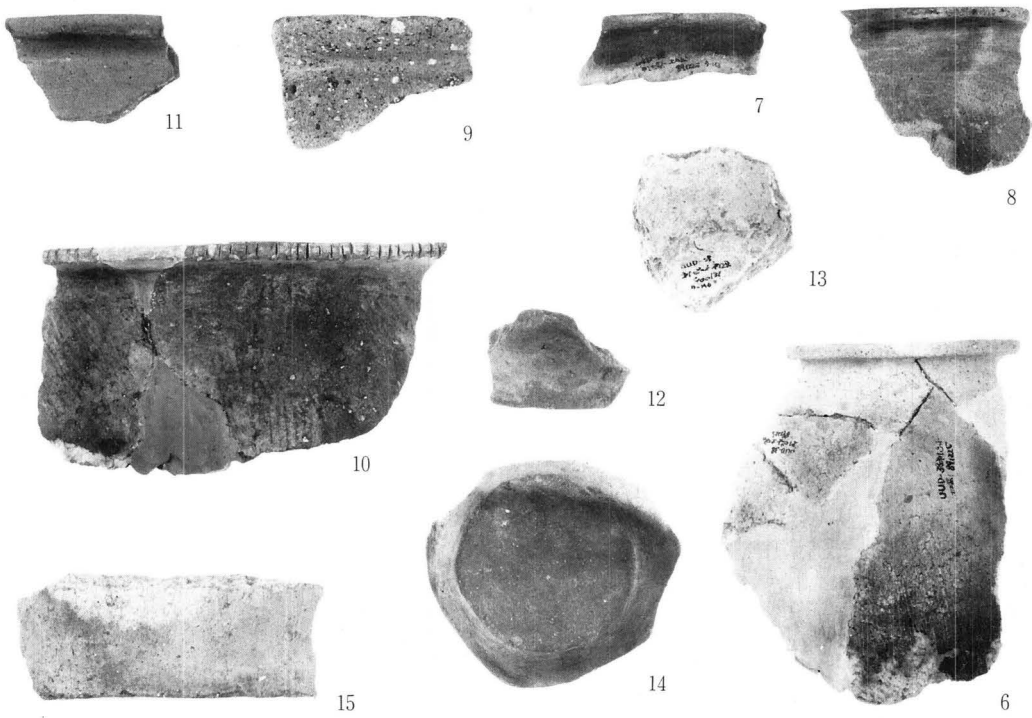
東壁上位断面（西より）



作業風景（南西より）



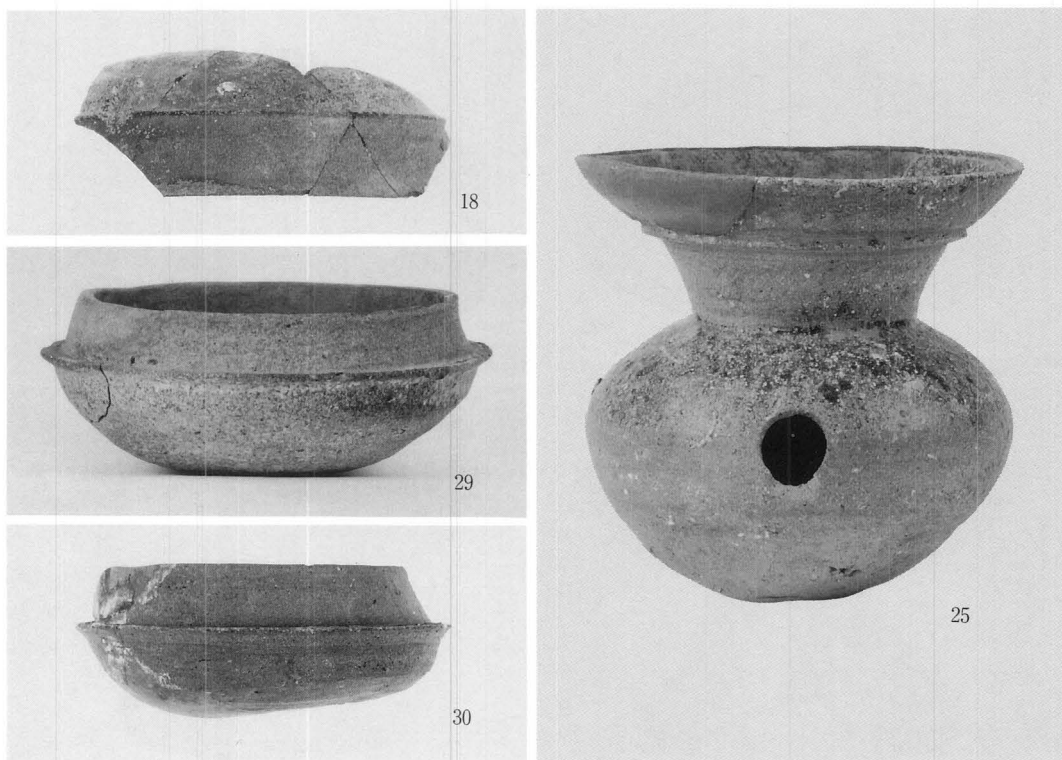
壺(1~4) 無頸壺(5) 高杯(17)



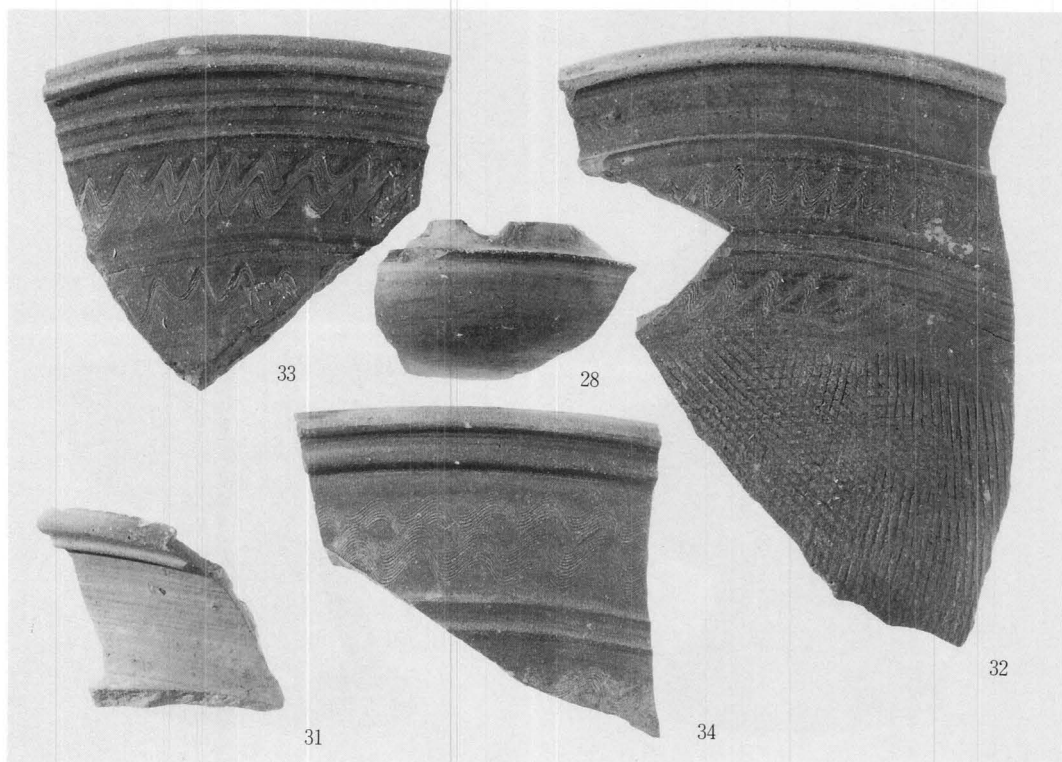
甕(6~9) 大型甕(10・11) 底部(12~15)



有蓋高杯蓋(22・23) 有蓋高杯(19~21・24) 無蓋高杯(26・27)



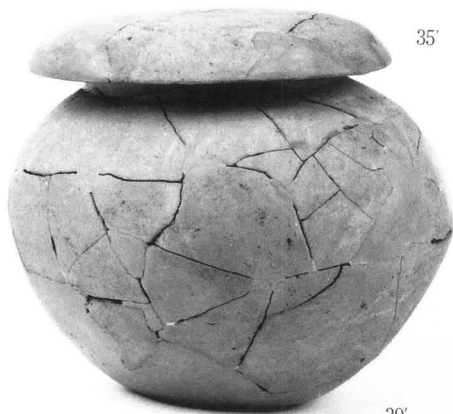
有蓋高杯蓋(18) 甗(25) 杯身(29・30)



杯身(28) 甗(31) 器台(32) 大型甗(33・34)



35



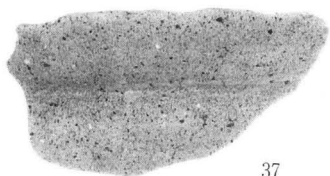
35'

39'

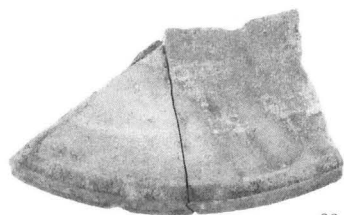


39

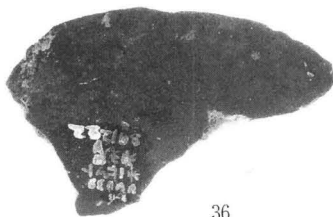
皿(35) 有蓋短頸壺(39)



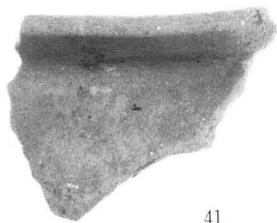
37



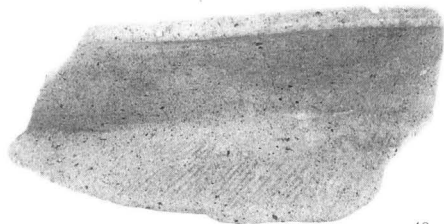
38



36

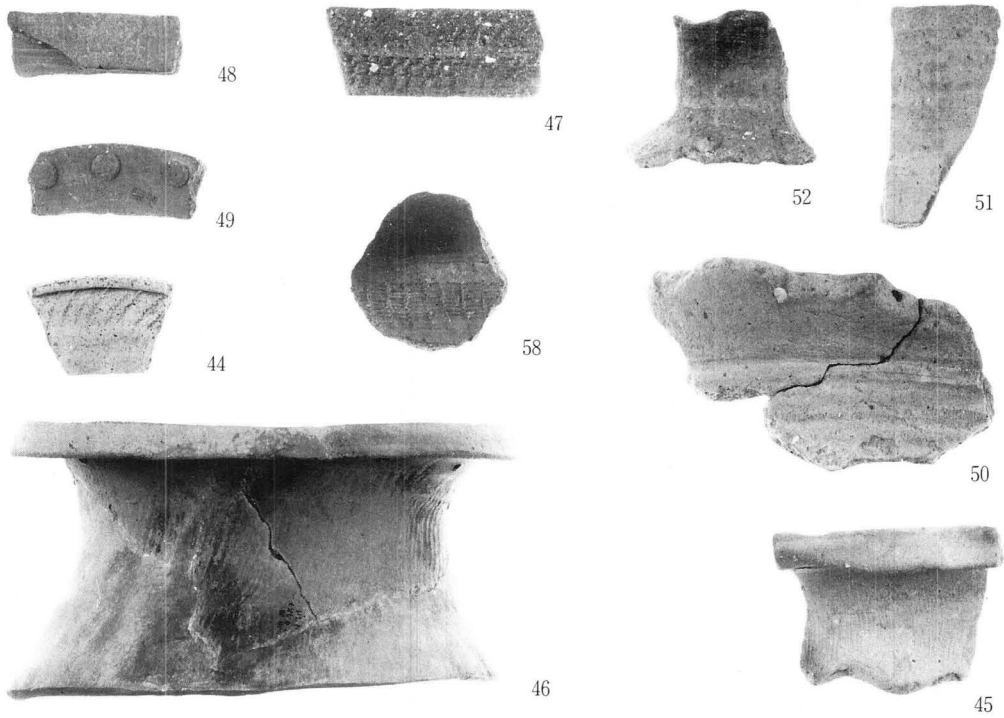


41

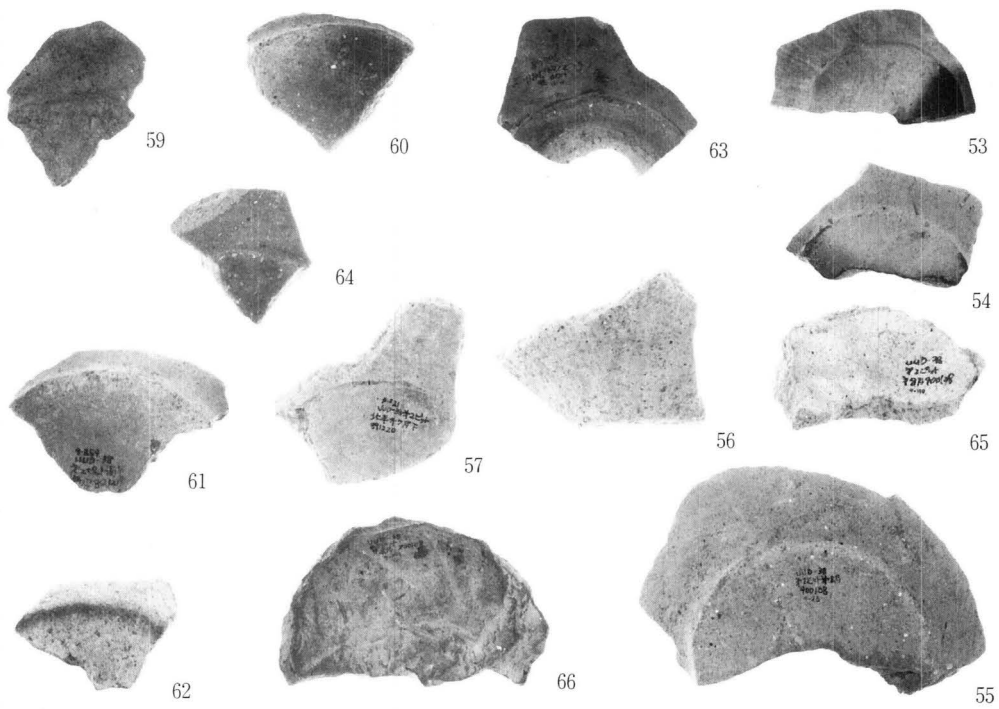


40

皿(36) 浅鉢(37) 杯蓋(38) 甕(40・41)



壺(44~49) 細頸壺(50~52) 土製円板(58)



底部(53~57・59~66)



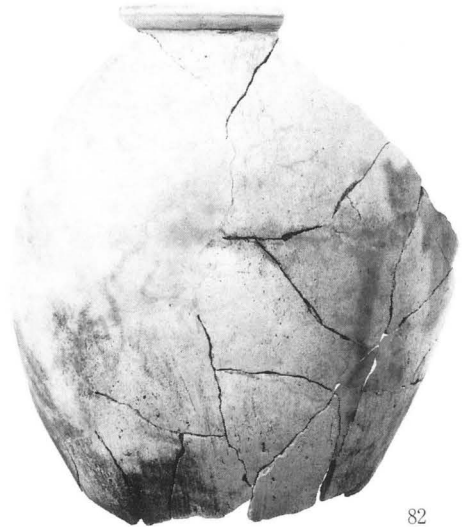
42



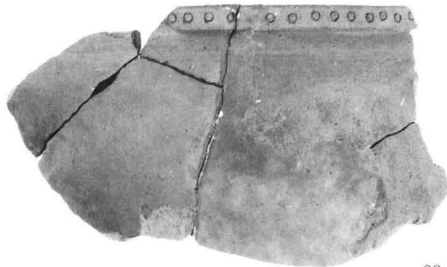
43



71



82

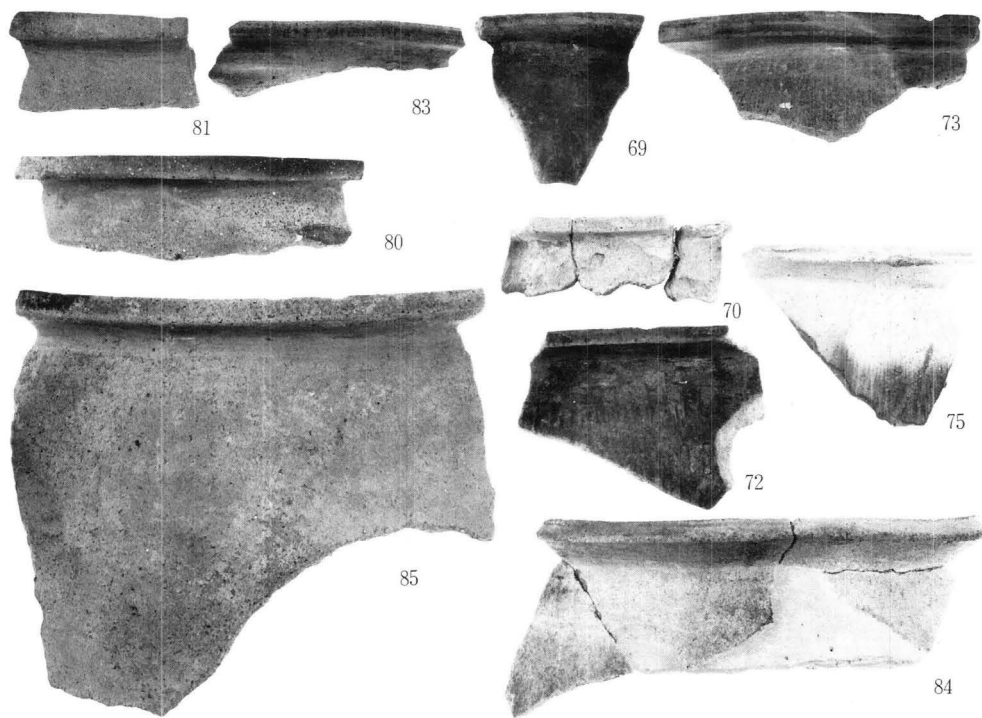


88

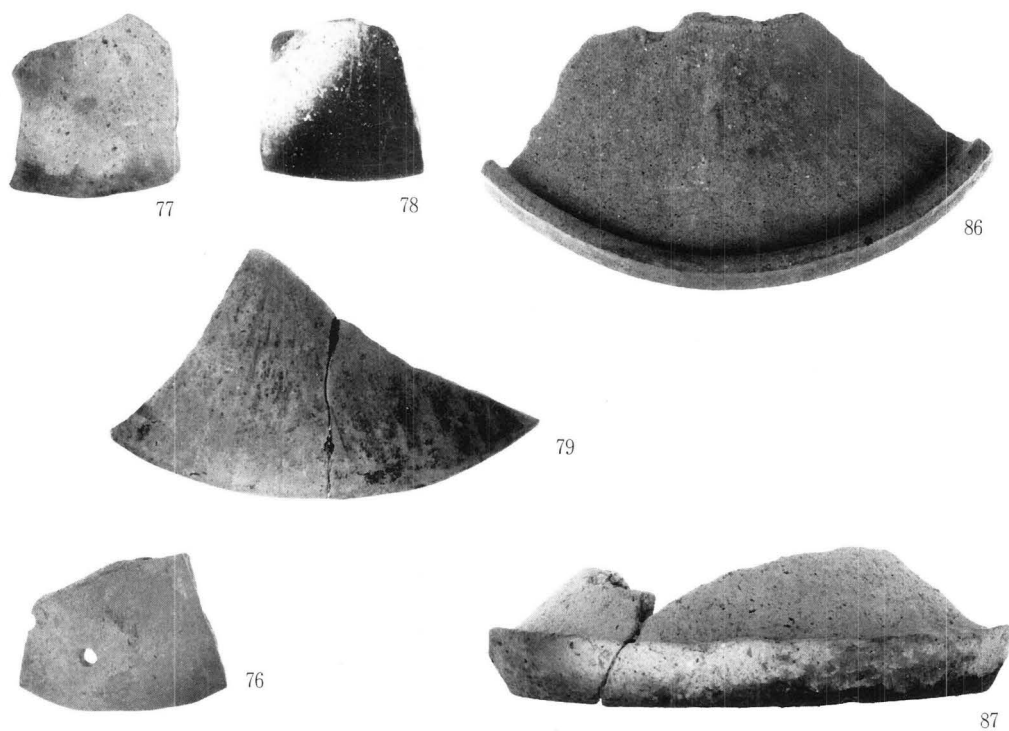


89

壺(42・43) 甕(71) 大型甕(82・88・89)



甕 (69・70・72・73・75) 大型甕 (80・81・83~85)



甕蓋 (76~79) 転用品 (86・87)



127

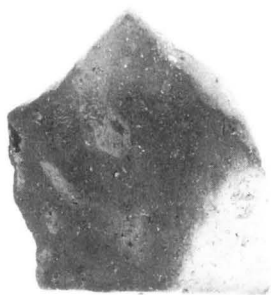


132



129

甕(40・132) 甕蓋(129)



98



96



90



92



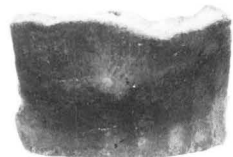
91



94

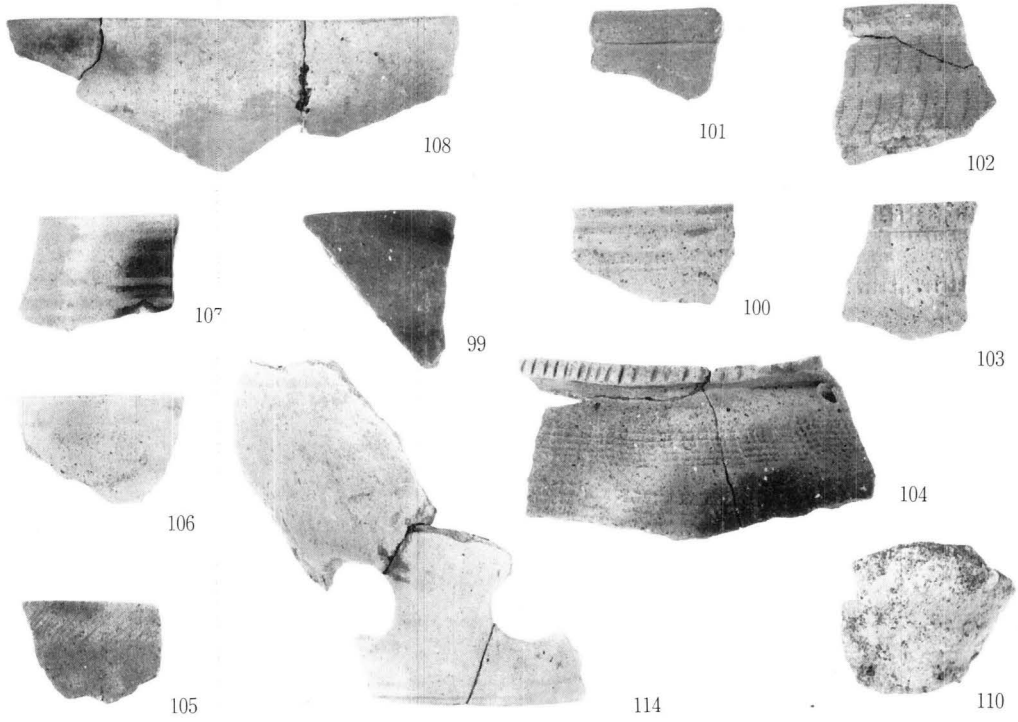


97

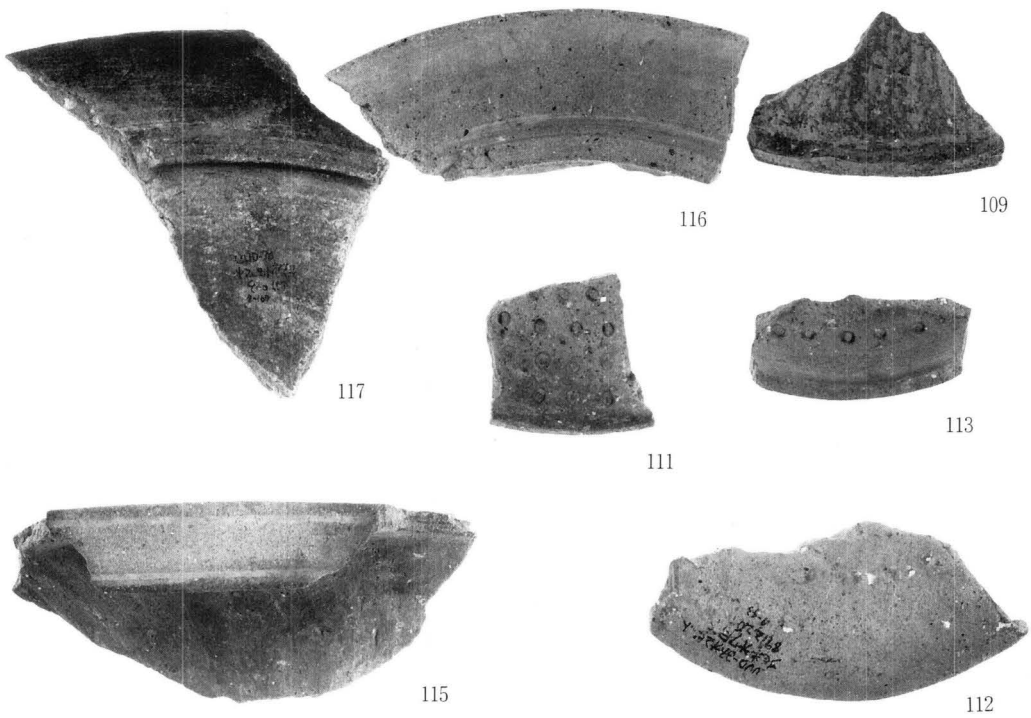


95

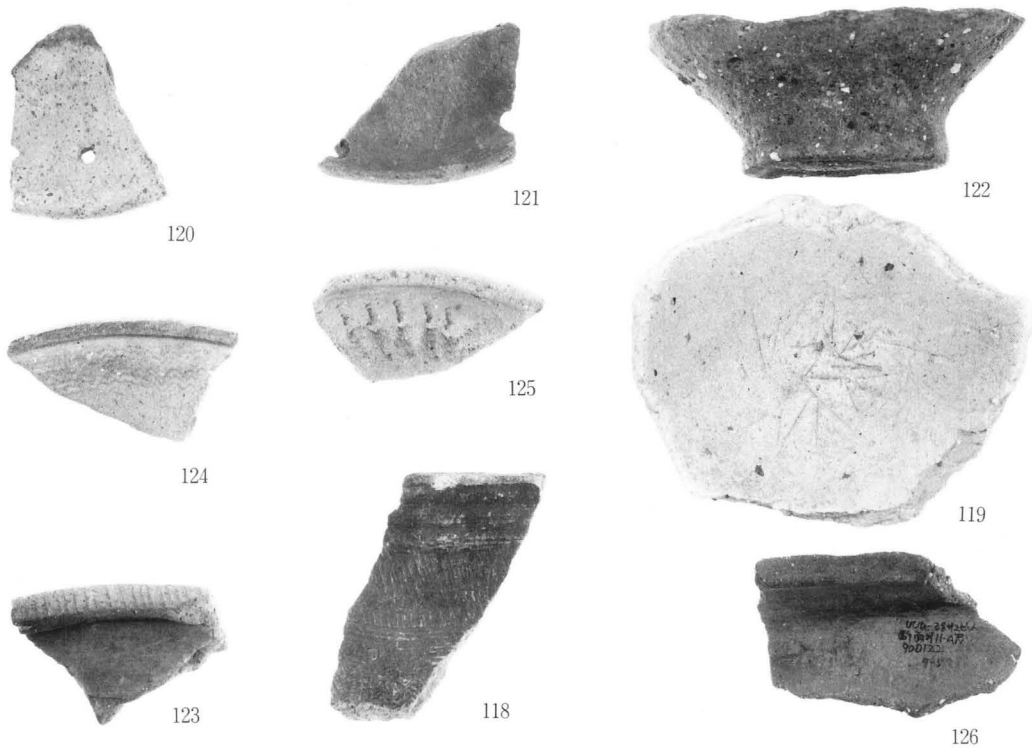
底部(90~92・94~98)



鉢(99・101~104) 壺・鉢(100) 台付鉢・高杯(105~108) 台付鉢・台付無頸壺(114)



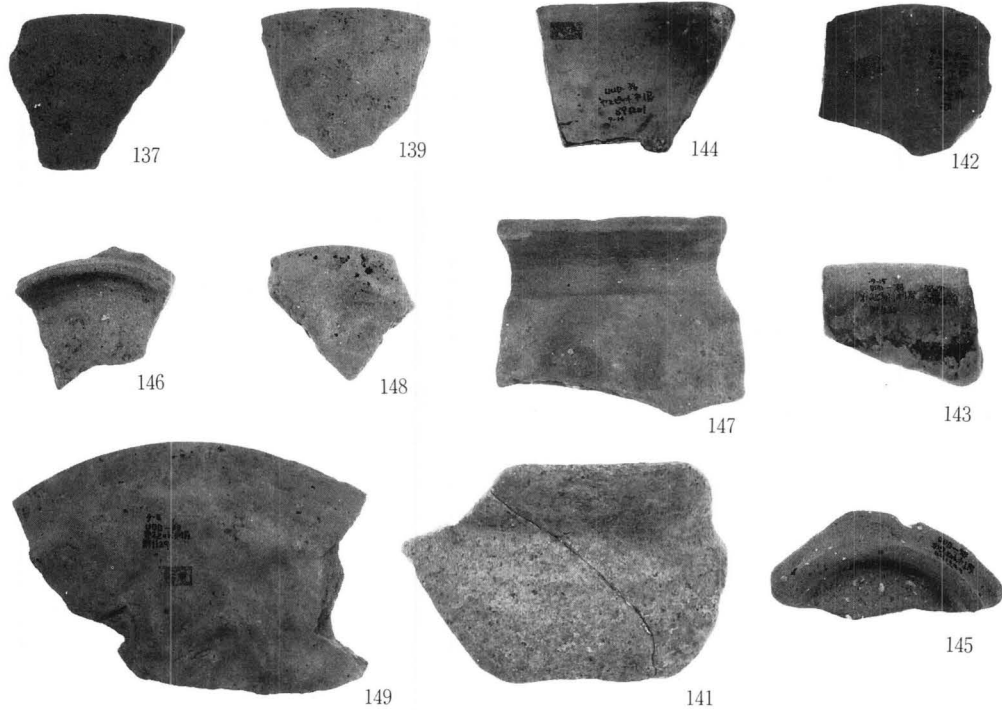
脚部(109・111~113) 高杯(115~117)



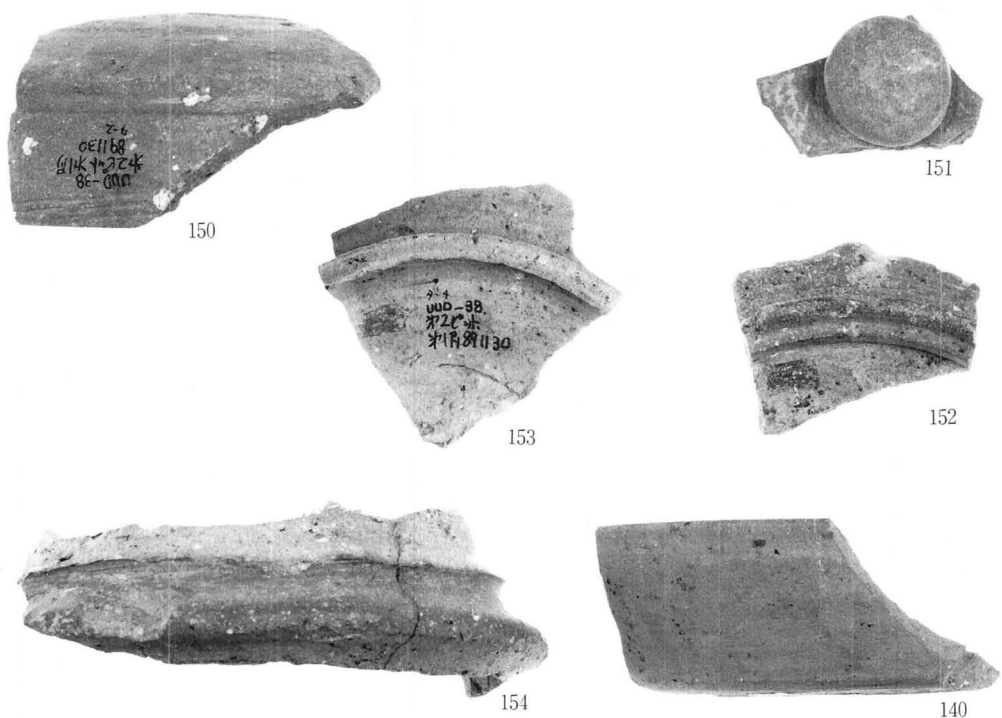
短頸壺・水差形土器(118) 壺底部(119・122) 壺蓋(120・121) 壺(123~126)



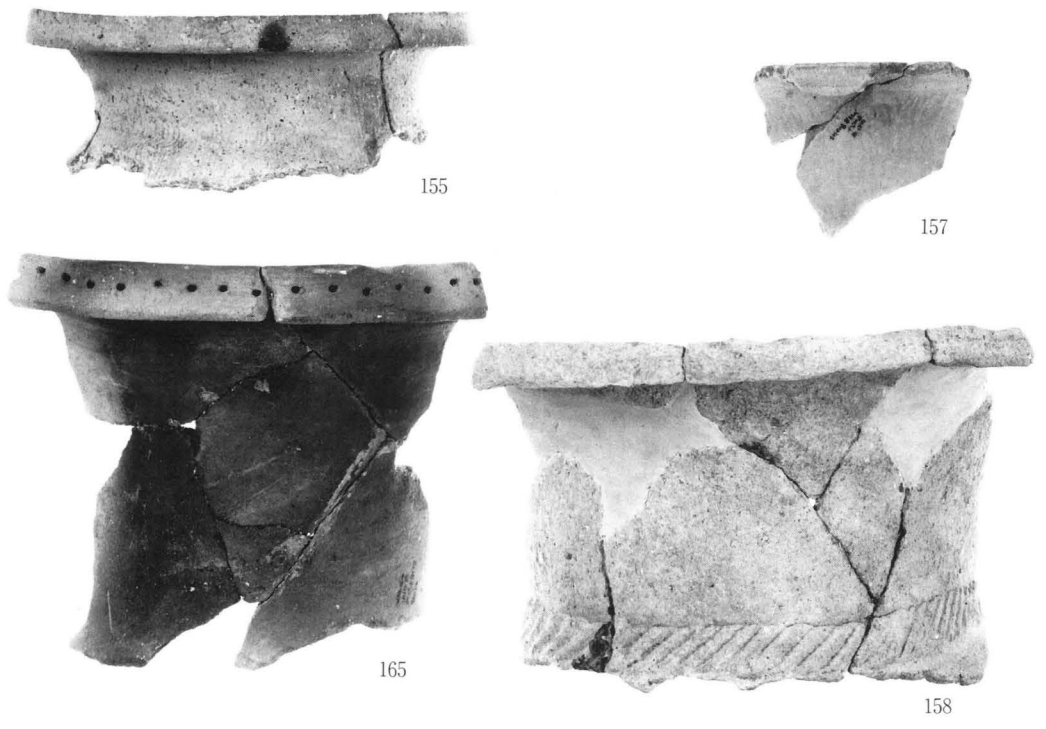
鉢(128) 甕(130) 甕底部(131) 脚部(133・135・136) 水差形土器(134)



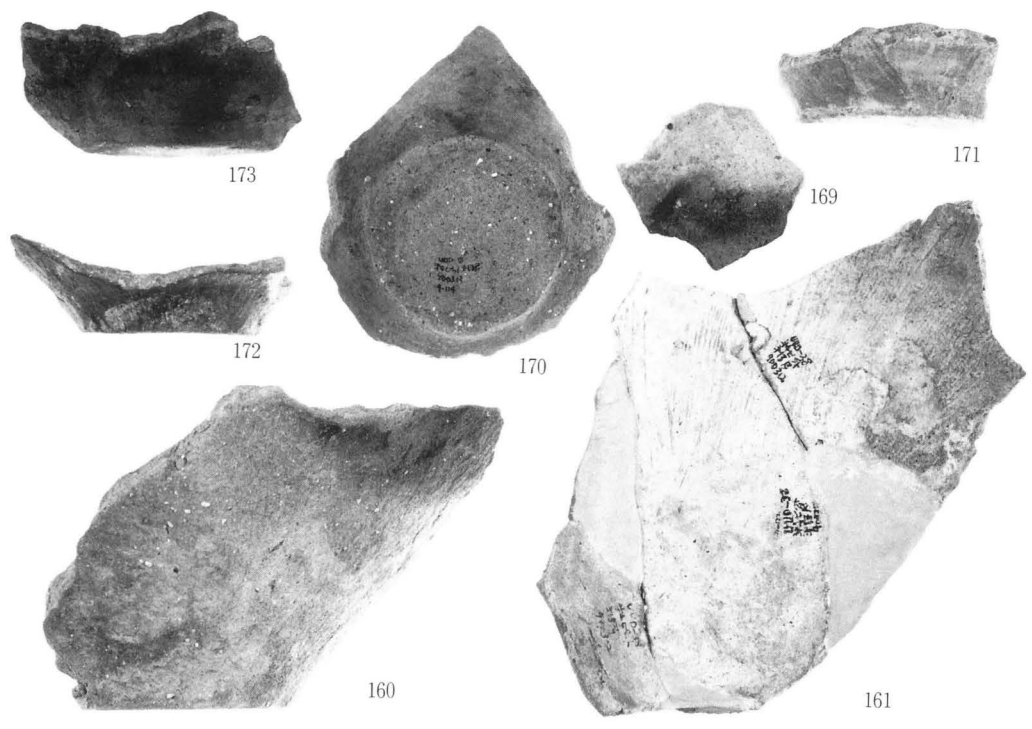
土師器杯(137~139) 土師器丸底壺(141) 黒色土器A類碗(142・146) 土師器碗・皿(143)
 土師器鉢(144・145) 土師器甕(147)



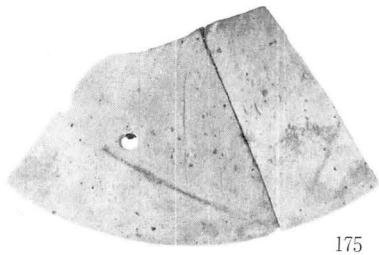
須恵器杯蓋(150・151) 須恵器杯身(140・152・153) 須恵器壺(154)



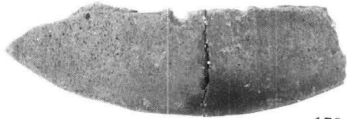
壺(155・157・158・165)



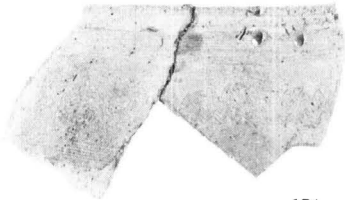
壺底部(160・161・169~173)



175



176



174



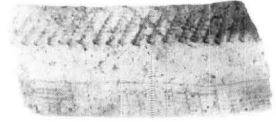
163



162



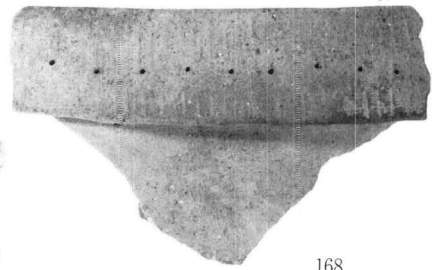
159



167



166



168

壺(159・162~164・166~168) 無頸壺(174) 壺蓋(175・176)

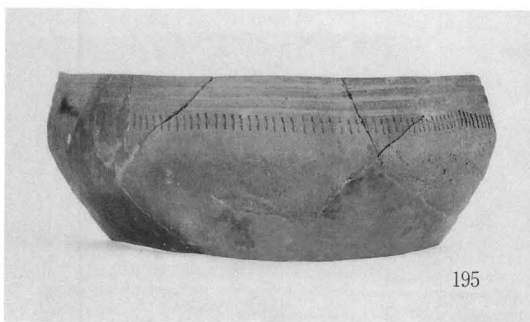


156

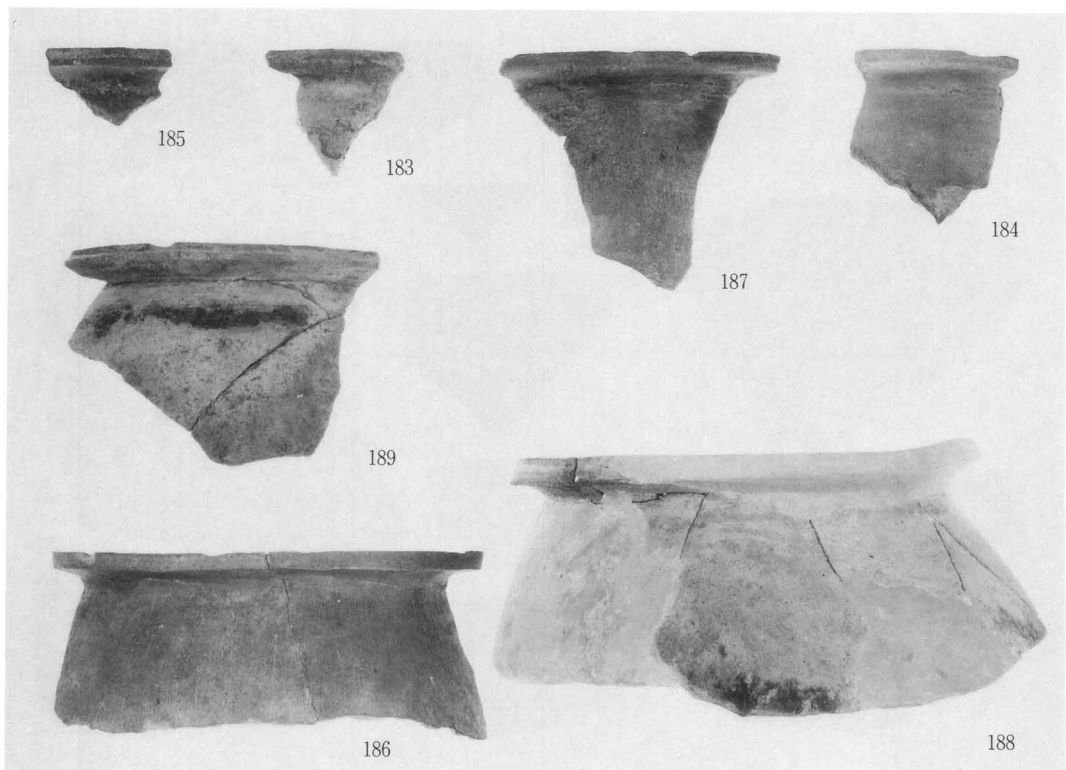


181

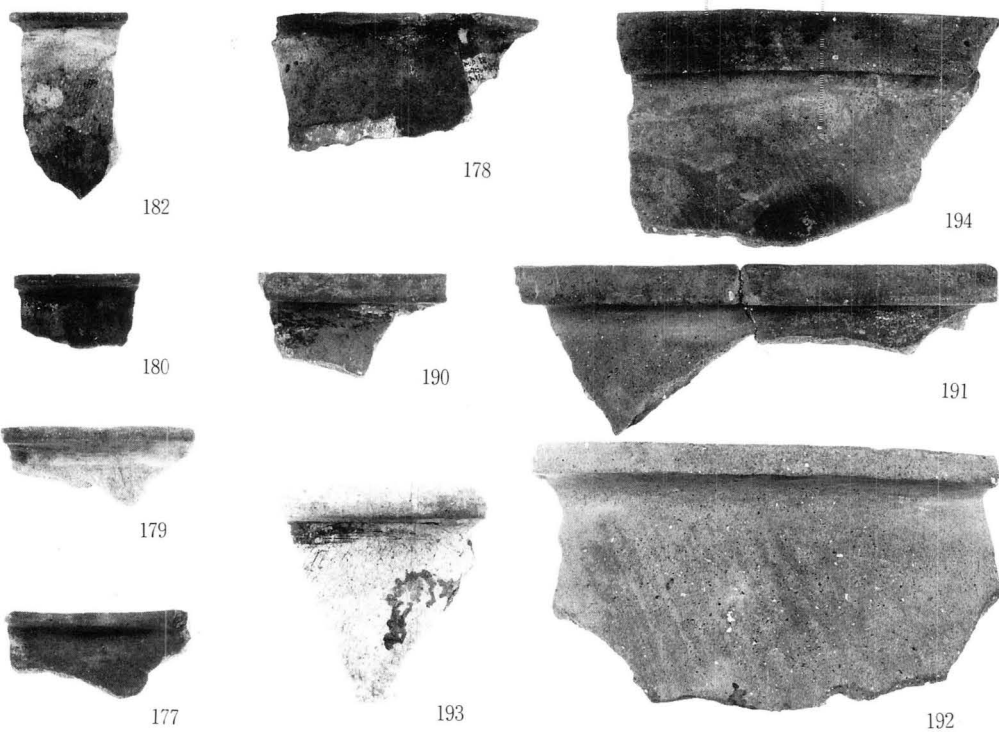
壺(156) 甕(181)



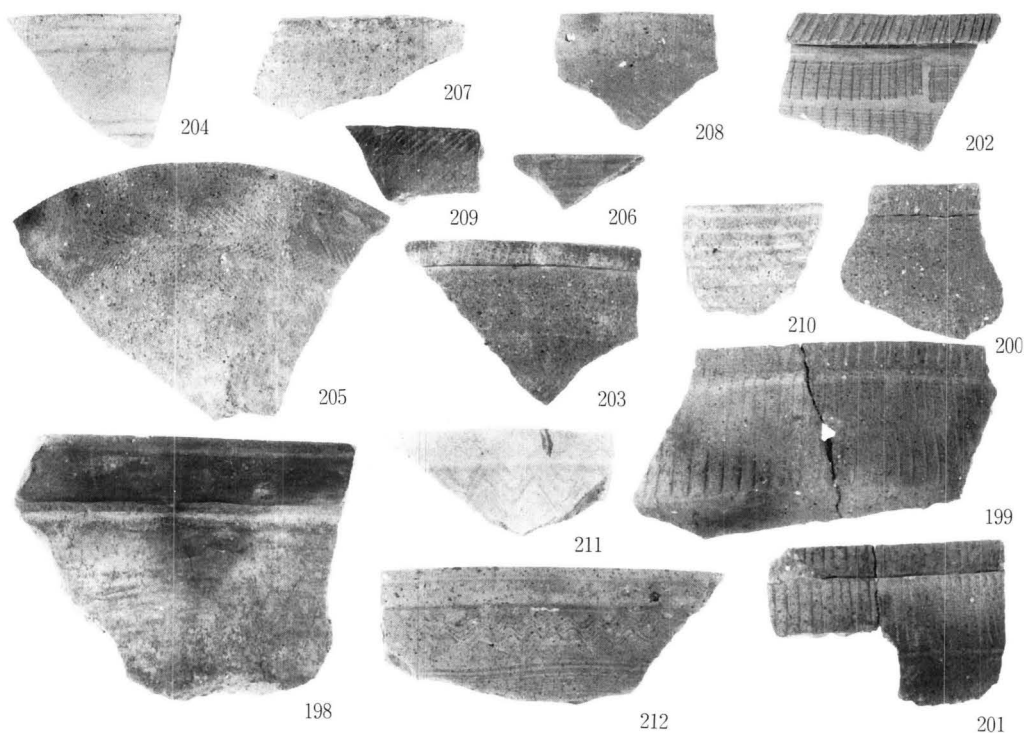
鉢・台付鉢(195) 台付鉢(196) 鉢(197) 高杯(225)



甕(183~189)



甕(177~180・182) 大型甕(190~194)



鉢(198~212)



213



219



218



220



214



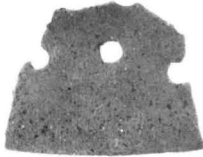
216



217



221



215

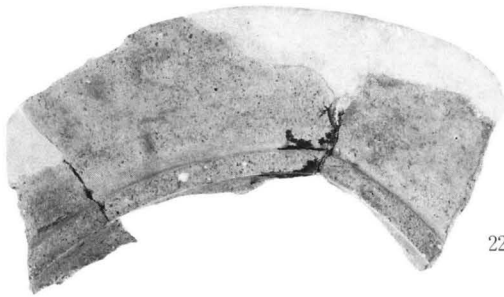


222



223

台付鉢(213) 台付鉢・高杯(214~223)



224



226

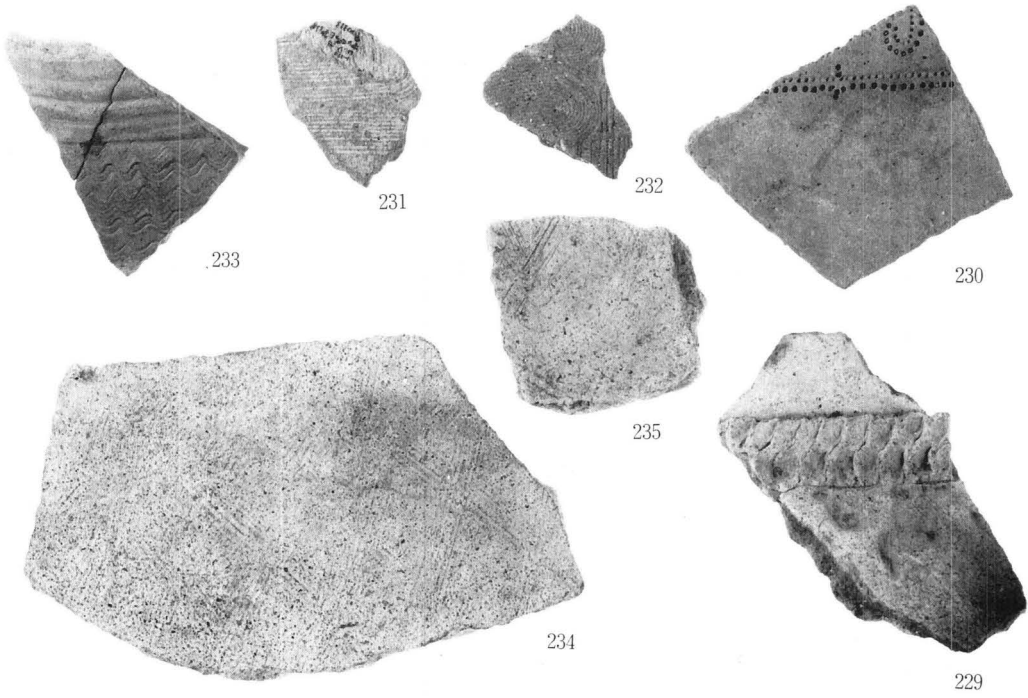


227

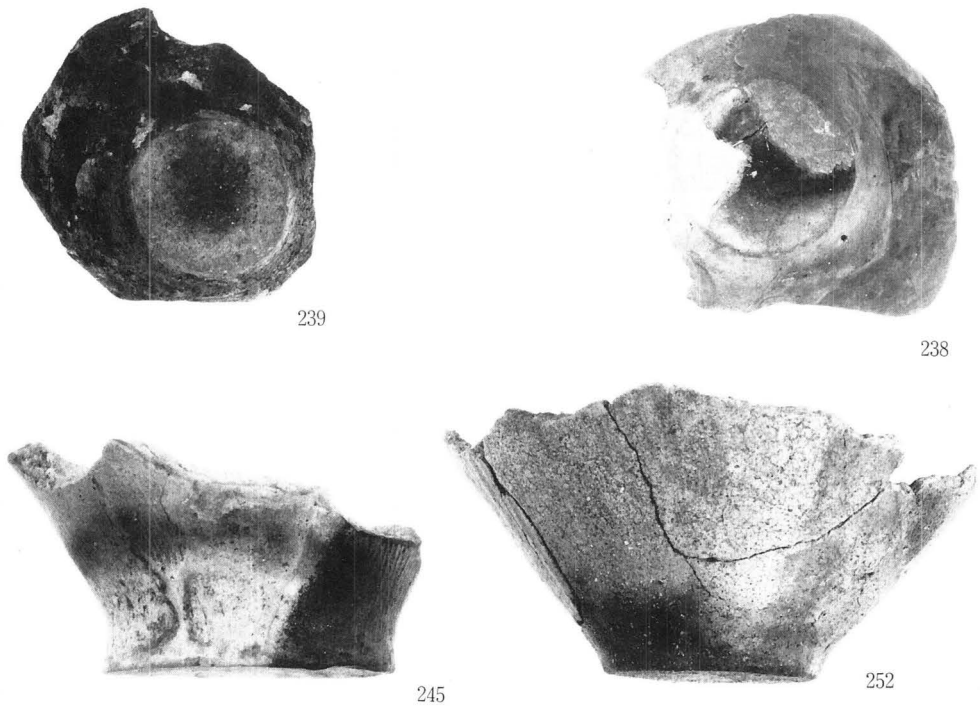


228

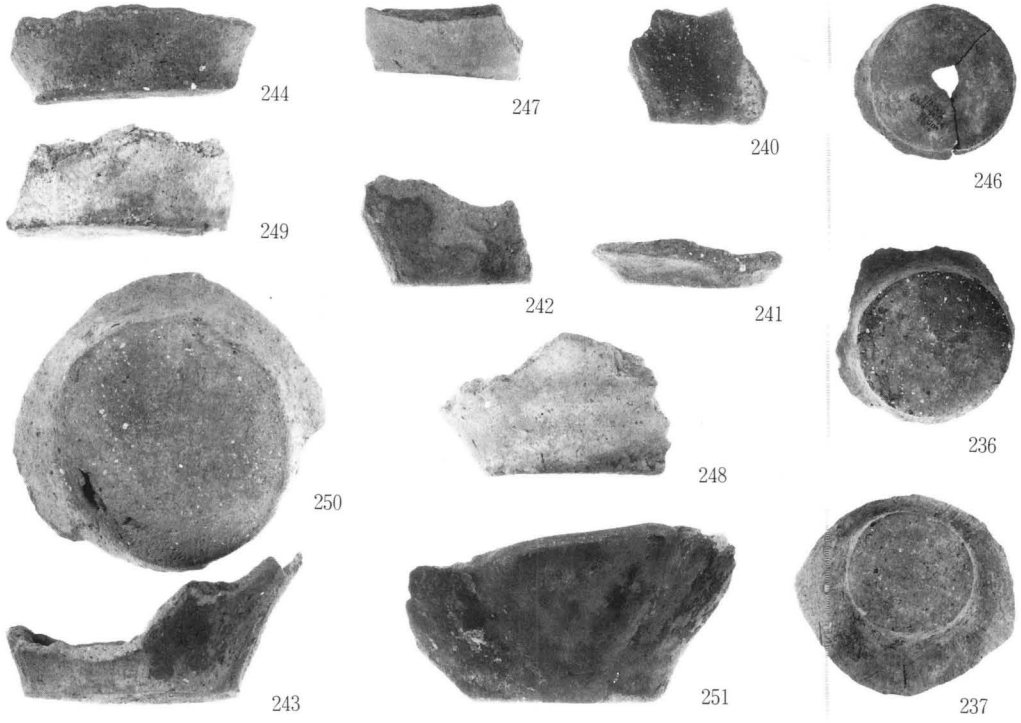
高杯(224・228) 高杯・台付鉢(226・227)



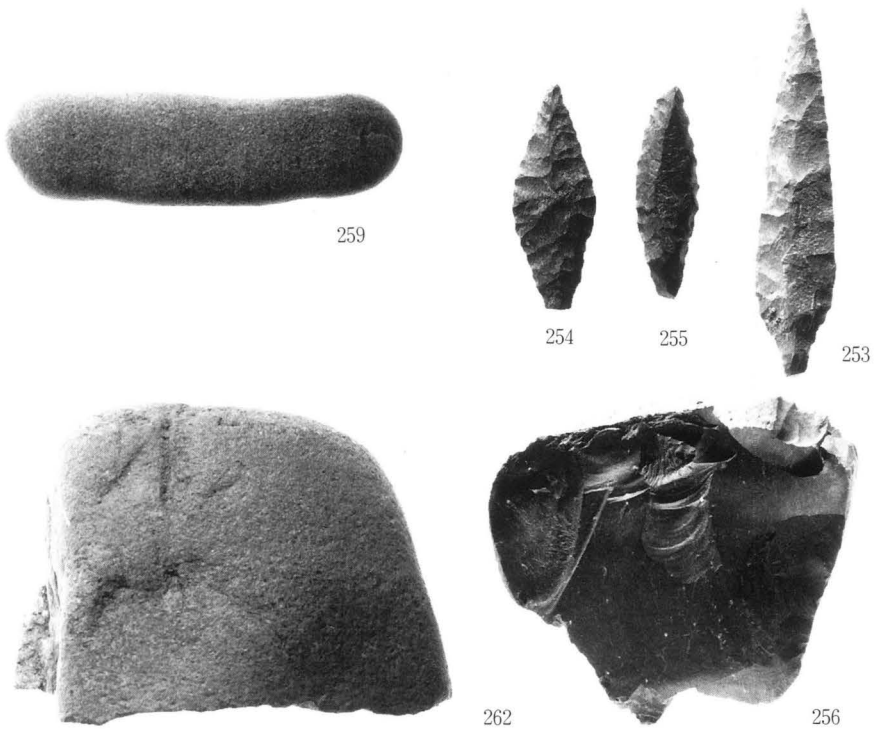
壺 (229~234)



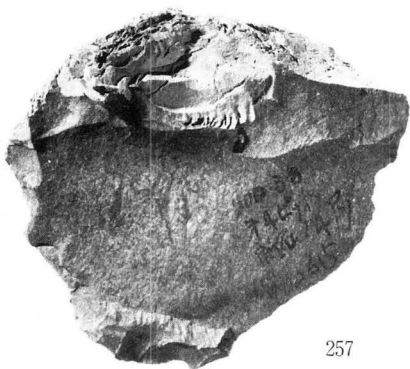
底部 (238・239・245・252)



底部(236・237・240~244・246・251)



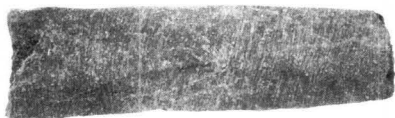
石鎌(253~255) 石核(256) 用途不明石製品(256) 砥石(262)



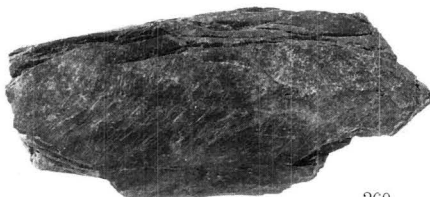
257



258

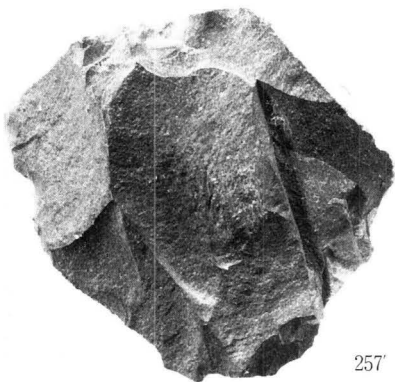


261



260

細部調整剝片 (257・258) 石剣 (260・261)



257'



258'



261'



260'

報 告 書 抄 録 (その1)

ふりがな	ざいだんほうじんひがしおおさかしぶんかざいきょうかいがいほうしゅう		
書名	財団法人 東大阪市文化財協会概報集 — 1997年度 —		
副書名	1. 意岐部遺跡第3次発掘調査報告 3. 市尻遺跡第1次発掘調査報告 5. 若江遺跡第42次発掘調査概要	2. 巨摩庭寺遺跡第2次発掘調査概要 4. 芝ヶ丘遺跡第5次発掘調査報告 6. 瓜生堂第38次発掘調査報告書	
巻次			
シリーズ名			
シリーズ番号			
編集者名	1・3 若松 博恵 5 芋本 隆裕	2 下村 晴文 6 福永 信雄	4 勝田 邦夫
編集機関	財団法人 東大阪市文化財協会		
所在地	〒 577-0843 東大阪市荒川3丁目28-21		TEL 06-736-0346
発行年月日	西暦 1998年3月31日		

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯 °'〃	東緯 °'〃	調査機関	調査 面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
1. 意岐部遺跡 (第3次調査)	ひがしおおさかしみくりやまひがしまち 東大阪市御厨東町2丁目714-6	27227				19880415 ～ 19880502	41	ガソリン スタンド 改築
2. 巨摩庭寺遺跡 (第2次調査)	ひがしおおさかしわかえにしんまち 東大阪市若江西新町3丁目	27227				19830801 ～ 19831102	735	学園本館 建設
3. 市尻遺跡 (第1次調査)	ひがしおおさかしひょうたんやまちょう 東大阪市瓢箪山町279-1	27227				19871019 ～ 19880109	550	共同住宅 建設
4. 芝ヶ丘遺跡 (第5次調査)	ひがしおおさかしなかいしきりちをう 東大阪市中石切町4丁目	27227				19870720 ～ 19870812	165	市立中学 プール建 設
5. 若江遺跡 (第42次調査)	ひがしおおさかしわかえきたまち 東大阪市若江北町3丁目52-1	27227				19890206 ～ 19890316	280	ビル建設
6. 瓜生堂遺跡 (第38次調査)	ひがしおおさかしわかえにしんまち 東大阪市若江西新町1丁目	27227				19891127 ～ 19900323	49	公共下水 道築造

報 告 書 抄 録 (その2)

所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
意岐部遺跡 (第3次調査)	集落	古墳時代前期～ 中世	溝・落ち込み・ピット 土坑	土師器・須恵器 瓦器	庄内～布留式土器の 一括資料
巨摩庵寺遺跡 (第2次調査)	集落	弥生時代中期～ 奈良・平安時代	溝・竪穴状遺構 自然流路	弥生土器・石鍬 土師器・須恵器	
市尻遺跡 (第1次調査)	集落	弥生時代中期～ 江戸時代	掘立柱建物・溝 ピット	弥生土器・須恵器 土師器・韓式系土器 製塩土器	
芝ヶ丘遺跡 (第5次調査)	集落	古墳時代後期	掘立柱建物・溝 ピット	須恵器・土師器 韓式系土器	掘方の径一辺 40～70cm 柱根も一部残存
若江遺跡 (第42次調査)	集落 城	弥生時代中期～ 中世	溝・井戸・土坑	須恵器・土師器 瓦器・陶磁器・瓦 弥生土器	
瓜生堂遺跡 (第38次調査)	集落	弥生時代前期～ 中世	土壇・ピット・溝	弥生土器・須恵器 土師器・黒色土器 石鍬・石剣・砥石	古墳時代中期後半の 須恵器一括資料 畿内前Ⅳ様式の 弥生土器一括資料

(財)東大阪市文化財協会概報集

— 1997年度 —

1998年3月31日

発行 財団法人 東大阪市文化財協会

印刷 大日印刷株式会社